
BMP187

ST

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BMP187

【Zマーク】

N7486M

【作者名】

ST

【あらすじ】

「幻影獣」と言われる怪物に蹂躪される世界。平凡な少年・澄空悠斗は、ある日突然「世界最高のBMP能力者」と断定され、ソーデウエポンの称号を持つ少女と共に、幻影獣との戦いに身を投じていく。といった感じの話です。よろしくお願いします！

計測結果「BMP187」

「なんどやつても『187』だ！ なんてことだ！！」

軽くヒステリーを起こしたよつて、白衣を着た年配の男が総長の機械を蹴り倒す。

テレビとかで見覚えのある顔だ。
確かBMP研究の世界的な権威で、名前は……。
思い出せん。

「上条博士、この測定器でもう15台目です。さすがに、機械の故障という可能性は低いかと」

「分かつてあるわ！」

床に転がった測定器を踏みつけながら怒鳴る、上条博士（やつと思ひ出した）。

似たような機械が、他にもいくつも転がっている。
この『BMP測定器』つてやつ、安いものでも一千万はするつて聞いたことがあるんだが……。

「187という数値が間違いないのなら、彼、拘束しないで大丈夫なんでしょうか……？」

「む、それは……」

少し気弱そうな白衣の女性に言われて、考え込む上条博士。

確かに、俺は拘束されていない。

すわり心地のいいリラックスチェアに腰かけて、BMP測定器に触れていただけだ。

というか、未だに、自分の状況が分かつていらないんだが。

「下手に彼を刺激するのはやめてください、上条博士」と、俺の後ろに立っている長身の男が声を出した。

こつちは全く見覚えのない男だ。年の頃は20代後半から30代前半だと思うのだが、やたらと顔がいい。

俳優か何かだろうか？ 眼鏡をかけた理知的なハンサムだ。

「BMP187のBMPハンターに暴れられれば、この程度の人員ではどうしようもありません。ただでさえ人手不足なんですから、あまり物騒なことを言わないでください」

自分が方がもっと物騒なことを言っているハンサム。

と、同時に10人ほどの黒服たちが、まるで化け物をみるかのよくな目でこつちを見てきた。
どの黒服も、俺が10人いても片手で払われるような体格をしているんだけど。

「と、とりあえず、検査を始めよう。い、いいかな、悠斗君。痛くはしないから、いきなり私を粉々にしたり、溶かしたりはしないでくれよ」

「できません

足を震わせながら、それでもプロ意識でこちらに寄ってくる上条博士。

「あの、その前にバイト先に連絡入れてもいいですか。今日シフト入ってるんで」

バイトの時間まで、あと3時間くらいはあるが、この調子だと間に合わない可能性がある。

「ああ、バイトなら」

と、眼鏡ハンサムが携帯電話を渡してくれる。

『も、もしもし』

「ん？ 店長ですか？ 実は、今日のバイト……」

『ああ！ 分かっている！ 今日は来なくても大丈夫だ！ というか、明日からも来なくても大丈夫だ！ 悠斗、い、いや、悠斗君！ 今までありがとう！ 今月の分の給料はちゃんと政府の人に渡しておいたから！ それじゃあ！』

言いたいことだけを言つて、電話は切れた。

「いかつて、これつてクビつてことか。

「良かつたね、悠斗君」

ハンサムメガネがにこやかに話しかけてくる。

この中で、俺にびびつてないのは、この人だけみたいだけど、まるで俺のことをライオンか何かのように警戒しているのが分かる。全く、心あたりがないんだが。

ああ、なんで、こんなことになつたんだらうか。

派手な音を立てて、重そうな機械が地面に落ちる。

「ひりあ！ 何をやつとるか！ 悠斗君を刺激するな！ 飛ばされるぞ、首が！」

そして、上条博士がどなる。飛ばさないけど。

若い研究員が、慌てたのか、聴診器のようなものをお手玉している。「もたもたするな！ 悠斗君が飽きたら、壊されるぞ、研究所が！」そして、また博士がどなる。もちろん壊さないよ。俺は。

白衣の女性が、やたらと太い注射器のようなものを、なぜか嬉しそうな顔で持つてくる。

「馬鹿モノ！ いきなり、硫酸など持つてくる奴があるか！ 何に使うつもりだ！」

いや、ほんとに何に使うつもりだ？

みんな真剣にやっているのは分かるが、検査の準備とやらは全く進んでいない。

正直、もう帰りたいんだが。

「彼を責めないでやつてください」

と、突然、眼鏡の青年が俺に話しかけてきた。

「この国には、彼の他にまともなBMP研究者はいないんですよ。毎回、危険なBMPハンターを押し付けられて、ちょっとナーバスになつてているんです」

今日一日で、10回くらい『危険』と言われた俺も、なかなかナーバスになつてます。

「あの、ちょっとと聞いてもいいですか？」

と振り返つたとたん、2・3人の黒服から銃を向けられた。

「こりこり、過剰反応し過ぎだ。別に取つて喰われたりしないから、銃をしまいなさい」

眼鏡の青年に言われて、ペニペニしながら銃をしまつ黒服たち。⋮普通に傷つくな。

「で、なんですか？ 聞きたいことは」

「なんで、今日、突然、俺を連れてきたんですか？ 確か、BMP 120以上の人間は、小さい頃から訓練しないと精神に異常をきたすから、国が保護してるって聞いたことがありますけど」

「ん。いい質問ですね。まあ、まだ色々と調査中なんですけどね。君を見つけたのは単純な話です。情報提供をしてくれた人がいるんですよ」

誰だ。そんな余計な事をした人は。

「私の口からは言いにくいんですが。まあ、近いうちに会えますよ。彼女も君に興味を持つてたみたいですから。……………会わなければいいかもしないんですけどね……」

ちゅつと待て。今、最後に小声で物騒なセリフを言いましたね。

「ついに、ついに！ 悠斗君の『属性』が判明したぞ！」

「よし、ようやく準備が整つたぞ！」

腕いっぱいにわけのわからない器具を持った上条博士が迫ってきていた。

「さあ！ 『属性分析』を始めようじゃないか！」

興奮で息を荒げながら宣言してくれる。

……ああ、なんだか。

牛丼が欲しくなってきたな。

「ついに、ついに！ 悠斗君の『属性』が判明したぞ！」

白髪を振り乱しながら、上条博士が叫ぶ。

意外に手入れが行き届いている白髪だ。研究で忙しいだろうに、しつかりケアしてるんだな。感心だ。

と、どうでもいいことを考へてゐるのは俺だけみたいで、みんな上条博士の次の言葉を聞き逃すことなく殺していい。

「悠斗君の『クラス』は……」

上条博士が、一瞬声を止める。

その場にいるすべての人たちが息を呑む。

俺は、腹の虫が鳴りそうになるのを我慢する。

「『ウホポンティマー』だ！」

……へえ。

と、とりあえず頷く俺の耳に、

॥ ॥ ॥ ॥ ॥ ॥ ॥ ॥ ॥

と、怒号のような歓声が響いてきた。

「田中君のホントイマード！ そんなことあるでいいのか！？」

無商いなし！」

確かに麗華さんはアライヤーかしながら「たれね！」

「土里最強の」ハガジカハリハ

中興書院

「悠斗君、万歳！！」

「お、どうでも」

一体何がどう凄いのか、誰も説明してくれないことが、俺的に
は脅威だ。

城守君！

「なんでしょう、博士」
城守 つていうのか。

「さつそく、悠斗君のB

「さ、そく、悠斗君のB.M.P登録を政府に申請してくれたまえ！ もちろん所属は、うちの研究所だ。あと、『新月』への編入手続きも頼む。ああ、それから予算だ。世界最強のティマーを養成するん

だからな、たゞふりと頼む！」

「お任せください。そういうのは、得意分野です。使いきれないくらい、引っ張ってきて見せますよ」

いや、その予算は、もうちょいと両の手のためになることに使ったほうがいいんじゃないかな?

「思えば、大学でどのゼミにも入れてくれなくて、仕方なくBMP研究の道に進んで数十年……」

上条博士が、語り始めてしまった……。

「いつの間にやら、世界的な権威、などと持ち上げられるようになつたものの、いつもいつも問題の多いBMP能力者を押し付けられてしまり……」

確かにいるよね、能力が高いのに嫌われる人って。

「だが、ついに今日！ BMP能力が高いのにまともな逸材に出会えた！」

ガツツポーズをする上条博士。

と、そのまわりに白衣の人たちが集まってきた。

「そのとおりですよね、博士！」

「一時間も検査をしたのに、どこも壊されてないんですよー。」

「他の連中なら、この辺の機材は全滅でしたね！」

「それどころか、麗華さんなら、この研究所が全滅でしたね……」

「それは、言い過ぎだ。半壊くらいで我慢してくれるはずだ」

抱き合つて喜ぶ研究員の方々。

BMP能力者っていうのは、怪獣なのか？

おかしいな。小学校の教科書には、そんなこと書いてなかつたぞ。

「わしゃあ、テンションあがつてきたぞー！」

年寄りが、テンションとか言つなよ……。

「悠斗君、私も嬉しいですよ」

理知的な眼鏡の人、いや、城守さんが話しかけてきた。

「君は……いや、君たちはきっと人類の希望になります。この歴史的な瞬間に立ち会えたことを、私は誇りに思いますよ」

端正な顔に最大級の敬意を込めて、城守さんが微笑む。

いや、どう考へても、俺はそんないした人物じゃないんですが。

さて、そろそろドッキリカメラとか、出でこないかな。
……来ないよね。

ソードウェポン『剣魔華』（一）

「ほへー」

と、思わず口に出して呆けてしまうくらい、俺はアホ面をしていた。それも、そのはず。

ここは、国内でも有数の名門ホテル『ホテル・ヒルトン』の最上階スイートルームなのだ。

俺がこんなところにいるのは、もちろん訳がある。

（なんとか）検査が終わり、アパートに帰ろうとしたときに、音もなく城守さんが近付いてきたのだ。

無言で差し出される携帯電話を、嫌な予感を覚えつつ受け取った俺の耳に聞こえてきたのは、予想通り、アパートの大家さんの声だった。

『ああ、悠斗君か！　いや、実は、今日、君の部屋の鍵を取り換えることになつてね。別に、どこも壊れてないんだけどね！　取り替えてしまつたから、君の鍵はもう使えないんだ。ああ、いや、大丈夫！　今月分の家賃は、政府の人に払つてもらつたから！　じゃあ、元氣で！』

というわけで、俺はホームレスになつた。

なつたと思ったら、城守さんにタクシーに乗せられて、気づいたらいつの間にか、この部屋に放り込まれていたというわけだ。

「いや、しかし、な……」

スイートルームなんて、俺は都市伝説の類いだと思ってたけど、ほ

んとにあるんだな。

一泊50万円とか。

ギャグだつたら笑つても良かつたけど、あいにくみんな大真面目だつた。

確かに豪華な部屋だけど、別に50倍豪華だとが、50倍幸せになるとか、そんな効果はない。

でも、

2倍くらいには、楽しくなつてきた。

ふかふかのベッドに、豪華な調度。

『こんな所、どうやつてメシ食つたらいいんですかー?』と泣きついたら、城守さんが『夕食は、フランス料理のフルコースをルームサービスで届けさせます』とのこと。

普通に楽しみだ。

しかも、大きな窓から見下ろせば、宝石箱をひっくり返したような夜景。

ゼひこーは、グラスを傾けながら『勝者の気分だ』とか、言わなければ!

ワインを飲むわけにはいかないので、高級そうなグラスミニネラルウォーターを注ぐ。

そのまま窓の近くに行こうとする

携帯が鳴つた。

シックな黒の折りたたみ携帯だ。

城守さんが持たせてくれたものだが、今まで携帯なんか持つたことがなかつた俺は、あれをさんざんいじくりまわそうと決めていた。

ああ、今日、寝られるかな?

なにほともあれ、電話にはでなければ。おそれく、相手は城守さんだ。

「もしもし」

「悠斗君ですか！ すみません、私のミスです！ まずいことになりました」

なんですか、いきなり？

「気が緩んでいたといわれても仕方ありません……。麗華さんに『あの子、どうだった？』と聞かれ『B M P 187のウエポンティマーでした。素晴らしい素質ですよ』と言ったら『やつ、わかった』と答えられてしまつたんです！」

すみません。今のセリフの『まことに』があるのか、俺には分からんんですけど。

「今は、まだ大丈夫ですか！？」

「はあ。特になんにも……。ひー！」

今、物凄い寒気がした。

なんだ？ スイートルームは、クーラーの威力も50倍なのか！

「どうしました、悠斗君？」

「い、いや、凄い寒気が……

うわ、足が震えている。

「く……。もう来たのか……

城守さんの悲痛な声。

その間にも、悪寒はどんどん増していく。

上がつてくる。なにか恐ろしい塊が、凄いスピードで上がつてくる。
内臓が下から突き上げられるような圧迫感。

下の階の人たちの悲鳴が聞こえてくるような気がするのは、幻聴だと信じたい。

と、緊急館内放送を知らせる音楽が鳴った。

『み、みなさまにお知らせがあります。げ、現在、当ホテルにBMRハンターとして有名な剣麗華様が、お見えになつていらっしゃいます。ご友人に面会に来られたとのことです。決して、危険はありませんので、悪寒を感じても慌てずに、お部屋に引き籠もついていてください!』

引きつったような、係りの女の人の声。

とこりうか、引き籠つていてください、って本音が出てるじゃないか。

『お、お、おちつ、落ち着いてください! 彼女の目的は、最上階のスイートルームに泊まつている澄空悠斗様です。他のかたたちには、け、けつして、き、危険はないので、落ち着いて! 部屋から出ないでください!』

……このホテルの個人情報保護方針は、いつたじどうなつてているんだ?

というか、危険がないなら、なんで、部屋から出ではいけないのだろうか?

『だから、大丈夫だつて言つてるでしょうが! 悪いのは、澄空つてお客さんだけなの! できたら、出でつてー!』

とこりうか、初めて泊まるホテルで『出でつて』と言われた高校生はどうのくらいいるんだろうか?

興味深いテーマだ。

「……凄い状況になつてゐるみたいですね」

城守さんが嘆息してゐる。

「俺、一体、どんな悪いことをしたんでしょ？」「

「いえ、悠斗君は少しも悪くありません」

城守さんは断定してくれるが、もちろん俺の心は癒されない。フレッシュナーの塊はどんどん近付いてくる。これつてひょっとして、エレベーターか？

「いいですか、悠斗君。よく聞いてください」

真剣な声の城守さん。

「君の部屋の前には、10人のＳＰを配置しています。死んでもその場を守るように言つておきますが、はつきり言つて、10秒と持たないと思います」

マジですか？

「とにかく初撃をかわしてください。ああ見えて、彼女は聰明な人です。落ち着いてみれば、君がまだ能力に目覚めていないのを、分かつてくれると思います」

ということは、一発喰らうのは前提なんですね。

と云ふか、聰明なら、乗り込んで来る前に、思ひとどまつたりはしてくれないんでしょうか？

「自分と対等に渡り合えそうな人ができたのが、よほど嬉しいんでしあう。君の実力を試したくて仕方がないようです。携帯も持つていないようで、連絡が通じません」

「携帯は、携帯しないと意味がないじゃありませんか！」

「つまること言つてゐる場合ではないですよ、悠斗君」

言つてねえよ。

「とにかく、間違つても死なないようにしてください。あなたは、こんなところで死んでいい人ではありませんから。私も急いで向か

います

「ちょ、ちょっと待つてく、だ……」

切れた。

……そりゃあさ。

こんな所で死んでいい人間なんて、いないと思うよ。普通は。

ソードウェポン『剣麗華』（2）

城守さんに切られた携帯電話を持ったまま呆然としている俺の耳に、ノックの音が聞こえてきた。

「悠斗様、起きていますか？」

こんな状況で寝られる人間がいたら、ぜひ教えてほしい。一生近付かないから。

「ご承知の通り、今、この部屋に向かつて麗華様が近付いています」

やつぱり、麗華って人か。

「我々は、これから麗華様をおとめしなければなりません」

声の主はおそらく、さきほど上条博士の研究所で見た黒服達だろう。いかにもプロフェッショナルという体つきをしていたが、このホテル全体を圧迫するような気配の持ち主と比べると、紙切れよりも頼りない。

「いや、やめといた方がいいんじゃないかな？」

この気配の持ち主は、絶対に人間じゃない。というか、人間であつてほしくない。

「そういうわけにもまいりません」

やたらと悲壮感の漂う黒服。

「悠斗様、今までお世話になりました」

いや、4時間前に会つたばかりだよね？

と、その時、チーン、と乾いた音がフロア全体に鳴り響いた。よつな気がした。

それと同時に、今まで下から感じていたプレッシャーが、真横から吹き付けてくるように感じる。

「正直に申し上げて、5秒と持たないと思います」

城守さんの見立てより、短くなってるじゃないですか。

「これほど嬉しそうな麗華様を見るのは、初めてです。万が一、あなたにもしものことがあつたら、怒り狂つた麗華様によつて、このホテルの歴史は今日で終わります」

「いや、なんかそれ、おかしくないですか？」

いまいち話の筋が分からるのは、俺の頭が悪いからか？ 麗華様とや�は、俺に死んでほしいのか、死んでほしくないのか、どっちだ？

と。

「.....」

い、いきなり恐ろしいほどの沈黙が訪れた。
な、なんなんでしょうか？

「お待ちください、麗華様！ 悠斗様は、まだ.....」

「ひ、そ、それは.....！」

「止める！ なんとしても、麗香様をおとめしや！」

飛び交う怒号。

つには、銃撃の音まで聞こえてきた。

「.....」

沈黙が続く。

「…………」

そして。

コンコン。

『さつき世界は滅んだ』と言われても信じそつなほどの静けさの中、俺の神経をこぼげ落とすよくな無氣味なノックの音が聞こえてきた。

「…………よー」

動転して『澄空悠斗なんて人間はここにはいませんよー。』とベタな返事をしようとしたが、口の中が完全に乾いていて声が出なかつた。

さつきのミネラルウォーター飲んどきや良かった。

と、

いきなりドアが田の前を通り過ぎた。

「…………なー！」

そのまま、後方の窓ガラスに激突する。

豪勢に街の灯りを映し出す大きなガラスは、防弾らしく傷一つついていなかつたが、高級そうなドアと俺の心は、真つ一つに折られてしまつた。

「しまつた……。力加減、間違えた」

心の折れた俺に聞こえてくるのは、『ちょっと反省』みたいな軽い声。

ちょっと待て！

これが『力加減、間違えた』なんてレベルか！

怒りで折れかけた心を再武装し、マウンテンパコカのようなその女を睨みつけて、

呆然とした。

『細い』というのが、第一印象だつた。

だが、それは、一足歩行するクロマダイルのような女性を想像していたためで、少し風変りな制服に身を包んだその女性は、奇跡のような比率を誇るプロポーションをしていた。

水でできているんじゃないかと思えるほど滑らかな黒髪が田を引く。冗談のように整った小さな顔がその身体に乗っている。

透き通るように色素の薄い瞳は、どこまでも捉えどころがなく、白磁のような美しい手には、壮麗な諸刃の剣が握られていた。

?

ちょっと待て？

剣？

「『断層剣』カラドボルグ」

『鈴が鳴るような』という形容詞がぴったりの声音で言う女性。んーと、今のは、その剣の説明をしてくれたのでしょうか？
そんなことより聞きたいことが、3ダースほどあるのですが。

次々と襲い来る摩訶不思議な事態に声が出せなくなつた俺の前で、

美しい女性は、『カラドボルグ』を振り上げた。

.....。

邪神以外の神様の存在を信じてもいい。

俺が今日初めてそう思ったのも無理はないだろう。少し変わった制服に身を包んだ女性が放つた一撃の後も、俺の首はつながっていた。

ただし、あと数十センチずれていれば、その限りではなかつた。

「.....」

俺の表情はほとんど変わっていなかつたと思う。心理的には泡を吹きまくりなのだが、もう外部に情報発信するだけの気力も残っていないのだ。

ふかふかの豪華なベッドが真つ二つに切断されたばかりか、床に巨大な亀裂が走り、階下の部屋が見えている。

重厚なドアの直撃にも耐えた防弾ガラスにも大きな三日月型の亀裂が入つており、そこから美しい星達が直接見えるようになつてしまつていた。

一瞬でスイートルームを戦場に変えた美しい女性は、『カラドボルグ』を肩に担いだまま少し考え込むような仕草をして、「じめん。まだ、BMP能力が覚醒していないこと、気づかなかつた」と言つた。

ああ、

誰か、誰でもいいからその一言を彼女に伝えることができていれば、俺が生まれて初めてのホテルで、名指しで、しかも全館放送で罵られることはなかつたんだ。

ついでに、この部屋も、明日以降も存分にブルジョワジー達の虚栄心を満たし続けられたんだ。

とりあえず、第一級戦犯は城守さんだな。あと、黒服。次点で、俺くらいにしておこう。

女性が軽く右手を振ると、『カラドボルグ』は煙のようだ消え去つた。

これが、BMP能力か。

そのまま女性が、ツカツカと近づいてくる。

「あれ？」

よく見ると、あの制服、高校生の制服っぽく見える。常人離れした容姿と、浮世離れした言動のせいで気付かなかつたが、女性自身もかなり若い。

ひょつとして、俺と変わらないくらいなんじやないか？

「ソードウェポン『剣麗華』」

と、女性は、ピアニストのように優雅な右手を差し出してくる。単なる自己紹介なのだろうが、その響きは、天上の音楽のように美しい。

俺も負けではない。

右手を差し出し、

「『澄空悠斗』。大衆飯店』よーい丼亭』皿洗い……は、今日首になつたから無職。琴峰高校一年生……だつたけど学費が払えなくてやめたから、学生でもない！」

……。

別に、困らせるよつと思つて言つたわけじゃない。
正直に自己申告しただけだ。

田の前の女性も、たゞ呆れているだらうと思つて見てみると、

捉えどころのない瞳に少しだけ真剣な色を載せた彼女は

「うん。 よいし〜」

と、その容姿に似合わない幼い口調で、俺の手を強く握りしめていた。

……変な人だな。

今日一日、なんざん気を張つていたからだらうか？

不意を突かれて緊張の糸がぶつつりと切れた俺は、
そのまま眠りの世界に誘われた。

田覚めは、意外に悪くなかった。

だが、ふかふかのベッドや、豪華な内装はなく、田に入るのは、まつ白い壁と少しせスプリングの固いベッド。

それから、象用か、というくらい太い注射器。
……なんでだ。

「お、お田覚めですか！？ 失礼しましたー！」

その象用注射器を抱えた白衣の女性は、俺と田が会つなり、脱兎のように逃げ出した。

そういうや、あの人、初日に俺に硫酸飲まそつとした人だな。
さすが、上条博士。部下の研究員まで、普通とは一味違う。
しかし、上条博士の部下がいるといつことば、上条は研究所かな。
なんで、こんなところに？

……つて、考えるまでもないか、いくらスイートルームだからと言つて、壁と床に大穴が空いたような部屋が使えるはずがない。
氣を失つた俺を、城守さん達が運んでくれたんだろう。

ん？ 今、なんか見えたような氣が。

「ちうつ」

と、自分でいいながら、ドアから顔の上半分だけ出しているのは、
城守さん。

全然萌えませんが、若干可愛いです。美形は得ですね。

「なに、やつてるんですか？」

一応、聞いてみる。

「お、怒つてませんかね？」

「まあ、そんなには」

怒るだけの気力が残つてないというのが本音だが。

「そうですか！ それは、良かった！」

途端に、顔を綻ばせて、部屋に飛び込んでくる城守さん。

「テ、テンショングが読めない。

「申し訳ありませんでした！」

と、いきなり城守さんは、腰を90度に曲げて謝つてきた。
むづ。役人のくせに、なんて潔い謝りつぶりだ。

「私が一言、『悠斗君は、まだBMP能力が使えない』と麗華さん
に伝えていれば、『こんなことには……』

それは、俺も思います。2秒で言えますよね、そのセリフ。

「いえ、そんな、気に……」

「まあ、無事でなりよります」

しないでいいですよ、と言おうとしたところドセリフを被せられた。
切り替え早いな、城守さん。

「あんなことになつて、麗華さんも残念がつてましたよ。『悠斗君
とあまり話ができなかつた』と」

「壁に大穴があいてる状況では無理です」

星空が見えていたので、若干ロマンチックではありましたが。

「ですから、私が代わつて彼女のこと説明しようかと思つのです

が

「いえ、その必要はないです」

この国で、総理大臣の名前を知らなくても、彼女の名前を知らない人間はない。

昨日、初めて名前を聞いた時点で気付かなかつたのは、俺が相当に混乱していた証左だと思う。

『剣麗華』。

高校生にして、すでに世界のトップランクに名を連ねる凄腕BMPハンター。

メディア露出がほとんどないため、『怪獣みたいな女性』『超絶美女』といった両極端な噂のみが流れていたが、両方とも真実だった。うむ。

実際の幻影獣討伐での実績はもちろん、BMP研究の分野でも、すでになくてはならない存在として認知されている。

外交戦略にすら影響を及ぼすほどの有名人だが、なにより特筆すべきは、そのBMP能力値。

人類には不可能と言われたBMP170を超えるBMP172を叩き出した、BMP能力値の世界記録保持者。

ん？

……ちょっと、待て？

「あの、城守さん？」

「はい？」

「今のBMP能力値の世界記録つしていくつでしたっけ？」

と、聞くと、城守さんが不敵な笑みを浮かべる。
うう、嫌な予感が。

「『昨日まで』なら、麗華さんがもつ172が最高値ですね」

『昨日まで』に不必要的力を込めて、城守さんが言つ。

「……少しほは、『自分の立場が分かっていましたか?』

「…はい」

わかりたくもありませんが。

つまり、この俺、澄空悠斗は、

昨日一日で、人類のBMP能力値最高記録を、15も更新してしまつたわけだ。

「ふむ……」

見知らぬ道の真ん中で立ち廻ぐ。

迷った。

ロードマップでは不安なので、わざわざゼンコンをペーして来たのに迷うとは、いかなる怪奇現象だうつか?

「参ったな……」

どう見ても自分に似合つてゐるとは思えない風変わりな制服の襟元を弄びながら、呟く。

今、俺は『新月学園』へ編入手続きに向かう最中だった。

うん？ なんでこんなことになつてているか？

『新月学園』は、日本で最高のBMP養成機関だ。俺の意図はどうあれ、政府としては是非とも、あそこに放り込みたいらし！ そして、俺のような人生経験の浅いガキが、海千山千の役人である城守さんに、論戦で歯が立つわけがないということだ。

以下に、その激しいやり取りを示そう。

「という訳で、悠斗君には、『新月学園』に編入していただきたいのです」

「なにが『』という訳でですか？ 直前のセリフ覚えてます？ 『新月学園学食のささみチーズフライの味は、もはや芸術の域に達していると言つても過言ではない』ですよ。『』という訳で」と言えば、説明責任をすべて果たしたと考えるのは、この国の人間の悪癖の一つで……」

「新月学園なら、学費は全額免除ですが？」

「入ります。すぐ入ります。必ず入ります。いますぐ入ります。さあ、早く必要書類を！ 虚実織り交ぜて、完璧な願書を作成して見せます」

「真実だけを書いていただければ、結構です」

という具合だ。

しかし、参ったな。このままでは、学園にたどりつけない。一度は諦めたハイスクールライフ。すぐにでも、授業を受けたいのに。

……誰かに、道を聞くか。

「うと、ちょうどいい」

道の先から、猛スピードで二つ巴に走つてきている男子高校生がいる。しかも、どうやら新月学園の制服を着ている。

あれだけバイタリティーに溢れる走りをする男なら、俺の一人や二人、学園まで連れて行つてくれるに違いない。

「おーい！」

手を振る。彼は、どんどん近づいてくる。

心なしか、スピードがさらに上がつていいよ! うな?

「お、おーい？」

疑問形にして呼びかけてみるが、彼のスピードは増すばかりだ。ひょっとして、これって危なくないか？

「ま、待て！ ちょっと待て！ いくらなんでも、そのスピードは、危ないぞ！」

「逃がすかー！」

もはや、人間業とは思えないスピードに達した男子高校生が、目前に迫る。何を追つてらつしやるんでしょうがー！

俺は、反射的にその場を飛びのいた。

「ぐつ。つつ……」

受け身を取りそこねて、ひとしきり痛がつたあとに、田をやぬじ。

石垣に大穴を開けて上半身をめり込ませた、男子高校生の下半身が見えた。

「くそ、見失った！」

石垣から勢いよく頭を引っこ抜いた男子高校生が叫ぶ。
言動から典型的なアホ面を想像していたのだが、なかなかのイケメンだ。若干、軽そくにも見えるが。
なんだか、不公平を感じるなあ。

「おい、あんた！ ここいらへんで、幻影獣を見なかつたか？」

「幻影獣？」

思わず問い合わせる。

俺だつて、天気予報とBMP警報くらいは、確認してゐる。
今日は、すがすがしいくらいの『青』マークだつたぞ。

「そんな訳ないつて。俺が、さつきまで追いかけてたんだから」と言つた男子高校生。
ならば、その辺にいるのだひつ。
と、周りを見回してみると。

「あ、ほんとだ」
確かにいた。

その姿はウサギを中心としたよつたようなイメージ。
ただ、頭のてっぺんに付いている立派な角が非常な違和感を醸し出している。

幻影獣とはいへ、このくらいなら特に害はない。いわゆるロランクとこうやつだ。

ただ、成長するとどんな化け物になるかわからないので、BMP管理局は、通報・捕獲を奨励している。

この男子高校生も、そんな真面目で正義感あふれる若者らしい。外見は、弱ナンパ男風味にも見えるが。

「でかした、相棒！」

いつの間にか人を相棒にしたてあげた男子高校生は、幻影獣（幼体）目がけて、クラウチングスタートの姿勢を取る。

そして、

「超加速！」
システムアクセラ

弾丸のような速度で、地を蹴った！

こ、こいつ、BMP能力者だ！

一瞬で、俺の視界から、完全に消えた。

そして、轟音。

「げ、げほげほ……」

さきほどに倍する量の土けむりで、せき込む俺。

しばらくして、それが収まったころに視界に入つたのは、腹を抱えて人を小馬鹿にしたように鳴いている幻影獣。

「あれ？」

疑問符を浮かべる俺を置いて、ひとしきり笑つた幻影獣は飛び去つて行つた。

「？」

「お、おーい……」

か細い声に目をやると、

「……大丈夫か？」

そこにはいたのは、壁に上半身をめり込ませた、男子高校生の下半身。

「……わ、わるいけど、抜いてくれないか？」

「抜くのはやぶさかではないけど……。どうだらう？　こには、い

つそのこと、そちら側に突き抜けるというのは？」

「だ、だめだ！ すつごい『デカイ』犬が睨んでる。あと、10センチで、やつの捕食範囲に入ってしまう」

……それは、大変だ。俺も、弱ナンパ風味とはいえ、イケメン高校生が犬にいただかれた道路を、これから通学路にはしたくない。

抜いてあげよう。

しかし、あれだ。

BMP能力者は、怪獣みたいな人たちばかりだと思っていたが、少し愉快系の変人もいるんだな。

……さらに憂鬱になつてきた。

ランスウェポン『三村宗一』 アイズオブエメラルド『緋色香』

「いや、助かったよ。マジで」

無事、石垣から下半身を（いや、上半身か）を救出した俺は、問題の男子高校生と一緒に歩いていた。

「しかし、石垣、あのままにしておいていいものかな？」

「留守だつたしな。後で、学園の事務の人と一緒に謝りに行くよ。どうせ、俺一人だと、もつと怒らせるしなー」

軽い口調で言う、若干イケメンの男子高校生（ではなくて、『新月学園』の生徒だな。こんな風変りな制服が他にあるとは思えん）。しかし、俺が着ると、ただの変わった制服なんだが、こいつが着るとなかなか様になっているな。ち、不公平な。

「しかし、あんたも変わってるよなー。入学式からまだ2週間もたつてないうちに、転校してくるなんてさ」

「ふ。俺はどちらかというと、入学して2週間で前の高校を辞める羽目になつたことに脅威を感じてるよ」

いや、マジで。

「いや、凄いって書めてんだよ。BMP能力がない奴が『新月』に入るのは、70以上の偏差値がいるんだろ」

いや、50を超えた記憶がないぞ、俺は。

「ま、も一人の転校生に比べたら、全然目立たないだろうけどな」

「もう一人の転校生？」

興味を覚えた俺は、聞く。

「おいおい、とぼけるなよ。BMP187とかいうんじゃない能力者だよ！ つい最近まで剣の172ですら人類の限界を超えたつて騒がれてたのにな。187なんて、もう人間じゃないんじゃない

かー？」「

「凄いな」

世の中には、そんなどんでもない人間もいるのか。

……って、ちょっと待て。それ、俺だ。

「お、着いたぞ」

「へ？」

彼の間違いをただそっとした俺は、唐突なセリフに意表を突かれた。「こ」が、職員室だ。先生が待つてんだる。こいつ時、普通は

「あ、ああ。そうだな」

……校門をくぐった記憶がない。疲れてるんだな、俺。

「じゃ、俺は事務室の方に行くから。さつきの石垣の件、報告しないと」

と、背を向けて、

「あ、そだ

と、止まる。

「俺は、ランスウエポン『三村宗一』。よろしくな」

「と、こちらが『元よーい丼亭調理補助候補・新月学園編入予定『澄空悠斗』だ」

負けじと、称号をつけてみたが、

やつぱり『元』と『予定』は良くないな。
早いところ、新しい称号を用意しよう。

日本で最高のBMP養成過程を持つ高校。『新月学園』。

BMP能力の高低と入学試験の難度が反比例するといつ、変則の試験方法を持つことでも有名なこの高校は、いわゆる超名門校でもある。

BMP能力がないものが入学するには日本で最も難しいと言われているが、入学することさえできれば、ここほど恵まれた高校もない。

まず授業料が安い。一般的な公立高校の半額程度だ（BMP能力者は無料になる）。

また、人的・設備的投資も凄い。

幻影獣対策費として政府から直接補助金を受け取っているので、授業料が安いにも関わらず、他の高校を圧倒するほどの資金力を誇る。BMP能力者養成に使うべき資金だが、その恩恵の一部を他の在校生も享受することができる（高BMP能力者にいたっては、生活費どこのか給料が出る）。

また、OB・OGの寄付及び卒業後のコネクションも凄い。
無事ここを卒業することができれば、『特権階級』『BMP族』と言われるほどに、輝かしい未来が約束される。

だが、それゆえに、過程は厳しい。

BMP能力者は、その能力を磨くために血のにじむような鍛錬を、
BMP非能力者は、それ以上の努力を要求される。
落伍者には、容赦ない。

それゆえに、教師陣も、他の高校とは一線を画する。各界で名をはせた学者、カリスマといわれる教育者。なかでも中核となるBMP養成課程を担当する教師陣は、世界の一流BMPハンターと並んでも、何ら遜色ない凄腕のみが抜擢されている。

以上、『季刊BMP最前線VOL137・BMPハンターになるなり』だより抜粋（俺の脳内で）。

……つまりは、あれだ。

この何の変哲もない職員室のドアを開けるにも、凄く勇気がいるということを分かつてもらいたかったんだ。

昨晩の麗華さんも件もある。

ドアを開けたとたん、原子レベルにまで分解されるトラップが発動しても別に不思議じゃない（というか、実際にそんなセキュリティを一部で採用しているらしい）。……正気か）。

とはいえ、いつまでもじっくりしているわけにはいかない。

意を決して、俺はドアを開けた。

超名門校とはいえ、職員室の中は意外と普通だった。

だが、誰もいなかつた。

「そうか、ホームルームの時間が
しかし、それにしても誰もいなくなるものだらうか。
少なくとも、俺の担任はここにいてくれないと、どうやって教室まで行けばいいんだ。

「ああ、もう！　いつたいじこじこのかしらー？」
突然、誰もいないはずの職員室から声がした。

……いや、誰もいなかつた訳じゃない。
小さ過ぎて見えなかつたんだ。

職員室の中ほどにある席の一つに、小学生くらいの女の子が座つていた。

「……なぜ、職員室に女の子が？」
いぶかりながらも、俺は近づいていく。

「もう……？　ほんとにどうなつてるんだろう？　10キロ先にいた
つて分かるくらい集中してゐるのに……。まさか、上条博士、ついに
ボケたんじゃないでしょ？」

上条博士はボケないだろ。あれだけハッスルしてれば。
しかし、この子、右目に、えらいじつに眼帯してゐるな。もつとフア
ンシーなのにはすればいいのに。

「『BMP-187』なんてとんでもない男の子なんだから。同じ町
内……いや市内にいれば、絶対に感知できるはずなのに！……つ
て、あなた、何をしてるの？」

「いや、教室が分からぬんですが」

いきなり話しかけられて思わず敬語になる俺。

しかし、この子、姿も声も幼いけど、口調が妙にしつかりしてゐるな。

しかも、教師の席に座つてゐし、いつたい何者だ？

まさか！？

「教室が分からぬいつて、転校生でもあるまいし」

まさか、あの、絶滅したと言われている。

「ん、あなた見ない顔ね。……いや、どつかでつい最近見たような

俺も一度でいいから見たいと思つていた。

「つて、ちょっと待ちなさい。確か、澄空悠斗君の顔写真がここに

……

でも、ほんとにこるわけないと思つていた。

「まさか、あなたが、澄空悠斗君ー！」

「じども先生だーーー！」

「……はい？」

しまつた。思わず、叫んでしまつた。

しかし、なんてことだ。俺の担任はじども先生だというのか。

「そんなことはいいから、ちょっと顔見せて」

言いながら、じども先生は、右田の眼帯をはずす。

驚いたことに、そこから深緑の瞳が姿を現した。

左田は普通の黒色なのに。

「んー？」

吐息がかかるくらいの距離で、深緑の右田を使って、俺の瞳を覗き込んでくる。

「ん、んー？」

しばらく見つめたあと、何が気に入らないのか、俺の頭を小さな両手でつかんでシェイクしだした！

「せ、せんせせせせ？」

「……ぜんつぜん、わからない」

拗ねたように言つて、急に手を離した。

「感知できないわけだわ。キミ、いつたこどりに一八七ものBMPを隠していの？」

……衝撃だ。

BMPってのは、隠せるものなのか？

しかし、頭を揺すつても出てきたりはしないと思つただけど。

「ま、いいわ。城守さんが間違いをするとも思えないし。よひじや、新月学園へ。私があなたの担任、緋色香よ」

「あ、どうせ、澄空悠斗です」

「んー？ いや、こじは、BMP能力者っぽく……」

とこつと、こじも先生は、気取ったしぐさで立ち上がり。

「はじめまして。『アイズオブエメラルド』の緋色香です。よひじ

く

ふ。そちらが、そう来るな。

「『無所属』の澄空悠斗です。よひじへ

……いや、確かに『元』も『予定』も使ってないけど

『無所属』はないよな。政治家じゃあるまいし。

といふか、『』をつければ格好がつくと思つてゐる考えをいい加減、直さなければ。

実は、転校つてのをしたのは初めてなんだが。

こんなに緊張感があるものなのかな?

「と、とこう訳で、今日からこの新月学園に通うことになった澄空 悠斗くんです。みんな仲良くなげてくださいね」
「じども先生がなんとか盛り上げようとしているが、教室はお通夜のよひに静まり返っている。
いや、違うな。

これは、どうちかというと爆弾処理の最中的な静けさだ。
めちゃくちゃ警戒されている。

……といふか、教卓前にいる子たちなんて震えているんだが。

「え、えーと、な、なにか悠斗君に質問はあるかなー?」
「おお、じども先生。俺の自己紹介をカツトしたぞ。
ナイスな判断だ。」こんな空氣で、ギャグとか言えないぞ、俺は。

「は、はい。あの、じゃあ、質問していいですか?」
眼鏡をかけた、三つ編みの女の子が手を擧げる。

なんか、委員長ぽい子だな。

「はい、なんでしょうか。委員長」
まんまかい。

とこつか、なぜ、じども先生が答える?

「す、澄空君のB.M.P能力は、なんですか?」

『うわ、聞いたまつた！』

的な空気が教室を支配する。

質問した委員長自身は、気丈に先生を睨みつけているが、教室はそれまでとは比べられないくらい空気が重くなっている。とこづか、廊下側のあの子とか、泣いてないか、ひょっとして。

「うーん。プライベートに関わる」とは、もひとつ悠斗君と仲良くなつてからね（はあと）」

「この学園に通う人たちは、みんな生死を共にする仲間です。少なくとも、BMP能力に関しては、プライベートなんてないと思います」

「こども先生が、ひらがな『はあと』まで使ったのに、委員長はスルーしてしまった！」

……といふか、ギャグが通る雰囲気じゃなれりうですよ、こども先生？

しばらく痛いほどの沈黙が続いたが、やがて、こども先生は観念したのか、

「いえ、澄空悠斗君は、まだBMP能力が発現していません」

言った。

直後、教室に悲鳴が響いた。

「や、やつぱり噂はほんとだつたんだー！」
「か、『覚醒時衝動』……」

「BMP187の覚醒時衝動だつて！」

「いや、確か、覚醒時衝動つて年を取つてから起きるほど、激しくなるつて聞いたことが……」

「麗華さんが小学生の時に起こした時には、國家維持軍の一個大隊が壊滅したつて話だろ！」

「宗一の時でさえ、あれだけの騒動になつたのに……！」

本人を置き去りにして盛り上がる、クラスメイツ。というか、また知らない単語が出てきたな。

カクセイジショウドウ？

氷砂糖の親戚か？

しづらりと騒ぐに任せていた教室の空氣を総括するように、委員長が一喝する。

「先生！ 先生は、私たちに死ねと言つてしまつですか！」

「あら、違うの？」

……今度こそ、教室が凍りついた。

「委員長、言つていいわよね？」 ここにいるのは生死を共にする仲間だつて。なのに、悠斗君のためには命をかけられない？」

「い、いえ、それは……」

「口」もある委員長。

「ども先生はいつのまにか、右目の眼帯を外し、深縁の右目を全開にしていた。

「これは、とても名誉な任務。 BMPハンターになれるかどうかさえ分からぬあなた達が、人類史上最高のBMP能力者の覚醒に立

ち会えるんですから」

「そ、それは、確かに。あ、あれ。そういうえば」

後ろの方の席で、背の高い男子生徒が困惑した声を上げる。

「きっと悠斗君は、私の想像もできないくらいたくさんの人を救つてくれる。だから、私は命だつてかけられます」

い、いや、そんな先行予約されても困るんですが。

「みんなも同じ気持ちだと思ってたけど、違つたみたいね」

「い、いや、違つたりはしないんですけど……。あ、あれ、なんでだろ?」

窓際で背の高い女子生徒が困惑している。

「やはり悠斗君は、別のクラスに在籍してもうつひとくらべ……」

「ちょっと待つたー！」

廊下側のガタイのいい男子生徒が声をあげた。

続いて、真ん中あたりの頭の良さそうな男子生徒が立ち上がりて言う。

「そうですよ、先生。僕らは何も、受け入れられないなんて言った覚えはありません」

え？ 言つてなかつたつけ？

「いわゆるブラックジョークってやつです」

なるほど、ブラックの方か。

「先生、私、悠斗君と世界のために、命をかけますー！」

「私もー！」

「俺もですー！」

今までの空氣が嘘のような熱気に包まれる教室。

……これは、洗脳と言わないか？

「みんな、やっぱり最高の生徒たちだわ。187ものB.M.Pを持つていながら、この年になるまで覚醒していないような爆発物クラス

に危険で急け者の高BMP能力者の覚醒時衝動に立ち向かうなんて

！」

「こ、こども先生。もう少し、オブラーートに。

俺のハートが大打撃です。

「でも、今のみんなの力では、悠斗君の覚醒時衝動に立ち向かうにはやはり力不足です。彼を止めるのは、わたしの『アイズオブエメラルド』の仕事です」

「そんな！ 先生は、ただでさえBMP過程の方で大変なのに！」

「そうですよ！ 『アイズオブエメラルド』に万が一のことがあつたら、それこそ、この国の大好きな損失です」

「クラス全員で壁になれば、延焼被害は最小限で済むはずです！」

……俺は、爆発物じやないやい。

と、その時、

「ん。なら、私がそばで見てようか？」

涼風が吹いた。

ホームルームの最中、それもこれだけ紛糾している中だというのに、彼女は、何事もなかつたかのように扉を開けて入つて來た。

いくら俺が頭のままならない人とはいえ、彼女の顔を忘れるはずはない。

昨日初めて出会つて、会つなり高級スイートルームと小心者の俺の心を両断してくれたBMPハンター。

一瞬、水を打つたように静まり返る教室。

沈黙を破つたのは、「じども先生だった。

「珍しいわね、剣さんが登校してくるなんて。でも、遅刻よ？」

「ん、おめかししてた」

……おめかし？

着ているものは、他のみんなと変わらない。少し風変りな新月学園指定制服だ。別に改造の類もしていない。

水でコーティングされているとしか思えない同性が羨むほどの黒髪も、特に手を加えた様子もない。

スキンケアという言葉とは無縁なほど宝石のような輝きを放つ肌は、化粧らしきものを施した形跡はまったくない。

いつたいどこを、おめかしする必要があるのでないつか？

同じ疑問をクラスメイト全員が持つたらしく、麗華さんも回答の必要を感じたらしい。

美しい黒髪を無造作にかきあげ、

「髪、洗つてきた」

「普段は洗つてないとでも言つんですかー！？」

委員長が、即座にツツ口む。

……早いな。高速ツツ口ミだ。

「ん、なかなかの仕上がりだと自負してる」
しかし、華麗にスルーする麗華さん。そら、確かに綺麗な髪ですけどね。

ギャラリーの視線を一切気にせず、彼女の席なのだろう、窓際最後列の空席に着く麗華さん。

と、そこで、最初の彼女の言葉を思い出したのか、麗華さんの隣に座っていた男子生徒が突然、立ち上がり、

「宣誓！俺、船酔いするタイプなんで、廊下側の席を希望します！」

どこからシッコンでいいのかわからないセリフを吐いて、立ち上がり、高速のスピードで、廊下側最下部に自分の席を構築した。

……まあ、とりあえず『センセイ』の発音が間違っていることだけ指摘しておいてあげよつじやないか。ただしくは『先生！』だ。

それはともかく、麗華さんの右隣の席が空席になつたわけで。

「じ

……「ひ。麗華さんからすつこいカムカム光線がでている。

この状態で、俺にあの席に座らないという選択肢はあるのか？

「じゃあ、悠斗君の席も決まつたことだし、ホームルームを続けま

しょうか

ないみたいですね。

新月学園「授業風景」

……まあ、まさしく。

先生が何を言つてゐるのか、さっぱり分からん。

転校初日。

新月学園で受ける初めての授業。

俺は、いきなりのピントに直面していた。

とにかく、授業の内容が理解できない。

入学式から2週間ほどしかたつていない時期なので、学校による授業進度の差が原因なのではないと思つ。

ただ単純に、俺の前の学校とはレベルが違うんだ。

「む、むむむ……」

今日転校したばかりだというのに、完璧に揃つてゐる教科書類（なぜか参考書までセットでプレゼントされた。凄い厚遇だ）だが、とりあえず俺にわかるのは、これが数学の教科書であるということくらいだ。

先生も、そんな俺の様子に気づいてゐるのか、さっきから、一ひらきをちらちらと見てゐる。

大丈夫ですよ、先生。ちょっと氣にかけてもひつたくらいで、どうにかなるような問題ではなぞそつツス。

「ん？」

と、待てよ。

あの、いかにも学者肌、つて感じの先生、俺とゆういつも、さつき

から麗華さんの方を見てるんじゃないかな?

「あ、ああ。あの、麗華君……」

学者肌数学教師が、麗華さんに呼びかける。

「ん。なに?」

「さ、君が授業に出ているなんて珍しいな。気になることでもあるのかい?」「

まるで睡れ物に触るかのような雰囲気の学者肌教師。なんだ、これ?「ん。悠斗君のそばにいないといけないから出でる」

しーんと静まりかえる教室(もともと誰も騒いでではないけれど)。とこりか、麗華さん、普段は授業出でないのか?

「そ、そうか。そうだな。ええと、あれだ。せつかくだから、私の授業で気になつたことがあつたら、ドシドシ指摘してくれないか?君の意見は参考になるからね」

「? ん。指摘していいの?」

心底、意外、という顔の麗華さん。

「……いや、やつぱり、やめてくれ。君のレベルに合わせると、他のみんながついてこれん」

難解な命題に挑む学者のように嘆く学者肌先生。

つて、あれですか?

この、俺にひとつては、同じ国の言語で話されてることひとつくらいしかわからない、この授業が、麗華さんには、出る必要もないくらいレベルの低い授業だと?

呆けたように隣の麗華さんの顔を見る俺。

それをどう誤解したのか、

「ん? 悠斗君、今の先生の解法は、別に間違いないよ? 確かに、あんまり綺麗な解法じゃないけど。悠斗君が気になるなら、指摘する」

「こやいやいやいや。しなくていいです」

『綺麗な解法』と来た。

な、なるほど、だいたい分かってきたぞ。

この人、自分と周りのレベル差にもの凄く無頓着なんだな。他のクラスメート達は、すでに俺がこの授業についていくのを肌で感じているというのに。

未だに俺が、数学のままならない人だとこいつとを理解できていらっしゃらない。

……腹が痛くなつてきました。

「ほめりじゃあー……」

別に復活の呪文ではない。

脳のオーバーヒート音である。

数学はあるが、午前中の全科目において1パーセントも理解できなかつた脳が発する、悲しみの交響曲だ。

「だいぶ、まいつてるみたいだな……」

「ん？」

同情するような声に顔をあげると、そこには今朝見た、弱ナンパ男風味イケメン。

「三村？」

「難しいだろ、こここの授業?」

「そもそも、魂を抜かれそうなほどに……。って、それより、なん

でおまえがこゝにいる?」

と、俺が聞くと、三村は一瞬キヨトンとしたが、「何言ってんだよ。クラスメイトだ。ついでに、おまえの前の席だ」「こつからだ?」「……」

少なくとも朝のホームルームの時にはいなかつたような気がするが。「あの石垣があつた家に、事務員さんと一緒に謝りに行つてたんだよ。こゝの席、空席になつてたろ?」

覚えてない。

基本的に、麗華さんのことと、呪文のような教師の言葉しか覚えてない。

「ま、同情はするけどな」

「なんの話だ?」

授業がさつぱりわからないくらいで、同情されるいわれはないやい。「こゝの学校、確かにBMP能力者は特別扱いされてるけどな。クラス分け自体は、単純に学力で分けるんだよ」

「?」

「上方の連中と下方の連中の偏差値の差が凄いからな。クラスごとに授業内容が別なんだよ。で、BMP過程のときだけ、BMP能力者が特別教室に集まって授業を受ける、と」

「と、いうことは……」

つまり、あれだ。

このクラス、麗華さんと三村と（あと、ひょっとしたら俺プラス若干名）以外は、特にBMP能力者といつわけではなくて、単に高学力生徒クラスってわけか？

そして、信じがたいことだが、

「お前、ひょっとして、勉強できるのか?」

「ま、このクラスじゃ底辺だけどなー」

「弱ナンパ男風味なのに?」

「おまえ、結構、無茶苦茶言つよな……」

若干傷ついたように見える三村。

気にしてたのか。悪いことをしたかもしない。

「けど、おまえは特別だ。学力関係なしで、どうしても、剣の近くに置いときたかったんだろ。だから、『同情する』って言つたんだ」「よし、分かつた。同情されてやる」

そういうことなら、同情されることもやぶさかではない。

「で、その剣はどうした?」

「へ?」

言われてみると、確かにいない。

まあ、昼休みだし、飯でも食いに行つたんだろう。

というか、俺も行かねば。

そんなことを思つていると、ちゅうづ麗華さんが帰つて來た。

「おかえり」

「ん。ただいま」

言うなり、抱えていた物体を俺の机の上に下ろす。

明太子パンが六個。

「? これは?」

「悠斗君はまだ知らないかもしれないけど、BMP能力は意外と力口リーを使う」

俺の机に手をつき、瞳を覗き込むよつこにして話しかけてくる麗華さん。

「うん。確かに美人だ。間違いない。」

「だから、私も悠斗君もこのくらいの量は必要」

言うと、俺の机に置いていた明太子パンのうち三つを取り、自分の席に着いた。

「……栄養のバランスは？」

「……栄養のバランス？」

おお、麗華さんに疑問符を使わせたぞ。

あの頭の良さそうな教師陣に勝つた！

……空しいよな、やつぱり。

「いや、タンパク質とかビタミンとか……」

ミネラルとか。

俺も良くなはないけど。

「……その視点はなかつた」

明太子パンをじっと見つめる超絶美少女。

「悠斗君は、奥が深い」

妙に感慨深そうに言つて、明太子パンを、はむはむし始める。

……んー。深いかなあ？

三村は、『深くない深くない』って手と首を振つてるけど。

昼休みも残りわずかだといつて、俺は呼び出しを受けていた。

呼び出し主は、あまり雰囲気のよろしくない三人組。どうみても友好的には見えない。

が、なぜか、呼び出し先が体育館裏ではなく、体育館『内』だった。こういうところにも、学校自体の品の良さが出ているのだろうか。そういえば、周りで遊んでいる他の生徒たちも、こっちをちらちら見ているが、あんまり緊張感がない。

「そりや、この学校は、BMPが全てだ。あんたが本当に、BMP187だつてんなら、王様のようにふるまおうが、誰も文句は言わねえ」

真ん中のリーダー格の男子生徒が、口火を切る。

どうでもいいが、右側に立っている男子生徒は、結構、男前だ。

「けどな。今だにBMP能力が発現してないってのはなんだよ！？」

そんなんで、エリート面されたんじや、他の連中はたまたまんじゃねえ。まして、あの剣より上なんて、ありえねえ！」

力説するリーダー格。

しかし、右側の男子生徒、額くばっかりだな。せっかく、顔がいいんだから、積極的に前に出ないと損だぞ。

「よし、分かった。つまり、石ころのよつてじつとして目立たなければいいんだな？」

まかせる。そういうのは、得意だ。

「ちげーよ。どうしたって目立つだろ。今ままじゃ」と、リーダー格が指さすのは、檯上。

天秤を模した、奇妙な形のオブジェクトがステージの奥に飾られていた。

しかし、左側の男子生徒は存在感がないなあ。そのままだと、『リーダーのA君、男前のB君、空気のC君』とかいうふうにランク付けされちまうぞ。世間に。

「こいつは、『審判の天秤』って言われてる」

「ふむ」

「触れた人間の潜在BMP能力を、他人にも分かるよう視覚化する装置だ」

「ふむ？」

「BMP測定器のように、相対評価には向かねえが、誰にでも直感的に分かりやすい」

「ふ、ふむむ？」

く、こいつ。

不良のくせに、小難しい言葉を並べてからに。なにが『ソータイキ』だ。

「見てろよ」

言って、リーダー格が、『審判の天秤』に触れる。

途端、

獅子に似た姿の獣が姿を現した！

「おお」

その輪郭は朧げで、今にも消え入りしきりだが、その獣の放つ氣配は、まっすぐで強い。

「つつ、はあ……」

止めていた息を吐き出すような仕草をするコーダー格。瞬間、獣も姿を消した。

「どうよー。今のが、俺の『審判の獣』だぜー。」

「へえ、

こいつに対する認識を少し改めなければならない。

今のが、まだ輪郭もはつきりしていなかつたが、嫌みのないまつすぐな強さを感じた。

「こいつは、BMP108。もう少しで、BMP能力の発現する、110に届くところだ」

男前が付け足す。

そして、やっぱり、何も発言しないもう一人の男子生徒。もつと、前にでよひせー！

「何が言いたいかわかるだろ？　あんたにも、これをしてもらいたいんだ」

馬鹿にするな。俺でも、そのくらいは、分かる。

「ちゅうぶ、ギャラリーも無い。じこりで一発、BMP187の凄さつてやつを見せてくれよ。そしたら、明日から、あんたがじこのボスだ

「なるほどな」

『ボス』という表現に違和感はあるが、リーダー格の『つっこむ』も一理ある。

……実は、俺自身も、あのBMP測定器とやらの187という測定結果には、疑問を持つていた。

だって、全然、自覚ないし。

そもそも、今までBMPとは関係ない環境で生きて来たのに、いきなり『今日から君が最強のBMP能力者だ』とか言われても困る。

いい機会だ。
挑戦しよう。

深呼吸する。

少し、緊張している。

正直な所、『審判の獣』は現れないんじやないかと思つてゐる。
そうすれば、この末だに理解できない現実からは、逃れることができ
れる。

三村や二じゅ先生、上条博士、城守さんに高校生活。
それから麗華さんと離れるのは若干寂しい氣もするが、リーダー格
の言つとおり、本当に能力がないのであれば、俺はここに居座るべ
きじやない。

意を決して、『審判の天秤』に手を触れた。

ぴりっとした、というくらいだろうか。
特にこれといった手ごたえもなかつた。

『審判の獣』も見当たらない。

「ほらみろ！ やつぱり、ガセじやねえか！」

いきなり飛び跳ねたように喜ぶリーダー格。

「BMP187なんて、いくらなんでもありえないと思つていたん
だ！」

追随する男前の仲間。

そして、あと一人はやつぱり頷くだけだつた。もっと前に出よづぜー。

とか言つている場合ではない。

これは、この『審判の天秤』か上条博士のところの『BMP測定器』
のどちらかが故障しているということだ。

どちらにしても、後始末は大変そうだ。城守さん、頑張つて。

と、そこまで俺が思つたとき、

「ひー！」

『心底恐ろしいものを見た』といつ声で、リーダー格が悲鳴をあげた。

「あ、ああ……」

男前も呆然とした表情で、『審判の天秤』の背後を見上げている。

「なんだ？」

俺も同じところを見てみるが、何も見えない。

ひょっとして角度の問題か？

などと、馬鹿なことを考えている。

「え、きやあああああー！」

ギャラリーたちから、もの凄い悲鳴が轟いた。

「なにあれ！　なにあれ！　なんなのあれー！」

「い、いくら、なんでもむけやくけやだ！　BMP187だからつて、なんだよ、あれー！」

「に、にげにげにげにげ……！」

「やっぱり、あいつには手を出しちゃいけなかつたんだ！」

ちょっとしたパニックに陥つてゐる体育館内。

しかし、やっぱり俺には何も見えない。

「な、なあ、澄空。俺たちが悪かつた。あなたの力は十分に分かつから、『ソレ』しまつてくれ！」

とリーダー格。

「い、いや……」

しまつてくれ、と言われても。

「お願ひだ、悠斗さん！……、ひ、ま、待つた。や、やめひ。潰さないでくれ！」

と男前。

つ、潰すってなんだ？

ひょっとして、これ。本人には見えない仕様なのか？

「ゆ、悠斗さん。いや、澄空様！俺たちが悪かった。この通り！だから止めてくれ。止めてください！お願いします！」

ついに口を開く第3の男。ようやく口を開いたと思ったたら、それか。どうか、様づけなんてするな。俺が暴君みたいじゃないか。

「や、やつぱり、無理だ。あの二人組がいくら謝つても、澄空君の怒りは収まらない！」

「て、天罰だ。地上最強のBMPを囮うつとした天罰だ！」

「とにかく逃げるー！ BMP過程の先生たちを……、いや、国家治安維持軍を呼べー！」

……。

いや、暴君だな。まるつきり。

「一言で言つて、大惨事ね」

「大参寺ですか」

それは、きっと格調高いお寺なのでしきうね。

「発音変えてもダメです」

右目の眼帯の位置を直しながら、じども先生。しかし、いつ見ても、じつい眼帯だ。クマのパーさん眼帯とかじやだめなのか？

昼休み後。

俺は午後の授業には出席せず、職員室に呼び出されていた。

机の前には、明らかにサイズの合っていない机の前に座っている、「こども先生」。

そして、他の教師たちが、俺から距離を取るようにして、壁際に移動しているのが気になる。凄く気になる。

「何らかの異常を訴えて保健室を訪れた生徒が216人。そのうち、パニック症状を起こして早退することになった生徒が87人」

「ぶつ！」

ま、マジですか！？

「一番近くにいた三人組は、入院したわ。大事には、いたらなかつたようだけど」

「ぶつ！」

ま、マジですか！？

もの言いたげな隻眼で見つめてくる、「こども先生」。

「待ってください、「こども先生」。意外に思うかもしませんが、俺にも主張らしきものがあるようですよ？」

「「こども先生」、言わない。別に、言い訳する必要はないわよ」

『『なんで疑問形なのよ』といったツッコミをすることすらなく、やけに寛大な、「こども先生」。

「君が他の生徒にそそのかされたのは明白だし、あの『審判の天秤』は、本当に何の危険もない、ただの検査器具なんだから」

「え？」

凄く危険だったように思うんですが。

「そうね。今、あれの製造元は大変よ。謝罪会見に、原因究明・再点検、商品回収。結構、大手なんだけど。潰れなければいいんだけどね。悠斗君のせいだ」

「こ、「こども先生」、もう少しオブラーート！」

俺のハートにクリティカルヒットです。

「ま、それはともかく。もう少し、じつちに来て」

言われるがままに、椅子ごと寄せると、じども先生は眼帯を外した。

「んー」

深緑の瞳が、俺を覗き込む。

「ん、んー！」

じども先生の手が、俺の頭を掴む。

「せ、せんせせせ……」

縦に振つても、やっぱりBMP能力は出てこないと思ひます、じども先生！

「やつぱり、わかんない」

拗ねたように手を離す、じども先生。じゃあ、するなよ。

「でも、これでわかつたでしょ」

「え？」

人差し指を、ビックリ立てて、じども先生。

「感知能力者としては屈辱だけど、私に感知できないだけで、やっぱり君にはとんでもないBMP能力が眠っているわ」

「はい」

みたいですね。

「君自身が自覚できないのは分かるけど、これから先に何が起るか、私にもわからない。覚醒時衝動だけでなく、いろんなことに気がつけて」

「分かりました」

深く頷く。

人に迷惑をかける生き方だけは、嫌だからな。

豪華絢爛（ロイヤルハッシュ）『本郷エリカ』

眼が覚めると、夕方だった。

机から頭を起こすと、教室内には誰もいない。

「ふーむ」

午後の授業の途中から、記憶がない。

これは、俗に言う居眠りというやつだろう。

「いや、どっちかというと気絶かな？」

ほんとに、授業中、先生が何を言っているのか分からぬもんなあ。

「そういや、麗華さんは……」

いない。

今日の状況からして、先に帰ったとは考えづらいな。
もう少し待つてよつか。

しばらく待つていると、教室のドアが開いた。
だが、期待していた人物ではなかつた。

「委員長？」

それは、麗華さんにも喰つてかかっていた、委員長属性の委員長だ
つた（名前はまだ知らない）。

「まだ、帰つてなかつたんですね」

軽く会釈をして、自分の机を漁る委員長。

どうやら、忘れ物を取りに来たようだ。

しかし、委員長。分厚い眼鏡で、三つ編みで、あんまり目立つ風貌
じやないけど、なんだか、ホつとする。

この一日間、個性の強い人たちばかりだつたもんない。

上条博士（と、その女性研究員）、城守さん、三村、いじども先生。
そして、やっぱり麗華さん。

あの人は、やっぱり特別だよなあ。

「『特別』って、どんな気持ちですか?」

そりや、あれだけ超絶美少女で、仰天戦闘力を持つてれば、普通の感性にはならないとは思うよ。でも、悪い子じゃないんじゃ……え?

気がつくと、いつの間にか、委員長が目の前まで来ている。
普段から難しい顔をしているが、今は特に真剣だ。

「今日の昼休み、体育館で遊んでいた人たちが、100人近く早退したつて聞きました」

「ぶつ」

そ、その話題でしたか。

まずい。急いで、対ごども先生用に用意していたけど、結局使わなかつた言い訳を思い出さないと!

「待ってくれ、委員長! 意外に思うかもしれないが、俺にも若干、言い分が、あつたりなかつたり、五分五分だ」
いかん。焦りすぎて、言動が意味不明だ。
「別に責めてるわけじゃないです」
しかし、やけに寛大な委員長。

「ほんのわずかだけど、BMP能力があると分かつて、この高校に入るために、私、勉強しました。身体を壊すほど」
以前に聞いた、BMP能力と反比例する試験制度か。

「でも、低BMP能力者……特に、BMP110未満の能力発動値に達していないBMP能力者にとつては、結局ここも、ただの名門校です」

それのどこが悪いのか、俺には分からないけど。
少なくとも、このクラスの授業についていけるだけで、凄いと思うけどな。

『特別』って、どんな気持ちですか?」

前言撤回。

この子も、難しい。

この一日間で、頭を悩ませる事項が爆発的に増えた。

まず、なんといつてもBMP能力。

続いて、麗華さん、新月学園、さきほどの委員長もそうだ。ついでに、上条博士のところの注射好きの女性研究員さん。

そして、今現在、俺がどこにいるかということ。

「そもそも、俺はどこに帰るつもりだったんだ？」
絶賛ホームレス中だというのに。

委員長の話を、頭が悪いなりに消化しようと、うんづん唸りながら帰つたのがまずかった。

ただでさえ知らない道を、意識しないまま歩き続けるうちに、絶望的なまでに知らない場所に出た。

「首都にしては、綺麗な川だよなあ」

その川（名前は知らない）に架かる、これまで名前も知らない橋の上から、のんきに呟いてみる。
でも、ほんとに綺麗な川だ。

透明度は高いし、魚も泳いでいる。
幅もそれなりだし、河原も綺麗だ。
おまけに金髪の美人まで立ってる。

「つて、え？」

確かに金髪の美人が立つてる。

後姿だけでも美人だということを確信できる、すらりとした長身（麗華さんより高そう）に加えて、セミロングの輝くような金髪。それも、染めているのではありえない自然な金。

おまけに、新月学園の制服を着ている。

「うちの学園、外人さんまでいたのか……？」

思わず欄干から身を乗り出して確認しようとする。
と、

「痛つ」

何かに、頭をぶつけた。

「なんだ、これ？」

確かに頭をぶつけた。

しかし、そこには何もない。

いや、『ない』訳じやない。手で触ると、確かに感触がある。
しかし『見えない』。

「うーん……」

撫で回す。

感触はプラスチックに近い。

大きさは、ラグビーボールほど。

形は橢円で……、そう、できそこないのラグビー・ボールといつと一番イメージが近いかもしれない。

そんな不可思議で不可視の物体が、欄干の上、10センチくらいのところに浮いている。

「あー！ それに触っちゃダメデス！」

俺の知能では無理と、早々に思考を放棄しよつとした矢先に、高く良く響く声が聞こえてきた。

声のする方を見てみると、さきほど外人さんだ。

「それに触っちゃダメデス！ 危ないデス！」

多少、片言気味だが、綺麗な発音だ。そして、案の定、美人だった。

輝くような金髪に見とれていると、金髪さんは、土手に駆け上がりだした。

「ひょっとして、いつに来ようとしているのか？」

結構、距離があるんだけど。

うーん、間が持たないなあ。

さて、ここで問題。

いつこの時の正しい対応は、次の内、どれだ？

- 1 · 恋人の「」とく、彼女に向って全力で手を振り続ける。
 - 2 · 一枚目の如く、少し流し目で川を眺め続ける。
 - 3 · 脱兎の「」とく、逃げる。
 - 4 · 馬鹿の「」とく、ぼーっとする。
- よし、4だ。

などと馬鹿なことを考えていると、金髪さんが、いつの間にか田の間にいた。

結構、足、早いな。

「あ、危ないから、触っちゃ……、だめ、デス」

「りょ、了解ッス」

近くで見ると、輝くような金髪以上に、深く青い瞳に圧倒される。思わず、敬礼した俺を、誰が責められるだろつ？

「そ、それに触れでは、いけないのデス」

「こ、これのこと？」

と、反射的に、その不可視のラグビー・ボールに触れてしまひ、馬鹿な俺。

「デスから触れてはいけません！ 手が切れてしまいマス！」

そ、それは、大変だ！

慌てて手を放し、出血の具合を確かめる。

「……あれ？」

しかし、手はどこも切れていなかつた。といつか、さつき、散々触りまくつてたよな。確か。

「ちょっと見せてくださいデス」

俺の手を取つて、まじまじと見つめる金髪さん。

「確かに、傷はないようデスね。何よりデス……」

セリフとは裏腹に、めちゃくちゃ落ち込んでいる金髪さん。え？

俺、またなんかしました？

「あの。なんか、まずかった？」

「いえ。怪我がなかつたことは、とても喜ばしいのデスが……

憂いの色に、瞳を染める。

「さうとばかりも言えない事情があるのデス……」

とつあえず、聞きましょつか。

そして、そのあとで、新月学園まで送つてもうおひ。さりげなく。

「私は、本郷エリカといいマス
「あ、どうも、はじめまして」

金髪の彼女に促されるまま、川を眺めるような体勢で、土手に一人して座り込んで話している。

名前もそうだが、外人さんにしては、顔の線が柔らかい気がする。ハーフさんだらうか？

「クラスは『サポーター支援士』、能力名は『ロイヤルエッジ豪華絢爛』デス
「へえ。ロイヤルエッジっていうのか」

さきほど俺も触れた、不可視の刃。

それを、彼女は今、川の上あたりに展開しているらしい。

その数は、数十個。

良く見れば、完全な不可視というわけではなく、光の反射で、だいたいの位置は掴めるみたいだ。

だが、一番の問題は……。

「Hッジといひにしては……」
「切れない。

たまたま近くに浮遊していた『ロイヤルエッジ』を撫で回しているのだが、できそこないのラグビーボールのような形のソレは、確かに多少は尖っているが、よほど強くこすらないと、斬れそうにない。

「そつなんデス……」

青い瞳を伏せるハーフさん。

「幻影獣に有効な攻撃を与えるのは、BMP120からなに、私のBMPは119。おかげで、エッジも、こんな中途半端な状態なんデス」

それで、放課後一人で訓練してたのか。

見た目はロイヤルなのに、なんて健気なハーフさんだ。
見た目も才能もエクセレントな、どこかの麗華さんにも、是非見せたいところだ。

つて、そつにえ、俺、自分の自己紹介しないぞ。

彼女は、『ロイヤル』だから、俺は……。

(はじめまして！『1-C』の澄空悠斗です！)

といふのは、どうだ？

つて、それは、ただの所属だ！

没！

「あなたは、澄空悠斗さんデスよね？」

「へ？」

とても自然に、俺の名前を呼ぶ本郷さん。
どうして俺の名前を知っているんだ？

理由は不明だが。

彼女に自己紹介する機会は、最初からなかつたらしい。

幻影獣「寄生型」

「体育館での『審判の獣』の儀式を見てましタ

「ぶつ」

「こ、ここにも糾弾者がいましたか。

「待ってください、エリカさんとやら。とてもとても不可思議でしょうが、実は、俺にも異論・反論・オブジェクト……」

「とても、感動しましタ」

「……はい?」

感動とな。

なぜに?

「いつたい、どんな獣が見えたんだ? ビームも、本人には見えない仕様らしいんだが……」

「分からぬデス」

平然と言い放つ金髪。

「レベルや属性が違い過ぎると、見えてても理解できないことが多いデス。麗華さんの時もそうだったデス」

「そ、そなんですか」

「でも、とても優しくて強い獣でしタ。強すぎて、みなさんパニッシュになってしまったようデスけど……」

と、エリカは、言葉を区切り、

「私も、悠斗さんみたいなBMP能力者になりたいデス」

「いや、それはおすすめしない

いや、マジで。

「ところで、悠斗さんの家は、こっちの方なんデスか?」

自分でも『ロイアルエッジ』を弄びながら、エリカが聞いてくる。

ああ、そういうえば、今、迷子の最中だった。忘れてた。

俺は、懐から携帯電話を取り出す。

「もしもし、城守ですが」

「城守さん。俺は、どこに帰ればいいんでしょうか？」

「？ それは、哲學的な問いですか？」

「なんでやねん。」

「物理的に、今日、寝るところです。壁はなくともいいですが、天井は必要です。浮浪者はいてもいいですが、不審者は勘弁です」「いきなり最低ラインを切り出さなくて……。そこに、麗華さんはいなんですか？」

「いえ、いませんけど」

別口の美少女なら、いますが。

「おかしいですね。麗華さんに、案内するよつい、お願いしていたんですけど」

「失礼しました。お手数、おかげしました」

慌てて電話を切る。

やばい。

そういうえば……。

「麗華さんを置いて帰つてきてた」

「ウチの学校で、麗華さんを置いて帰る男の子がいるとまもいませんでしタ」

「意外だねえ。俺もだよ」

とりあえず新月学園まで帰らないといけないので、エリカに案内を頼むと、意外なほどあつたりと引き受けてくれた。見た目はロイヤ

ルだが、ほんとにいい娘だ。

しかし、麗華さんにどうやつて謝ったものか。いきなり、断層剣を抜かれた日には、まつぶたつになるのは、俺の身体だけではすみそうにないぞ。

「アレ？」

唐突にエリカが立ち止まる。

「どうした？」

「アレを見てください」テス

言われて見た方向には、新月学園の制服に身を包んだ女生徒。しかも、

「委員長に似ているような……」

気がするのだが、確証が持てない。

俺の知っている委員長は、ちょっと気が強いところもあるみたいだが、まじめで、礼儀正しい。

しかし、今、見ている彼女は、制服をだらしなく着崩しているし、髪にも艶がなく、目の焦点も合っていないように見えるし、靈魂のよつな不可思議な光り方をする爬虫類のような尻尾を生やしている。

「……」

つて、ちょっと待て！

「なんなんだ、あれ！？」

よつやく現実を認識して騒ぎ出す俺の前で、不気味な青色に輝く尻尾が、もの凄い勢いで振りぬかれた！

「な！」

たまたまそこを通りがかつていた人たちが、3人ほど、まとめて吹っ飛ばされる。

「氣をつけてくだサイ、悠斗さん！　あの人は、幻影獣に寄生され
ていマス！」

エリカが叫ぶ。

き、寄生型の幻影獣だって？　あれは、滅多にいなはずじやない
のか！

ちなみに、カードレアリティで言つと、『レア』くらいの出現率だ。
「あの人を止めマス！　援護してくだサイ！」

と、エリカ。

言われて、一応、周りを見渡してみるが、他に誰もいない。
ということは、さっきのセリフは俺に言ったのか？
しかし、援護といつても……。

「とりあえず、ミネラルウォーターとか買つてきておけばいいのか
な？」

ほんとにそれくらいしか思いつかない馬鹿な俺を尻目に、エリカが
能力を発動させる。

「ロイヤルエッジ
豪華絢爛！」

指揮者のような優雅な腕の振りに合わせて、空間に出現する数十の
不可視の刃。
その刃が、彼女の指の動きに合わせて、幻影獣に寄生された女生徒
に向かつて殺到……。

「さあ、どこからでもかかつてくるがいいデス！」

……え？

この刃、ひょっとして、動かせないのか？

ビシ、と指を突き付けられた謎の女生徒は、しかし、向かつて来な
い。

どころか、くすりと小馬鹿にしたような笑みをこぼして、背中を向
けて逃げて行つた。

「お、追わないと！」

あまりの出来事に、自分の身の程も忘れて追いかけようとする俺。

「ま、待ってくださいデス！」

その俺の首に、後ろから細い腕が巻きつく。

す、スリーパーホールドの体勢になつているんですが！

エリカの腕は、長いが細い。

ゆえに頸動脈をいい感じで圧迫しており、気を抜くと落ちてしまいそうだ。

ついでに、エリカの胸は大きくて形がいい。

こちらも気を抜くと、背中側から意識が飛びそうな危険物である。

「エ、エリカ！　ぐ、首！　落ち……」

「チョークタに、ロイヤルエッジ豪華絢爛の切れ味がいいデス！　隠蔽率も高いので、下手に突っ込むと危険デス！」

確かに、謎の女性徒を追つたためには、ロイヤルエッジ豪華絢爛が布陣された空間を抜ける必要があるが……。

「じゃあ、早く解除を！」

「そ、それガ……。慌てて変に固着させてしまつたせいか、解除に

時間がかかりそうなんデス……」

ま、まさか。解除に、1分くらいかかるとか……。

「15分くらいかかりマス」

……。

キミの能力は、お笑い専門ですか？

「ひ、ひどいデス！　悠斗さん！　私はあんまり出来は良くないかもしねないデスけど、お笑いじゃないデス！」

「す、すみません！」

言い過ぎました！

だから、落とさないでくださいー。

結局、謎の女生徒には逃げられてしまった。
まあ、15分も経てば、無理もない。
そもそも、迎撃専門のエリカと、応援専門の俺でなんとかできる状況ではなかつた気がする。

あのあと、

『やつぱり、私はだめだめデスー』
と嘆くエリカをなんとかなだめすかして、新月学園まで案内してもらつた。

女性とまつたく縁のなかつた俺が、レディを慰めるような真似ができるとは……。

「人間その気になれば、なんとかできるもんだなー」
ほんとに、そう思う。

しかし、なんともならないことも、もちろん、厳然として存在する。

今がちょうどその時だった。

「うわ。ほんとにまだいる……」

今日の宿はなくなるが、いつそのこと、帰ってくれていた方が良かつたかもしれない。

不審者のような恰好で、教室のドアの陰から覗き見る俺の視線の先。窓側最後尾の席に、何度も見ても、この世のものとは思えないほど美

しい少女が座っていた。
待つてくれたのだ。

俺の脳裏に最初の出会いのシーン（主に『断層剣カラドボルグで』真つ二つになつた部屋）が思い出される。

おまけに、今回は、例え俺が真つ二つにされても、誰も擁護してくれない気がする。というか、してくれない。

とはいって、まだ死ぬ気はない。

「仕方ないな……」

やはり、ここは『カウンター土下座』しかない。

麗華さんが怒り始めた瞬間に、カウンターで額を床に叩きつけながら、ダイビング土下座をする。

人間、機先を制されると弱いものだ。

「とはいって……」

頭を床にこすりつけた状態になるので、後頭部を踏みつけられたりすると、非常にスプラッタなことになる。

「い、こえー……」

普通にビビる。

が、あれだけの超絶美少女を2時間近く待たせておいて、このまま逃げることなど許されるはずもない。

「よしー！」

俺は、覚悟を決めた。

「麗華さん！」

勢いよくドアを開ける。

「待たせてごめん！ 頭悪いくせに考え方してて、ボーとしていて、

一人で帰つてしましました！ ほんとにはみませんでした！」

一息に言いきつて、『カウンター土下座』の体勢を取り、麗華さんの怒りに備える。『断層剣カラドボルグ』か『後頭部踏みつけ』が

出でませば黙つていれば、俺の負けである。

すると。

「ん。待つてた。じゃあ、帰つ

許してくれました。

心、広いな！

道行く人がみんな振り返る。

良く『街で会つたら、10人中10人が振り返る美人』とかいうけど、ほんとに全員振り返る。

それも老若男女問わずに。

まあ、無理もない。

どう見ても、モデルかアイドルにしか見えないもんな。

「ん？ 悠斗君。何か気になることある？」
なくはないですよ。

振り返つて麗華さんを見てボーとした連中が、その後で、『で、その隣にくつついてるおまけみたいな奴、何？』みたいな視線で見てくることとか。

しかし。

「いや、何も」

と答えるしかあるまい。

毎日こんな状態じゃ無理もないけど、ほんとに他人の注目を集めるのに無頓着な人だ。

ところで、今、俺は、他の人からどう見えてるんだろうな。

この位置関係（麗華さんの隣を歩いている）なら、ストーカーには見えないだろうが。どうだろう、アイドルとそのマネージャーとかか？

いや、しかし、麗華さんは、普通の人間なら一緒に歩くことすら躊躇するほどの美人だ。

コスプレして麗華さんに付きまとつている不審者と勘違いされないとも限らない。というか、さつきから10人に1人くらいの割合で、そういう目で見ている連中がいる。

一応、保険をかけておくか。

「麗華さん。もし、国家権力がやつて来た時には、正しい身分照会を頼むよ」

「ん。大丈夫。悠斗君もBMPハンター登録されているはずだから、もう国會議事堂にでもフリー・バスで入れるはず」
そういう類いの心配をして居るのではないですが。
まあ、大丈夫だろう。

実際に居心地の悪い帰り道をじょじょへ歩き、ようやく田舎地帯のマンションが見えてきた。

首都の一等地だというのに、土地の取得だけでいつたいいくらかかったんだ、というくらい馬鹿でかくて豪華なマンション。

どうも、ここが俺の新しい寝床らしい。

しかし、昨日までは、こういう建物は実は、国家維持軍の秘密基地か、変形合体するロボットパーティのたぐいだと思っていたけど、やっぱり人が住めるんだな。

俺なら、屋根さえあれば、オールシーズンいけるといつに。ちなみにマンションの名前は

『ハイツ剣』

「…………」

ちょっと待つてみようか。

「麗華さん」

「ん。何?」

「このマンションは、お父様の持ちモノなのでしょうか?」

なぜか敬語になる卑屈な俺。

「ん。違う。おじい様の」

ですか。

俺にとっては、その違いは本質的な違いではないですが。
つまり、あれだ。

麗華さんは、これだけウルトラハイスペックな容姿と能力に加えて、
お嬢様属性持ちと。

一度、この世界の神様と意見交換会をする機会はないものだらうか。

入口のセキュリティを、麗華さんに付いて抜ける。
そのまま、最上階までエレベーターに乗って上がり、
一番いい場所にある一室の前まで来た。

「ここ」

と言つて、麗華さんが鍵を開ける。

そして、そのまま先に中に入った。

? あれ?

とりあえず、俺も続いて入る。

入つてみると、麗華さんは、ダイニングの椅子に腰かけて、くつろ
いでいた。

? エーと。

「麗華さん、質問です」

「ん? なに?」

「ここは、俺の部屋なんだよな?」

「うん。そう。それから、私の部屋もある」

俺は席を立つた。

廊下に出て、携帯電話を取り出す。

そして、一件しか入っていない番号をホール。

「はい。城守ですが」

ワンホールで出た。

「城守さん。俺は、ここにはいられません」

「？ それは、哲学的な意味ですか？」
おしい。

「倫理的な意味です。なんで、高校生の分際で、同棲をしなければならないんですか？」

と聞くと、いかにも、やれやれ、と言った口調で、

「実は、悠斗君の覚醒時衝動に関する調査報告がまとまつたんですね」

また、氷砂糖の親戚か……。

「それによると、悠斗君のBMP能力が戦闘系のものだった場合、最大被害を想定すると、国家維持軍の首都防衛部隊が全滅となっています」

「ぶつ」

それは、いくらなんでも大袈裟過ぎだ。

麗華さんが、昔、国家維持軍の一個大隊を沈黙させたとかいう話といい、どうしてそもそも大袈裟に言うのか？

「誰ですか、そんなテーマを飛ばしてるのは？」

と訊く、城守さん。ほらみる。やつぱり、『テーマじゃ……』。

「一個『連隊』です。麗華さんの覚醒時衝動の時ですね。いや、あの時は、ほんとうに肝を冷やしました」

……左様ですか。

「国家維持軍をそのマンションに張り付けられればいいんですが、『近所迷惑』というものもありますし」

……でしうねえ。

「まあ、悠斗君にひとつても、麗華さんひとつでも『高貴なる責務』とこうやつですよ。間違いにだけ気をつけて、健全に同居してください。十分、骨身にしみているとは思いますが、麗華さんを怒らせ

ると、検査院に机を投げつけた時のほうがまだまし、ところに「いつにありますよ」

「実感こもってますねー」「

投げやりに軽く俺。

やつぱり、この人に口論で勝つのは無理だ。

どうやっても、反論できない材料をそろえているに違いない。

「では、私はこれで」

と言つて、電話は切れた。

敗者の気分でダイニングに帰つてくると、美しい姿勢で麗華さんが椅子に座つていた。

ただし、制服のままだ。

「とりあえず、服、着替えてきたら?」

「なぜ? このままでも構わない」

「いや。そのままだと……」

「そのままだと?」

「しわになる」

「……悠斗君は奥が深い」

以上のようないやり取りを経て、麗華さんは着替えに行つてくれた。

……やつぱり、俺の『奥』が深いわけじゃないよな。

「こしても……」「

見渡してみても、何もない。

3LDKといつぶざけた間取りで、広さも十分。備え付けの家具も豪華だが、それ以外に何もない。

なんとなくイメージ通りではあるが、ここまで徹底しているとは。

「まさか、食料もないなんてことはないよな？」

心配になつて冷蔵庫を開ける。

そこには、500//リリットルのミネラルウォーターが5本ほど入つていた。

「……」

ちなみに冷凍庫は、空だつた。冷凍庫、いらないではないか。たとえ、この水が、BMP兵器開発局の調合した特殊飲料だつたとしても、この水だけで、あの暴力的なプロポーションが維持できるとは思えない。

「となると、怪しいのはあそこだ！」

芸能人お宅訪問、のノリで、システムキッチン上部の収納部を開く。すると、雪崩が起きた。

「…………」

雪崩の正体は、カツプラーメンだつた。
それも、同一メーカーの同一種類のシーフードヌードルだ。

「…………」

一つ一つひっくり返して調べてみるが、賞味期限以外に違ひが見当たらない。

「ということは、シーフードヌードルコレクターのセンもないな」
そんなコレクターがいるかどうかも知らないが。
と、ドアの開く音がした。

「あれ、悠斗君？　どうしたの？」

麗華さんは、タンクトップとジーンズというラフな格好だつた。
お嬢様属性ということで、ドレスで登場とかいうインパクトはなかつたが、代わりに脚が長いことが判明した。いや、マジで長い。

「いや、食料を探してた」

自分で言いながら、これはコソドロと変わらないのではないかと、今更ながらに青くなる。

「ん。だったら、そこから好きなの選ぶといい」

「そうか。やっぱり、このシーフードヌードルズが唯一の食糧か。

「栄養のバランスは？」

「その視点はない」

開き直りやがつた。

「……ないけど、あつてもいいかなとは思つてゐる」

「讓歩ですか」

ならば、仕方ない。

俺が、カレーでも作りますか。

「はじめの一歩」幻影戦闘

「身近に料理ができる人がいるなんて、思わなかつた」

夜道。

スーパーへの道程を歩きながら、麗華さんはしきりに感心している。「いや、あのクラスにも結構いると思つぞ。あんまり、自分から言わないだけで」

「！ やつぱり、悠斗君は、奥が深い」「いやー。深いかなー？」

「ところで、悠斗君は着替えないの？」

麗華さんの指摘の通り、俺は、新月学園の似合わない制服のままだつた。

「服がなくてね」

もともと、大して持つていなかつたが、アパートを追に出されるදサクサでほとんど紛失しているとみていた。

「だったら、私の服を着ればいい」

言われて、麗華さんの方を見る。

長身の麗華さんと俺は、確かに身長は同じくらいだが……。

麗華さんの細い腰に目をやる。

そのウエストの寸法で締め付けられると、俺は冗談抜きで死んでしまう。

しかも、『あれ、私のズボン、悠斗君の足にはだいぶ長いね。かなり、切らないと』なんて言われた日には、泣いてしまつ。

「ウエスト？」

きょとんとして、麗華さんは、自分の腰に手をやり、続いて俺の腰を撫でる。

「ほんとだ、細い」

気づいてなかつたのか。

ここまで、自分の魅力に無自覚なレディも珍しい。

「この、『ジャワカレー』と『アーモンドカレー』は、結局、何が違うの？」

スーパー『トミタケ』の、今まで足を踏み入れたことがないという区画で、2種類のカレールーを前に深遠なる問いかけをしてくる超絶美女。

「基本的には、味が違う」

それは、間違いない。

「……応用的には？」

容赦のない、麗華さんのツッコミ。

「値段が違う」

人によつては、こつちが基本的事項だろつ。ちなみに、俺は後者だ。

「つまり、値段と味が正比例すると？」

「そもそも限らないのが、カレールーの恐ろしさ」とこりだ
別にカレールーに限つたことではないが。

部屋の惨状を見ている限りでは、てつきつこういう買い物は面倒くさがると思つたんだが、麗華さんは、意外にノリノリだつた。

しかし麗華さん、食材の産地とか、栄養素とか、ついでにスーパー マーケットの営業形態の特徴と分類とか、そういう難しいことは自分からスラスラ教えてくれるのに、変なところで知識が抜けている。

「大変だ。悠斗君」

「どうした?」

「カレーを作らなければならないのに、米がない」「入口のところに売つてたけど?」

「違う。炊飯ジャーがない」

「麗華さんの部屋にあつたぞ?」

「え?」

そんな馬鹿な、みたいな顔で見つめられる。

「そういうえば、あつたような気もするけど。私が買つていないので、なぜ存在するの?」

「うーん。いわゆる『備え付け』ってやつじゃないのかな?」

冷蔵庫とかも、間違いなく麗華さんが買つたものじゃないだろ?」

「そこまで確認したうえで、カレーライスを作る決断をしたの?」

そ、そんな大げさなものではないですが。

「いや、炊飯ジャーくらい、なくとも普通に買えるし。まだやつて

る電機屋くらい、ここに来るまでにもあつたろ?」

「! そ、その視点はなかつた。申し訳ないです」

い、いや、謝らんでもいいですが。

でも少し分かつたぞ。

このアンバランスさは、麗華さんの性格だけが原因じゃない。

おそらく、いろいろなことの経験が不足しているんだ。

抱えていた。

麗華さんは、野菜や飲み物。
俺は、カレーラーと米。

「悠斗君。重くない？」

麗華さんが声をかけてくる。

重いです。20kgは調子に乗りすぎました。

「いや、大丈夫だ」

「しかし、発汗量、筋肉反応、心拍数。全てが、異常値を示してい
るよつに見えるけど」

「気のせいだ」

「そう?」

麗華さんに、男のプライドについて説明するのはまた今度にしよつ。

「あれ？ 悠斗君。あの人、うちの委員長さんじゃないかな」と、麗華さんが指差したのは、俺の体力がいい加減に限界にきていた時だった。重い。マジ、重い。

「どれどれ

あ、ほんとだ。

……いや、待てよ。

確かに委員長に、似てはいる。

しかし、今、見てている彼女は、制服をだらしなく着崩しているし、髪にも艶がなく、目の焦点も合っていないように見えるし、靈魂のよつな不可思議な光り方をする爬虫類のような尻尾を生やしている。

「つて、夕方のあいつじゃないか！」

幻影獣に取り憑かれた女生徒だ！

「幻影獣に取り憑かれてるね」

冷たすぎて頬もしくなるほど冷静な声色の麗華さん。

その手には、シンプルな装飾の諸刃の剣が握られていた。

……『断層剣カラドボルグ』じゃないよな。

「『干渉剣・フラガラック』」

と、麗華さんは説明してくれた。なんだか、良く分からぬけど、凄い剣なんでしょうね。

「悠斗君は、ここで待つて」

言つて、女生徒めがけて突進していく麗華さん。

「ギィヤアアアア！」

鼓膜が破れそうなほどの奇声とともに、青白く光る尻尾で迎撃する女生徒。

だが、麗華さんは、苦もなくかわし懷に飛びこむ。

そして、『干渉剣・フラガラック』を、女生徒の身体に突き立てた。

「……って、ちょっと待てー！」

思わず焦つてしまつたが、麗華さんが、そんな早まつたことをするはずがない。

干渉剣フラガラックは、確かに謎の女生徒の身体を貫いていたが、その身体からは一滴の血も流れていなかつた。

「ひょっとして、精神だけを攻撃する剣とか……？」

という俺の推測を裏付けるように、串刺しにされた謎の女生徒の身体から、青白いゴーストのような物体が姿を現した。
あれば、寄生型の幻影獣か！

「追いかけて、仕留めてくる。悠斗君は、ここで待つて」
言つて、駆け出す麗華さん。

「ま、待つんだ、麗華さん！」

買い物袋は、置いて行つた方がいい！

しばらく待つたが、麗華さんは帰つてこない。

仕方なく、俺は謎の女生徒の様子を見ていた。

「やつぱり、委員長だよな」

とりあえず地面に敷いた俺の制服の上着の上で眠る女生徒は、見れば見るほど委員長そっくりだった。

「江北も先生は、委員長はちやんと家に帰つてたって言つてたけど

……」

家族も騙していたところだとどうつか。幻影獣もあなどれないな。

「ん……」

お、委員長が目を覚ました。

「委員長。大丈夫……」

「なんなのよ、あいつら！」

いきなり、怒鳴られました。

「し、信じられない……。人の心に、入つてくるなんて！ 幻影獣

つてなんなの！ なんであんなのが存在するの！ もういや！ 私

もひ、あの学校やめる！ BMPハンターになんかなれない！」

無理もないのかもしれないが、委員長はだいぶ怯えて興奮していた。いかん。なんとか、落ち着かせなければ。

小粋なギャグも全然思いつかないし、とりあえず「ほほ下座して

謝ろう！

「すみませんすみません。とりあえず、すみません…」

……いかん。俺もだいぶ混乱している。

と、どうにも手のつけられない状態だった委員長が、突然黙り込んだ。

「な、なにか、ありました？」

敬語で聞く、情けない俺。

「あ、あれ、あれ……」

委員長が指差す先には。

青白いゴーストが立っていた。

間違いない、さきほどのは寄生型幻影獸だ。

麗華さんを振り切つて、ここに帰つてきたらしい。

犯罪者は現場に帰るというが、なんてハタ迷惑にセオリー通りなやつだ。

「いや……。もういや！　ここに来ないで！」

よっぽど気持ち悪かったのだろう。

委員長は、俺のワイヤーシャツをちぎれるくらいに握りしめて、目いつぱい振り回していた。

「まあいいな、これは」

委員長は、戦力にならないばかりか、逃げることすら難しそうだ。

俺も、彼女を抱えて逃げられるほど、身体を鍛えてはいない。

あんまり出来の良くない頭を使って、打開策を考える。

「仕方ないか……」

やはり、大した策は思いつかなかつた。

「委員長」

ダダをこねる子供のような委員長の目をみながら、語りかける。

「これを麗華さんに渡してほしい」

「え？」

はじめて、委員長が俺の目を見た。

そんな彼女に渡したのは、カレールーと米袋。

「そして伝えてほしい。とりあえず『弱火で煮込め』と」

「は？」

ぐ。やはり俺もだいぶ混乱してるな。口クなセリフが思いつかん。

「す、澄空くん！」

委員長を背にするよつて立つ。

俺のカンでは、あの幻影獣には直接的な攻撃力はない。

とりあえず、俺に取りつかせて、時間稼ぎをしている間に麗華さんが帰ってきて、『千渉剣フラガラック』でズブリとやつてくれる！
完璧だ。完璧に行き当たりばったりなプランだ。
……俺、ほんとに頭悪いな。

「来い！ 幻影獣！」

でも、なるべくなら来るな！

買い物帰りのヴァルキリー

こいつの間にか、俺は田をつぶっていた。

精神を乗っ取られるつて、どんな感覚だらう。

普通に生活していれば、まず遭遇しない危機だ。

委員長があんなに怯えるんだから、よっぽど気持ち悪いんだろうな。

いや、それどころか下手をすると、もう一度と田覚めないかも。その場合、労災はおるのか？

つて、おりても、田が覚めなかつたら意味ないだろ！

と、ひとしきり心の中で葛藤してみた。

しかし、幻影獣はいつまでたっても襲つてこない。

「……ひょつとして、なぶるつもりか……？」

恐る恐る田を開けると。

そこには、『干渉剣フラガラック』で壁に縫いつけられた幻影獣がいた。

「麗華さん！」

「じめん。遅くなつた」

シンプルな片手剣で幻影獣を壁に縫いつけたまま、息一つ乱れずに麗華さんは言つ。

その姿は、まるで北欧神話のヴァルキリーのようだ。

ヤバイ！ めちゃくちゃ格好いいぞ！

そして、左手に持っている買い物袋は、プラスなのかマイナスなのが、もう何がなんや。ひ。

「ギ、ギイィイヤアアアア！」

「この世のものとも思えぬ声をあげてもがく幻影獣だが、その剣はい

つこうに抜けない。

無感動な目で見降ろす麗華さん。

やがて、寄生型幻影獣は、煙のよつよつの世から姿を消していった。

幻影獣が消えると、フラガラックも消した。

エリカと二人、あれだけ苦労した寄生型幻影獣を苦もなく消し去った麗華さんは、特になんの感慨も抱いてはいな「よつだつた。

「悠斗君、大丈夫だつた？」

声をかけてくる、超絶美女改めBMPヴァルキリー。

「ああ。大丈夫。なんともな……」

「大丈夫じゃありません！」

また、委員長に怒鳴られた。

「な、なにを考えているんですか！　じ、自分から乗つ取られようとするなんて！　麗華さんがもう少し遅ければどうなつていいたか！　何が『弱火で煮込め』ですか！　馬鹿ですか！？」

まあ、馬鹿なのは、確かです。はい。

「ま、まあ。あの時は、あれくらいしか思いつかなかつたし……」「お、思いつかなかつたつて！……お、思いつかなかつたからつて……」

徐々に、委員長の声が小さくなつていく。

「……やつぱり『特別』だからですか？」

「え？」

「まだ、BMP能力が発現していないのに……。それでも、やつぱり

『特別』だから、あんなことができるんですか？「捨てられた子犬のような目で見てくる委員長。

それは、今日の放課後に、一度聞いていた問いただ。

……特別か。

委員長の抱えている悩みは、俺には理解できないけど。

「『特別』じゃない人なんて、いるのかな？」

俺は、自然とそつ答えていた。

「たとえば、ここにおわす麗華さん」

両手で、麗華さんを指し示す。

「今はいつもやつて超絶美女づらしているけど。なんと部屋には、ミネラルウォーターと一緒にヌードルしかないという徹底ぶりだ。しかも、同一メーカーの！」

「は？」

委員長はきょとんとしている。

が、俺は構わない。

「今は若いからいいけど、あと10年もすれば、顔中に吹き出物が出て『わたし、こんな顔じや、恥ずかしくて表に出れないー』とか言つて、戦闘サボタージュするだ。たぶん」

「私は、そんなことしない」

すかさずツッコム麗華さん。

いや、俺もほんとにそう思つていてるわけじゃないですよ。

「だから、栄養管理をしてくれるメツシーゲ必要だ」

……俺、ほんとにボキャブラリー貧困だな。

「麗華さんだけじゃない。城守さんって人がいるんだけど、あの人
がいなかつたら、俺も新月学園に通う」とすらできなかつた

「……」

「BMPハンターだけが偉いわけじゃない。支えている人たちだって『特別』だと思わないか？」

「……」

それは、俺の偽らざる本音だったが。
委員長は答えない。

「……それは、きっと、澄空君が『特別』だから言えるセリフです
すっかり、正気を取り戻した瞳で言う委員長。

「私、やっぱり、特別になりたいです」

言つて、委員長は、帰つて行つた。

……失敗か。

委員長の説得に失敗したからといって、落ち込んでいる暇はなかつ
た。

次は、いよいよ本日のメインイベントだ。
具体的には、カレーを作るだけだが。

軽い気持ちで言い出したことだが、今は少し後悔している。

麗華さんの部屋のキッチンを借りて料理をしている俺の後ろから、
彼女の凄まじいまでに真剣な視線を感じるからだ。
そのくせ、目が合つと、微妙に視線をそらす。

……妙な雰囲気だ。

良く考えてみれば、超絶美少女かつお嬢様属性持ちの麗華さんに出す料理を作らなければならぬ訳で。

通常であれば、『うちの犬でも食べないわ』と一喝されても不思議がないシチュエーションである。

……だんだん怖くなってきた。

スパイスとか全然買つてないし、ほんとにただの家庭用カレーなんだが。

ええい！ 考えていても仕方ない。

ここは『よーい丼亭調理補助見習い候補』と呼ばれた自分の実力を信じるのみだ！

緊張する。

緊張する緊張する緊張する。

俺はだんだん、自分の言葉を後悔し始めていた。

麗華さんが、右手にナイフ、左手にスプーンを持ち、小さな子供の『待つてました』ポーズで待っている。

麗華さん。カレーにはナイフは使わない。

「それでは、じょ、どうぞ」

少し噛んだ。

超絶美少女が、まるで宝石でも見るかのような目で鍋を見ているんだから、仕方がない。

やはり、今からでもカレースパイスを買ってきて、本格的なカレーを作り直すべきだろうか。

……まあ、そんな技術もないけど。

買つてきた食器に、カレーをよそいつ（驚いたことに）、麗華さんの部屋には皿すらなかった）。

緊張の一瞬。

王侯貴族のような優雅な仕草で、麗華さんが一口カレーを口に入れ

た。

そして。

.....。

「どうしたの、悠斗君？ 頬、真っ赤」

はつ。

「い、いや、そんなことはないぞ」

「でも、心拍数も早くなってる」

無造作に麗華さんが俺の手に触れる。

「い、いや、大丈夫！」

俺は慌てて手を引いた。

落ち着け！

笑顔が可愛いなんてのは、物語の中だけだ！

人間の表情の中で一番きれいなのは、おすまし顔だと、偉い人も言つてたぞ！

「衝撃。これは、おいしい」

と、また微笑む。

すみません。抜群に可愛いです！

「変な悠斗君。どうして、私と皿を合わせない？」

心底不思議そうだという顔で、麗華さんが聞いてくる。

笑顔一つで、完全にわきまえどと立場が逆だった。

「だから、女の子は怖い。

「はあ……。衝撃だつた」

食後のコーヒーを飲みながら、麗華さんはご満悦だった。
ちなみに豆から挽いたコーヒーではない。特売のインスタントコ
ーヒーだ。

でも、麗華さんは気にせずに飲んでいた。超絶美少女のくせに、な
んて難易度の低い女の子だ。

「そういうえば、悠斗君に聞きたい」とある
「なんだ?」

「なんでカレーにリンク」とハチミツなの? とか聞くなよ。俺も知ら
ん。

「さつき、委員長さんに言っていたこと
「といつと……」

カレーは弱火で煮込め、だつたか?

「違う。特別でない人なんていなって言った」と

「ああ、あれか」

「委員長さんも特別。悠斗君も特別」

「ああ

「じゃあ……」

「じゃあ、私も特別?」

…………えーと。

「むしろ、麗華さん以上に非凡な人は、この国にいないと思うんだけど？」

「でも……」

麗華さんは、真剣な顔だった。

「私が死んでも、別の人気が私の仕事をする。とすると、私は特別ではないと思う」

「ふむ」

確かに、他にも優秀なBMPハンターは沢山いる。
でも……。

「その人は、きっと、麗華さんと同じようで、違う仕事をする人だ
と思うな」

「？」

「肩書きは同じでも、やつてることと同じでも、麗華さんの代わり
は麗華さんしかいない。俺よりうまいカレーを作れる人は世界に何
億人いるだろうけど、このカレーを作れるのは世界に俺一人しか
いないのと同じように」

「？」

麗華さんはきょとんとしている。

そして、たっぷり五分ほど固まつてから、

「悠斗君は、難しい」

と、ポシコとしまった。

……もうかな?

『ここでもある『特別』

翌日。

昨日の激闘（麗華さんしか闘つてないけど）が嘘のよつこ、平和な教室。

その静寂を破る乱入者が現れた！

「澄空ー！」

このクラスのもう一人のBMRハンター、三村宗一だ。

「聞いたか！ 澄空ー！」

「もちろんんだ。新月学園の学食が、ささみチーズフライの販売を一時停止するという話だろ？」「

悲しむべきことだ。

「誰が、ささみチーズフライの話をしてるんだよ！ 他にも、うまいモンはあるだろうが！」

何を言つているんだ、こいつは？

「いくら、おいしい料理を並べていても、『ホーム』となる料理は必要だ。ささみチーズフライ、ささみチーズフライ、ラーメン、ささみチーズフライ、ささみチーズフライ、トンカツ……といった具合に」

「だったら、『ホーム』を変えろよ！ 牛丼、牛丼、カツ丼、牛丼、牛丼、鳥の唐揚げ……といった具合にー！」

「む

なるほど、一理ある。

だが、しかし。

「それは、ささみチーズフライに対する裏切りにはならないだろ？

か？」

「……な、なるほど。そう言わると難しいな……」

「だらり、」

言つて、自分でドツボにはまつてゐる気がしてきた。
今、別のものを食べると、もう一度とさみチーズフライは食べて
はいけないといふことになつてしまふのだろうか？

「で、三村。本当にささみチーズフライの話をしに来たの？」
横から麗華さんの声がする。

何を言つてゐるんだ、この超絶美少女は？
他の話をしてゐるように見えるのか？

「つと、やうだった。澄空のせいですっかり脱線しちまつた
え？ 違つの？」

「これだよ、これ」

と、三村が差し出してきたのは、薄っぺらいわら半紙だった。

「なこなに」

『季報・新月』と書かれてある。どうやら、校内新聞の類らしい。

「この学校、校内新聞とかあつたんだな」「一年前まではな。そんで、これが一年ぶりに復活した『新、季報・

新月』だ」

ほう。それは、確かに大ニュースだ。

誰が復活させたのかは知らないが、大した人物に違いない。

肝心の紙面は、と。

「衝撃！　深夜の激闘。寄生型幻影獣対BMPヴァルキリー」
麗華さんが、後ろから見出しを読み上げる。

「昨夜、20：00頃、新月学園にほど近い路上で、寄生型幻影獣と、有名なBMPハンターであり、本校の生徒でもある剣麗華さんとの戦闘が繰り広げられた。人間の精神に寄生し操るといつ危険極まりない能力を持つ幻影獣に対し、剣麗華氏は、精神体を攻撃する『干渉剣・カラドボルグ』で応戦。圧倒的な強さでこれを殲滅し……」

そこに書かれていたのは、まぎれもなく昨日の戦闘の一部始終だった。あと、麗華さんの普段の学園生活とか。

なぜか、俺の体育館での『審判の獣』騒ぎも書かれていた。ついでに、季報・新月を復活させた『本誌記者』とやらの顔写真も載っていた。もちろん新月学園生だが、勝気な瞳が印象的な、なかなか可愛い子だった。

「しかし、いい文章書くなー。まるで、見てきたみたいだ」

「……おまえの目は節穴か、澄空。ちゃんと『偶然居合わせた本誌記者が』って書かれてるだろ？」

「ああ、確かに」

しかし、待てよ。あの場所には、俺たちの他には委員長しかいなかつたはずだが。

「いや、だからな。澄空……」

物覚えの悪い子に対するやうひ、少しこじつけはじめの三村。
……なんだというんだよ。

「新、季報・新月。楽しんでいただけましたか！」

ガラッとドアを開けて、良くなれる声が教室を走り抜ける。
見ると、季報・新月に載っている『本誌記者』がそこに立っていた。
写真と同じ、勝気な目が魅力的な女の子だ。

「ああ。凄く良かった。主役は麗華さんなのに、なぜか俺のことが
ちゅうちゅう書かれているのは気になるけど、この臨場感は凄いね。
いつたいどこで、あの闘いを見てたんだ？」
と、俺としては褒めたつもりだったんだが。
なぜか、記者さんは、ぽかんとした表情をした。
……え。俺、またなんかした？

「澄空よ……」

「か、彼は大物だから……」

「というか、あれ、本気で言つてるのか？」

「澄空君は、天然だから。ネタとかじやないと思つ
にしても、ベタだよな」

「でも、委員長、ほんとに別人みたい！」

クラスメイトの訳の分らない非難を浴びる。
疎外感を感じた俺は、三村と麗華さんを見た。

「澄空……。おまえ、ほんとに気付いてないのか？」

「三村。悠斗君を責めてはいけない。きっと、昨日の戦闘で疲れて
いる」

麗華さんのフォローになつていかないフォロー。
だって、昨日、俺、何もしていないし。

「 もへ、これでどひー。」

と、記者さんが、颯爽とした姿で眼鏡をかける。あれ、どじかで見
たよひな。

「 だつたら、これでどひー。」

と、どじかで見た女の子が、髪をみつあみにする仕草をする。

「 ひて、委員長ー。」

それは、まじひことなき委員長だつた。
俺は、慌てて、季報・新月に田を移す。

でも、

「 本誌記者『新條 文』」

ほら見ろ。どじにも委員長なんて書かれてないぞ。

「 それは、委員長の本名だーー。」
「 それは、委員長の本名だーーー。」
「 それは、委員長の本名だーーーー。」
「 それは、委員長の本名だーーーーー。」
「 それは、委員長の本名だーーーーー。」
「 それは、委員長の本名だーーーーーー。」

怒られました。

「 ほんとに、澄空くんは、つかみどじひがないですね
委員長が、呆れたよひに、ひひつ。」

いや、単に馬鹿なだけですよ。

「BMPハンター専門のライター。これが、今日から私が担当する『特別』です」

勝気な瞳には一点の曇りもなく。

委員長は、清々しい声で言い切った。

「そうだな。うん。

さつとそつなんだろ。

「だから、これから、よろしくお願ひしますね
俺に向かって、礼儀正しくお辞儀をする委員長。
ん、あれ？」

「え？ 麗華さんをメインで取材するんじゃないの？」
「何を言つてるんですか？ これから、澄空君が世界一のBMPハ
ンターになるんでしょう？」

涼しい顔で大型爆弾を投下する委員長。

「い、いや。俺はまだ、BMPハンターになれるとは……」

「委員長さん」

しどりもどりになる俺を見かねたのか、麗華さんが助け船を出してくれた。助かった。

「委員長さんは見る目がある」

麗華やーん！

「まだ能力も目覚めてないってのに、大変だな。澄空
人」とのような口調で、三村が言つ。

そして、『絶対に悠斗君は、まかせておけってこうに決まっている』
光線を出している麗華さん。

「取材、してもいいですよね？」

勝利を確信したかのような委員長。

俺は……。

「と、とりあえず、まかせておけ」

結構、ヘタレだった。

第五次首都防衛戦

入学して、2か月。すでに、6月に入っているといつに、俺のBMP能力はまだ目覚めていなかつた。

これだけ結果が出ていないにも関わらず、なぜか政府は俺のBMPハンター登録を抹消しようとせず、学費・生活費の負担が全くない状態で高校生活を送っていた。

が、フレッシャーまでない訳ではなく。かといって、BMP能力をすぐに目覚めさせる方法などあるわけもなく。

とりあえず、授業についていけるようにならうと、俺は勉強をしていた。

「違う。ここは、いつちの公式を使つ」
また、麗華さんに注意された。

特に頼んだわけではないのだが、俺のあまりの要領の悪さを氣の毒に思つたのか、最近、麗華さんが勉強を見てくれている。

「そこも、違う。ここは、こうな、なるほど。

いつ見ても、目の覚めるような美しい解法だ。

ちなみに麗華さんが勉強をしているのを見たことがない。

『授業だけで十分』とのことだ。
で、常に学年一位と。
……人を馬鹿にしているのか？

「悠斗君。聞いている？」
すみません。聞いてませんでした。

「ふーむ……。どうして、悠斗君がこんな問題が解けないんだろう？」

そんなこと言われても。

「やっぱり、悠斗君は奥が深い」
……いや、絶対に違う。

「ん……」

ふと、麗華さんが険しい顔をした。

え？ 僕、またなんかした？

「悠斗君、テレビを」

「え？ え？ え？」

訳も分からず、迫力に押されるようにリモコンを探すが。
ああ、くそ。こんな時に限つて見つからないんだ。

が。

「首都にお住まいの皆さま！ 申し訳ありません！ ただいまより、緊急放送を開始いたします！」

え？ え？

まだ、電源入れてないぞ？

なのに、テレビには国営放送のニュースキャスターが映し出されている。

アイドル並みに美形と評判のキャスターだけど、今は化粧もそこそこに、ものすごい形相だ。

「首都東方より、500を超える幻影獣の大群が侵攻してきております！ 過去最大の規模です！」

「J、500！？ 20年前の、首都決戦の時より多いじゃないか！

「Jの非常事態に対し、政府はさきほどレベル4、非常事態宣言を行いました！ 国家治安維持軍の全軍を投入し、東方砦にて敵幻影獣軍の迎撃を試みます！ また、BMPハンターへの通常の依頼手順を全て省略。撃破した幻影獣の数に応じて、報酬が支払われる『クルセイドシステム』が適用されます！ 全BMPハンターは、東方砦に急行してください！」

マジか……。

「なお、『クルセイドシステム』発動に伴い、東方砦以外の地域は完全に非武装状態になります。都民の皆さまは、至急最寄りのシェルターに避難してください！」

悲鳴のようなキャスターの声とともに、簡略化された戦略図が、画面に映し出される。

「うわ……」

思わず声が漏れた。

絶望的なほどの赤の光点が、東方砦に押し寄せてきてくる。5年前、当時俺が住んでいた町に幻影獣が襲ってきたときは、確かにあの10分の1くらいの数だった。

それでも、当時は、本気で死を覚悟したものだ。

ピココリリ！

ひい！

心臓を驚撃みにするような電子音が響く。

「あ、私の携帯」

麗華さんが呟いて、電話に出る。

「うん。今、見てる。うん。今から? 分かった、待つていの
必要なことだけを言つて、電話を切つてしまつた。

「し、城守さんですか?」

なぜか敬語になる、ビビリな俺。

だが、今回は、誰も俺を責められないのではないだろうか?

「うん。車を回すから、ここで待つてくれつて。東方砦まで送つ

てくれるらしい」

「そ、そつか……」

麗華さんの強さは身にしみているが。

……本当に、こんな女の子が、幻影獣と闘うのか?

「れ、麗華さん……」

自分で情けないと思つ声が漏れる。

「うん?」

「え、ええとだな……」

何を言おうとしていたのか、自分でわからぬ。

「ああ」

麗華さんが、ぽんと手をたたく。

「大丈夫。このペースなら、ちょっと中断しても来週の試験には間に合つ。赤点の心配はない」

いや、そんな心配はしてないつす。

とにかく、えらい余裕ですね。BMPヴァルキリー様。

「麗華さん！ 悠斗君！ いますか！」

ドアを叩く音と、緊迫した城守さんの声が響く。

ドアを開けると、有無をいわさず駐車場まで引っ張つて行かれた。

「さあ！ 早く乗つてください！ 麗華さん！」

自分も、頑丈そうなブラックの車に乗り込みながら城守さんが言つ。

「うん。分かった」

と言つて助手席に乗り込もうとする麗華さん。

しかし……。

「？ 悠斗君は？」

え。俺？

「悠斗君は、今回ば留守番です」

「え……」

予想外、という顔をする麗華さん。

まったく、ほんとにこの超絶美少女は、一般常識といつものが欠如してゐる。

「あのな、麗華さん。BMP能力が覚醒していない俺が行つても、足手まといになるだけ……」

最後まで言えなかつた。

「私の近くにいた方が、悠斗君は安全」
そう言い切る彼女の目には、いつもの浮世離れした色も、何者にも屈さない超人的な力も見えなかつた。

「やつらを東方砦で喰いとめられれば、もっと安全ですよ」
そこには、正論で諭す城守さん。

しばらく麗華さんは悩んでいたが。
やがて。

「悠斗君、これを

と、俺の手に何かを置いた。

「もしもの時に使って欲しい」

言つて、助手席に乗り込んだ。

「麗華や……」

この時の彼女の顔を、俺は生涯忘れないと思つ。

「悠斗君……。すぐに帰つてくるから、私がいないとひり死んで
はいけない」

『首都民の皆さん！ 非常事態警報が発令されました！ 至急最寄
りの指定避難場所へお急ぎください！ くじかえします！ 首都民
のみなさま……』

がなりたてるサイレンと必死のアナウンス。

我先に避難場所へ向かう人たちの中で、俺は一人、霸気がなかつた。
避難するのに霸氣というのもおかしいのかもしれないが、とにかく
元気がなかつた。

「はあ……」

麗華さんがあんな顔をするなんて。

まるで、これから俺が死ぬみたいじゃないか……。

実際に死ぬかもしれない恐怖より、麗華さんにそう思わせてしまつたことの方がこたえている。

「しつかりしなきやな……」

麗華さんが負けることはないだろう。

俺にできることは、何事もなかつたように迎えることだけだ。

「でも……」

2か月ですっかりなじんだ街も、今日はまるで別の街のようだ。取るものも取り敢えず逃げまどつ人たちを見ていると、嫌な予感ばかりが膨れ上がってくる。

放置された自動車、放置された商品、放置された街。
確か五年前もこんな感じだった。

しばらくして、新月学園が見えてくる。
BMP能力者養成校というだけあって、あそこの幻影獣防衛システムは、首都でも一・二を争うほど洗練されたものだ。
だけど、今の俺には……。

まるで、棺桶のように見えた。

「あれ……」

いつものように教室に坐ってみると。

誰もいない。

なんだった。

この学園は避難場所じゃなかつたのか。

「いや、ちょっと待てよ……」

避難つて教室にするもんなんだろうか？

なんだか、避難つて、体育館とかにするイメージがあるぞ。

「つたぐ、何やつてんだよ、おまえは」

聞きなれた声がする。

「三村？」

「三村？ じゃないだろ。避難場所にいないから、探したぞ。こんな時に、教室なんかで何をするつもりだつたんだよ」

さあ。

それは、俺にも分らん。

「校門のところで、先生たちが、体育館の方に避難してく下さい、つて叫んでただろ。あそこ、ショルターになつてるんだよ。聞いてなかつたのか？」

聞いてはいたんだろうが、まったく覚えていない。

まいったな。

自分の命の危機だとこの上。

麗華さんのことばかり考えてた。

避難所にて

「でも、わざわざ、俺を探しにきててくれたのか？」

並んで廊下を歩きながら、三村に話しかける。

この2か月の付き合いで、外見こそ弱ナンパ風味だが、なかなかいいやつだというのは分かつていたが、こんな時にまで他人を気遣える兄貴属性の持ち主だったとは。

「もう弱ナンパ男風味はいいだろ……」

苦笑する三村だが、なんだか元氣がない。

まあ、こんな状況で元氣があつても、どうかとは思つが。

「なあ。澄空……」

「ん？」

「その……。おまえ、こんなことっていいのか？」

「？」

「ああ……。聞き方が悪いよな」

珍しく言いにくそうにしている三村。なんなんだ？

「その、こんな一大事に鬪えずに、悔しいとかはないのか……？」

「と言わてもな……。俺、まだ、BMP能力とやらが使えないし。
ん？ そういうや……」

三村は鬪わなくていいのか？ と聞こうとする。

「俺のBMPは121。ギリギリ能力が使えるつて程度だからなー。

邪魔になるから、来るなつてことだろ」

これも三村には珍しく、自嘲気味に答えてくる。

「ふーん。どのくらいまで上げれば、呼んでもうれるんだろつな
四捨五入して130になる125か。いや、までまで単に数字の問
題とは限らない。

能力特性があるだろうじ、年齢制限もあるのかも。

などと、俺がいろいろと推論を述べていると。

「おまえ、やっぱり、変わってるよな」

などと、失礼なことを言われた。

「それをいうなら、弱ナンパ男風味のくせに、おまえがナンパして
るの見たことないぞ。そっちの方が変わり者だい」

「もう弱ナンパネタはいってのに……」

と、にわかに真剣な顔になり。

「BMP能力者はさ、特に高BMPになるほど、幻影獣狩りに執着
するんだ。俺なんかですら、こんなところで留守番させられて悔し
い。なのに、おまえは……」

「口」もある三村。

それは、俺に闘志とか霸氣とかがないと言いたいのか？

「どきどき……」

……。

しまった！

セリフと心の声が逆だ！

「ふつ」

笑われた。

「いや、ふふ。おまえは大したもんだって話だよ！ 剣がべつたり
なのもわかるなー」

と、なにやら一人納得したような三村。

こいつ、ひょっとして、情緒不安定になつてるんじゃないだろうな？

「いや、俺も大丈夫だよ。そだな。また、次があるし。今はおとな
しく、一人でBMPヴァルキリー様のご帰還を待つとすつか！」

俺は常々疑問に思つてゐたことがある。

それは『体育館を避難場所にするのは本当に正しいのか』といふことだ。

内部構造は、むき出しで、なんだか強い力を受けけると壊れそうだし、だだつ広くて寒そうだし。

だが、今日、その疑問が解けた。

最初にその光景を見たときは、さすがに驚いた。

行列を成す人々が体育館の中で次々に消えていくのだ。
なんと、体育館の中央に隠し階段が設置されており、そこから地下に降りれるらしい。

そして、地下は核の直撃にも耐えられるといつゝ、とんでもないシエルターになつている。

ついでに、5 000人が一年間は生き延びられる仕様になつているらしい。

……普通に凄え。

シェルターでは、意外な再会が待つていた。

「悠斗さん。お久しぶりデス」

「ほ、本郷さん！？」

「エリカでいいデス」

と言つて、エリカは俺の手を取つて振り回した。

「2か月も会えなくて、気になつてしまシタ。悠斗さん。ちゃんと学校来てました力？」

「來てたよ、一応」

成果は上がつてないけど。

「1-Cにいるのは知つてたんですけど、なかなか行きにくくてズルズル来てしまいました。こんな時に再会できるなんて心強いデス！」

……いや、なんの役にも立ちませんけどね。

と、いきなり後ろから首を絞められた。

「澄空ー」

「み、三村……？」

「学園一の美少女のヒモみたいな生活しておきながら、こんどは『金髪の妖精』となんだか怪しい雰囲気作りやがつて……。いくらBMPセレブだからって、いつたいどういうア見だ？」

おまえこそ、そのセンスの悪いニックネームはいつたじうじう見だ？

そして、誰がヒモだ。誰が！

「悠斗さんの転校初日に出会いましタ。いろいろと相談に乗つてくれて助かりましタ。一緒に幻影獣と闘つたりもして、頼もしかったデス！」

……おかしいな。俺の記憶とだいぶ食い違があるぞ？

「……やっぱりいいよな。高BMP能力者は。これは決して、俺が弱ナンパ男風味だから羨ましいわけじゃないぞ。男なら、誰でも羨

ましい状態だ！」

そして、力説する三村。

弱ナンパ男風味つて言つて、もつやめよつか。

「三村さんは、121なんですか！ 羨ましいデス」

「いや、本郷さんだつて119なんだろ。俺とくしか変わらないじゃないか」

「でも、120超えたらBMPハンター登録できマスよね。やっぱり、120の境は大きいデス」

避難中だというのに、なんだか盛り上がっている三村ヒエリカ。核戦争にも耐えられるというだけあって、普通の避難所ほど雑然とした雰囲気はないが、それでもこんな状況だ。よくそんなに盛り上がるなー。

「いやいや、BMPハンター登録したところで、120をギリギリ越えたような高校生には仕事なんて回つてこないんだよ」

「そりなんデスカ？」

「まったく。仕事さえくれれば、いくらでもやつてやるのにー！ 187もあれば、仕事なんて選び放題なんだうけどなー」

ひょっとして、俺のことか？

俺も仕事なんてもらつてないぞ。麗華さんは、時々行つてるみたいだけど。

「でも、悠斗さんはBMP能力が覚醒していないのデハ？」

「そうそう。だから、剣のヒモみたいな生活してんだよ。高校生でヒモつて凄いよなー」

……ヒモじゃないやー。

新月学園地下シェルターは、広大だ。

避難してきた人も一か所に押し込められるといつことはなく、50人くらいずつ別々の部屋に分かれて入っている。

長期避難を前提としているからか、ちょっと小奇麗な集会場といった雰囲気だ。

もちろん長期滞在したいとは思わないが。

その時だった。

『緊急事態発生！ 緊急事態発生！』

突然、シェルター内に警報が響く。

今日は、緊急事態の大安売りだな。
もう驚くまい。

『Bランク幻影獣が一体、この新月学園を目指して侵攻してきます！ 現在、首都の国家維持軍は東方砦に集結しており、救援には時間がかかります！ 非常事態につき、対幻影獣結界を最高出力にて稼動します！ 精神干渉により、人によつては精神状態が若干不安定になる恐れがありますので、みなさま、気をしつかりお持ちになつてください！』

驚いた！

「び、Bランク幻影獣……！」

避難した人たちも絶句している。

幻影獣は、おおまかにAからDの四つのランクに分けられている。Dランクは危険度の低い幻影獣。三村と初めて会つた時のウサギみ

たいなやつがこれにあたる。

Cランクは一般的な幻影獣。麗華さんがフラガラックで一蹴したやつはこれだ。この強い方だ。今、東方砦に向かっている幻影獣の軍団も全部これだ。

そして、Bランク。

これは、いわゆるボスクラスにあたる。
ほとんど現れる事はなく、確かに世界全体でも出現数は20に届かない。

一体で、軍団に匹敵すると言われ、その大きさも強さも桁違いだ。
もっと分かりやすく言つと。

こっちに向かっている幻影獣は、東方砦に向かつた軍団と同等の力を持つてゐるということだ。

ヒーローの条件

轟音とともに、核にも耐えうるシェルターが揺れる。避難してきた人たちの悲鳴が木霊する。

『現在、Bランク幻影獣と対幻影獣結界が接触しています！ かなりの衝撃がありますので、みなさま、何かにつかまってください！』

オペレーターの必死の叫びが響く。

最初の放送から、約30分後。

この新月学園は、Bランク幻影獣の攻撃にさらされていた。

「想像以上だ……」

あまりに圧倒的な力の前に、恐怖すら湧いてこない。こんなもの、もう天災と変わらないじゃないか！ でも、なんでだ？

陽動にしても、なんで、こんな避難所なんかを攻撃するんだ？

と。

不意に三村が立ち上がった。

「お、おい！ 三村……」

「知ってるか、澄空？ 単独でBランク幻影獣を30分以上止められる対幻影獣結界は、まだ世界のどこにもないらしい」

嫌な予感がする俺に、三村はやけに落ち着いた口調で答えてきた。

「つまり、こここの結界も長くは持たないということデス」

覚悟を決めた表情でエリカが続く。

見ると、他にも何人か立ち上がっている生徒がいる。あいつら見覚えがある。ある程度、腕に覚えがあるBMP能力者だ。

「おまえは来るな」

「お、おー……」

「悠斗さんの戦場は、今日じゅないと思いまス
「いくらなんでも、Bランク相手に無茶だろー。」

「無理をするつもりはないわ」

「危なくなつたら逃げマス」

「だ、だからつてな……」

無茶だ。

どう考へても、無茶だ。

「死ぬなよ、澄空。高BMP能力者は、それだけでみんなの希望なんだ」

「今日を生き延びるのが、悠斗さんの仕事デス」

「いつか、Bランク幻影獣でも倒せるような凄いBMP能力者になるまで」

「必ず生き延びてくだサイ！」

言つて、二人は駆けだして言つてしまつた。

そして。

感傷にふける間もなく。

……みんなの視線が痛い。

さきほどのやり取りは、どうも声が大きすぎたらしく、俺の素性が

みなさんに筒抜け状態になつていてる。

『きっと、あの方は、不利な状況も顧みず仲間を救うため、ここを

飛び出すに違いない。つてか、飛び出せ』光線が、四方から降り注いでいる。

あやこのおまかせなんか、揉んじやつていのよ、おい。

「…………じー」

俺が行つても、邪魔になるだけですよ、冗談抜きで。麗華さんとの件で、実証済みです。

「…………じー..」

応援ぐらしかできないですよ。しかも、ボキヤブライーが貧困なので、大して、足しにななりません。

「…………じー！..」

えーと。だから、その……。

「…………じー！..」

つまり……。

「…………じー！..」

「い、行つてきまーす！」

俺は飛び出した。

目を輝かせているみなさんの期待が痛い。

物語の主人公って、実は、案外、こんな状態が多いのか、ひょっとして！？

パシンという音がした。

音の質 자체は軽い。
けど、何か取り返しがつかないものが切れてしまったような音だった。

続いて轟音・振動。

わが校が世界に誇る対幻影獣結界が崩壊したのが、直感で分かつた。
大地震に匹敵するような揺れの中、それでも地上への道を駆けのぼつた自分を褒めてやりたい。
が、俺の勇気もそこで打ち止めだつた。

地下シェルターから体育館に通じる階段を登りきった後。
体育館の中央で、俺は一步も動けなくなつた。

怖い。

とんでもなく、怖い。

三村やエリカ達が出て行つたはずなのに、なぜか閉ざされたままの
体育館の扉。

その向こうから、ホテルで初めて麗華さんに会つた時と同じくらいのプレッシャーを感じる。

ただ、あの時と違つのは。

叩きつけてくるような、圧倒的な殺意。

「これが、Bランク幻影獣……」

例え、銃を目の前に突きつけられても、たぶんこんな気持ちにはならない。

「これは……無理だ……」

情けなくも断言して、再び地下への扉を開ける。たとえ地下に逃げ込んでも、たぶん助からない。でも、それでも、ここにはいたくない。

負け犬そのものの思考で、階段を降りようとした時。

ポケットから、何かが滑り落ちた。

それは、手のひらサイズの飾り氣のない箱だった。
「これは……」

確かに、別れる時に麗華さんがくれたものだ。もしもの時に使えとか言つていたような。

藁にもすがる思いで、その箱を拾い上げる。

「ボタン……？」

箱を開けると押せるボタンが一つ。

何かを起動させる装置なのか？

そして、説明書らしき紙切れが一枚滑り落ちる。

「これまた、藁にもすがる思いで拾い上げる。

麗華さんのことだ。

きっと、何か物凄い兵器を隠していたに違いない！

『BMP決戦アイテム・決意の天幕』

概要

遠隔操作装置により起動する、拠点型BMP能力者補助装置。

起動と同時に10本の高さ3メートルの円柱が出現する。

その円柱によつて描かれる境界線よりも前方で闘う限りにおいて、

大幅にBMP能力を強化することができる。

ただし、境界線を越えて後退した場合には、長期に渡つてBMP能力が使用できなくなる。

また、境界線を越えなかつた場合でも、限界以上にBMP能力を酷使するので、身体への負担は大きい。

使用する際には、特に注意すること。

追伸

BMP能力増幅率は、悠斗君の言葉を借りれば『当社比1・5倍』。
これなら、勝てると思う。頑張れ。

「当社比1・5倍じゃねー！」

俺は、説明書を床に叩きつけた。

だいたい、『当社比』なんて、俺がいつ言った！？

……いや、言ったような気もするな……。

「じゃなくて！」

BMP能力を使えない俺に、BMP能力強化アイテムを渡してどうするんだよ……。

時々、変わったことをする人ではあるけど、今回は極め付けだ。期待していた分、反動も大きい。

「もう、どうにでもなれ！」

俺は、その場にどつか、と腰を落とした。

シェルターに戻る氣にもならない。

この気配の持ち主にかかれば、どうせ~~巨~~大な棺桶だ。

もう、この状態からなんとかなるとしたら。

麗華さんが、突然戻つてくるか。

噂に聞く最強BMPチーム『クリスタルランス』が駆けつけてくれるかしかない。

そういうや、クリスタルランスって、今、首都に帰つてきてるんだつたな。まあ、どうせ、東方砦に向かってるんだろうけど。

「あとは、俺のBMP能力が突然目覚めるくらいかな……」

……。

「…………待てよ」

自分で言つて、気がつく。

ひょっとして、麗華さん。

「俺のBMR能力が目覚めると、信じていたのか？」

『私がいないところでは死んではいけない』

あの時の、麗華さんの言葉と表情が思い出される。

心配していなかつたわけでも、ちよつとエジをした訳でもなくて……

⋮。

「やうなのか、麗華さん？」

考えれば考えるほど、やうだといふ気がしてくる。

俺の頭の中に残っている別れ際の麗華さんの表情のイメージが、別れの予感を想像させるものから、再会の約束を信じさせるものへと変わつていぐ。

「正直、どうしてそこまで信じてもらえるのか、非常に疑問なんだが」

俺は、立ち上がった。

5年前とは違つ。

今回は逃げるわけには行かない。

「なんせ、世界一の女の子に期待を貰てるんだからなー！」

意を決して、体育館の扉を開ける。

と、同時に、人間が飛んできて、俺を下敷きにした！

守りたい誰かがいるところ想定で

「み、三村！？」

俺を下敷きにしたのは、三村だった。

頭から結構な量の血を流しており、呼んでも反応しない。

「ひょっとして、やばいか、これ？」

とりあえず、シェルターに運んで治療してもうおひと思った時。

総毛立つような視線を感じた。

それは、生まれて初めて見る怪物だった。

大きさは、三階建てのビルほど。

それが、10メートルくらいの高さのところに浮いている。

姿は、人型に近い。

ボロボロの黒いマントを纏い、鈍い色の鉄板面をしている。だが、マントの切れ目から覗く関節部分は、腐食した何か、

その目の部分には空洞しかなく。

その奥には、赤い光が見えている。

『ミ・ツ・ケ・タ』

「ひつ」

思わず悲鳴をあげてしまつ。

あの化け物、間違いなく俺を見ている。

まさかと思つが……。

「ひょっとして、狙いは俺……？」

呆然と咳く俺の前で、化け物が腕を振り上げる。
なんか、ヤバイ！

麗華さんの寝起きくらい、ヤバイ！

「この、こっち来い、三村！」

動かない三村をひきずつて、体育館から逃げ出す。

細身なのに、意外な重さを感じる三村とともに、なんとか脱出した
後。

閃光が走った。

「…………わー…………」

無感動に咳く。

体育館がなくなっていた。

何が起きたのか分からぬが、地面から30センチくらいの壁を残して、その上の部分がごつそり消滅していた。

どうやら、シェルターは無事のようだが、二度目の保証はない。といづか、二度目があつたら、まづ間違いなく誰も助からない。

『ミ・ツ・ケ・タ……』

だが、化け物は、とりあえずシェルターの方には興味がないらしい。こちらにじっかりと向き直り、近づいてくる。

……良く見れば、鉄仮面の下の顔が、骸骨だった。

「マジで、怖い。」

「……あれ？」

「うあえず、逃げようとしたが、立てない。
ひょっとして腰が抜けたか？」

「……へえ、腰が抜けるとこんなふうになるんだな。」

「ロイヤルエッジ
豪華絢爛！」

現実逃避しかかつていた俺の意識を引き戻したのは、聞き覚えのある声だった。

「エリカ！」

「悠斗さん！『ご無事ですか！』」

エリカは、三村以上にひどい有様だった。

風変りな制服はあちこちが破れ、赤い血がにじんでいる。

美しい金髪も泥だらけで、おまけに血でべつとりと顔に張り付いている。

いや、エリカだけじゃない。

見覚えのある新月学園生……BMPハンター候補生や、おそらくは国家治安維持軍の軍人であるう軍服を着た人たちが、グラウンドに散らばって転がっていた。起きる様子はない。

「の人たちなら大丈夫テス。BMPハンターは、これくらいで死んだりしまセン」

「そ……」

そうなのか、と聞くとして絶句した。

エリカの顔が白い。

青白いなんてレベルじゃない。ほとんど死人の顔だ。

理由はすぐに分かった。

「見てくだサイ、悠斗さん。私の豪華絢爛^{ロイヤルエッジ}。相変わらず斬れないですケド、Bランク幻影獣を抑え込んでいるでシヨウ?」

「た、確かに、抑え込んでいるけど……」

命を削っている。

これ以上続けると、ほんとに危ない！

「豪華絢爛^{ロイヤルエッジ}を解除しろ！ 死んでしまつぞ！」

「大丈夫テス。私もこんなところで死ぬつもりはないテス。……ですが、解除するのは、悠斗さんが逃げた後テス」

「え？」

「あの幻影獣、ずっと誰かを探していました。私は、あいつは、悠斗さんを殺しに……、いや、そもそも東方砦が襲われていること自体、悠斗さんを殺すための陽動だと思つていマス」

エリカがとんでもないことを言い出した。

「あいつの狙いは悠斗さんテス。悠斗さんが逃げてくれれば、みんな助かりマス」

「ほ、ほんとに？」

俄かには信じがたいけど、あの幻影獣は、豪華絢爛^{ロイヤルエッジ}に遮られながら

も、ずっと俺だけを見ている。

俺がうまく逃げおおせば、シェルターには見向きもしないかもしない。

「ここは私たちの戦場デス！ 今は、逃げることが悠斗さんの闘いデス！」

「エリカ……」

「悠斗さんなら、いつかきっと、Bランクでさえ倒せると信じてマス！」

エリカの言つ通りかもしだれない。

いや、きっと言うとおりだ。

俺がここに残つても、なんの役にも立たない。

いや、足手まといどころか、敵を引き寄せている厄介者だ。

今はみんなのためにも逃げる時だ。いつか能力が目覚めれば、あいつを倒せるかもしれない。

いや、きっと倒す！

そのためにも、今は、逃げる時なんだ！

『本当にそれでいいのか？』

「いいわけがない

俺は、懐から一つの箱を取り出す。
麗華さんにもらつた『切り札』だ。

そのボタンを押す。

「俺の生き方は、俺が決める」

誰にも邪魔はさせない。

ま、参考くらいにはするけど。

「BMP決戦アイテム『決意の天幕』」

轟音がする。

そして、俺の『決意』が現れる。

東方砦。

首都の東方100キロに位置する軍事基地である。

幻影獣の出現により、国家間の戦争というものに現実味がなくなつた現代では、従来のような戦闘機や戦車といった兵器は無用の長物と化していた。

なぜなら幻影獣には、近代兵器は通用しない。彼らを倒せるのは、BMP能力者だけである。

そして、本当に優秀なBMP能力者ならば、比喩でなく、一人で軍

隊に匹敵する。

翼を持つ悪魔のような外見をした一体の幻影獣が斬り捨てられる。

「 37 体目、撃破」

感情のこもらない声で、剣麗華が呟く。

最強BMPハンターチーム『クリスタルランス』をはじめとする有力ハンター達の到着が遅れているうえに、かつてない規模の軍勢に苦戦するBMP能力者の中で、孤軍奮闘……というか、傍若無人に暴れまわっている。

あまりにレベルが違いすぎて、味方のハンターたちは足手まといにすらなつていよい。

「 38、39 体目、撃破」

しかし、麗華の声には高揚も霸氣も感じられない。

そもそもそのはずで、麗華は明らかに退屈していた。
もともと闘いに使命感や刺激を求めるタイプではなかつた。
BMPハンターになつたのも、他の能力者達のように、闘いに存在意義や居場所を求めたわけではなかつた。

その意味では、退屈などと感じること自体がなかつた。
自分を脅かす敵など存在せず、自分の求めるものもない。闘いは麗華にとって作業でしかなかつた。

だが、今、明らかに彼女は退屈していた。

なぜならここには、彼がない。

(悠斗君がいれば、きっと今日の闘いは褒めてくれていた)

この2ヶ月間、常に一緒にいてくれて、彼女の言動に、いちいち驚

いたり、呆れたり、感動したりしてくれた、あの少年がいない。

気付いたら、幻影獣はいなくなっていた。

50体は倒しだろうか。

この区画の敵は、ほとんど一人で片づけてしまった。だが、疲労もなく、感慨もない。

(つまらない)

対幻影獣戦闘は、こんなにつまらないものだつただろうか？

「噂以上だなー、君は」

所在なく立ちつくしている剣麗華に、嫌みのない声で、二人のBM Pハンターが話しかけてくる。

20代後半から30代前半に見える、屈強な二人組だ。

「俺らもそこそこ上位のランカーなんだがなー。君がいると、やることなかつたな」

「ほかのところに回つた方が良かつたかな？」

「どちらでもいい」

もひこは飽きた。早く帰りたい。

「そうだなー。確かに君は、新月学園の方に行つた方がよかつたかもなー」

「え？」

会話を切り上げて立ち去つとした剣麗華の耳に、聞き捨てならぬ

い単語が飛び込んできた。

「新月学園が、どうかしたの？」

「？ 知らないのか？ 新月学園がBランク幻影獣に襲われてるつて」

「わざわざ、この東方砦を放つておいて、なんであんなとこ襲うのか分からないよなー。つて、待てよ。君、確か……」

剣麗華が新月学園所属というのに気がついたのが、気まずそうな顔をする二人組を置き去りにし、彼女は物凄い勢いで駆けだす。

が、そんな彼女を、携帯の着信音が引き止めた。
何の飾り気もない、初期設定のベル音だ。
気のりはしないが、なんとなく電話に出る。

『戦闘中すみません、麗華さん！』

「なに。城守さん。今、忙しい」

『その件での電話です。麗華さんの耳にも入ってるんですね？』

「やつぱり、本当なの？」

『はい。間違いありません。信じがたいことです、首都に出現したBランク幻影獣は、東方砦を無視して、新月学園を狙っています』
「わかった。すぐに向かう」

『ちょっと待つてください！ 今、麗華さんに離れられたら戦線が崩壊します。第2波はもうそこまで来ているんですよー』

言われて見ると、確かに東の空に多数の黒点が見える。

剣麗華にとつて脅威となる数には見えなかつたが。

「でも、緋色先生も、他の有力ハンターも、今は新月学園にいない。私が行かなれば悠斗君は守れない」

いつになく真剣な剣麗華。

そんな彼女に、予想外の一言が投げかけられる。

『それを、悠斗君が望むと思いますか？』

「え？」

予想もしなかつたセリフに、一瞬、剣麗華の動きが止まる。命を救われて、怒る人がいるとでもいつのだらうか？

『東方砦で闘う仲間と、首都に住む人たちを守るという責務を放りだして駆けつける麗華さんを、悠斗君は喜ぶと思いますか？』

「そんなことは……」

分からぬ。

考えたこともない。

そして、その問いに答えてくれる少年は、今、ここにいない。

「城守さんには分かる？」

『分かります。決して彼は喜ばない。このクビ、賭けてもいいです！』

一片の迷いもないセリフ。

そこに嘘がないのは、明白だった。

どうしてそこまで言い切れるのかは疑問だったが。

悠斗君に嫌われるのは、困る。

「こいつら片づけたら、新月学園に行つてもいい？」

『それはもちろんですが……。100体は来ていますよ。いくら麗華さんでも、他のハンターと連携して防御しながら……』

『忙しいから切る』

と、ほんとに切る。

とは言つものの……。

100体は厳しい。

時間制限さえなれば、どうといつこともない数だが、一刻も早く
新月学園に駆けつけなければいけない状況では、厳しい。

(けど……)

新月学園に残つているBMPハンターを思い浮かべてみる。
とてもBランク幻影獣に対抗できそうな人材は残っていない。
悠斗君がうまく逃げてくれればいいけど。

いや、待てよ。

(ひょっとして、Bランク幻影獣の狙いは悠斗君じゃ……)

何らかの根拠があつた訳ではない。

高BMP能力者ほど幻影獣に狙われやすい、といつ訳でもない。
けど、なぜか、そんな気がした。

そんな気がすると、さらに不安になつてくる。

(悠斗君が死ぬ……?)

それは困る。

とても困る。

この幻影獣軍をすぐにでも止づけて、新月学園に向かわなければな
らない。

(でも……)

難しい。

『断層剣カラドボルグ』では時間がかかりすぎる。

『干涉剣フラガラック』では意味がない。

剣麗華の『幻想剣イリュージョンソード』は、神話や伝説上の剣をモデルにして、様々な能力を持つ剣を具現化する能力だ。

創り出す剣の能力には基本的に制限がなく、一度でも具現化した剣は、以後いつでも即座に取り出すことができる。

究極の汎用性を持つ無敵の能力なのだが。

剣麗華は物理系はカラドボルグ、精神系はフラガラックと安易に考
えて、他の剣を創り出す努力を怠っていた。

ただ勝つだけなら、その二つでも問題はなかった。

だが、『時間をかけずに勝たなければならない』といった状況を想
定してなかつた。

守りたい誰かの為に闘う、といつ状況を想像したこともなかつた。

正答を出すことと思考することの違い。

今思えば、あの少年はずつとそのことを麗華に伝えてくれていたよ
うな気がする。

しかし、今さら悔やんでも仕方がない。
今からでも、新たな剣を創り出すまでだ。

幸いイメージはある。

今のこの気持ちを、そのまま具現化するかのようなぴつたりのイメ
ージの剣がある。

目を閉じて集中する。

その剣のイメージは、驚くほど簡単に具現化できた。

「早い……。新記録かもしれない」

疑つまでもなく新記録だ。

前にフラガラックを作った時は、3か月かかった。

剣麗華の手に、ひと振りの長大な剣が握られている。
しかも、その刀身は紅蓮の炎に包まれている。

「『炎剣レーヴァテイン』」

それは、世界を滅ぼすと言われる炎の剣。

お互いの射程範囲にまで迫りくる幻影獸。

紅蓮を抱えたヴァルキリーは、幻影獸の群れに向かつて、破壊の塊
を振り下ろした。

「覚醒」の劣化複写（イレギュラー「ル」）

俺の背後に並んだ10本の円柱。
これが、『決意の天幕』なのだろう。
同じ場所にいるエリカの『豪華絢爛ロイヤルハッジ』の威力が目に見えて跳ね上が
つた。

だが、俺には何の変化もない。

『いぐら増幅しても、ゼロはゼロだなぞな

構わない。

決意に必要なのは、損得勘定じゃない。

ほんの少しの勇気。

俺は、絶対に、この円柱より後ろには下がらない！

全く勝算がない訳じゃない。

こども先生によると、BMP能力は、該当者が強いストレスや生命の危機にさらされている時、あるいは強力な幻影獣と相対している時に覚醒する可能性が高く、覚醒理由の30パーセント超を占める。今は、二重に条件を満たしている状態なのだ。
まあ、『覚醒理由、特になし』回答が60パーセント超を占めるので、あまり期待はできないが。

「ゆ、悠斗さん！」

エリカの悲鳴が響く。

俺は、エリカの脇を通り抜け、さうこBランク幻影獣に近づいた。

いきなり麗華さんはよつになれなくてもいい。

でも、なれると、さらにいい。

だつて、闘つてこの時の麗華さんは本当に格好いいもんな。

普段は、ただの超絶美少女なのに、いざ、カラドボルグを持って闘い始めるど、本当に戦女神みたいで。

「ゆ、悠斗さん……？」

エリカの声の質が、少し変わる。
同時に、右手に生まれる確かな重み。

「そうそう、こんな感じで……」

麗華ちゃんと同じように、右手に持つた剣を天に掲げてみる。

「つひ、剣！？」

思わず、叫ぶ。

驚いたこと、俺の右手にはいつの間にか。

『断層剣カラドボルグ』が握られていた。

「カラドボルグ……だよな？」

いつの間にか右手に握られていた剣を、まじまじと見つめる。間違いない。

どうからどうみても、麗華さんが持ったカラドボルグだ。

「？ なにゆえに？」

以下から、選ぼう。

- 1・目の錯覚
- 2・超常現象
- 3・麗華さんのEX能力。
- 4・俺のEX能力。
- 5・マンモスラッキー

「5だな」

一瞬で、結論を出す。

分からぬことは、あとで城守さんにでも聞けばいい。

目の前には、『豪華絢爛^{ロイヤルエッジ}』で身動きの取れないBランク幻影獣。
そして、右手には、無敵の断層剣カラドボルグ。

これがラッキーでなくて、なんだといつのだ。

「せーの！」

壮麗な剣を力いっぱい振りかぶる。

使い方については、問題ない。

『具現化した時点で、もうこれは俺の能力』だ。

「ま、待ってください！ 悠斗さん！ 」そのままでは、『ロイヤルエッジ豪華絢爛』が、障壁になりマス！ 解除しますから、タイミングをあわせテー！

エリカが何か言っているが、攻撃に集中していてよく聞こえない。たぶん『キャー！ 悠斗さん、格好いいデス！』とかに違いない！

照れるな。

「おおおおおー！」

気合い一閃。

俺は、カラドボルグを振り下ろした。

振り下ろしたが、特に変化はなかつた。

だいぶ近づいたとはいえ、俺と、鉄仮面を被った大型幻影獣との距離は、まだ10メートルはある。刀身が届くような距離ではない。もちろん、手こたえもない。

「あれ……？」

思わず咳く。

なんだか、さつきまで、カラドボルグを発動できただよな気がしてたけど、いざ冷静になつて見ると、そんなはずはないよつな気がしてきた。

そもそも『幻想剣』は、麗華さんが能力で具現化させた仮初の剣だ。

麗華さんの手を離れれば、消滅する。

100キロも離れた俺の手の中にあるはずがない。

ましてや、俺に発動できるはずがない。

そいつについて、もう一度右手を見ると。

そこには、綺麗さっぱり何もなかつた。

なるほど、1が正解だつたか。

「よし、逃げるぞ、エリカ！」

男らしく決断して、エリカの手を取る。

鉄仮面幻影獸が怖いのはもちろん、だいぶ盛り上がり上がってしまったので、若干格好悪くもあつた。

「ま、待つてください！ 悠斗さん、あれヨー！」

「な、なんだよ？」

意外な抵抗を受けて立ち止まる。

鉄仮面を見ると、身体が斜めにずれていた。

「あれ？」

錯覚ではない。

確かに、鉄仮面の上半身と下半身が、若干斜めにずれている。しかも、そのズレが少しづつ大きくなつていぐ。

「これつテ……」

「まさか」

唚然とする俺たちの前で、鉄仮面大型幻影獣が、魂を切り裂くような悲鳴を上げる。

「うわー！」

「う、うるさいデス！」

慌てて、耳をふさぐ俺たち。

そして。

完全に切断された幻影獣の下半身が。

どさつと、地面に落ちた。

地に落ちた下半身は、砂のように舞い散っていき。
しばらく叫び続けていた上半身も、やがて煙のように消えつせた。

「やつた……のか？」

声が渇いている。

どうにも、目の前の現実が信じられない。

「デモ。『豪華絢爛^{ロイヤルエッジ}』が障壁になっていたはずデスのに……」
エリカも、半信半疑のようだ。

バリン！

突然音がした。ガラスをたたき割ったような、甲高い音だ。

バリン！ バリン！ バリン！ バリン！

しかも、一つじゃない。

連鎖するように、連續して音がしている。

「な、なんだ？」

「悠斗さん、アレを…」

言われて見上げると。

空から、碎け散ったガラスのよつた物体が、夕陽を受けて輝きながら舞い降りてきている。

「なんだ、これ？」

そのうちの一つを手に取る。

プラスチックに近い、不思議な感触。

「これって

『『豪華絢爛』』の破片デスね…』

エリカも、俺の手を覗きこみながら、呆然と呟く。

そつか。

『豪華絢爛』』と、あの幻影獣を切り裂いたのか……。

「凄いデス……」

「ん？」

囁くような声に振り返ると、なんだか、金髪の美少女が凄い目をしている。

「悠斗さん！ 憎いデスー！」

『

夕陽を浴びて煌めくカケラが、一人の少年を祝福するように降り注ぐ。

今日、この場で産声を上げた、一人のBMPハンターだ。

新月学園を襲つたBランク幻影獣のBMP値は、推定で352。正式に幻影獣の存在が確認されて以来、観測された中では過去最強の幻影獣だった。

それを生まれて初めての実戦で、しかも一刀のうちで斬り捨てるといつ離れ業をやつてのけた少年は、自信の能力を誇るでもなく、恐れるでもなく。

金髪の少女に抱きつかれて、田を白黒させていた。

……大丈夫。麗華さんには言わないから。

それは、ともかく。

私にはようやく分かつた。
私が彼に惹かれる理由。

彼のBMP能力の本質は、剣麗華の幻想剣を複写して見せた、その

性能の高さではなく。

死神の「」とく君臨したBランク幻影獣にも決して退かなかつた、心の強さ。

どれだけ打算を積まれようとも曲げなかつた、意志の強さ。

本人は否定していたが。

やはり、私は特別なものだと思つ。

そういうえば、彼は常々『称号』を欲しがつていた。

麗華さんは、ソードウエポン。緋色先生は、アイズオブエメラルド。

三村くんでさえ、ランスウエポン。

子供っぽいとも思つが、分からぬでもない。

「」は、僭越ながら、私が考えよう。

そのチカラで、他のみんなが続く道を切り開いて欲しいという願いを込めて。

BMPヴァンガード、と。

『

季報・新月、臨時増刊号『決戦・新月学園籠城戦!』（編者：新條文）より抜粋。

第一章『BMPヴァンガード』ハローグ

「以上が、第五次首都防衛戦で、澄空悠斗君がBランク幻影獣を破つた時の映像です」

ここは、上条博士の研究室の一室。そこの大規模プロジェクトに、澄空悠斗が大型幻影獣を屠った戦闘の映像が映し出されていた。

部屋にいるのは、上条博士に、城守、そして、5人の男女。

「国家維持軍の撮影班が間に合わず、新月学園の生徒が撮った映像を提供してもらわなければならなくなつたのは情けないです、これはこれでよく撮れます。スカウトしたいくらいですね」滔々と話す城守。

一方、5人の男女は、そんな城守を若干白い目で見ていた。

「『クリスタルランス』の皆様方には、この少年の今後について、最強BMPハンターチームとして助言をいただきたいと思い、お越しただきました」

あくまで淡々としている城守。

その彼に、端に座っている体格のいい男が声をかける。

「いや、蓮よ。これって、どう見ても、あの時のガキじゃ……」

「何を言つているのか分かりませんねハンマー・エポン、彼は今回初めて能力覚醒したのです以前にクリスタルランスと会つてゐる訳がありませんなにか勘違いをしてゐるのでは」

「そ、そうだった。すまん、蓮」

大男が、城守に頭を下げる。

「いやー、それにしても、あの子、ほんまにリーダーの呪いを自力で解いたんや。たいしたもんやなー」

大男の隣に座つている活発そうな女性が、声を上げる。

「コトコト、凛々しい ギューッてしたい……」

そのさらに隣の、本人は眠そうだが目の覚めるような美女は、頬を赤らめて夢見るような表情をしている。

「そうですかね……」

そのさらに隣の少年は、なんだか、おもしろくなさそうな顔をしていた。

「な、なあ、城守君。なんだか、彼らは悠斗君の事を知っているよう見えるんだが……」

「なにを言つているんですか上条博士前回の戦闘で初めて覚醒した悠斗君とクリスタルランスに接点があるわけないじゃないですか科學者なら冷静な目で見てください悪い人に騙されて高額な商品を卖りつけられますよ」

「そ、そうだな、すまん」

勢いに押されて黙り込む、上条博士。

「ま、まあ、いい、とりあえず、悠斗君のこの能力について、クリタルランスの皆には意見を……」

「『劣化複写』」

「へ？」

間抜けな声を出す、上条博士。

「『』の能力の名前は『劣化複写』。必ず劣化状態で模写する代わりに、どんな能力でも複写できる、最強の複写系能力です博士」一番端に座っている、剣麗華に負けず劣らずの美しい女性が発言する。

驚いたことに、その瞳は燃えるような赤だつた。

「劣化複写……」

な、なんて、研究意欲を掻き立てられる能力だ！」

そして、年甲斐もなく興奮する上条博士。

「しかし、記憶が戻つたって感じやないなー」

活発そうな女性が言う。

「うん。戻つてたら、キュートさに加えてスタイリッシュ度が30パーセントくらいアップすると思う」

眠そうな眼の美女が、なぞの指標を持ち出して言う。

「能力自体には問題ないみたいだし、いいじゃないか。これで、いつもでもストリートバトルができるそうだな」

大男が言う。

「いくら幻想剣を複写できるからって、剣さんとは用とすっぽんです。臥淵さんとじや勝負になりませんよ」

少年は、やっぱり面白くなさそつな顔をしている。

「ですからですねえ！」

そんな5人を見て、焦つたような表情になる城守だが、上条博士が彼らの会話そつちのけでパソコンを叩きだしたのを見て安心した。どうやら、劣化複写イレギュラー コピーがよほど魅力的な研究材料だつたらしい。

相変わらず、優秀なのに扱いやすくて助かる。

「心配しすぎですよ、蓮。上条博士は、そんなに話の分からない人ではありません」

赤い眼の美しい女性が、上条博士に聞こえないようにして、城守に話しかけてくる。

「というより、ただ単純にビットでもいいと思つタイプの人ですけどね……」

嘆息する城守。

「でも、無理だとは思いますが、もう少し気をつけてもらえないで

「しょうか？」

「あれでもみんな気をつけているつもりなんですよ」
だから困るんですよ、という感想を持つ城守に、柔らかなほほ笑み
を向ける女性。

しかし、その深紅の瞳だけが、場違いな程に異彩を放っている。
眼の前の女性にその気がないとしても、決して気を抜けない。

一旦、この瞳『アイズオブクリムゾン』に支配されれば、『死ねと
言われれば死ぬのかお前！』という子供の喧嘩で良く使われる常套
句が冗談でなくなる状態になる。
つまり、死ねと言われれば死ぬ。

「むしろ、私は、あなたが一番心配なのですが？」

「それは誤解です」

「そうですか」

あまり信じてはいない顔で、赤い眼の女性が言つ。

といつも、城守はこの女性が一番心配だった。
自分で気が付いていないのだろうか？

今でも、普段は滅多に自分が笑わないことを。
なのに、さきほどから、隠すそぶりもなくニコニコと笑顔を振りま
いていることを。

そして、言つ。

「よつやく会えますね。澄空悠斗君」

俺は、今までの人生で死を覚悟したことが、三度ある。

一度目は、5年前、当時住んでいた町が幻影獣に襲われた時。
二度目は、同じ先生に、「先生って、ちっこくて可愛いですね」と言つた時（なんで、あんなこと言つたんだか）。
そして、三度目が今。

正直、今が断トシで、一番怖い。マジ怖い。

「あのー、麗華さん……」

テーブルの向い側に座つてゐる麗華さんに声をかける。

「なに。悠斗君」

そして、いつものように感情の薄い表情で、普通に返事もしてくれ
る。

でも、明らかに怒つてゐる。

怒つているのを隠そうとしているのか、そもそも今まで怒つたこと
がないから怒り方が分からないのかは分からないが、確かに怒つて
いる。

しかし、俺には心当たりがない。

が、3か月一緒に暮らしているが、ただ機嫌が悪いだけで麗華さん
がここまで怒つているのは記憶にない。
何かやらかしたのだろう。

なんとか、思い出してみるとこじつけ。

えーと、今日は、朝、起きてきて……。

「おはよー、麗華さん」

「おはよー、悠斗君。そろそろ起きてくるころだと思って、トーストを焼いておいた。2分前に焼きあがったから、いいタイミングだと思う」

「え、えらくピンポイントな起床予想だな。さすが、麗華さん。ありがたくいただくよ」

「ん？ 悠斗君、何を読んでるの？」

「ああ。賃貸情報誌だよ。新しいアパート探してて」

要約すると、以上のよつな状況だつた。

……分からん。先の会話のどこに問題があつたといつんだ！？

「悠斗君」

「は、はい！」

なんでしょうが？

「私に気に入らない」とあるなり、言つてほしい。大抵のことは、直す用意がある

いえ、どこからどう見ても、いつも通りの完璧美少女ですが。

「だつたら」

と、言葉を区切る。

言葉では伝えにくいや、無茶苦茶怖い。

目の前にいる俺にはもちろんだが、高BMP能力者である麗華さんの感情の高ぶりは、プレッシャーという形で周囲の人にも影響を与える（普段は抑えているらしい）。

以前は、そのせいで、あるホテルが一週間、営業停止になったこともある。

……このマンションの下の階じゃ、今頃、大騒ぎだろうなあ。すみません。

「だつたら、なぜ、新しい転居先を探しているのか理解できない」「？ だつて、この間の闘いでBMP能力が覚醒したる？ 覚醒時衝動とやらもなかつたし。もともと、俺の覚醒時衝動対策で、俺と麗華さんは一緒に暮らしてたんだし」

と、俺が言つと。

ほん、と、やたらと可愛い仕草で麗華さんは手を打つた。
「うつかりしてた。そういうえば、そうだった」
さきほどまでの怒氣が、嘘のように消えていく。
なんだつたんだ、一体？

「アリーハーとであれば、私も協力させてもらひ。悠斗君に、きっと最高の部屋を見つけて見せる」と、燃える完璧美少女。

いや、普通の部屋でいいですよ。

といひで、俺は、今までの人生で『贅沢な悩み』といつものをしたことがない。

だが、今、初めてそれをしている。

「金には余裕があるんだよなー」

思わず、顔がほころぶ。

手元で開いているのは、賃貸情報誌。

今までの人生では、入居部屋に求めるのは、屋根と壁だけだった。バストイレ共同どころか、それ自体がないような場所も多かつたし、治安の悪い場所も多かつた。

住み込みのバイトなんかは最高だつたが、あまり長くは雇ってくれなかつた（別に俺の素行が悪かつたせいではない）。一言で言つと、城守というイケメン眼鏡役人のせいだ）だが、今回は違う。

高校生の身分でありながら、B M Pハンターとしての収入がかなりのものなのだ（まだ、一回しか戦闘してないのに）。（元）おまけに前回の第5次首都防衛戦でBランク幻影獣を倒した時の一時金が、これまた凄い額だつた。

という訳で、俺は身の程知らずにも、部屋の良し悪しなんかをいい気分で判定していた。

「これなんか良さそうだな。豪華なテラス付きの高層マンションかー

「そこはだめ。隣にもつと大きなマンションができる、田当たりが悪い」

突然割り込んでくる完璧美少女。びっくりした。

「じゃ、じゃあ、ここは？ 超高速インターネット使い放題、電話かけ放題、最新ハイテクマンション、近日公開

「あのあたりは、干渉系の幻影獣の出現率が高い。電気・通信系統

は正常に動作しない」とがある。マンションなんか作らないほうがいい

いい

「じゃ、これ。複合型ステーションまで徒歩一分。アクセス抜群、環境最高」

「あのステーション、この間、幻影獣に、根こそぎやられた。呪い汚染のせいで、あと10年間は建物が建てられない。線路の引き直しをしないと」

「これ」

「建設会社が談合で捕まつた。このマンションは完成しない」

……だそうです。

選択肢があるならあるで、結構、難しいな。

「引越し、やめようつかな

「それがいい」

「へ？」

思わず、麗華さんを見る。

「い、いや、やはり良くない。理由もなく、若い男女が同居するのは良くないと、緋色先生も言つていた」

「そ、そうすか」

「じども先生らしい正論だ。」

「ちなみに、麗華さんはオススメとかあるの？」

「なくもない。いくつかピックアップしておいた。案内できる

「じゃあ、お願ひしようつか」

そういうことになりました。

「あ、あの、ijiは……？」

俺は、どもりまくつながら、麗華さんに尋ねていた。

「部屋探しをする前に寄りたいところがある。悠斗君も迷惑じゃなければ付き合ってほしい」「いいよ。じゃあ、そつちから、先、行こうか」とお請け合いしたのを、俺は今、激しく後悔している。

なぜなら、この建物は、どう見ても……。

「首相官邸。テレビとかで見たことない？」

ありますよ。

あるから、ビデオてるんですよ。

「な、なんで、こんなところ……？」

「おじい様に呼ばれた。少し時間ができたから、顔が見たいって」

今、とんでもなく不吉なセリフを聞いた気がする。

『おじい様に呼ばれた』と言つたな？

つまり、麗華さんのおじいさんは、この建物に縁のある人で……。

俺は、物凄い勢いで、麗華さんの名字『剣』が付いている政治家をピックアップする。

財務大臣、厚生労働大臣、幻影獣対策大臣……。

その他、色々。

でも、『剣』という名字には覚えがない。

じゃあ、そんなに有名な人ではないかな？

と、俺が、少し（ほんの少し）だけ、安心してこる。

「剣源藏つて言つ」

「首相じゃないですかー！」

思わず叫ぶ。

一番最初に思い出さなければならぬ人が抜けていた。

「で、では、こつらひしあい

精神的に完全にビビッてしまつた俺は、ぎりちない笑顔で麗華さん
に手を振る。

「悠斗君も来るとい

「い、いや、俺は、ここで待つてるからー。」

「でも、こんなところで立つてると、不審者と間違われる

麗華さんの鋭い一言。

確かに、さつきから、門のところのガーデマンが（俺ばっかりを）
物凄い目で見てくる。

「お、俺は、庶民だから……」

「私だつて庶民」

いや、絶対に違う。

「大丈夫。お付きの人たちは胸に穴があいて、時々、交代するナゾ、
私には普通

いや、俺には普通じゃないと思います。絶対。

なんと言わても、俺はここに入る気はなかつた。

大して役に立たない第六感が、今日ばかりはビンビンに警戒音を発
しまくつていた。

たとえ、今現在、後ろから幻影獣に襲われても、絶対に、ここには

……！

「一緒に来てくれないかな……？」

「行きます」

ちょっと、上目遣いの麗華さんに、「俺は即答した。泣く子と、完璧美少女には勝てん。

おじい様への「」探検

剣源蔵。

剛腕で知られる政治家で、現在、この国の首相を務めている。

元々は、この国最大の企業グループ『剣財閥』を率いるバリバリの財界人だったのだが、あることをきっかけに政界に転身。

以後、とんとん拍子で首相にまで上り詰めたという、庶民をなめきつた経歴の持ち主である。

財界と政界でトップを極めた人間だからして、国民の評価はすごいぶる高い。

この国が幻影獣に滅ぼされていないのは、この人のおかげだという声も多い。

が、気性の激しさは折り紙つきで、国会中継を見て子供が泣き出したとか、SPが胃潰瘍で入院したとかいう話は上げるとキリがないほどある。

それでも、物を投げつけたり、むやみやたらとビンタしたりといふ子供っぽい怒り方をしないところが、また人気の理由ではあるのだが。

断言しよう。

子供っぽかううと、子供っぽくなかろうと、怖いものは怖い。

「いつも孫娘が世話をなっているね」

「この国のトップからしく、威厳に満ちた口調で言ひ劍首相。

麗華さんから見ればただの祖父かもしれないが、俺から見れば、遥か彼方の天上人である。

剣首相も表面上はそれらしく振舞つてくれてはいるが。
その実は。

『こいつが、可愛い麗華にたかるゴバHか……。機会があれば、搾りあげてやるつか』とばかりに、低レベルの怒気に満ち溢れている。やたらと豪華な応接室に麗華さんと一緒に座らせられ（俺は嫌だと言ったのに）、その正面にこの国の首相が座つてこるとこいつ異常な構図もあいまつて、俺は逃げ出したくなつっていた。

「い、いえ……。お、僕のほうへ、麗華さんにはいつも世話をな
りっぱなしで……」

「隠さなくてもいいよ。麗華と一緒に暮らすのは大変だらう」「そんなことはない。最近では、家事もきちんと分担しているし、お風呂上りにバスタオル一枚で怒られることもなくなつた

麗華さん、空氣読んで！

でないと、俺が身体的・社会的に抹殺されます。

「ま、まあ……。仲良くやつてこいるのない、なによつだ。節度さえ守つてくれれば、何も言わん。節度さえ、な」
ま、守つてます、守つてます。

「ところで麗華よ。ちと、澄空君と一人で話がしたいので、席を外してもらつてもかまわんか？」

なんですよー！
「別にいい」

「じゃあ、しばらく散歩してくる

と言い残し、麗華さんは出て行つてしまつた。
久しぶりの家族の会話じやなかつたんですか！？

なんで、俺が首相と一人つきりにならなければ……！

「すまんな、澄空君。一人の貴重な時間を、年寄りの我がままで浪費させてしまつて」

年齢的には初老だが、精神的にも肉体的にも若々しい首相が言つ。

「いえ、気にしないでください」

だから、社会的に抹殺だけは勘弁してください。

麗華さんは、ほんとこ、ただれた関係にはなつてませんから。

「……」

「……」

「……」

「……えーと」

黙つたまま俺を見つめてくる首相に、どう反応していいものか迷つてしまつ。

「君は……」

と、よみやく口を開いてくれる。

「はい」

「普通だな」

「はい？」

思わず語尾が上がる。

なんのこいつや。

「そ、そうですね。あまり面白味がある人間ではないかもしけませんねー。外見も普通だし、運動神経も普通だし、頭は悪いし

しかし、とりあえず合わせる、事なきれ主義の俺。

「ああ、いや。すまない。そういう意味ではないんだ」と、やきほじまでの子供っぽい怒氣を完全に消した首相。

「君には、釈迦に説法かもしれないが、高BMP能力者は精神を病む」

どきり、とした。

「周囲の無理解や嫌悪はもちろん、BMP能力自体が、直接的に精神を蝕む代物だからな。高BMP能力者が人格破綻せずに成長するためには、完全に外界と隔離した状態で、専門的な訓練と治療が必要だ」

「……」

「だが、その代償は大きい。麗華を見ていれば、分かるだろう」

「麗華さんは……？」

「ああ。小学校を出るころまでBMP研究施設で育つた。君も知っているかな。上条博士という世界的にも有名なBMP研究の権威だ」「知っています」

「とても、そうは思えないハッスルじいさんでしたが。

「あの施設は、もともと麗華のためだけに建てたものなんだがね。最新の設備と最高の頭脳。おかげでなんとか麗華の人格は崩壊することなく成長できた」

「あの人の最高の頭脳というのは俺にはなかなか難しいが、とにかく、剣首相の言っている意味は分かった。」

「だが、その麗華のBMP172を上回る187ものBMPを持つ君が……」

俺を見る。

「普通のことにして、脅威を通り越して、感動さえ覚える」「た、ただの特異体质では……？」

「長年、麗華を見てきた私には、あれが体质」ときでどうにかなる

ような衝動でないことがぐらいは分かる。彼女も同意見だ

「彼女？」

と、俺が聞き返した時。

上品なノックの音がした。

『最強BMPチーム・クリスタルランス1人目・緋色瞳（能力名：リーダーアイズオブクリムゾン）』の場合

「失礼します」

上品な美声とともに、目を疑うような美女が入室してくる。

俺は、今までの人生で麗華さんより綺麗な人は見た事がなかつたが。
年の差はあれ、この人は同じくらい美人だつた。
だが、何より驚いたのは、その燃えるような瞳の色だ。

「お茶をお持ちしました」

「は、はい……」

圧倒的な存在感に気圧されながらも、なんとか返事ができた。

「どうぞ」

と湯呑みを差し出す、赤い目の美女。
が、差し出した後も、すぐには去るうとしなかつた。
その燃えるような瞳で、俺の瞳をじっと覗きこむ。

あれ？ この仕草、誰かに似てる気が。

「綺麗な瞳ですね」

「は……はい……」

炎を宿す瞳にそう言われても、俺にはまともな返事はできない。

「緋色君。もういいかね？」

「ええ、すみませんでした、剣首相」

首相に言われて、優雅に距離を取る美女。

「さて、澄空君。一応紹介しておこうか。彼女が、最強BMPチム『クリスタルランス』のリーダー。『アイズオブクリムゾン』こと、緋色瞳くんだ」

「あ、アイズオブクリムゾン！？」

いくら世相に疎い俺でも、その名前くらいは知っている。

クリスタルランスのリーダーにして、最強の支配系能力を操るBMP能力者。

確か、BMPは、麗華さんに次ぐ168で、賢崎藍華と並んで、歴代3位（ちなみに、恐ろしいことに、1位は俺である）。

「はじめましてですね。澄空悠斗君。それとも、『BMPヴァンガード』とお呼びした方がいいかしら？」
「い、いえ。澄空で結構です……」

恐縮する俺。

ちなみに『BMPヴァンガード』というのは、前回の戦闘でクラスメートの新聞部員兼委員長がつけてくれた称号だ。自分でも、割と気に入っている。

「で、どうかね。久しぶりに見る澄空君は？」

「変わつてないですよ。溢れるほどの力と、強い意志。……いえ、むしろ、以前より強い」

久しぶり……。何を言つてるんだ？

いくら俺でも、こんな美女と会ったことがあるなり、忘れたりはないぞ。

「きっと。凄く素敵な生き方をされてきたのじょ？ 私も、我が事のように、誇らしいです」

ちょっとした気がかり

『クリスタルランス2人目、ハンマー・エポン・臥淵 剛。能力名：
ドラゴンバスター 怪力無双』の場合

麗華さんのお祖父さんと、麗華さんと同じくらい綺麗な謎の美人のツイン攻撃で消耗しきった俺は、なんとか解放されたあと、ふらふらしながら首相官邸の廊下を歩いていた。

『麗華さんが戻るまで待つていては?』と勧められたが、あれ以上消耗させられては、家さがしじるではなくなってしまう。

「にしても、一体、麗華さん、どこに行つたんだろうなー?」
と、歩き慣れない広大な建物内をうろついていると。

前方から、2メートルはありそうな、がつしりした体格の男が歩いてきた。

「な、なんだ、あれ!?」
思わず叫んでしまったのも、無理はないと思つ。
大男は、なんとハンマーを担いでいた。
それも、漫画とかで出てきそうな、コテコテのハンマーだ。
しかも、でかい。大男の背丈くらいある。

大男自身も、ガラが悪いといつわけではないが、異常な威圧感がある。

『近づくだけで怪我をしそうな』という形容詞がぴったりの大男だ。

だから、俺は、端に寄つた。

それも、壁に触れそうなくらい端にだ。

なの』。

気がつけば、大男は、俺の目の前に来ていた。

「な、何でしようか?」

近くで見ると、ほんとこでかい。田の前に壁ができたみたいだ。

「ふん……」

大男は俺の質問には答えず、軽く鼻を鳴らすと、いきなりハンマーを振りかぶつた。

「『怪力無双』」
〔ドラゴンバスター〕

まさしく、ドラゴンをも倒せるくらいの威力を持つたハンマーが迫ってくる。

あまりに突然の出来事で、俺は対応どころか、走馬灯すら見る暇がない。

そして。

俺の鼻先数センチのところで、大男のハンマーはピタッと止まっていた。

あれだけの慣性をいつどりやつて殺したんだ?

「避ける必要もなし……か。つれねえなあ。相変わらず」
ハンマーを背中に戻し、大男は、にっこりと獰猛な笑みを見せた。
いや、反応できなかつただけつすよ。

だいたい『相変わらず』ってなんだよ。出会いがしらにハンマーを振り上げられた経験は、今まで生きてきた中で、なかつたぞ。

「あの時は、不意を突かれたからだ、なんて言い訳はする気はねえけどな、今の俺は、あの時よりさらに強ええぞ。失望をせるつもりはないぜ」

「???」

何を言つてゐるんだ、この人?

「ああ、そうか。一応、自己紹介する必要があるんだつたな」
いかにも『馬鹿らしいけどな』と言わんばかりの口調で、大男が言う。

「俺は、『ハンマー・ウエポン』臥淵 剛。能力は『怪力無双』。^{ドラゴンバスター}ま、典型的な怪力戦闘タイプだ。よろしくな」

「い、こちらこそ、よろしくお願ひします」

この人の名前も聞いたことがあるな。

クリスタルランスのメンバーで、身体能力を飛躍的に向上させる『怪力無双』^{ドラゴンバスター}の使い手。

身体能力自体を向上させるから、攻撃にも防御にも隙がないのはもちろんだが、特筆すべきは、その攻撃力の上昇幅。

あのハンマーで、直接幻影獣を叩いて潰せるほどの怪力を發揮できるらしい。

……やつを止めてくれなかつたら、首相官邸の壁に、俺の顔がコレクションされてたな……。

「ところで、おまえ。ストリートバトルは知ってるな？」

「は、はい」

ストリートバトルって、確かに、能力向上を目的にB.M.P能力者同士で私闘をするやつだよな。

話は聞いたことがあるけど、俺には無縁のものだ。

「俺は、ストリートバトルは基本的に誰からでも受けてるが、おまえは特別だ。ファイトマネーなしで最優先で受け付けてやる。俺の懸賞金はなかなかのもんだから、その気になつたら、いつでも連絡してくれ」

「は、はあ」

なんで、そんな危ないものを、こんな化け物と俺がしないといけないのだ？

「じゃあな、『主都橋の……』じゃなかつた『BMPヴァンガード』。
ストリートバトル待つてゐるぜ」

最初から最後まで、意味不明のまま。
謎の大男は、去つて行った。

結局、この日は部屋をしじみでなくなった。

「澄空。ちょっと、小耳に挟んだんだが……」

次の日。

俺の通うBMP能力者養成校『新月学園』に登校した俺は、朝の教室で一人の弱ナンパ男風イケメンに話しかけられていた。

こいつの名は、三村宗一。

風貌こそ弱ナンパ男だが、一応BMPハンターだ。おまけに、麗華さんと同じく『ウエポン』の属性持ちだ。

また、学力に応じたクラス分けがされるこの学校で、このクラス（学年一位だったりする）にいるということは頭もいいということだ。じゃあ、俺も頭がいいのかというと、そういうわけでは無かつたりする。

「おまえ、家を探してるんだってな？」

「やうだけど。誰から聞いた？」

疑問に思つて聞き返す。

この話は、麗華さんにしかしていないと思つていたんだが。

「いや、剣に『なんか面白いことないかなー』つて聞いたら、『つん。悠斗君が部屋を探している。私も、できる限り助力しようと思つ』って答えてくれたもんでなー」

……なるほど。

相変わらず、読みにくい反応をする人だな、麗華さん。

「というわけで、おまえにはこれをやろう」と、封筒を渡される。

「なんだ、これ？」

「中には、地図と入場券が入っている」

指を意味なく左右にチツチツと振りながら、三村が言つ。こうこうこうとするから、弱ナンパ男とか言われるんだがな。「そこで、おまえは求めるものを得るだらう」

「要するに、住宅展示場の案内か何かか？」

「……ま、平たく言えば。バイト先なんだけどな、ノルマが結構、きつこいんだよ。助けると思つて、頼む……」

挿むような仕草をする。

コイツは、弱ナンパ男のくせに、なかなかの苦学生らしい。一ヶ月前までは、こいつに輪をかけて苦学生だった俺としては、なんとか力になつてやりたいところだ。

「じゃ、とつあえず、週末に行くよ

その日の放課後。

俺は、じども先生に呼び出された。
ちなみに、じども先生といつのは、俺が勝手に（心中だけで）呼
んでるあだ名で、本人に言いつと怒る。ちゃんと緋色先生と呼ばひ。

「失礼します」

頭を下げて、職員室に入室する。

入室すると同時に、他の先生たちが『今度は何があったんだ?』み
たいな顔をするが、もう慣れた。別に濡れ衣でもなし。

「ん?」

と、そこに予想外の人物を見つけた。

麗華さんだ。

「悠斗君」

おいでおいでをする麗華さん。

「あ。ちゃんと来たみたいね」

続けて、やたらと幼い声がする。

声が幼いのも当然で、麗華さんの前に座っているのは、どう見ても
小学生の女の子だった。

この外見で、『じども先生』以外に、一体どんな愛称を付けるとい
うのだ?

まあ、右目に物凄く無骨な眼帯をしているのが、子供らしくないと
言えぱないけど。

もつと、ファンシーなのにはすればいいのに。

「ちょっと待つてね」

と言つて、こじも先生は、右目の眼帯を外す。
そこから、深緑の瞳が姿を現した。

「こじも先生のBMP能力『アイズオブエメラルド』だ。

「んー」

視力検査のような格好で、麗華さんの瞳を覗きこむ。
ああることで、その人のコンティショニングやBMP能力の状態が分
かるらしい。

俺も、ああやつて、良く『診ら』れている（ちなみに、俺の場合は、
あの後、頭をシェイクされる）。

「んー？」

眼帯をかけなおして、難しそうな声を出す、こじも先生。

「麗華さんが、どうかしたんですか？」

ちょっと心配になつて声をかける。

「うん。ねえ、剣さん。最近、身体の調子が変とか、熱っぽいとか、
感じじる」とはない？

「特には、私は、風邪などはひいたことはないから」

「そつか。美人は、風邪引かないっていうしね」

……初耳だ。

「こじも先生？」

「うん。悠斗君にも聞いてもらつた方がいいかな。でも、こじも先
生言わない」

「こん、と叩かれた。……また、言つちまつたか。

「わざかにだけど。麗華さんに、BMP過敏症の兆候が出てる」

「BMP過敏症？」

花粉症と響きは似ているが、BMPと入つていると不吉だ。

「BMP能力の強さに身体が付いていかなくなつた時に起つる不具

合の総称。進行してBMP中毒症になると命に係る「

自分のことなこと、そういうと『命に係る』とか言つ麗華さん。

「高BMP能力者ほど、かかりやすいの。まあ、その年になつてから能力覚醒して、覚醒時衝動も起こさないよつた鈍感な男の子は大丈夫でしょうけど」

く、せつきの仕返しか。こども先生、意外とうだな。

「ま。このくらいなら問題ないでしょ。でも、あんまりBMP能力の乱用は避けること。進行が進む時もあるから」

初めてのデート？

週末。

封筒の中に入っていた地図を頼りにやつてきた先。

そこにひとつの大好きな建物があった。

広大な敷地にそびえ立つ、青を基調とした建物。
どことなく、海を連想させる。

そして、看板に『新月マリンパーク』と書いている。

「悠斗君。私には、住宅展示場じゃなくて、水族館に見える
一緒にきててくれた麗華さんが言つ。

奇遇だな。俺もそう思う。

一緒に入っていたチケットを見ると、それはもうはっきりと『水族
館入場チケット』と書いている。

今まで確認しなかった俺も悪いが、あいつはいったい何を考えてい
るんだ？

「どうするの、悠斗君？」

「悔しいから、使ってやるか。このチケット」

单なる入れ間違いだつたら氣の毒だと思つが、今回は、あいつが悪
い。

「でも……」

「ん？」

「水族館は、恋人同士でないと入ってはいけないと二村が言つてい
た」

「そんなことはない」

ほんとに何を考えているんだ、あいつは。

『新月マリンパーク』は、なかなか豪勢な造りをしていた。まずは、全方位に魚が泳いでいる水のトンネルがお出迎え。ジャブ代わりの普通の水槽がいくつか続いた後、この水族館の売りでもある、深く地下にらせん状に進みながら鑑賞できる超大型水槽が待っている。

やっぱ、首都は金があるんだなー。

「悠斗君」

と、いきなり麗華さんに話しかけられた。

「ん？」

「ここでは、結局、何をすればいい？　ここにいる魚の名前や生態を説明するのなら、簡単だけど」

そういう場所ではありません。

とはいって、そうはっきり聞かれると迷うな。

恋人同士なら、親睦を深める、でいいんだろうけど。

……いや、恋人同士でなくてもいいのか。

「自由に泳ぎ回る魚を眺めながら、親睦を深める……とか」

「親睦？　私と悠斗君の間の人間関係に、現在問題があるとは思えない」

「まあ、問題があるとは俺も思ってないけど。さりと仲良くなる…

…とか？」

「さりに仲良くなるとどうなる?」

「仲良くなると……」

どうなるんだろ?」

「対幻影獣戦闘時の連携戦闘効率がアップするとか?」

自分で疑問形になる俺。

「なるほど。では、親睦を深めよう」

そして、あつれつと納得する麗華さん。

と、いきなり腕を組まれた。

「れ、麗華さん?」

「大丈夫。私とて、男女の親睦の深め方くらいは知っている。周りの人たちも、皆、同じようにしている」

麗華さんの言うとおり、確かに周りの人は皆、腕を組んだり、肩を組んだり、もう少し密着したりしている。

というか、ここ、ほとんどカップルばかりだつたんだな。

そして、カップルばかりなのに、なぜか俺たちに物凄く視線が集中しているのに、今、気がついた。

そつか、麗華さんと居るんだもんな。

最近はだいぶ慣れてきたが、モデル並み（というよりもモデルより）綺麗な麗華さんは、とにかく目立つ。

最初は、一緒に登下校するだけで、不審者通報されないか心配になるくらいだった。

そんな美人が、かなり無理しないとイケメンとは言われない俺と腕を組んで、珍妙な会話を繰り広げているんだ。注目されないほうがおかしい。

男が見とれて、女が腹を立てているカップルなんかはまだいいほ
うで。

女が顔を赤らめて『私、そっちのケがあつたのかもしない』とか
言つて、男が青い顔をしているカップルなんかは、もう『懲傷さま
としか。

「悠斗君、顔が赤い」

「ひょ！」

いきなり言われて、飛び上がる。

女性にしては背が高い麗華さんの顔は、俺と同じ位置にある。
いつたん意識しだしてしまつと、かなり無理をしても一枚目ではな
い俺には、この美顔は刺激が強すぎる。

「ちょっと、のどが渴いたから……」「……」

かなり無理のある言い訳をする俺。

すると。

「わかった。水分を調達してくる」

言うが早いが。

音の速度で、麗華さんは行つてしまつた。

ひょっとして、催促したと思われたのか？

ひとり残された俺には興味をなくしたのか、周りのカップルたちは
去つて行つた。

とはいゝ、女が男をつねつたり、男が必死で白昼堂々、愛の言葉を
囁き直して女を正常な道に戻そうとしているカップルを見る限り、
だいぶ禍根を残すイベントだったようだが。

まあ、それはともかく。

下手に動くと、はぐれてしまう。麗華さんが迷子になるとも思えないし、ここでのんびりと待っているか。

「でか……」

目の前に巨大なサメが迫る。

体長は10メートルほど。大きな口は、俺がまる」と入りそうだ。強化ガラスがなければ、人間など相手にもならないような生物だが。

「俺は……」

つい一ヶ月ほど前、これよりもさらに強大な生物（かどうかは分からぬ）を倒した。

史上最強のBMP352を誇ったBランク幻影獣。

『奇跡のBMPハンター出現』なんて見出しで、つい最近まで大々的に報道されたもんだ。

こうやってのんびり過ごせるのは、城守さんが顔出しNGにしてくれたからだな。感謝しなければ。

気がつくと周りには誰もいなくなっていた。

「イレギュラー・ジャー・イリュージョンソード
劣化複写・幻想剣。断層剣カラドボルグ」

ふと呟く。

次の瞬間、俺の手には壯麗な剣が握られていた。
麗華さんの幻想剣を俺の能力で複写した剣。

一ヶ月前に目覚めたばかりだというのに、今では驚くほど簡単に使いこなせる。

そして、劣化状態の複写とはいえ、この剣は、目の前のサメ」と、この超巨大水槽を両断する力を秘めている。

「ま、しないけど」

剣を消す。

BMP能力に目覚めた当初はむやみやたらと使ったがる人が多かった

しいが、俺にはそういうのはなかつた。

覚醒時衝動つてやつもなかつたし。

そういうしてじるうちに、人の気配がした。

麗華さんかと思つて見ると、

そこには、見たことのない二人組の女性が並んで歩いてきていた。

『クリスタルランス3人目、アローウエポン・茜嶋光。能力名・天閃^イ。及び、クリスタルランス4人目、犬神 彰。能力名・電速^{バルス}』の場合

ただものじゃないのは一目でわかつた。

身のこなしどとか隙とか、小難しいことを考える前に、高BMP能力者は纏つている空気が違う。

意識して抑えないと、周りの人に対する圧迫感を与えるほどのプレッシャー。

麗華さんなんかは、その筆頭だ。

ちなみに、その麗華さんよりBMP値の高いはずの俺は、あんまりそういうのがないらしい。

『控えめなのが、澄空君のいいところですね』と、じども先生も言つていた。

だが、その力に反して、見た目は一人とも細身の女性だった。

一人は、勝気な瞳が印象的な活発そうな女性。なんとなく、眼鏡はずし状態の委員長に似てるな。
もう一人は……。

「美人……だな」

単純に美人度（そんな尺度があるのかどうかは知らないが）でいうなら、麗華さんや緋色瞳さんが上かもしけないが、包み込んでくれそうな優しい雰囲気がいい。
少しどろんとした眠そうな眼といい、おつとりとしているながら優雅な仕草といい。

「あんな姉さんがいたら、いいだろうなあ」

不覚にも、そんなことを思つ。

……家族のいない生活も長いのに、何をこなさる。

などと、考え方をしている。

「うわ

いつの間にやら、二人組の女性が目の前にいた。

通路は広い。

この二人は、俺に用があつて寄つてきたのだ。

「あ、あの、なんでしょうか？」

「キミは……」

眠そうな眼の女性が、言つ。

「私を……」

高BMP能力者なら、俺の力に気づいてもおかしくない。

いや、それ以前に、ひょっとして、さつきの『カラドボルグ』見られたか？

「お姉さんと呼んでもいい」

「あ……」

つて。

「え？」

今、なんとおっしゃいました。

「私は、コトコトのお姉さんになりたいと思っている」

ゆ、コトコトつて、それ、ひょっとして、俺の愛称つすか？

「ちょ、ちょっとちょっと。飛ばしそや、光。悠斗君、びっくり
してるやないか」

隣にいた活発そうな女性が、口を挟む。

「そ、そうですよ。いきなり、お姉さんとか言われても」

といふが、この人たち、なんで俺の名前を知ってるんだ？

不思議な関係

『クリスタルランス5人目、ダガーウエポン・坂下 陸。能力名：
ラピッドアタック連携攻撃』の場合

最強BMPチーム『クリスタルランス』は、リーダーの緋色瞳をはじめ、5人中4人が初期メンバーのままだが、一人だけメンバーが交代していた。

それが、彼、坂下陸。ダガーウエポンの称号を持つBMP能力者だ。『無敵』と言われた前任者には及ばないが、次代を担うホープとして、世界の注目を集める能力者の一人である。

そんな彼が、なぜかこの日、一人で水族館をさまよっていた。

「別に事件が起こりそうな雰囲気もないよな……。先輩方が月に一度の合同練習をキャンセルするくらいだから、よほどのことだと思つたんだけど……」

二人の先輩、茜嶋光と犬神彰が突然『今日、水族館に行くから、練習行けなくなつた』と言い出したため、心配して後を追つてきたのだ。

が、電速^{パルス}を尾行をするのは無理だつたらしい。見事に捲かれたとうわけだ。

「まあ、单なる息抜きだつたら、邪魔しちゃ悪いしな。このところ、忙しかつたし……」

幻影獣との闘いで彼女らが疲れを感じているとすれば、クリスタルランスの中ではまだまだ実力不足の自分も原因の一つである。休息の邪魔はしたくなかった。

「帰るか」

帰つて修行しよう。そう思つて、踵を返した時だつた。

「あれ……」

前方から見覚えのある女性が近づいてくる。

羨望の視線を当然の如く集めながら、とらえどころのない表情で歩いてきているのは……。

「つ、剣さん！」

思わず叫んで駆け寄つていく。

「ん？」

女性が、軽く視線を動かしてこちらを見る。

そんな仕草でさえ、撮影して永久保存しておきたいほど美しい。

「えーと？」

「お忘れですか？ 以前、剣さんに挑戦して、ボッコボコに負けた坂下陸です！」

まるで、それが誇らしいことであるかのように胸を張るダガーウエポン。

「ん。覚えてる。あの後、クリスタルランスに入つたって聞いた」歴代2位のBMP能力値を持つ麗華でさえも、クリスタルランスには一目置いている。

チームとしての実力は紛れもなく世界一だし、アローワエポンこと茜嶋光には、個人部門のBMPランキングでも上を行かれているのだ。

「入つたつて言つても、補欠みたいなもんですけどね。なんせ、前任があの人だし……」

「まあ、そうかもしけない」

前任者、ブレードウエポンと呼ばれる男は、引退した今でも歴代最強と言われている。

「ところで、剣さんはどうしてここへ？」

「ん？ 悠斗君と見学に来た」

「コウト？ ひょっとして澄空悠斗ですか？」

途端に渋い顔になる坂下。

彼は悠斗には会ったこともないが、あまり良い印象を持っていなかつた。

別に、突然出てきて、いきなりBランク幻影獣を倒して英雄と呼ばれるようが、上条博士とある人が共謀して『彼こそ救世主』とかなんとか国会で演説させて『そり予算をぶんどつていうが構いはない』

しかし、なぜか彼の尊敬するクリスタルランスの他のメンバーがやたらと悠斗のことを気にしているのだ。

特に茜嶋光などは、第五次首都防衛戦以降、あからさまに『コトコト可愛いコトコト格好いい』などと言い続けている。

どう考へても何らかの接点があるのは間違いないのだが、誰もそれを教えてくれないので。

仲間外れにされているようで、面白くはない。

「今から悠斗君のところに戻るけど、一緒に行く？」

と、両手に持った缶ジューースを揺らしながら、問いかけてくる麗華。

一瞬迷つた坂下だったが。

「ええ、是非」

「こきなり「ermenな。」つちら、クリスタルラブのメンバーなんや」「え？」

ま、またクリスタルラブ？
最近、えらく縁があるな。

「つちは、電速^{パルス}の犬神彰^{パルス}で、つちのぼやぼやしてるのが、アローワーポンの茜嶋光

「え、ええ！ー！」

また、驚いた。

電速^{パルス}が女性だつてのは聞いたことがあつたけど、遠距離戦闘系最強とも言われるアローワーポンの正体が、こんなぼやぼやしたお姉さん系の女性だつて？

「うん。そういう訳で、私の弟になると色々便利。といつか、もう10年前から姉弟だつたよ^夙せえするよね？」

しませんよ。

「だから、飛ばしそぎや、光

「彰は、クールすぎると思つ。自分でつて凄く楽しみにしていたく

せに」

「悠斗君が戸惑うやろ、吉川さんのや

と、なんだか言い合ひをしている女性一人。

……訳が分からん。

「という訳で、どうかな？　コトコト」

「どうかな、と言われても……。

確かに、こんな美人のお姉さんがいれば嬉しいのは間違いないが。ここで『分かりました。これからよろしく、お姉さん』などと言えるほど、俺は三村ナイズされていない。

「えーと、とりあえず、ちよつと連れがいるんで、また今度とこいつ
ことで……」

「連れ？ ああ、ひょつとして、剣麗華？ おたぐら、同じ学校や
つたもんな」

「ど、どうして、そんな情報まで？」

「ゴトゴト。お姉さんに黙つて彼女作るのは良くないと悪い。ちや
んと紹介しないと」

そして、二つの間にか、お姉さんになつてゐる。

「べ、別に彼女じゃないですよ」

同居は、してゐるけど。

「ほんとに？ 嘘、吐いてない？」

「ほ、ほんとです。もう、全然」

「欲しいとも思つてない？」

「お、思つてないことはないですが……。麗華さんとは、いくらなん
でも、俺とじや釣り合いが取れないといつか……」
いきなり元気になつたアローウエポンに押されるまま、余計なこと
をしゃべつまくる弱気な俺。

「そつか。分かつた」

と、いきなり光さんが、ポンと手を打つた。

「ゴトゴト」

「は、はい」

と、いきなり光さんは、決定なのか？

「ゴトゴトは、お姉さんより、彼女が欲しいところ」と。

「え？」

「そういうことなら、私も彼女で構わない。10年前から、そつだ
つたような気がする」

10年前つて、俺、小1ですよ。

「ん？ ひょっとして、妻の方がいい？」「

『いや、そういうことではなく…』と言わうとした俺の耳に。

「それはおかしい」

聞きなれた声が耳に入ってきた。

「悠斗君がBMP能力に目覚めたのは、1か月前。クリスタルランスと婚姻関係を結ぶほどの出来事が、10年前にあるはずがない」麗華なんだ。

一応、助け舟を出してくれているんだと思うけど。
なぜだろ？ 事態がややこしくなるような予感しかしない。

それに、横に連れてるイケメンは誰だ？

「うわ！ あんた、剣さんかいな？ 美人さんになつたなあ……」
猫っぽい方の女性、犬神さんが声を上げる。

「美人さんなだけでは、お姉さんは認めない」

そして、いつの間にかできた、俺のお姉さんの気合が膨れ上がっている！

「アローウエポンと悠斗君は、血縁関係はないはず。そのくらいは、私も知つてゐる」

「ソードウエポンこそ、悠斗君と同居とは決してないけど、いくら同じ高校に通つていてはいえ、おかしい」

「おかしくない。悠斗君の覚醒時衝動に対応するため、それなりの実力を持つBMPハンターがそばにいる必要がある」

「ならば、ソードウエポンよりBMPランクが上で、お姉さんである私が同居すればいい」

「悠斗君に、お姉さんはいない」

いつの間にやら、物凄い勢いで人が集まつてきていた。
どちらか片方でも呼べれば、どんなくだらないイベントでも成功しそうなほどの美女二人が、どこかずれたような言いあいを真剣な顔で繰り広げているのだ。

注目されない方がおかしい。

「あ、あのな、光……」

「つ、剣さんも……。みんな、見てますし……」

猫っぽい女性とイケメンが、美女一人を止めようとしている。
そして、『あんな美女一人が取り合いをするなんて、ユウトって、
いつたいどんな男前だ』とかいう声も聞こえるが（真横にいるのに、
俺のことだけは思われてないらしい）、俺にも何がなんだか、さつぱり事情が分からぬ。

まあ、とうあえず。

とりあえず、今日は家さがしどころではないことだけは分かつた。

狙撃手と安全装置

翌日。

平和な登校風景より。

「という訳で、おまえが間違つて入れた水族館のチケットは使ってしまった」

「いや、それはいいんだけどな……」

道すがら、三村に説明する。

住宅展示場の地図と案内状の代わりに、水族館の入場券が入つていたこと。

麗華さんも一緒にいたから、間違いでした、と引き返すわけにいかなかつたこと。

中は意外に楽しめたが、途中、アローウエポンと電速パルスとダガーウエポンに会つて、しかもアローウエポンが自分のお姉さんになると言い出して大変だつたこと。

元はと言えば、三村がチケットを入れ間違えたのが原因なので、チケットを返すつもりもチケット代を払うつもりもないと。

こんなに分かりやすく説明したのに、三村はなんだか不思議そうな顔をしていた。

「俺には、途中から話がまったく見えなくなつたんだが。エリカは分かつたか?」

と、もう一人一緒に登校していた金髪の美少女に振る。

この少女の名は、本郷エリカ。

『豪華絢爛』ロイヤルエッジ という不可視の刃操る、見た目ゴージャスなのに、

中身けなげな、ハーフっぽい（実際は良く知らない）女の子だ。

「私は最初から分かりませんでしたガ？ そもそも、なぜ、住宅展示場の地図と案内状を、水族館のチケットと入れ間違えるんですカ？ 悠斗さんも当日まで確認しないなんて変ではないでしょうカ？」確かに、前半部分は俺も気になるところだ。……そして、後半部分は俺がバカだからというだけの理由だ。

「いや、俺にも実はよくわからないんだけどな……」

俺とエリカに見つめられ、若干気まずそうに三村が口を開く。

「バイトしてたら、いきなり、あの『アイズオブクリムゾン』に声を掛けられてな……」

え？

「で、いきなり『これはとても重要なミッションです。あなたを見込んでの依頼ですよ』とか言つもんだから……」

「ちょっと待て」

俺は遮つた。

「緋色さんが、どうしてそんなことを言い出したのかは分からないけど、おまえ、そんな怪しげな切り口で始まつた依頼に乗つたのか？」

「いや、俺も怪しいとは思つたんだよ。いくら『アイズオブクリムゾン』だからってな。でも……」

「デモ？」

エリカが興味を示している。

「美人過ぎて、いつのまにかOKしてた」

「おい！」

理由になつてない。

「おまえ、もし、緋色さんが何かヤバイたくらみを持つてたら、どうするつもりだつたんだ！」

「ち、ちらとはその可能性も考えたんだけどな……。ほら、あの人、

一応、緋色先生の姉さんなわけだし、妹の生徒に悪いことをしたりはしないかなー、と

「『しないかなー』じゃないだろ……。いくら、じども先生の姉さんだからって……？ 姉さん？」

昨日から、良く聞く単語に、一瞬、止まる。

「あレ？ 知らなかつたんですカ？ アイズオブクリムゾンは、緋色先生のお姉さんですヨ？」

「まじで！？」

「超有名だぞ。だいたい、緋色なんて名字少ないんだから、予想はつくだろ？」

つかなかつたし、知らなかつた。

「じども先生……。ただものではないと思つてたけど。まさか、あんな超絶美人の姉がいたとは……」

「姉は関係ないだろ……」

「というか、あんまり、じども先生言わない方がいいですヨ」

エリカにまで、注意される。

いい加減ほんとに、じども先生と呼ぶ癖は直した方がいいかもしない。

と、その時。

ガンと、石が碎けるような音がした。

見ると、一メートルくらい先の地面が拳大にえぐれていた。

「ん？」

首を傾げる。

「なんだ、あれ？」

落石か。

などと、考えていると。

「伏せる馬鹿！」

三村が、俺たち二人を庇つように押し倒してきた。
この時、エリカの方は抱きかかえるようにして、俺の方は蹴飛ばす
ようにして、庇つてくれたのは、この際、大目に見よう。……若干、
羨ましいが。

「な、なんだ、なんだ」

三村に引かれるまま、隠れた電柱の後ろから、地面が拳大に次々え
ぐれしていく光景を見ている俺。

「狙撃されてる」

「そ、狙撃？」

なんだ、そのデンジヤラスな単語は！？

「方角からして、新月学園の方ですね。ロイヤルヒツジ豪華絢爛で防ぐには、弾が
小さくてやつかいデス」

当然のように順応する金髪美少女。

こういう時、やっぱり、俺は新米だなあと思つ。

それは、ともかく。

「やつてくれるじゃねえか

ん？ あれ？ これ、俺の声？

『

電柱の陰から飛び出す。

さきほどまでの弾道から、敵狙撃手は、おそらく新月学園の屋上。
距離は、100メートルほど。

天閃なら、まったく問題にならない距離だが、人死にはまずい。
なるべく威力を絞つて。

「天門^{レイ}」

手のひらから放たれた、光り輝く光線が、新月学園屋上の昇降口部分を貫き。爆発する。

これで、敵は姿を現すはず。そこを撃てば終わりだ。

「…………？」

と思つて見ていたが…………。

一向に、敵は姿を現さない。

幻影獣なら、向かつてくるはずだが…………。

「ひょっとして、お仲間か？」
だとするとまずいな。

遠距離攻撃系つてんで、過剰反応しちまつた。

とつとつ、引っ込もう。

『

「ん？ あれ？」

気がつくと、俺は人差指で新月学園の屋上を指差した、なんだか格好いいポーズで立ちぬくしていた。

「…………」

確か、電柱の後ろに隠れていたはずなんだが。なんというか、記憶が数秒ほど飛んだ感じだ。

……というか、敵は？

「す、澄空？」

「悠斗さん？」

出遅れた感を漂わせながら、三村とエリカが電柱から姿を現す。この感じだと、敵は逃げたのか？

「な、なあ、澄空。今なんだけど……？」

「今の？」

やつぱり、俺、何かしたのか？

「お、覚えてないんです力？」

「な、なにかまずいことしたのか？」

たとえば、こども先生に、『こども先生』と言いつてしまつたような感じで！

「まづくはないデスけど……。いきなり、飛び出していつたかと思うと、遠距離系のBMP能力で敵を狙撃しテ……。しかも、あの能力ハ……」

「おまけに、なんつうか、若干渋い魅力というか、チヨイ悪でぶつきらぼうで、でも強いみたいな一枚目風といつか！」

「いや、ほんとに、覚えてないんだか……」

そして、俺は、おまえが何を言つているのか分からん。

「いい加減にしろよ、おまえ！」

いきなり、三村がキレた。

「剣みたいな完璧美少女と同居しておきながら、こないだの第五次首都防衛戦で幅広い層の人気を獲得し（もちろん若い女性層を含んでるのが問題だ！）、あげくの果てに、エリカともちよつといい感じになつてる上に……！」

「なつてないデスけど……」

「今度は、チート氣味でどう見ても一枚目風味の裏人格使いか！」

表人格の三枚目とのギャップが魅力か！　おまえは、漫画の主人公か！」

「ええい！　少しばかり分かる単語で話せ！　だいたい、漫画みたいな設定つていうなら……！」

「悠斗君。と、三村にエリカ？　何を騒いでるの？」

「……彼女が居るじゃないか」

誰もが認める完璧美少女・剣麗華の登場で、ひとまず場は収まった。

一方その頃。

「いや、びっくりしたね。複写系能力ってのは、聞いてたけど。天レ閃イまで使えるなんて。どこで、覚えたんだろうね」

爆発の痕を留める新月学園校舎屋上で、一人の少年が話しかける。線の細い、どこか儂げな雰囲気の少年だった。

「……」

対照的に、話しかけられた方の少年は、存在感に満ちていた。
体格にも恵まれ、霸氣もある。ついでに言うと、なかなかの男前だった。

「でも危なかったね。僕が、飛び出すのを止めなかつたら、今頃死

んでたかもしれないよ

「…………」

霸氣がある方の少年は、なにやら眼を閉じて考え方をしていた。

「 聞いてる？ 達哉」

「 ああ。 聞いている」

と、眼を開ける長身の少年。

「 僕が間違っていた。 数か月前にBMP能力が覚醒したばかりだと
はいえ、実力を確かめてやろうなんて上から目線で対したのが、失
敗だった」

「 …… そりかな？ 単純に力量差のような気もするけど
「 やつてみなければ、分からん」

力強く言い切る長身の少年。

「 具体的には、どうするの？」

「 決闘を申し込む」

「 …… 君ら、一応同じ高校の高校生だよ？」

「 だが、僕も彼もBMPハンターだ」

そして、長身の少年は、闘志あふれる笑みをこぼす。

「 ストリートバトルなら、問題ないだろ？」

緋色先生の個人授業

「一重人格?」

「こども先生が、すっとんきょうな声をあげる。そして、他の先生が、『またアイツか』的な距離の取り方をする。もう慣れたけど。

だから、あなたがたも、いい加減、俺に慣れろよ。

「俺は覚えてないんですけど」

あまりに、三村とエリカがうるさい（特に三村）ので、麗華さんと一緒にこども先生に診てもらいうけに来たという訳だ。ちなみに麗華さんは、BMP過敏症の検査。今のところ、特に心配するほどではないらしい。

「悠斗君は、私を廃業させる気なのかしら?」

「え?」

なんでだ。まさか、こども先生を廃業して、大人先生になるとか? と、あほなことを思い浮かべたら叩かれた。

「失礼なことを考えたわね」

と言つ緋色先生。

さすがは、アイズオブエメラルドだ。

「いくらなんでも、人格障害を見過ごしていたなら、感知系能力者失格ってことよ」

と、麗華さんを診るために外していた眼帯を弄びながら言つ。しかし、いつ見てもじつに眼帯だ。もつとファンシーなのにすればいいのに。

「じゃ、いい？ 動かないでね」と、俺の顔を固定して深緑の右目で覗き込んでくる「じも先生」。いつもより、さらに近い。

いつもより、激しく頭をショイクされました。

「やつぱり、分かんない！」
……わいですか。

「前から聞く」うと思つていいたんだけど」
それまで黙つて見ていた麗華さんが口を挟む。
「緋色先生が言つ『分からぬ』って、何が原因なの?」「
原因も何も、全然、さっぱり、何も分からぬの」
はつきりと言い切るじども先生。

「でも、正直なところ、ひとつだけ心当たりがあるの」
「え？」

初耳だ。

といふが、心当たりがあるならどうして今まで言わなかつたんだ？

「でも、ソレじゃけつとね。場所を変えましょ！」

連れてこられたのは、生徒指導室。

あつたんだな、うちの高校にも。
ちなみに、いくらうちの高校が特殊でも拷問器具とかはないから安心していい。

…………たぶん。

「場所を変えるつて」とは、何か秘密の話でもあるんですか？」
心配になつたので、聞く。

B M P能力にかかわつてから、心配性になつた気はするな。

「やうね

肯定するじども先生。

「私は、居ていいの？」

麗華さんが口を挟む。

そういうえば、まったく普通の成り行きで、麗華さんを連れてきているけど、大丈夫なのか。

「悠斗君次第ね。私は、麗華さんにも聞いてもらつた方がいいと思つているけど」と、じども先生が俺を向く。
麗華さんも向く。

話の内容が分からぬけど、別に麗華さんに隠すことはないだろ？

麗華さんなら、隠しておいた工口本を見つけても、『悠斗君の嗜好の傾向を教えてもらえれば、次は私が買つてくる』とか言いそうだ。

まあ、それはともかく。

「問題ないです」

「そう。分かった」

「ども先生が、俺たち一人に椅子に座るよう促す。

「さつき言つていた心当たりなんだけど」

「はい」

「私のアイズオブエメラルドは、どんな現象でも解析できるのが特徴なの」

「はあ」

「つまり、いくら澄空君が特殊でも、解析できないといふことはありえないの」

「はい」

「なのに解析できないとなると、答えは一つ」

「はい」

「私を上回る力の持ち主による精神プロテクトがかかっている可能性がある」

「……はい？」

精神プロテクト？

なんですか、それ？

「分析に特化した緋色先生クラスのBMP能力を妨害する能力？

そんなものがあるの？」

すかさず質問する麗華さん。対応早いな。

「私もないとは思つんだけど……。少なくとも、今まで見たことないわね」

「マジですか？」

「あ、あの先生……。その精神プロテクトってやつ、危険はないんですか？」

「あると思う。これが本当に精神プロテクトだとすると、暗示や催眠というより、ほとんど呪いね。一重人格というのも、その影響じゃないかしら」

「マジですか！」

「悠斗君がBMP能力に目覚めたことで、精神構成に変化が生じ、ほろこびが出始めている……？ あいつの話だと思つ」

そして、どんな時でも冷静な麗華さん。

「悠斗君、ちょっと聞きにくい話なんだけど……」

「な、なんでしよう？」

「これほどの精神干渉を受けていて、そのことだけを忘れてしているとは考えられないの。悠斗君。ひょっとして、ある時点からの記憶がないんじゃないかしら？」

「まさか。そりや、小さい頃のことはあんまり覚えてないんですけど、記憶喪失とか、そんなドラマチックなことはないですよ」
まあ、一般的な家庭ではなかつたけど。この辺の時代、珍しいこというほどでもない。

「なら、いいんだけどね」

緋色先生が、ほつと息をつく。いつも仕草は、年上っぽくも見えるな。

「私も色々試してみるけど、正直、不透明な部分が多いわ。麗華さ

ん。BMP過敏症のこともあるのに申し訳ないけど、悠斗君の「」
見てあげてくれるかしら?」「了解した

即答する麗華さん。
正直に言つて、頼もしかった。

俺のBMP能力値は、人類最高らしいけど。

この人を守つてあげられる日は、来そうにないな。

一日の学園生活を終え。
俺たちは、マンションに帰つてきた。
いつまでも同居状態なのはまずいとは思つているのだが、新居が見
つからないのだから仕方がない。

今日の夕食はシチュー。

家事は分担しているが、料理だけは必ず俺の当番だった。

「前のより、おいしい

麗華さんが嬉しいことを言つてくれる(無表情だけど)。

「ども」

正直、『よーい丼』亭でバイトしていた時より、料理の上達が早い
気がする。

こんな完璧美少女に食べもらつているのだから、あたりまえかも

しれないが。

「悠斗君」
と、麗華さんが、口に運ぼうとしたスプーンを一皿置いて話しかけてくる。

「ん?」

「聞きたいことがある
なんだらつか?」

「私の家族を紹介したのに、悠斗君の家族について聞いたことがなかつた」

……確かに話したことはない。

ところよつ。

話すことがなかつた。

「……あー。俺、家族いないから」「
なんでもない」とのようになり、答える。
事実、なんでもないことだった。

「家族、いないの?」

「あ、ああ……」

なんでもないことだと思っていた。

「私には分からぬけど、家族がないのって寂しいことなの?」

な、なかなか凄い質問だけど、麗華さんらしいと言えばらしく。俺は全然気にしてないんだし、こじらせ、軽く答えればいいか。

「そりゃあ……寂しいよ」

? あれ?

声、暗くないか?

「特に食事時が……ね。生活に困ったとこでほなかつたんだけど……」

暗いって、声。

今まで、全然、気にしたことなんかなかつたつもりなのに……。麗華さんと一人の食事に慣れてしまつたからか? 腹にずんとくるような、嫌な重さがある。

「ゆ、悠斗……君?」

麗華さんが驚いたような顔をする。

やば。

ひょっとして、ひいた?

「あ、あー。ま、まあ。一般的な感覚だよ。うん! やっぱ、人間、一人では生きていけないっていうか! ひょっと寂しきくらいが、正常どいうか!」

「悠斗君」

「いや、ちょっと大きさに言つたけど、フィクションというか、ドラマチック氣味というか、ほんとはそんなに気にしてないから!」

「悠斗君」

「とか、俺は一人でも平気だぜ、的な強がりは男がやつても格好良くないというか、あくまで、一般的なオーソドックスな意見と

いうか」

「悠斗君」

「なんといつか……」

自分でどんどん慌ててテンパつていぐ俺に、麗華さんは冷静に呼びかけ続けている。

な、なんか格好悪いな、俺。

と。

「え？」

麗華さんが、深々と頭を下げた。

「『めんなさい』」

「え？」

え？ え？ え？

「私は、今、とても無神経なことを言つたんだと思つ

「え？」

「だから、『めんなさい』」

微妙な朝

あまりの出来事に。
俺の頭はフリーズした。

頭を下げるままの麗華さん。
なんとかギャグで、場の空気を変えようと頭をフル回転させるが、
何も思い浮かばない俺。

沈黙を破ったのは、麗華さんだった。

「私は、自分が、悪い意味で普通でない」と知つている
普段は、とらえどころのない瞳が。
「でも、私が今、悠斗君を不快にさせたことは分かる」
とても真摯な色を宿して俺を見つめている。
「同じ」とは、もつ言わない」

整いすぎた顔立ちよりも。

「だから許してほしい」

今は、その瞳の色に見惚れている。

麗華さんは、確かに世間知らずなどもあるけど。
嘘は通じない。

そんな気がした。

だから。

「気にしてないよ」

「え?」

「自分でも驚くほど動搖したけど。麗華さんを不快に思つたりはし

てない」

これは、本当だ。

「だから、麗華さんも気にしなくていいよ」

「悠斗君」

麗華さんが、ふっと力を抜く。

その緩んだ仕草に、どきりとした。

また、沈黙。

だが、今度の沈黙は不快ではなかつた。

「悠斗君」

と、また、麗華さんが声を出す。

「ん?」「

「お願いがある」

麗華さんの頬みなら、なんでも聞く。
マジで。

「私は、悠斗君に一切悪意を持つていない」「え?」

「だから、もし、悠斗君を不快にさせたとしても、それは私の意図するところじゃない」

「は、はあ」

「だから、そういう時は、指摘してほしい」

「し、指摘ですか……」

「怒ってくれても構わない。でも、愛想を尽かす前に、悪いところを教えてほしい」

「あ、ああ」

「そしたら、前にも言つたように、たいていのことは改善する用意がある」

麗華さんは表情が読みにくいけど。

この時、どれだけ真剣なのかは、いくら俺が馬鹿でも分かる。だから。

「ああ、分かった」と答えた。

でも、難しい話だ。

俺が、麗華さんに愛想を尽かすなんてことが起つたとは思えないからな。

翌日。

突然だが、イメージに反して、麗華さんは別に無口ではない。話しかければ無視されることはほとんどないし、麗華さんの方から話しかけてくることも珍しくない。

だが、今日は違つた。

「麗華さん」

「なに」

「今日も暑くなりそうだね」

「最高気温は30度みたい。水分の補給には気を付けて」

といつ具合だ。

……別に普段と変わらないよつて見えるかもしねいが、微妙に違うのだ。

だいたい、麗華さんから話しかけてこない。

昨日の一件のせいかな、とも思うけど。

最後は、お互い納得したしな。

女の子は難しいな。
特に、麗華さんは。

1限目が終わつた後、麗華さんは、職員室に行つた。
また、こども先生に診ても「ひらひらしい。悪くなつてなければいいけど。

それは、そうと。
俺にも、気がかりなことが一つあつた。

「なあ、澄空」
「分かつてる」

珍しく心配そうな声の三村に返答する。

気がかりの元は、今日から新たにできたクラスメート。

峰 達哉。

といつても、転校生といつわけではなく、もとからこのクラスにいたらしい。

入学してから、俺が編入してくれまでの間に、幻影獣との闘いで大怪我を負つて入院していたらしい。

長身でがっしりした体格。

しかし、巨漢というイメージではなく、むしろ均整のとれた体つきをしている。
顔もいい。

三村のような今風のイケメンではないが、ストイックな男前といったところだろうか。

素直に格好いいと思う。

そういう男子高校生が。
どういう訳か、俺を睨んでいた。

睨むように、ではなく、睨んでいた。
まるで、軽い気持ちでちょっとかいを出したが、逆に手ひどい反撃を受けて死ぬ思いをしたかのような睨み方だ。

「悠斗、正直に答えてくれ」
「なんだよ」

三村が真剣な顔で問うてくる。
こういう時は、だいたいいずれたことを言うのが三村宗一という人間なので、あまり真剣に聞く気にはならないが。
「峰の姉妹が彼女に手を出したんじゃないだろうな？」
「……」

そういうことを言うから、弱ナンパ男とか言われるんだ。
「剣一人で十分だろうが。あいつ一人で、その辺の女の子の100人分くらいに匹敵するぞ」
「なにを馬鹿なことを……」
100人分には、匹敵する。

それは、ともかく。
「言いたいことがあるなら、はっきり言えばいいのにな……」
男相手に、氣を使う必要もないだろうに。

と、思つてゐる。

「なら、言わせてもらひつか

峰が近づいてきた。

え。今の聞こえたの？

「澄空 悠斗。単刀直入に言つ」

峰が俺の机の前に立つ。

どうでもいいが、同級生にフルネームで呼ばれる機会はそつそつないだらうな。

「俺とストリートバトルをしてくれ！」

「…………え？」

今、何て言つた？

「あの剣すら超えるBMP187の持ち主。しかも、覚醒すると同時にBランク幻影獣を倒した君と、是非とも闘つてみたい！」

「…………」

首相官邸で会つた、あの『つい人といい、ここいつといい……』流行つてゐるのか、このノリ？

「君は、最近ストリートバトルを、…………いや、BMPハンター訓練 자체をあまり行つていないと聞く。強者にとつて、一番の敵は、驕りだ。俺と闘おう。こういう言い方は好きではないが、これでもこの新月学園で五指に入る実力の持ち主だ。決して失望はさせない」
……その言い回しも、の人と同じだな。

というか、BMPハンター訓練をしてないんじやなくて、まだ素人すぎて、実践訓練に入れないだけなんだがな。
まして、ストリートバトルなんかは、論外なわけで。

その辺を、論理的かつ順序立てて説明しなければ。

「悪いけど遠慮するよ」

「！ なぜだ。ひょっとして、今朝のことを怒っているのか！？ ならば、謝る！ もちろん不意打ちのつもりなんかはなかった。少し実力が見たかっただけだ。」

「……今朝？」

なんかあつたつけ？

「それとも、俺の実力が不足か？ それなら、失礼だが、俺を見くびっている。BMPハンターの強さは、BMP値だけでは測れない。たとえ及ばずとも、君にとつて時間の無駄ではないはずだ」

「いや、逆・逆」

「逆？」

きょとんとする峰。

「まず間違いなく、お前の方が強いよ。それこそ、時間の無駄ってくらー」

「……ふざけないでくれ。BMP352の幻影獣を倒した君が、何を言つ？ 口実なら、もつとうまいのを選んだらどうだ？ それとも、最強の澄空悠斗は、実は、一高校生のストリートバトルすら受けられない臆病者という評判がたつてもいいのか？」

「全然、問題ない」

別に、最強じゃないし。

「な……」

驚く峰。

「どうか、その方が真実に近いし」

「何を言つてている。俺より弱い人間が、Bランク幻影獣を倒せるか！」

「俺一人で倒したわけじゃない。國家維持軍の人、新月学園のBM

「ハンター、それから、二村……はマイマイチだつたが、エリカ。それから……」

「麗華さん。の名前は、別に言わなくていいか。照れくさい。あの場にいた訳じゃないしな。」

「俺は、最後に剣を振りおろしただけだ」
しかも、その剣も元は麗華さんのものだ。

と俺が言つたといひだ。

「澄空……」

「澄空君……」

「澄空さん……」

「悠斗さん……」

クラスメートが何やら、固まっている。
あれ、俺、またなんかやつた?

新たな課題

「もうか……。あくまで、弱いと言って張る訳だな」
固まっている（なんか感動しているよりは見えるけど、さすがに
気のせいだら）クラスメート達を尻目に、峰が続けてつっかかる。
てくる。

「悪いけど」

「ならば、君が俺より強いということを証明すれば、君は俺と闘う
といつ訳だな」

「……え？」

ええと。

そうなるのか？

「いいだろ。ならば俺は、俺が君より強いことを証明するためこ
君が俺より強いことを証明しちゃ！」

「……」

あれ？

氣のせいか。今のセリフ、なんか変じゃないか？

「では、今日はこの辺で。また改めて
と、教室を出ていく峰。

とこいつが、同じクラスなんだから。『また』も何もないと思つんだ
が。

……といふか、もつ休み時間終わるだ？

「トイレか？」

「そんな訳あるか

すかさず、三村のツツ「ミ」が入る。

そうだ。こいつに……。

聞いても駄目だな。

と、教室を見まわした俺と眼があつたのは、委員長。

みつあみと眼鏡がチャーミングな、委員長属性を持つ委員長だ。しかし、髪を下ろして眼鏡を取ると、新月学園新聞部記者『新條文』となる。

こうなると、パーソナリティがマスクミになるので、話しかけるのは危険である。

でも、今は大丈夫だ。

「何？ 澄空君」

「実は委員長に聞きたいことがあるんだ」

「何かしら？」

眼鏡を、クイと理知的な仕草で上げる委員長。

「さつきの峰との話の展開について、説明してくれ。俺には、理解できなかつた」

「当事者に分からぬのに、なんで私に分かるのよ？」

「その前に、おまえ。俺を見て『コイツに聞いても駄目だ』的な顔しなかつたか」

いらんところで鋭い三村が、ツツ「んで来る。

「ま、びっくりしたのは確かだけどな。峰とは中学の頃から一緒だつたけど、あんなに取り乱してたのを見たのは初めてだ」

三村が妙なことを言う。

「取り乱してた？」

「ああ。分かんなかつたか？ あいつ、基本はクールっぽい熱血バ

力だから、あんなややこしい状態になつたことはないと思ひけどな
三村は基本、弱ナンパ男だが、時々俺には分からぬ言ひ回しをす
ることがある。

麗華さんが俺のことを、悠斗君は難しい、といつのも、似たような
感覚なんだろ？

「私はなんとなく分かるわよ」
と、今度は委員長が口を挟む。
そういえば委員長。委員長モードの時でも、少し口調がフレンドリー
になつたな。
……いいことだ。

「みんな澄空君みたいに考へたことがないから、いまなり澄空ワー
ルド喰らうとびっくりするのよ」

「どんなワールドだ……？」

返す俺。

と、クラスメートがみんな、うんうんと頷いていた。
え？ みんなは分かるの？

「……ま、いいじゃないか。誰かが誰かより強こじとを証明する手
段なんて、実際にやりあう以外にないんだしさ」

三村が締めた。

一方、その頃。

「うーん……」

アイズオブエメラルドこと、緋色香は難しい声を出していった。

右目の眼帯は外している。

剣麗華を診てている最中だった。

「どうかした？」

「麗華さん。ひょっとして、最近、BMP能力を使った？」

「いえ、使っていない。戦闘もなかつたし」

「……そうね。だいたい、あなたくらいのBMP能力者なら、ちょっとくらい使っても影響はないはずだしね」

と、眼帯をかける緋色香。

「BMP過敏症が進行しているわ」

「？ BMP能力を使っていないのに？」

「BMP能力自体がブラックボックスみたいなものだからね。BMP過敏症ともなると、どんな原因で進行するか、はつきりとは分かつていないので」

「私、死ぬの？」

まるで、事務処理した数字を読み上げるかのような口調の麗華。

事実、香のアイズオブエメラルドでも、感情の揺らぎは読み取れなかつた。

悲しくもあるが、仕方がないことでもある。

187ものBMPを持ちながら、人並みの感情を維持している澄空悠斗の方が異質なのだ。

高BMP能力の代償。

香にとつても、他人事ではなかつた。

「BMP能力を乱用しない限りは、さすがに死ぬことはないと思うけど。入院くらいは必要になるかも。復帰にも時間がかかるでしょうね」

「それは困る。そんなに長く、悠斗君を一人にしておけない」「え？」

香は一瞬止まった。

今のセリフは？

「どうして、悠斗君を一人で放つておけないの？」

「どうして？ 悠斗君の一重人格の件があるから、悠斗君を放つておくのは心配と、緋色先生も言っていた」

「ただけど……。そうじゃなくて」

そう。そういう話ではない。

剣麗華に、澄空悠斗の覚醒時衝動を制御して欲しいと依頼したのも、彼にかけられた強力な精神プロテクトを監視してほしいと言ったのも、いわゆるBMPハンターの任務としてだ。

そして、BMPハンターは自分の命より任務を優先しないのが不文律。

この世界にとつては、幻影獣に対抗できるBMP能力者こそが、最も価値ある財産だからだ。

少なくとも、剣麗華は、その原則を忠実に守っていた。

(いや……)

単に香がそう思い込んでいただけで、いつの間にか、そうではなくなつて来ていたのか？
だとすると。

「麗華さん。突然なんだけど、最近ストレスを感じてない？」

「ストレス？」

予想外の単語に驚く麗華。

『BMP過敏症は、不安定な精神状態の時に進行することもある』

それは知っていたが、剣麗華に限つてはと、選択肢から除外したのだ。

感情があるからこそそのストレス。麗華から帰ってきたのは、意外な言葉だった。

「ストレスがどうか分からぬけど、困つてこむことはある」「こ、困つてる! ? 麗華さんか?」
衝撃の告白だった。

「え、ええと。それは、聞いてもいいのかしら?」

「別に問題ない」剣麗華は、言い切った。

「そんなことがあつたの……」

昨夜の夕食時の一件を聞いた香は、呟いた。

事態としては概ね予想通りだった。

一般常識に欠けるところがある麗華が、相手を怒らせん発言をすることもあるだろ?」。

澄空悠斗が、それを許すべしの度量を持つて居るのは予想していた。

しかし、そのことを剣麗華が理解し、しかも真剣に謝つたとなると。

(悠斗君も、びっくりしたでしょうね……)

それは、もう、眼に浮かぶようだ。

「で、それがどうして、困ったこと、なの？ もう話は決着したんでしょう」

「昨夜の件は確かに。でも」

「でも……」

「悠斗君を不快にさせずに会話をする方法が分からない」

「？」

「？」

「えーと、ちょっと待って。麗華さんが、昨日、ついかり両親のことを見いてしまい、悠斗君に嫌な思いをさせてしまったことは分かつたわ。でも、それがどうして、会話できないことになるの？」

「昨夜は意識せず悠斗君を不快にさせた。今後も同じことがないとは限らない」

「不安になるのも分かるけど、いくらなんでも、昨夜みたいなことは滅多に起こらないと思つわよ。たとえ起こったとしても、それを指摘してもらひて、少しずつ直していくつて約束をしたんでしょう？」

言いながら、香は心の中でガツツポーズをしていた。

その約束は、剣麗華が、一般人の感情を学ぼうとしている証ではないか！

「それは確かに。しかし、そこで私は考えた」

「何を？」

「では、悠斗君を快適にさせる話題とはなんなのか？」

「は？」

香の顎が落ちる。

「単純な事務的な会話では意味がない。といって、下手に会話を盛

り上げようとした無意味な話題を振ると、昨夜みたいな事件が起る可能性がある。とても難しい」

「や、そうですか……」

と言しながら、香は心中でお手上げポーズをしていた。

なんのことはない。

このモデル並みのプロポーションを持つ完璧美少女は、要するに『悠斗君との会話をもっと盛り上げたい』

と言っているのだ。

思春期以前の悩みだ。

「こども先生と（主に澄空悠斗に）言われながら、高校教師をしている自分とは良い意味で正反対な子だ。

それはともかく。

「たぶん、それよ。BMP過敏症が進行した原因は

「……なるほど。」これが、ストレス……」

感心したように囁き麗華。

その様子を見ながら、香は思った。

（誰かしら、高BMP能力者が精神を病むなんて言つたのは

それとも。

（剣さんも『特別』なのかしら）

なにはともあれ。

「次々と予測不可能なことばかり起こるから、感知系能力者の自信無くなってきたな。そろそろ引退しようか」

「冗談とはいって、耳にすれば政府が青くなるようなセリフを言つアイズオブエメラルドだった。

特訓をじょり

「じょうじて、峰とのストリートバトルを受けなかつたの？」

授業が終わつた後、

「下校する前に、何か面白い話をしたい」

という麗華さんのリクエストに応えて「面白い話（峰との話）」をする
と、とんでもないことを言われた。

「いや、あいつ見るからに強そうだし。下手すりゃ怪我じゃ済まないぞ。だいたい、わざわざそんな危険なことする意味がないだろ？」
「そんなことはない。B M P能力者同士のストリートバトルは、実践訓練としてはとても優れている。もし心配なら、私が立ち会えば危険も少ない」

ヤバイ。この展開は、なんだかどつてもヤバイ。

「だつたら、もひとつ弱いやつでいいだろ？ 僕なんか、三村にだつて負けるぞ」

「それは謙遜しすぎ。さすがに三村に負けることはない」

「何いつてるんだ。三村はデフォルトは弱ナンパ男だが、いざという時は兄貴属性持ちの、なかなか頼れる男だぞ！」

「曲がれない超加速も、^{システムアクセル} 加速しないと使えない猪突猛進も、^{オーバードライブ} B M P能力として凄く不完全。横にかわして刺せば、終わる」

「……怖いよ。麗華さん」

と、俺たちがだんだん脱線し始めていると。

「お前ら、峰とのストリートバトルをしたいのか、ラブコメをした
いのか、俺を馬鹿にしたいのか、どれだ？」
三村が怒り出した。

「もちろんストリートバトルの話。三村の話は事実だし。悠斗君と私はラブコメディなんかしていない」

言い切る麗華さん。

「ならいいけどよ……」

そして、はつきり言わされて落ち込む三村。

「悠斗さんと峰さんのストリートバトルですカ。それは楽しそうですネ」

しかも、いきなり、金髪が割り込んできた。

「え、エリカ？ なんで、うちの教室に」

エリカは、俺とクラスが違う。

学力に応じたクラス分けがなされるこの学校で、うちのクラスはナンバー1なのだ。

そして、エリカのクラスはナンバー2。

でも、俺よりエリカの方が遙かに頭がいい。

三段論法が成立しない理由は、俺が危険人物だからだそうだ。

「最近、三村さんと一緒に帰つて自主訓練しているんデス」
な、なに？

「三村、おまえ……」

「か、勘違いするなよ。ただの訓練だ」

「弱ナンパ男が言うと、世界一説得力無いな、そのセリフ。人にあ
れだけ言つといて、自分はそれか？」

「ち、違う。本当にそんなんじゃないんだ。ちょうど同じくらいの
実力のBMPハンターが他に居なかつただけで……」

「じゃあ、もし居たら、それがひげもじやのおっさんで、筋骨隆々
のマッチョで、でも腹はボテボテにたるんでいて、しかも男色家で、

おまけに結婚詐欺師でも構わないというんだな…」

「なんで、いきなりそんな極端なとこ行くんだよ！ しかも今の人

物像、あちこちで矛盾があるぞ…」

「……話、そらさないで欲しいデス」

エリカの不満げな一言で、俺たちのバトルは遮られた。

「なんで、悠斗さん、そんなにストリートバトルが嫌なんですか？」

「だから、実力差がありすぎるからだつて。意味がない」

「じゃ、私シます？」

……。

「ちよ、ちよっと待て！ 早まるなエリカ！ こいつ、今は剣の幻想剣を使えるんだぞ！ なのに制御はめちゃくちゃだし。危ないってマジで」

「そう言えばセツテスね。逆に峰さんの方がキケン。といふこともありえマスね」

なんだか、納得する金髪少女。

「確かに。怪我をしたんじや本末転倒」

おお。麗華さんも納得してくれた。

「じゃあ、澄空君も自主訓練をすればいいんじゃない？」
しかし、また、別の声が割り込んでくる！

つて、この声は。

「「ジビも先生？」

「「ジビも先生、言わないと」

また、叩かれた。

「でも、緋色先生。悠斗君も、BMP課程で訓練はしている

麗華さんが言ひ。

ところで、ここ少し新田学園の授業課程の説明をしておひへ。

- 1・まず、学力順にクラスを分ける。
 - 2・普段は普通に授業を受ける。
 - 3・1日か2日に一回、BMP能力発動可能（BMP110以上）の者が集まつて、BMP課程を受ける。
- こんな感じだ。

「一年のこの時期じゃ、ほんとに基礎しかやらないでしょ。実際麗華さんだって、澄空君が来るまで授業でてなかつたじゃない」

「確かに」

あつさり認める麗華さん。

「うこや、麗華さんが授業を受けるよつになつたのは、俺が登校中に覚醒時衝動を起した時に対応するためだつたよな。でも、今でも普通に受けてるよな。なんでだ？」

とこう俺の証みを無視して、じど……緋色先生は、告げた。

「だから、麗華さんが教えてあげればいいのよ」

一瞬、何を言つていいのか分からなかつた。

「麗華さんが悠斗さんに闘い方を教えるといつことですか？」
だから、ヒリカが通訳してくれた。
つて、ちょっと待て。

「それじゃ、無理ですよ

思わず呟く。

名人がサルに将棋を教えるようなものだ。

「名人には無理でも、麗華さんになら教えられると思わない？」
あつさりと言ひついじも先生。

どうだろ？ 仮にも先生なら『サル』のまつを否定するべきだと
思うのだが。

「私は、人に何かを教えたことはない」
はつきりと言ひ麗華さん。

「だから、いい機会なんぢやない。三村君ならともかく、澄空君に
教えるのなら退屈しないでしょ」

「先生。そこで、俺を引き合いに出す理由が分かりません」

三村がツツ「ミを入れる。

俺にも分からぬが、あえて言ひなら、いじも先生がうだからだ。

「人に教えるといつのは、麗華さんにとってもいい経験になると思
いまス」

エリカが自信満々に言ひつ。

「そりなの？」

「そりよ。重要」

それを受けて、いじも先生。

「『全力を出さなくてもいい』と『全力を出しちゃいけない』の違
いを学ぶことはね」

そして、週末。

30分ずらし目覚まし掛け（6時、6時30分、7時、7時30分と複数回目覚ましをセットしておくことだ。でも、たいてい最初の1回で眼がさめて、止めるのが面倒くさい）で完璧に起きた俺は、心身ともに今日の特訓の準備をしていた。

麗華さんは信頼しているが、なんせ実力が竜とミジンコほどに違う。気合い入れていかないと、大怪我して麗華さんを悲しませる事にもなりかねない。

「よし、大丈夫」

どこも調子悪いところはない。

BMP能力に関しては、調子の良しあしを判断できるところまで扱いきれていないが、まあ大丈夫だろう。空氣的に。

という訳で、麗華さんの待つているダイニングに向かつた。

「おはようー 麗華さん」

と言った所で、俺は自分の目を疑つた。

「おはよう、悠斗君。ちょうど起きる頃だと思つてトーストを焼いておいた。1分前に焼けたからいいタイミングだと思つ」俺の起床時間予想が進化している（一分前一分前）。

いや、そんなことより！

「麗華さん。その格好は？」

聞く。

なぜなら、なぜか麗華さんはワンピースを着ていた。

清楚さを前面に押し出した、白いワンピースだ。
完璧美少女が着ると、完璧に令嬢に見える。

「？　変かな？　可愛くない？」

「いや可愛い」

もちろん可愛い。凄く可愛い。間違いない可愛い。

「でも、変だ！」

特訓するんだよな、今田！

「でも、緋色先生が『麗華さんは美人過ぎて隙がないから、ワンピースとかの可愛い系を着た方が悠斗君もリラックスできるんじゃないから』と言っていた」

それ、たぶん今日着るという意味で言つたんではないと思います。

「でも、他の服は洗つてしまつているし……」

困つたような麗華さん。

そうだ。

この人は、完璧美少女のくせに、服をあまり持つていらないんだった。

「今日のところは、この服で手を打つともうひと助かる」と、真剣な表情の麗華さん。

「ま、まあ、俺もどうしてもダメとこつ訳じゃないけど……」

どもる。

まあ、実際、竜とミートコンドリアくらに実力差があるし、大丈夫か？

「うん。次は気をつける」

と、やっぱり真剣な表情の麗華さん。

それは、ともかく。

特訓やめて、デートに切り替えたら、駄目かな？

特訓開始？

一人で並んで歩く。

この辺の人たちは、もう俺の正体を知っているので、完璧美少女の隣を普通少年の俺が歩いていても疑問に思つたりはしない。とはいへ、面白くないのは相変わらずのようだ。

「はあ……」

思わずため息が漏れる。

こども先生のアドバイスは、片手落ちだ。

麗華さんの『クール美人度（そんな尺度があるかどうかは知らないが）』が落ちた分、通行人の人たちの『なんだか面白くないゲージ（このゲージはあるだろうたぶん）』が上がっているので、俺はやつぱり落ち着かない。

と、前方から、俺たちと同じくらい目立つ二人組が歩いてきた。
なんせ、片方が美少女で金髪だ。

「あー、澄空？ ひとつ聞きたいんだが、今日は特訓でいいんだよな？」

だいたいの事情は察していると思われる三村が聞いてくる。

「ああ、特訓だ」

「麗華さん、可愛いデス！」

そして、事情をあまり気にしていないエリカが褒める。

「うん。悠斗君もそう言つていた」

麗華さんの何気ない一言。

そう言えれば、俺。女の子に『可愛い』って言つたんだよな。
まさか、俺がそんな高等なセリフを言える日が来るとは、人生は分
からん。

「ところで、三村たちは何を？」

聞いてみる。

二人とも動きやすい恰好をしていろといろを見ると、この二人も特
訓だとは思うのだが。

しかし、この二人、俺と麗華さんと違つて、並んでいても違和感無
いな。

三村は、中身はともかく外見はイケメンだからな。

……」いつ、いつも俺のことを羨ましいだのなんだの言つけど、い
つたい現状のビビに不満があるというんだ。

「いや、緋色先生が『あの一人だけじゃやっぱり心配』って言つか
らな。付き添いといふか見学」

「悠斗さんと麗華さんの特訓がどんなものか興味があつたんデス！」

ま、いいけど。

俺が首都に来る一か月ほど前、首都のある場所が幻影獣に襲われた。
襲撃自体は小規模だつたらしいが、その幻影獣はどうもタチが悪か
つたらしく、退治された時に呪いを振りまいて行つた。
俺は頭が悪いので呪いといつてもうまく説明はできないが、麗華さ
んに聞いても『理屈を説明することはできるけど、結局は呪いとい

うのが一番本質に近い』と、（しつかり理由を説明してくれたあとで）言つていたので、まあ呪いでいいんだろ？

その呪い汚染された場所が今、眼の前に広がっていた。

「『ヒトなどにマジックショーンを建てよつなんて計画があつたのか……』

思わず呟く。

「計画があつたのは、呪い汚染される前。あれさえなければ、ここは、悠斗君が住むにふさわしいマジックショーンになつていたかも知れない

麗華さんが応えてくれる。

『複合型ステーションまで徒歩一分。アクセス抜群、環境最高』か。やつぱり、古い情報誌使ってたんじゃダメだな。

途中までは建設が進んでいたらしい。

整地も終わっているし、骨組みも半分くらいはできている。でも、そこで止まっている。

ついでに、マンション（になる予定の骨組み）の周囲100メートルほどが、根こそぎ何もなくなつていた。

しかも、土の色が明らかにおかしい。なんというか、紫っぽい。

そして、全身に絡みついてくる違和感。

触覚で感じられる臭氣というか、不快感のバーゲンセールというか。

「ほんと、こんなところで特訓するのか？」

だいたい、俺の壊滅的な言語力が本当に壊滅していなければ、『K E E P O U T』と黄色いテープが張り巡らされているのを、乗り越

えて入ってきたような気がするんだけど。

「ふむ。時間ぴったりね。澄空君、麗華さん」

しばらく茫然としていた俺に、こども先生の声が聞こえてきた。
先生は、今日の特訓の見守り役といったところだ。

「ここ、ほんとに一般人が来て、大丈夫なんですか?」

「大丈夫な訳ないでしょ」

『なにを言つてるのこの子は』的な視線で返される。

中身はともかく外見はこどもなので、屈辱度も一倍だ。

……そういえば、こども先生って、年はいくつなんだろ? つか?

「頭痛、悪寒、動悸、息切れ、吐き気、嘔吐。その他もうもう不快感のオンパレードで、最悪、命に係るわ。なんせ『呪い』だから。KEEP OUTが見えなかつた?」

「だったら、なんでこんな場所で!?」

俺の当然の疑問に。

後ろから、盛大なため息が聞こえてきた。

三村だ。

「あんな、澄空。『一般人には』って言つただろ。お前は一般人か?」

違うとでも言つのか?

「違う! あんな、澄空。俺たちはBMPハンターなんだ。BMPハンターは、対幻影獣の切り札にして唯一の戦力。俺たちはまだ高校生だけど、職業としては、弁護士や医者よりも格上なんだぜ。お

前だつて知つてゐるだらうが」「

「そ、それは……」

そうだつたかもしれない。

が、あんまり実感がないんだよ。自分のこととなると。

「私は残念ながらBMPハンターではないデスが、悠斗さんはもう世界的にも上位ランカーなんデスヨ。単独でBランク幻影獣を倒したハンターは、ほんどういませんカラ」

エリカが自分のことのように誇らしげに付け足す。

「いや、あれは、エリカやみんなの力があつたからで……」

「デシたね。ありがとうございマス」

と、エリカがほほ笑む。

「あ、いや、礼を言つのは」いつちの方で……」

「悠斗君」

「え?」

エリカの奇襲に慌てふためく俺に、完璧美少女の声が被せられる。「次は、私も一緒に闘えると思う。あてにしてくれて、構わない」

「は、はいな……」

あてにするもなにも、麗華さんがいれば間違いなく主力兼主役になると思うんだが。

第五次首都防衛戦で、ボスの方に来れなかつたことを悔やんでいるのか?

陽動軍隊の方で、50体以上消滅させたつて聞いたけどな。

それに、あの時は。
個人的には。

麗華さんのおかげで勝てたつて気がするんだけどな。

「エリカ。ロイヤルエッジ豪華絢爛をお願い」

「ハイです。みなさん、下がつていってくだサイね」

麗華さんに言われて、エリカがロイヤルエッジ豪華絢爛を展開する。

ロイヤルエッジ豪華絢爛とは、エリカのBMP能力で周囲の空間に数十の不可視の刃を発生させる能力だ。

完成すれば恐ろしい能力だと思うが、エリカ自身のBMPが119のため（対幻影獣戦闘に使用できる用意はBMP120）。なんというか、その。

斬れない。

かなり強くこすらないとかすり傷ひとつ付けられない。しかも、不可視と言いながら隠蔽率が中途半端で、うつすら見えている。

まあ、それはともかく。

「はっ！」

麗華さんが剣を抜いた。

まるで神話に出てくるかのような壮麗な剣。

麗華さんの『幻想剣』イレゴージョンードで実体化した断層剣カラドボルグだ。

そのまま振りぬく。

次元に断層を作る剣が、空間を切り裂く。

それに伴い、エリカの豪華絢爛^{ロイヤルエッジ}がガラスが割れるような音を出して
砕け散つた。

そのまま連續でカラドボルグを振る麗華さん。

その度に乾いた音がし、空間が豪華絢爛^{ロイヤルエッジ}の破片で満たされていく。

しばらくそんな光景が続き。

唐突に、麗華さんが剣を納めた。

豪華絢爛^{ロイヤルエッジ}はもう見えない。すべて、破壊したのだ。

「ジャスト15秒。さすがね、麗華さん」

ストップウォッチ片手のこども先生。

「す、凄え……」

麗華さん凄え。

格好いい。

「悠斗君には、これからとりあえず、これをやつてもいい?」

「…………く?」

「とりあえず目標は30秒以内で。悠斗君には、ちょっと簡単すぎるかもしれないけど」

「え、ええ?」

「準備いいデスか? 悠斗さん。わつきより、むしょと難しい配置
にしまスから、ガンバつてくださいネ」

えええええ?

麗華さん、エリカが連續で無茶なことを言つてくる。

「あれ、わざとじゃないですね。先生」

「当たり前でしょ」

「二人とも頭いいの?」

「期待が大きすぎるのね。ヒーローはつらつとしてとかしさら」

「澄空、めっちゃ気まずそうな顔してますけど」

「そりや、可愛い女の子一人の前で『ごめん。俺、もつと無能なんだ』とは言い出しつらいでしょ」

「助けないんですか」

「逆境を乗り越えて」とか、ヒーローよ」

そして、三村といじりも先生が、勝手なことを言っている。

天才ではないけれど

10分経過した。

どうして10分経過したのが分かるかといつと。

「10分27秒ジャスト。さすがね、悠斗君」

「こども先生が嫌味を言うからだ。

だいたい、10分27秒にジャストもくもあるか。

「！」こんなに扱はずらかつたのか。カラドボルグ……」

思わず呟く。

能力を本格的に使用しての訓練は初めてなので多少苦戦するのは予想していたが、ここまでとは思わなかつた。

イレギュラー「ヨレ」
劣化複写自体は驚くほどよく馴染んでいるので、カラドボルグの実体化には困らないのだが、カラドボルグ自体が扱はずらい。幻想剣というだけあつて持つてているだけでは重さを感じないのだが、振ろうとすると石のようにも重く感じる。

おまけに軌道がぶれまくる。

さらに、剣の軌道と、それによつて生み出される空間の断層が、またずれる。

結果、遅い・当たらない・危なつかしいと三拍子そろつた恐ろしい能力になつてしまつっていた。

「悠斗君。手を抜いたりはしていない？」
ぐさつ！

「という擬音が聞こえた気がした。
麗華さん、そりやないつすよ。

「「」、「」めん。また、失言した」

と、完璧美少女の申し訳なさそつた姿に、また落ち込む俺。

「なるほど。複写できるからといって使いこなせるとは限らないのか」

「向き不向きもあるでしょうシ……。麗華さんは軽々と振りまわしてイルので忘れそうになりマスが、幻想剣つて最高難度の能力なんデシたね……」

「難度的には劣化複写イレギュラー・コピーの方がさらに上だと思つけど、同じ幻想剣イコゴージョン・ソードを使つている間は、麗華さんとは比べ物にならないとこりとね。案外、使いどこのの難しい能力かも……」

三村、エリカ、じども先生が好きなことを言つてゐる……。

「で、デスが、まだ本格的な修業を始めたばかりデスし！ 麗華さんだつて、最初から幻想剣イリュージョン・ソードを使いこなせたわけじゃないはずデスし！」

「ん？ 最初から、使えただけど」

「…………」

ハーフっぽいのに一番気配りができるエリカのフォローを、ものの見事に寸断する麗華さん。

「でも、困つた。せめて、3分は切らないと、次の段階に進めない」

3分か……。

もう一度、カラドボルグを実体化する。

「悠斗君？ どうしたの？」

実体化したカラドボルグを見て、麗華さんが不思議そうに聞いてくる。

「ん？ どうしたつて……。3分切ればいいんだろ？ とりあえず、

切るまでやるよ。エリカ、悪いけど、また豪華絢爛を頼むよ

「は、ハイテス！」

なぜか、とても嬉しそうに返事をするエリカ。

「せっかく来てもらつたのに、麗華さんには悪いんだけど。ちょっと待つてもらえるかな？」

「…………」

なぜか無言の麗華さん。心なしか、意表を突かれたような顔に見える。

「麗華さん？」

「あ、うん。分かった。見てる」

？

微妙な表情だな。

「9分52秒テス……」

凄く申し訳なさそうな口調で言つエリカ。別に、君が悪いわけじゃないんだが。

え？ ストップウォッチを持つてたのはこども先生じゃないかつて？
3回目くらいで飽きたのか、向こうで三村と漫才やってる。あの人も、つかめない人だ。

「あ、アノ……。少し豪華絢爛の配置を簡単にしましようか？」

「いや、それじゃ訓練の意味がないよ」

そして、少しぐらい簡単にしたといひでビックリにかなりそな問題ではなさそうス。

「ナラ、別の訓練にするトカ？ せっかく麗華さんと来てるんですけどカラ……」

「いや、たぶん別の訓練にしても同じだ。麗華さんは本物の天才だよ」

正直、ちょっと見てたかもしれない。

とはいって、麗華さんの貴重な休日を、これ以上無駄遣いさせるわけにはいかない。

さすがに退屈してたんだろ。

「先に帰つてもいいつか……」

残念だけど。

と言おうとしたんだが。

見てる。

麗華さん、めっちゃいつも見てる。

適切な表現が見つからないが、あえて言つなら。

子供が未知のおもちゃを見つめるような眼で。

ほんとに読めない人だな。

一方。

子供が未知のおもちゃを見ているような眼で澄空を睨み見る剣麗華。

「麗華さん、退屈していない?」

「していない」

三村との漫才にも飽きた緋色香は、麗華の隣に腰を下ろした。

「どう？ 澄空君は？」

「少しずつ良くなってる」

澄空悠斗から眼をそらさずに言ひ麗華。

「でも、私と同じくらい幻想剣を使いこなすにはまだ時間がかかる」

「といふか、一生無理のような気もするけどな」

いつの間にか、三村も二人の後ろに立っていた。

三人の見つめる先で、澄空悠斗がエリカの応援を受けながら、剣をふるつていた。

その姿は、お世辞にも華麗であるとは言ひにくい。

「少し悠斗君を勘違いしてた」

「幻滅した？」

「幻滅？」

緋色香の質問に、疑問符で返す麗華。どうやら、違つうじい。

「ち。奴の不可解なモテフィールドを解除するチャンスだと思つたのに。エリカもなんだか、マイナスどころかプラス補正氣味っぽいし」

そして、相変わらず訳のわからぬ言葉を使う三村。

と。

「え？」

その時。

『ソレ』以外ではあり得ない違和感を感じて、三人は同時に天を見上げた。

空に舞つてゐるのは、翼を持つ異形の怪物たち。

「幻影獣！」

緋色香の言葉に反応して、悠斗とエリカも空を見上げる。その悠斗めがけて。

一匹の幻影獣が降下してきた。

「悠斗君」

「だめ！ 麗華さん！」

幻想剣を実体化させようとする麗華を香が止める。

「あ、そうか」

BMP過敏症のことを思い出す麗華。

「任せろ」

二人を置いて、弾丸のような速度で飛び出す三村。

三村のBMP能力、システムアクセル超加速だ。

今にも悠斗に襲いかかるとしていた幻影獣に、三村の拳がめり込む。

「猪突猛進！」

オーバードライブ

拳を突き刺し、幻影獣を抱えたまま速度を上げる三村。

その拳がうつすらと青い光を帯び始める。

速度が増すごとに、青い光も強さを増し、少しづつ拳が幻影獣の体にめり込んでいく。

そして、建設途中のマンションの骨組みに幻影獣を叩きつけた。

「げ？ 三村が格好いい」

マンションの骨組みに叩きつけられて消滅する幻影獣を見ながら、俺は咳く。

まあ、あの外見でウエポン属性持ちで成績もいいのに、格好悪いといつまうが難しい気もするのだが。

と云うか。そんな場合ではない。

「悠斗さん。下がってくだサイ！」

叫びとともに、エリカが豪華絢爛を展開する。

が、全周囲を囲まれている状況で一体どこに逃げるといふんだ。

「く……うウ！」

エリカが呻く。

幻影獣が豪華絢爛をすり抜けて向かってきているのだ。

斬れないとはいえ、巨大な幻影獣なら引っかけて動きを封じる」ともできるが、今眼の前にいるような人間大の幻影獣ではどうしようもない。

ゴツゴツと派手な音を立てて不可視の刃に衝突しながらも、まったくひるむことなく（俺めがけて）向かってくる。

「このー！」

劣化複写した断層剣カラドボルグを振り下ろす。

空間にできた断層が一匹の幻影獣を切断するが。

あと一匹くらい（数えている暇はない）の幻影獣がひるむことなく襲いかかってくる。

はっきり言つて、間に合わない。

攻撃に備えて体を固くする。

が、防御系の能力を持たない俺は、幻影獣にひつかれれば普通に死ぬ。

でも、次の反撃は無理。

そんな、なすすべなく立ち向かへす俺の前で。

幻影獣たちの動きが止まつた。

致命的な『合理的』

一瞬、時が静止したよつと。

次の瞬間、バタバタと地面に墜落していく幻影獣達。なかには俺のすぐそばまできていた奴もいた。

……やばかっただ。

それは、ともかく。

「緋色先生……でスカ？」

エリカの声に、そちらに視線をやる。

そこには、右目の眼帯を外し、煌々と輝く新縁の右目で幻影獣達を睨みつける『アイズオブエメラルド』。

「本当は、こういう荒事好きじゃないんだけど。今日は特別ね」と、黒い左目でウインクする、『ども先生。

どうも、アイズオブエメラルドの力で幻影獣達の動きを止めているらしい。感知するだけじゃなくて、あんなこともできるのか。

「凄いな……」

うつかりと惚れてしまいそうだ。

「惚れる場合ではないテス。悠斗さん、早く逃げまショウ」

「え？ 僕、声、出してた？」

などと馬鹿なことを言いながらも、そそくさと地面に落ちた幻影獣の間をすり抜けて逃げてようとする俺とエリカ。

と。

「え、何、この気配！？」

突然、こども先生が視線をそらせた。

建設中で放棄されたマンションの残骸へ。

……西田」と。

「つて、まずいだろ、それ！」

思わず叫ぶ俺。

何に気を取られたのが知らないが、アイズオブエメラルドで睨んでないと、幻影獣が動き出してしまっ！

「悠斗さん、危ないデス！」

エリカの警告が飛ぶ。

だが、俺の身体能力では反応できない。

一番近くに転がっていて、突如息を吹き返した幻影獣の腕が俺の眼の前で振り上げられている。

太い腕だ。首相官邸で会ったハンマーワエポン並みに。

しかも、赤いし。ぬるぬるしてる。

あんな腕に殴られて死ぬの嫌だなあ。

などとあまりの恐怖に、面白いことを考えている俺の前で。

幻影獣の頭が、何かに撃ち抜かれた。

「一」、今度はなんですカ！

次々に襲つてくる予想不可能な展開に沸騰氣味の俺の頭を代弁するエリカ。

撃ち抜かれた幻影獣は、声も出さずに、その場にくずおれる。

その後も次々に狙撃される幻影獣達。

いや、狙撃と言つにはあまりに弾の数が多い（それでも、俺とエリカには当たらないが）。

「な、なんなんでしょうカ？」

「援軍？」

エリカの疑問に疑問文で返す俺。

ロイヤルエッジ

弾は拳大。、無色に近いが、エリカの豪華絢爛と違い、はつきりと認識できる。

おそらくだが、空氣を圧縮させて撃ちだしているような印象だ。

「……にしても」

激しい。

発射点と見られる、マンションの骨組みの一角、三階部分あたりから、機関銃のよつに撃ちだしていく。

「凄いな」

俺は、さきほどまで死にかけていたことも忘れ、激しい弾幕ではつきりと見えない狙撃手の姿をぼんやりと眺めていた。

「ガンキャッスル
砲撃城砦だ」

11匹（ちゃんと数えてもそうだった、俺もなかなかやるな）の幻影獣が、謎の狙撃で動かなくなつた後。唐突に俺たちを助けてくれた狙撃手が、下に降りてくるため一旦姿を消したところで、三村がそう話しかけてきた。

「ガンキャッスル
砲撃城砦？」

オウム返しに問い合わせる俺。

というか、最初に決めた猪突猛進以外は、まったくもつて戦闘中、オーバードライブ

空気になつてたのはいかなる理由だ。

「圧縮した空気を打ち出すBMP能力。俺も見るのは初めてだけどな。話くらいは聞いたことがある。ちなみに空気になつてたのは、オバードライブ猪突猛進決めた際に鉄柱に頭をぶつけて、お花畠が見えてたからだ。いや、まいつた」

二つの質問に同時に、しかも正直に答える三村。しかし、やることなすこと、きつちり三枚目だな。せつかくの弱ナシパ風味イケメンが台無しといつか、むしろ一周回つてそのうち魅力になるかもしねん。

「どんなやつなんだ？」

「おまえも想像はついてんだろう？」

「？ いや、まったく」

と俺が応えると、三村は『この天然が』という顔をした。こども先生も『天然ねえ』という顔をした。

「天然さんデスネ」

エリカは声に出して言った。

「悠斗君を責めてはいけない。きっと慣れない戦闘で、まだとまどつてる」

麗華さんはフオローしてくれた。

「つて、みんな知ってるやつなの！？」

「本人に、聞いてみたら、どうだ」

「へ？」

三村に言われて振り返る。

そこには。

「無事か。みんな」

数日前にできた俺のクラスメート、峰達哉がいた。

? なんで、みんな分かつたんだ?

「最後まで、判断に迷つたぞ」

「? 何を?」

ありがとう、と言おうとしたところに予想外のセリフを浴びせられて、俺は間抜けな声を出した。

「特訓も戦闘中もずっと見ていたが、どう見ても素人の動きだった。いや、三か月前に能力覚醒したばかりだと考えれば、あれだけ使えること 자체が驚異的なんだが……」

「なんだが?」

「あれが、君の実力とはどうしても思えなかつた」

「あのな……」

まだそんなことを言つてゐるのか、こいつは?

「言つただろ。俺は、完全無欠に素人だつて。とてもじやないけど、戦闘なんて」

「分かつてないのは、君の方だ」

確信に満ちた峰の声。

「第五次首都防衛戦の時の映像を見せてもらつたが、あの時の『力ラドボルグ』は、早さ・威力共に完璧だつた。そもそも、君は『みんなの力があつてこそ』と言うが、実質あのBランク幻影獣を切り裂いたのは君の能力だ。世界の上位ランカーでも同じことができる者は何人もいない」

「そなの?」

「そうだ」

「ちょっと、待つて」

ふいに、こども先生が声を挟んだ。

……いや失礼。緋色先生だ。

「第五次首都防衛戦の映像？ 峰君、あなた、そんなものどこで見たの？」

「う。そ、それは……」

いきなり口こもる峰。

ついでに『さ、さすがはアイズオブエメラルド』とか言つてる。なんかフラグっぽいな、覚えておこ。

「そ、そんなことはこの際、後回しにして……。とにかく、澄空！ 君の実力が分からぬ。それとも、危機に陥らなければ本領が発揮されないのか？」

「物語の主人公じゃあるまいし……」

第五次首都防衛戦の時も、自分の的にはそんな大した闘い方をした覚えはないんだがな。

例の第2人格（こちらはもつと自覚はないが）なら分からぬが、あの時は、記憶も途切れてないしな。

（とりあえずは、良かつた）

峰を囲むように集まつた一同。

その一角で、剣麗華は、ひとまず胸を撫で下ろしていた。

少々BMP能力を使つたところで急激に症状が悪化するとも思えなが、余計な危険は冒さないに越したことはない。

それに、あの峰達哉は、なかなかのBMP能力者のようだ。自分が BMP過敏症を患つてゐる間だけでも、今日のように悠斗君を助けてくれれば、ありがたい。

「ん？」

今の思考、何か違和感があつたような?

「気のせいかな」

と、剣麗華が言つた瞬間。

本当の違和感が襲つてきた。

たぶん、その場の全員が感じたはずだ。

BMP能力の高低や感受性など関係ない。

空が光れば雷を思い浮かべるし、大地が震えれば、基本、地震しない。

それくらい、誰にでも感じられる違和感だった。

それでも、反応は、剣麗華が一番早かつた。
すぐにその場を飛び退く。

その動きは稻妻のように俊敏で、しかも一切の無駄がない。
BMP能力者にとって一番大切なのは、自身の安全。
ひとまず危険から遠ざかつておいてから、視線を澄空悠斗達に戻し、
状況を確認する。

驚異の正体は『口』だった。

直径……といつていいかどうか分からぬが、口の端から端まで5メートルはある。

人間の口をそのまま大きくしたような巨大な口。

唇は紫色。

歯はノコギリのようで。

そして、それ以外は何もない。

口腔にあたる部分には、赤黒い闇がわだかまつているだけだった。

幻影獣か、あるいはそのBMP能力か。

どちらにしろ、生半可な存在ではない。

剣麗華以外は、ようやく反応を見せ始めたところだ。
少し遅い。

アレの能力は分からぬが、どちらにせよ、あのタイミングでは捌
ききれまい。

(ん?)

状況把握はできた。

敵の初撃には間に合わない。

流れるような思考で、次の一手を。

考える?

(次?)

何を言つてゐる?

初撃が終わると「」とは。

彼女の担任と。

クラスメイトと。

クラスは違うが同年代のBMPハンターの仲間と。

そして。

(悠斗君が死ぬといつこと……?)

何を言つてゐるんだ!?

「幻想剣・断層剣カラドボルグ!」
イリュージョンソード

一切の躊躇なく、壯麗な剣を実体化させる。

(何を……)

何が、状況把握だ？

(私は、何をやつてゐる)

何が次の一手だ？

「標的との間に障害物はない」

最速で振りかぶる。

……でも、間に合わないかもしれない。

(私は……)

こんなに離れた場所で。

(いつたい……)

自分から、みんなと離れた場所で一人。

「いつたい、何をやつてゐる！？」

(わずかにだけど、絶対に間に合わない)

そんな嫌な確信があつた。

絶対に認めるわけにはいかない、その確信を振り払つように剣を振り下ろす。

続・天才ではないけれど

自身最速の剣ではあつたが、わずかに及ばなかつた。
なぜなら、剣麗華が剣を振り下ろす前に『口』は縦に両断されてい
たからだ。

剣麗華は、剣を振り下ろしていない。

そもそも、この角度では、あんな風には両断出来ない。

『口』を斬つたのは、剣麗華ではなかつた。

「悠斗……君？」

劣化複写したカラドボルグで天を衝くような体勢のまま、他の誰よ
りも前で澄空悠斗は立っていた。

両断された『口』の断片は、澄空悠斗の両脇を通り過ぎ。
消えた。

「今は……」

完璧だつた。

反応は決して早くはなかつた。

むしろ、（麗華は別格としても）この場にいる他の誰よりも遅かつ
た。

しかし、振り向いて『口』を認識し。

一瞬でカラドボルグを実体化させ。

一切の淀みのない動きで『口』を両断させた一連の戦闘は。

剣麗華と比べても、なんの遜色もない動きだった。

「いや……」

互角などでは決してない。

仲間を庇つ様に立つ澄空悠斗の姿を見て、思つ。なぜなら、自分の後ろには誰もいない。

自分は間違つた行動はしていない。
まず優先すべきは、自身の安全。
そして、的確な状況判断。

なのに。

「なんだか……」

遠い。

「悠斗君が……」

とても、遠くに感じる。

「あ、危なかつた……」

今度こそ、まじ死ぬかと思った！

生きてこられることに感謝しながら、劣化版断層剣カラドボルグの実体

化を解く。

でも、まじで危なかつた。

振り向いたときには、もう眼の前に『口』があつたもんな。実体化はともかく、攻撃が良く間に合つたもんだ。

人間、死ぬ氣になりや、なんとかなることもあるひじい。

「澄空！」

「凄いデスー！」

「ぐぼつ！」

後ろからHリカに抱きつかれ、正面から峰に肩を掴まれ、俺は一瞬、気が遠くなつた。

「澄空、澄空！ 君はやつぱり… わつきのが本当の君の実力なんだな！ 見ろ！ やつぱり、俺より君の方が強い！」

「が、がふがふ」

峰の力は、相當に強い。油断してると、肩を碎かれそうだ。

「凄いデス！ 凄いデス！ 悠斗さん、凄いデース…」

「ぎ、ああ…」

そして、Hリカの胸は相変わらずの危険物だった。油断していると、あつちの方まで連れて行かれそつだ。

「緋色先生…」

「ん？ なに、三村君？」

「ヒーローとそういう者の違いは、ビコにあるんでしようが？」

「…素直に、本郷さんに抱きつかれた澄空君が羨ましいって言つたら？」

「羨ましいっす！ めっちゃ羨ましいっす！ なんで、なんで、あ

いつばっかり、あんなおいしんすかー！」

「どうどう」

そして、三村といいHリカも先生は、コントをしていた。

つて、そんなことより、麗華さんは？

「あ、いた」

5メートルほど離れた場所で、カラドボルグを片手に、じゅり（と）
いつより、『口』がいた方向かな）に身構えていた。

「一瞬でみんなとこりまど……。さすが、麗華さん」
でも、なんで、みんな顔してるんだ？

少し気になつた俺が、麗華さんに声をかけようとしたといふで。

「……からともなく、唐突に拍手の音が聞こえてきた。

ひどく不吉な。

パチパチパチ。

パチパチパチパチ。

「…………」

峰がさきほど狙撃していたのと同じ場所。
マンションが完成すれば、四階あたりになつたと思われる場所で、
その少年は拍手をしていた。

少年といつても、小学生くらいに見える。

どんな悪い漫画に影響を受けたのか、紫色に染められた髪。少女といつても通りそうな、線の細い顔。

不気味なほどに均整の取れた四肢。

そして。

体中から発散している違和感。

「お見事」

茫然と見上げる俺たちの前で、ソレはまさに少年の声を出した。外見に見合った声なのに、ソレが人間の言葉を吐くことに、不快感を覚える。

「いや、ほんとに喰らひつもりはなかつたんだよ？ ちょっと刺激して、反応が見たかつただけなんだけど、まさか真つ一つにされるとは驚いた」

少年は、上から田線で、そう言つてくる。

いや、上から田線とも違つな。

こいつは、もっと変な所に立つてこる。

「あなたは誰！」

「こども先生が、鋭い声を出す。

その右眼は、深緑の光をたたえている。

「あれ？ ソーダの報告によると、君はアイズオブエメラルドっていう、凄い感知系BMP能力者つてなつてたけど、僕がなんなのか見当つかない？」

「つから、聞いているんです！」

いつになく余裕のない声で、こども先生が叫ぶ。

と、ソレは少し驚いた顔をした後。

「なるほど！ つまいこと言つね。さすが人間」
楽しそうな顔で、また乾いた拍手を返してきた。

「馬鹿にしているの……！」

「こども先生がうめく。

けど、たぶん違う。

あれは、馬鹿になんかしてない。

そんなところまで、分かりあえない。

「ちょっと待つてね。そつちにいくから」と。

少年は、四階相当の高さから無造作に飛び降りた。

「ちょ、待て！」

人間じゃないのはほぼ確信していたが、それでも制止しようとする
お人よしな俺。

もちろん少年は、予想通り、どこにも異常をみせずに地面に立つて
いた。

「では、自己紹介しようか

「ぜひ、お願いするわ」

「こども先生が挑むような口調で言つ。

俺も含めて、他のみんなは、まだ事態が呑み込めていない。

でも、たぶん、奴の次の一言で呑み込まれる。

やつは、もつたいぶつて胸をそらし。
そして、言つた。

「僕は四聖獸ガルア・テトラ。君らのこいつとの、Aランク幻影

獸だよ」

幻影獣は、4つのランクに分けられる。

Dランクは、無害な幻影獣。

Cランクは、一般的な幻影獣。

Bランクは、いわゆるボスクラス。

そして、Aランクは。

どちらかといふと、都市伝説の類に近い。

「どうしたの？ セッカく自己紹介したのに。あ、ひょっとして、びっくりして声も出ない？ ま、それは無理もないけど、あんまりボーとしていると、喰われるよ？」

ガルアがそう言つと同時に。

その背後に、巨大な『口』が出現する。

息を飲む俺たちの前で、ガルアは楽しそうに解説する。

「これが僕のBMP能力。マングイータ捕食行動。いわゆる生物の類じゃないから喰われても消化はされない。でも、どこかに飛ばされる。君たちの言葉を借りれば、時空系能力つてところかな？」

「じ、時空系……？」

そんなBMP能力、聞いたこともない。

人に使える能力じゃない。

「あ、飛ばされるって言つても、9割方は僕らでも帰つてこれないよつの場所に飛ばされるからね。油断して食べられちゃだめだよ」

忠告どつむ。

「で、その四聖獸様が、いつたい何の用だ？」

頼もしいセリフを吐くのは、峰。

「こいつは、なんというか普通に格好いいな。

「ん？ ああ、実はあんまり考えてなかつたんだけど、しいて言えば、こいつの紹介かな？」

と、ガルアは『口』の脣を撫でる。

なんか、不気味だ。

「どういう意味だ？」

今度は、三村が口を開く。

あれ、三村もちょっと格好いいぞ？

「そうだねー。ハンデ……といつか、調整といつか……。君ら人間も、相手のことが事前に分かつた方が闘いややすいだろ。その類のことだよ」

「良く分かりませんが……。なんのために、そんなこと『アヘ』

「だつて、僕は、澄空悠斗に殺されるために、ここに来たからね」

「……」

沈黙の中。

俺は、麗華さんを見た。

(麗華さん、通訳ブリーズ。俺には、あいつが何を言っているのか分からぬよー)
的な視線だ。

そうすると、麗華さんも、こっちを見た。
(ごめん。私にも、分からぬ)
的な視線だ。

「あれ？ やっぱり、うまく伝わらない？ うーん。異存在間『』」

ユニケーションは難しいね」

ガルアが残念そうに言つ。ああ、確かに難しいな。

「少し、言い方を変えようつか

と、ガルアは軽く手を叩いた。

「僕は澄空悠斗と闘うために、ここに来た。ミッション的には僕が殺されれば成功なんだけど、僕は澄空悠斗を全力で殺さないといけない。……こんな感じなんだけど、分かる？」

わからん。

「だよねー！」

と、ガルアは底抜けに明るい顔で言つた。

少し背筋が冷えた気がした。

「じゃ、もつとまつきつせよ！」

ガルアが指を一本立てる。

「今から一週間後、僕は幻影獣軍を率いて、この首都を攻める

「！！」

全員が息を呑む。

「目標はもちろん、澄空悠斗の抹殺。でも、ついでに首都を落とせるくらいの軍勢で攻めるから、きちんと防御してね」

「ま、待ちなさい！」

緋色先生が、大きな声を出す。

「ん？ ああ、一週間後じや曖昧だね。ええと、7月24日13時。場所は、澄空悠斗の居る所。ただし、首都から出したら、先に首都を攻撃するからね」

「な……」

絶句する。

「望むところ

絶対零度声色の麗華さん。

怖頬もしい。

「ちょ、待つて、麗華さん！」

緋色先生が慌てて止める。

「ガルア・テトラ！ そんなついでみたいに首都を滅ぼされたんじやたまらないわ。あなたたちにとって、澄空君はいったいなんなの？ あなたが本当にAランク幻影獣だというなら、訳を話してくれれば……！」

「そういう訳にもいかないんだよ」

緋色先生の絶叫に、少し困ったような顔で答えるガルア。

なんだろ？

今の顔だけは、普通に見えた。

「そんな簡単にいくなら、僕だって、わざわざ殺されに来たりはない」

矛盾しない感情

「」じども先生はじめ、みんな（麗華さん除く）でガルアを説得しようとしたが、奴は聞く耳持たずには帰ってしまった。

城守さんへの報告は自分に任せろという、こども先生に任せて、俺は麗華さんと一人で家に帰っていた（もちろん三村たちも帰った）。

『じゃね。7月24日13時。場所は、澄空悠斗の居る所。忘れないでよ。ま、幻影獣軍が来たら思い出すと思つけど。前よりす』『いいよ』

とは、ガルアの弁だ。

『あ、あんなのハッタリですよね！』と俺が言つた時の。

『ええ。澄空君は、そう思つていいのよ』と返したこども先生の優しい顔が、3か月ほど前のトラウマになつそうだ。

……3か月も生きられればだけど。

「悠斗君」

「ん？」

唐突に、麗華さんに呼びとめられた。

「くりくりする」

「は？」

突然の難解な単語に動きを止めた俺の前で、麗華さんがゆつくつと崩れ落ちる。

つて、おい！

「れ、れれれれれ麗華さん！」

「ん？」

おお慌てで麗華さんを抱きしめる。

うわ、背高いのこ、軽！

「ん。悠斗君、世話を掛ける」

「そ、そそそそ」

そんなことはいいから。

「きゅ、救急車、いや、消防車？　じゃない、いじども先生…」

混乱しながらも、なんとか解答を導き出した俺は、片手で携帯電話を取り出す。

「いや、大丈夫」

そんな俺を麗華さんが止める。

「ちょっと、視界がぐるぐる回って、頭痛と吐き気がして、動悸と息切れがするだけ」

「つて、めっちゃやばいよ、それ！」

「でも、もう治まってきたる」

「ほ、ほんとに？」

表情が変わらないから、わかりづらい…

「ほんと？」

意外としつかりした動きで立ち上がる。

「もう治った」

「治つたって言つても…」

ただの立ちくらみにしては、なかなかマーベラスな諸症状ではなかつたか？

と、俺は大事なことを忘れていたのを思い出した。

「つて、麗華さん。さつき、幻想剣使つてた！　ひょっとして、B

MP過敏症が！？」

「その可能性はある

さらりと言つ麗華さん。

「ま、まざいじゃないか、まざいじゃないか…　やつぱり、いじども

先生を!」

「明日、診てもいい。そんなに心配しなくて大丈夫」自分の命に係ることだというのに、頬もしいほど冷静な麗華さん。

「本当に大丈夫なのか?」

「大丈夫」

と、すたすたと歩き出す麗華さん。

「いや、大丈夫でもなかつた」

いきなり止まる。

そして、じちらに振り返り、真剣な眼で振り返る麗華さん。

「な、なんすか?」

予測不可能な麗華ワールドの真骨頂に、混乱しつぱなしの俺。

「悠斗君に聞きたい」とがあつた

「あ、ああ」

「でも、不快になるようなことだつたら、答えなくてもいい」

「そんなことはないと思ひナビ」

と、麗華さんを促す。

「さつき、あのAランク幻影獣の捕食行動を斬つた時マンイータ」

「うん」

「どうして、逃げなかつたの?」

「え」

……え。

「BMPハンターは、自分の安全を最優先するのが原則。個々の自立なくして、連携戦闘は成立しない」

「う、うむ」

なんか名言っぽい。

とこうか、最近、じども先生が同じようなことを授業で言つてた気

がする。

「そう習つたし、それしか知らない」

「あ、ああ。俺も、そう習つた

「でも、あの時……」

「……」

「あの時は、私が間違つていた……？」

この時。

普段、鈍い俺には珍しいことに。

ほんとに、珍しいことに。

麗華さんが、何を言いたいかが、分かつたような気がした。

「間違つてないよ、たぶん

「え？」

「自分の面倒も見れない人間に、他人のことは助けられない。自分を大事にできない奴は、人を思いやることができない。よく言われることだけど、俺もそう思う。いまいち自覚はないけど、BMPハンターが貴重な存在つてのも分かるしな。麗華さんは間違つてないよ」

「じゃあ、悠斗君が間違つてたの？」

「いや、たぶん、俺も間違つてない

「????」

「おお、珍しい。

麗華さんの、ハテナ顔だ。

ま、無理もないけど。

「おかしい、悠斗君。悠斗君の説は、相互に矛盾している」

「いや、それがそうでもないんだ」

「説明を要求する」

「あー、えつと……」「

説明、となると……。

まいったな。

麗華さん相手だと、時々、柄にもないことを言ってしまう。困る。

「いや、説明はなしで」

「え」

「結構、人によるから。あんまりハッキリ言いたくないんだよ、
だいたい、恥ずかしい。」

「それは、残念」

と、少しうねた顔をする麗華さん。

……可憐いじやないか。

「治つてゐる……」

「じども先生（眼帯外し右眼全開ヴァージョン）が驚いたように咳い
た。

俺も驚いた。

麗華さんは普通だった。

そして、上条博士も驚いた。

「ふーむ。今までの経緯を聞いている限りでは、悪化しさえしないそ
れ、治るはずがないんじゃが……。どうこうことなのかの？」
年齢に似合わぬ若々しい声で（とこつても、もちろん博士の年齢な
んか知らんけど）上条博士が言つ。

ちなみに、なんで上条博士がいるかといつじ。

麗華さんを心配した上条博士が、新月学園職員室までかけつけた

……訳ではなく、

麗華さんを心配した俺といども先生が、上条博士の研究所を訪れた訳でもなく、

Aランク幻影獣に狙われて「こいつ」と城守さんにBMP管理局の本部に軟禁状態にされてついでになぜか麗華さんも付いて来てそこに訪ねて来たこども先生が診てくれている時に管理局の応援要請でやってきてた上条博士が顔を出した。

という訳だ。

……疲れた。上条博士がいる理由に加えて、今現在の状況説明までしてしまったじゃないか。

「でも、本当に治っているんですよ。お疑いなら、今度は上条博士が診察しますか？」

「知つとるじやろ。BMP過敏症は診察できん。おまえさんのアイズオブエメラルドがそうだと言つなら、そななんじやろ」

セリフだけ聞くと確かに博士っぽいが、上条博士は明らかに腰が引けていた。

「あの、上条博士？」

「おお、悠斗君！ 君の活躍は聞いとるよ。やはりわしの眼には狂いはなかつた！ ……というより、想像のはるか上を行つておるな。まさか、あれから4か月足らずで能力覚醒し、Bランク幻影獣を撃破し、あげくの果てに伝説と言っていたAランク幻影獣に眼をつけられるとこ……」

「……」

「正直、わしには想像もつかなんだ」

「いや、それはいいんですけどね」

今は、上条博士が俺の背中に隠れるようにして、麗華さんと距離を取りうとしているのが気になる。

「上条博士は、麗華さんが怖いのよ」

「え？」

「おおー、なんで、ばらしてしまつんだ！ 香櫻ー。」

眼に見えるほど慌てている上条博士。でも、麗華さんが怖いって？

「高BMP能力者は、だいたい検査とか嫌いな人が多いから。上条博士、言つてしまつたよね。最初からまともに検査をさせてくれた高BMP能力者は悠斗君だけだって」

「だからなんでばらすのだ！ ああ、悠斗君にだけは、まともな研究者だと思われてたのに……」

「いや、思つてないすよ。」

と。

「それだけじゃない」

麗華さんが口を挟んできた。

「え？」

「麗華君？」

怪訝そうな一人。

「私は、10年前にBMP覚醒してから、上条博士の研究施設で育つってきた。その時、たくさん迷惑をかけた」

「れ……」

「麗華君」

驚いたような、困ったような様子の一人。

麗華さんが覚醒してからのこととは、以前、おじいさんの剣首相に聞いていたけど。

たぶん、一人とも、このことを他人に言つはなかつたんだね。

「その節は、『めんなさい』

麗華さんは頭を下げた。

「驚いたの……」

上条博士が今までに見たことがないほど優しい顔をしている（まあ、今まで驚いた顔か、びびった顔しか見てないから当たり前だが）。

「ここ何年かは報告でしか麗華君のことを聞いたことがなかつたんじやが、実際に会つてみると、ずいぶんと違つたわ」

「それは、たぶん報告が古いんですよ」

上条博士の独白に、じども先生が意味ありげな顔でじりりを向く。なんだる？

「ほうほう。一体、何があつたんじゃろ？」「

「何があつたんでしょう？」

そして、一人で俺の顔を見ながら頷きあう。何があつたんだろう？

「まあ、何はともあれ麗華君が〇×ならば、これから悠斗君と男同事二人で『麗華君による研究所半壊事件』とか『麗華君による機動隊殲滅事件とか』とか『麗華君によるB M P ロールタワー誤動作事件』とかの、麗華君の嬉しい恥ずかし事件簿を語り合えるのじやな！」
そんなもん。

「語り合いたくないです」

麗華さんと一緒に暮らしている小心者が、ますますびびってしまうではないか。

特に、最後の事件、物凄く不吉な響きがあるぞ。

「私も、できれば、それらの事件は言わないで欲しい

「ん？ こういうことは駄目なのかの？」

「……それは、恥ずかしい」

……。

ゾクつとした。

完璧美少女と拗ねたような仕草は、無敵のコラボだ。

「ゆ、悠斗君……。わしの心臓が、早鐘のように鳴り響いておるー…

「これは、いかなる超常現象だろうかー…?」

「たぶん、心疾患の類ではないかと」

「どこの世界に、可愛い女の子の仕草を見て心疾患を起こす老人があるといつのだ！」

「いい年して、心臓がどきどき、なんてことを言い出す世界的科学者もいないと思うが！」

「まあ、しょうがない男性たちは放つておいて。とりあえず、麗華さんはもう学校に行きなさいな。まだ信じがたいけど、BMP過敏症も治つたことだし」

「え？ でも、悠斗君は？」

「城守さんが『絶対に出すわけにはいきません』って。まあ、あのAランク幻影獣が約束通り2週間待ってくれるとは限らないし、私も悠斗君はここを出ない方がいいと思つわ」

「悠斗君が行かないのなら、行く意味がない」

そういう意味ではないと分かつてはいるが、それでも破壊力抜群の麗華さんのセリフ。

俺の心臓が、早鐘のように鳴り響いている！

これは、どんな超常現象だらうか！

「そつは言つても、昨日からずっと悠斗君にべつたりじゃない。悠

斗君にだって、プライベートはあるんだから」

「こども先生が説得している。

でも、俺と麗華さんつて今、一緒に暮らしているんですが。

「それは気がつかなかつた。確かにその通り」

「そうよ。時には少し引いたくらいが、男女の仲は長続きするのよ

！」

「分かつた。学校に行つてくる」

「うん。悠斗君の分まで頑張つて来てー！」

すくいしい笑顔で言ひ、「じども先生。

なぜだらり？なんか、頭がいいくせに時々素直な麗華さんを、子どもなのに先生な緋色先生が騙して学校に行かせよつとしているよう見える。

ウーポンティマー

『何かあつたらすぐ呼んで』と言い残して、新月学園に麗華さんが行つた後。

こども先生が淹れてくれたコーヒーを、上条博士も入れて三人で飲んでいた。

驚いたことに、こども先生はブラックだつた。

ちなみに、俺は砂糖もミルクもたつふりだ。文句ありますか。

「しかし、やはり氣になるのう」

「まだ言いますか……。まあ。確かにアイズオブエメラルドといえども、絶対ではないですけど」

「あたりまえじゃ。この世に絶対なんかあるものか

こども先生のセリフに、なんだか格好いいセリフで返す上条博士。

「やつぱり、麗華さんは次の戦いには呼ばない方がいいですか？」

俺は聞く。

俺の命もかなり心配だが、麗華さんには無理をさせたくない。

麗華さんがいるのといないので、実質上も心理上も、安心度が7割ほど違うが。

「それは無理よ」

「うむ。執着心が薄いように見られがちだが、昔から決めたことは絶対に曲げん。麗華君をおとなしくさせるのは、そのAランク幻影獣を撃退するより難しいかものう」

マジですか？

「大丈夫なんでしょうか？」

「うーむ。BMP中毒症の応急措置をするための設備は、ここひらくんではわしの研究所くらいにしかないからのつ。こぞとこう時に対応できるよつにはしておぐが」

なんせ、そこそこ距離があるからの「」と上条博士は返してきた。

「おまけに、搬送経路と手段を確保できるかどうか。城守さんが言うには、敵の規模は、この間の第五次首都防衛戦より大きい可能性が高いらしいから」

ブラックを飲みながら、さりと憂鬱になるセリフを吐く「」も先生。しかし、俺は見た！

「」も先生は、ブラックを飲みながら、わずかに苦しそうな顔をしたぞ！

つて、話をそらしている場合でもなく。

「なんか、方法はないんでしょうか？」

このままでは気になつて仕方がない。

ただでさえ、自分の命の心配で忙しいところの「」。

「」も先生は、そんな俺に視線を向けて、少し考えたような仕草をした後。

でも逆に考えるとこれはいい機会かも、とかなんとか呟いた後で。

こつ言つた。

「悠斗君。^{メンテナンス}調律を覚えてみる？」

「調律ですか？」

なんか、格調高い響きだけビ。

覚えられるようなものなのか？

と、俺が疑問に思つていると。

「まさか、香君。授業で教えとらんのか？」

上条博士が、心底驚いた、といつ顔で言った。

そして、その表情と、般若のような「」も先生の表情から、たぶん

習つたけど俺が忘れてるだけだということに自分で気づけたから、怒らないでと言つたら、こども先生、怒ります？

「ゆーと、くーん！？」

「はい。すみません！　忘れたか、聞いてないかだと思います。ほんとにすみません！」

ほら、怒られた。

「いい、悠斗君？　もう一度だけ教えるから、ちゃんと覚えて？」「いい」、ほんとにほんとの基本的なことだからちゃんと覚えてね？」

「は、はい」

大丈夫です。きちんとメモも取ります。

そして『悠斗君は毎日こいつやって香君の授業を受けてあるのかー。ええの一』と言いながら、一向に帰らうとしない上条博士は無視の方向で。

「まずおさりい。BMP能力者はいくつかのクラスに分けられるけど、その中でも特に特別だとされるクラスは何？」

「もちろん『ウエポン』クラスです。クラス名に必ず『ウエポン』と付いています」

「では、その特徴は？」

「他のクラスに比べて、幻影獣に対する干渉攻撃力が、かなり高めの能力を使えます。BMP能力値が同じなら、だいたい1・5倍から2倍の差があると言われてます」

「ふむ。よくきました」

と、こどもにしか見えない先生に褒められて、少し嬉しくなつている俺。

そして『ええの。ええの！　わしも高校生に戻りたくなってきたわい！』と叫んでいる上条博士。ぜひ、戻らないでください。

「メンテナンス調律は、そのウエポンクラスのBMP能力者に作用する能力よ

「へ？」

「相手がウエポンクラスでさえあれば、怪我の治療や体力の回復、精神のメンテナンスはもちろん。身体能力の強化やBMP能力の拡張も可能よ。たぶんBMP中毒症にも効果があるはずよ」

「ちょ、ちょっと待つてください」

そんなんでも能力があつたのは驚きだが。

そして、それを以前、聞き逃したか忘れたかした俺にも驚きだが。「俺にそんな能力が使えるんですか？」

「もちろんよ」

「こども先生は、あつさりと頷いた。

「悠斗君、あなたの『クラス』名はなに？」

「え？」

えーと。

……なんだつたつけ？

「あ、もちろん分かっていると思つけど『一・〇』とか答えたたら、ブツから」

につこりほほ笑むこども先生。……この人、怖いよ。

……えーと、確か、あれは初めて上条博士に会つて『属性分析』をされた時。何て言つてたかな？

……そういえば、あの時は突然城守さんプラス黒服ズに引っ張つていかれて、本氣でビビったな、確か。

いや、そういうじゃなくて、クラス名を……。

……そう言えば、あの時、城守さん『情報提供してくれた人がいた』から俺を見つけられたつて言つてたな？ 誰なんだろう？

「ゆーとくーん、まーだかしらー？」

「も、も少しお待ちを」

のど元まで出かかつてゐんですけど！？

と、上条博士の微妙な視線を感じる。

その口が、こども先生に見えないようになつて動いている。

「……これは……口の形で、答えを教えてくれていいる？」

「ウエポンハイターです」

「洗剤か！」

結局、ブたれた。

「ほんとこ、悠斗君ほどBMP能力に無頓着なハンターは初めてよ。しかも、それが人類最高のBMP能力値を持つてるんだからぶつぶつ言つ、じども先生。すまんこつてす。」

「悠斗君、君のクラスは『ウエポンハイマー』。ウエポンの属性持ちより、さりにレアなクラスじゃ」

上条博士が答えを教えてくれた。ああ、そうだ、そういう前だつた。

「ウエポンハイマーは、調律メシテナシスが使えるの。…………というより、調律メシテナシスができる人ことをウエポンハイマーと呼ぶの」

「え？」

ちょっと待つてくださいな。

それじゃ、俺は。

「そう。劣化複写イレギュラーコピー」そが、悠斗君にひとつて文字通りイレギュラーな能力なのね。悠斗君の本来の能力は、調律メシテナシスのはずなの」

「そ、そうだったんですか」

衝撃の事実だ。

「じゃあ、どうせだったら、使えるんですか？ それを使えば、麗華

さんにもしものことがあっても大丈夫なんですよね」

「ふむ……。本来は、同じウエポンハイマーに教えを請うのが一番なんじやが」

「なんせリアルな能力だから。今、連絡が取れる人がいないのよねじゃ、駄目じゃないですか」

「それが、そもそもないじいのよ」

「個人的にはあんまりお勧めしない講師なんだけど……ね
？
？」

BMP管理局の外層。

誰でも入れて、誰でも座れる、待合所のような場所で、俺は一人で座っていた。

『じゃあ、講師を連れてくるから』と言つて、じども先生が去つて行つてから。

もうずいぶん待つていて、ひよつとして何か用事ができたか、それとも忘れられたのかとも思つたが、それでもここを離れるわけにはいかなかつた。

なんせ、ここにはじども先生に連れて来てもらつたから、帰る道がまったく分からぬのだ。

ここ、無駄に広いし、複雑な造りだからな。

「はー」

ぼーと眼の前に並んでいる自販機を眺める。待合室にあるのは5台ほど。

並んでいるジュース缶の数は多いけど。

「全部、メジャーどころばかりじゃないか。天下のBMP管理局ともあるつものが、こんな無難な自販機チヨイスしてどうするんだよ」

退屈まぎれに訳のわからない愚痴をこぼしてみる。

さすがに『シニタクナイヨー。なんで俺が、Aランク幻影獣と闘わないといけないんだー』とか叫ぶ訳にもいかないからな。

と。

「それは、困りましたね。後で、施設の管理者に話しておきまわ」「いや、話さなくていいから」

聞かれた！

驚いて振り返った俺の眼に飛び込んできたのは、麗華さんと同じく
らしい美人な、赤い瞳の女性。

それから、じども先生。

「悠斗君は、時々とんでもなく変なことを言つから、気にしないで
いいわよ。私も何度も注意してるんだけど、未だに時々とんでもな
く変なことを言つのよね」

こども先生らしからぬ、ぐどい言い回し。

もちろん何を言いたいかくらいは分かる。

俺が時々『こども先生』って言つことりますよね？

「まあ冗談はともかく、姉さん。ほんとに大丈夫なのよね

「大丈夫、とは？」

「分かつてゐるでしきう？ 支配系能力による能力覚醒は、失敗する
と後遺症が出る場合があるわ。特に姉さんのアイズオブクリムゾン
は、精密だけど乱暴な能力だから」

「ちよ……」

ちよつと待つてください！

今、4つほど恐ろしく不吉な響きのする単語を聞いたような。
特に、最後の方とか！

「あなたが頼んできたのではないですか？」

「それは……。悠斗君が、『自分の身はどうなつてもいいから、命
に代えても麗華さんを助けたいんだ』と言うから」

「ちょっと…」

待ってくださいな！

そないなことを言つた覚えがないんですけど！

「え？ 悠斗君は、麗華さんがどうなつてもいいの？」

「いや、そういう訳ではないんですねが……」

「BMP過敏症の症状に蝕まれながらも、アランク幻影獸に襲われる悠斗君を助けるために、症状が悪化するのを覚悟の上で幻想剣を使つた麗華さんなんかのために、命をかけられない」と？

「そ……」

そういう方にはなかろうに。

これじゃ、じども先生じゃなくて、大人先生じゃないか。しかも、いつの間にか、深緑の右目が全開になつていて

「ひら」

と、緋色瞳さんがじども先生の頭をこづいた。

「いたー……」

「相手を説得する時に、アイズオブエメラルドを使うのは悪い癖だと言いませんでしたか？」

「分かつてはいるんだけど。これをやると、びっくりするくらい生徒が言うことを聞いてくれるものだから、つい」

いや、それは、説得というより洗脳と言わないか。

「少し脱線しましたが。とにかく、心配することはあつません。アイズオブクリムゾンは使いませんから」

「え？」

「どうじつことなの、姉さん！？ 麗華さんを助けようといつ悠斗君の熱い心意気に応えて、若干嫌がる悠斗君を、無理やり押さえつけるか騙すかして、この機会に能力覚醒させるつもりじゃなかつたの！」

劇的に驚く、じども先生。あんた、ほんとに教師か？

瞳さんの前だと、なんだかキャラが違いますよ。

「そんな覚醒に、一体どんな意味があると言つのですか？」

若干呆れたような口調で言つた瞳さん。

「私は、ただ、悠斗君とお出かけしようと思つただけですよ」

首都橋の伝説

ほんとこ、こんなことをしていいのだろうか？

言われるがままに、瞳さんとランチを食べて。

ウインドウショッピングをして。

喫茶店でお茶して。

公園をぶらぶらして。

そして、いい感じに日が落ちてきたので、瞳さんの車で首都橋をドライブしている。

まさかほんとに遊ぶだけなんてことはないだろ？と思つて付いてきたのだが、まさかほんとに遊ぶだけなんだろ？

それはともかく、首都橋は、首都湾にかかる橋だ。

首都の動脈の一つであるのはもちろん、夜景が綺麗なので、いい感じに盛り上がったカップルが、納期ぎりぎりで焦つて飛ばしているトライックの運転手さんの神経を逆撫でしていることもしばしば。

それはともかく、このままだとほんとにこのまま終わってしまう。別に楽しくなかつた訳ではないが、楽しんでいる場合でもないのだ。メントナンスなんとか調律の極意とやらを聞き出さないと。

とりあえず、ジャブから入るか。

「ええと、いい車ですねー」

どう見ても趣味でしか買えない高級外車を褒めてみる。

「あり、ありがとうござります。でも、ほんとは軽自動車の方が便利で好きなんですよ」

「え？ そうなんですか？」

それは意外だ。

麗華さん年上ヴァージョンとでも言つべき美貌を持っているから、

「ういう車はイメージぴったりなんだけどな。

「だからですよ。支配系能力者はイメージが重要。『この人は、こういう存在だ』と思わせることができれば、支配するのも容易くなるのです」

「へえー」

しつかり前を向いたままで、語る瞳さん。

結構、極意的なことだとと思つんだけど、今の俺にはあまり関係ない話だ。

「ところで、メントナンス調律なんですけど

いきなり本題に入つてしまつ俺。だって、もう話題が思いつかないし。

「やっぱり使う気なんですか？」

こちらを向いて、真剣な視線を向けてくるアイズオブクリムゾン。でも、今は前向いて運転してください。

「そりや、何事もなければそれが一番ですけど。もしものこともあります。それに、内容を聞く限り、使えるようになつてれば損はないと思うんですけど」

「悠斗君は大事なことを忘れていませんか？」

「え？」

「B.M.P能力者が最も恐れ、最も待ち望む瞬間。始まりの儀式にして、一生忘れられない悪夢の瞬間」

「？」

「覚醒時衝動です」

「……」

いや、でも。

「あ、でも、俺、第五次首都防衛戦で劣化複写^{イレギュラー・コピー}覚醒しましたけど、覚醒時衝動は起きなかつたですよ」

「覚醒時衝動のないBMP能力者など存在しません」

まるでそれが絶対の真理であるかのように、断言する瞳さん。

そうじやないことを体現したはずなのに、なぜか反論できない。

……あの赤い瞳のせいだろうか。

というか、前向いて運転してください。

「そして、複数能力者は、一つの能力が覚醒する度に覚醒時衝動を起こします」

「え？」

そ、それって！？

「次は、覚醒時衝動が起こるついとですかー！？」

「はい」

短い肯定。

そうならない可能性を全く感じさせない声だった。

「悠斗君本人には自覚がないようですが、劣化複写^{イレギュラー・コピー}は最高難度のBMP能力です。ウエポンティマーの身で、それを使いこなすあなたが、本来の能力である調律^{メンテナンス}を使えないはずがないんですよ」

「え、でも？」

「使えるはずです。もう、すでに」

ちょっと待つてください。

それは、ドラマや映画なんかだと凄くいい感じの決め台詞ですが、実際当事者になつてみると『そんなこと言つても、使えないものは使えないし』感がたつぱりですよ。

「無意識で恐れていらんんですよ、覚醒時衝動を」

「え？ でも」

「細胞がとつた方がいいかもしませんね。どんな低BMP能力

者でもいいので、一度でも覚醒時衝動を見てみれば、私の言つてゐる意味が分かると思いますよ」

「そうなんですか」

そう言われると、実際に見たことのない俺には返す言葉がない。それに、周りの人たちの話を聞く限りでは、瞳さんの言葉の方が実際に近いような気もする。

「それに、実際使わない方がいいんですよ。10年前の麗華さんの覚醒時衝動の話、聞いたことがありますか?」

「は、はい」

国家治安維持軍をおもちゃ扱いしたという例のあれば。

「その麗華さんより高いBMP値。当時の麗華さんよりも10歳も上の年齢。そして、一回目の覚醒時衝動」

「……」

「全ての要素が、過去最悪の覚醒時衝動を予想させます。正直な話をさせていただくと、Aランク幻影獣より、よほど恐ろしいです」

「あ……」

「マジですか?」

「妹は、支配系能力なら、覚醒時衝動にも効果があると思つてゐるようですが、とんでもない話です。ただでさえ、今はあのAランク幻影獣の脅威があるので、下手をすると首都が落ちます」

「そ、そうですか……」

本人には全く自覚はないが、この人がここまで言うんだから、俺の覚醒時衝動とやらは、それほど凄まじいんだろう。
じゃあ、やっぱり、調律はなしか……。

「でも
え?」

「それでも、使いたい。もしくは使わなければならぬ状態になつたのなら」

「……」

「その覚悟があるのなら」「……」

「……」「……」

「使えるでしょうな、簡単」「

衝撃の事実だつた。

俺はすでに調律(メソテナス)を使えるらしく、しかも、使ってしまつと覚醒時衝動で首都を落としてしまひりし。

それでも使いたいなら、使い方は、瞳さんの妹(メソテナス)……こじも先生が教えてくれること。

……気のせいかな。俺、こじも先生に言られて調律の使い方を瞳さんに教わるつもりだつたと思うんだけど。

「ま、いいか

麗華さんにもしものことでもない限りは、むづ俺も使う氣ないし。

「ところで、悠斗君。この首都橋について、何か知っている」とほありますか?」

「知つていることですか?」

首都の動脈で、夜景が綺麗で、料金が高いことくらいか。
ドライブ中に告白したカツプルが幸せになれるとかいつた類の伝説は、聞いたことないしい。

「例えば、BMP能力者に関する」ととか……

「あ!」

そのヒントで思い出した!

超有名な話があった。これを一番に思い出さなかつたことが知れた
ら、また三村に馬鹿にされるくらい……

「『首都橋の魔女』ですね！」

「そうです。良く知っていますね」

瞳さんは褒めてくれるが、もちろんリップサービスだ。
むしろ『今まで思い出さなかつたのか、こいつ』とか言われても、
不思議ではない。

誰でも知ってる話だ。

「10年前、首都橋に強力な幻影獣が突然現れた。急なことだつた
ので、クリスタルランスしか現場に向かえなかつた。当時のクリス
タルランスも、すでに最強と呼ばれていたけど、その幻影獣を倒す
ことはできず引き分けるのが精いっぱいだつた」
俺の知る知識を披露してみる。

クリスタルランスが任務に失敗……まあ、失敗とも言い切れないと
思うけど、成功しなかつたのは、この時だけだつたって言われてる。
「でも、それが、一体……」

と、ここで（俺にしては珍しく）閃くものがあつた。

「まさか、首都橋の魔女の正体つて、ガルア・テトラだつたんじや
！？ そうか、クリスタルランスにとつて、やつは因縁の相手！」
ここに連れて来てくれたのは、その辺の事情を踏まえて、あのAラ
ンク幻影獣はクリスタルランスが倒すという決意を語つてくれるつ
もりに違ひない。

なんて、頼もしいんだ！

「ふつ

へ。

「うふふ……。悠斗君つて、こんなに面白い子だつたんですね」
と、美貌に不釣り合いな無邪気な顔で、瞳さんがコロコロ笑う。
といふが、前を向いて運転してください。

「あ、あの、なんか間違つてましたか？」

一応、全部、人から（ソースが三村といつどいろこ、一抹の不安はあるが）聞いた話なんですが。

「そうですね。今のは、三つの間違いがあります」と、三本指を立てて語りかけてくる瞳さん。もう、完全にこちらを向いている。なのに、運転に危なつかしいところがまったくない。

……ひょっとして、これもBMP能力か？

「まず、一つ目。クリスタルランスしか対応できなかつたのは、急襲だつたからではあります。同日、同時に、もう一つの大事件があつたからです」

「大事件？」

「剣麗華さんの覚醒時衝動です」

「な！」

なんですよ！

「BMP172であることはもちろん、剣首相のお孫さんですからね。国家治安維持軍が総出で確保にあたりました。首都橋の事件を無視したわけではないようですが。さすがの剣首相も孫娘の危機とあつては、冷静でいられなかつたようです」

「そ、それなら、なおさら、クリスタルランスも、そつちに呼ばれるはずじや……」

「当時の剣首相は、あまりBMP能力者を信用していませんでしたから

と言つて、よつやく視線を前に戻してくれる瞳さんだった。

「一つ目。引き分けではありませんでした」

一本指を折つて、二本指にする瞳さん。

「え？ 実は、勝つてたんですか？」

「逆です。敗北しました。それも完膚なきまでに」

「な

驚いた！

「クリスタルランスが負けた？ でも、メンバーは今とほとんど同じで……。いや、それどころか、10年前つていえば、ブレードウエポンが居たはずですよね」

「彼も負けました。剛も彰も光も、もちろん私も。クリスタルランスマンバー総がかりで、まったく歯が立ちませんでした」

「そ、それは……」

「一体、どんな化け物だつたんだろうか？」

「最後の三つめですが」

「あ、あの。その前に、首都橋に現れた幻影獣のことをもつと聞いてもいいですか？ クリスタルランスに勝つくらいなんだから、ガルア・テトラじゃないにしても、やっぱりAランク幻影獣ですよね？」

「それが、三つ目です」

「え？」

最後の一本の指を立てたまま、瞳さんが告げる。
でも、やっぱり、こちらを向いたまま運転できても、きちんと前を向いて運転するべきだと思つんですね。

「首都橋に現れたのは、幻影獣ではありませんでした」

「え？」

「覚醒時衝動を起こした、一人のBMP能力者だったのです」

決戦前夜

一週間はあつとこづ間だった。

色々やつても、効果は薄いといふことで、俺はカラドボルグの特訓に集中した。

具体的には、以前麗華さんに教わった練習方法（ロイヤルエッジを斬りまくる例のアレだ）を人工的に再現してもらい、延々とこなしていた。

その甲斐あってか、タイムは6分12秒まで縮まった。

訓練教官が言つには、なかなかの上達具合だそうだ。ああ、なんか久しぶりに褒められたよ。

あと、こども先生が（対策会議やらなんやらで、BMP管理局に呼び出された帰りに）授業でやつたところをかいづまんで教えてくれた。

曰く「悠斗君の成績で出席日数にまで穴が開くと、正直かなり厳しいから」だそうだ。しかも笑顔で言われた。

シャレにならん。

でも、ありがたかった。

ついでに、三村とエリカと峰が訪問して来てくれた。

曰く「澄空がいないと、張り合ひがない」（これは峰）

曰く「悠斗さんがないと、みんな寂しがつてマス」（これはエリカ）

曰く「やさみチーズフライが学食に復活したから、早く一緒に食べに行こうぜー」（これは三村）

そのあと、すぐに新月学園へ行こうとしたら、三村が「うそぴょーん」と言いながらった。なんてやつだ。
それはそつと。

帰り際に。

「冗談はともかく、早く出でこよ。おまえがいないと、やっぱり寂しいからさ」

と、三村が凄く絵になる顔で言い残していったのが気になる。凄く気になる。

病氣で長期療養している同級生に対するノリではないか。

「あのAランク幻影獣さえ撃退できれば、すぐにまた新月学園に通えるんだからな！」

誰に言ひ訳でもなく、突然堂々と宣言する俺。
別に頭がおかしくなったわけでもない（良くはないけど）。
ただ、少し不安になつただけだ。

「明日、だもんなあ……」

呟いて、休憩室のベンチに腰を下ろす。
ここは、BMP管理局の中層。俺が止まつている部屋の近くにある
休憩室だ。

関係者しか入れない中層にあるだけあって（という訳でもないだろうが）外層の待合室と広さや構成は同じながら、自動販売機が10台も置いてある。

しかも、うち5台は、なかなか個性ある飲料がそろっている上に、まるでつい最近設置されたかのように新しかった（というか、初めてここに来た日にはなかった気がするんだけど、気のせいだろうたぶん）。

明日は約束の7月24日。

ガルアは紳士的にも、ほんとに約束の日まで一切ちよつかいを掛け
てこなかつた。

「ついでに、これ以降もずっと来なければいいのに」
思わず、本音の漏れる俺。
と。

「それは困る。早く、あのAランク幻影獣を撃退しないと、いつま
でたつても悠斗君が新月学園に行けない」

「まあ、確かにそりやそつなんだけど……。つて、麗華さん…」

驚いて振り返る。

全く気配がなかつた（気配なんて読めないけどね）。

「お風呂に入つてた」

と、説明してくれる麗華さん。

確かに、風呂上がりのいい匂いがしてゐるし、少し上気した顔は、い
つ見ても完璧フェイスだった。

だが、ドライヤーもせずに、タオルでわしわし髪を拭いているのは
いただけない。あの髪のキューティクリルに傷でも付いたら、いつた
い誰が責任を取れると言つのだ！？

「私の髪の心配はともかく。悠斗君、元氣ない？」

「いや、ちょっと緊張してるだけだよ」

言いながら、立ち上がって自販機に向かう。

この2週間、ここで色々なドリンクを試したが、結局普通の微糖コ
ーヒーが一番おいしいと気付いた普通の俺は、麗華さんの分と二つ
買つ。

ありがと、と言しながら俺の隣に腰を下ろす麗華さん。

「明日は、前回と違つて、クリスタルランス初め上位ハンター達も
揃つし、私もそばで護衛する。前回よりも、むしろ安全」

「ああ、確かに」

後半部分が、また俺の悩みの種でもあるんですが。

とはいって、今日『念のための最終チェック』でこども先生が念入りに診てたけど、ほんとに麗華さんのBMP過敏症は治つているっぽいしな。大丈夫か。

「Jくつ……」

可愛らしい音を立てて、麗華さんがコーヒーを飲む。
俺も、プルタブを開けて……。

「ん……」「…………」

開けて……。

「つと……」「…………」

開けて。

「…………」「…………」

開かん。

「縁起悪いよなー。ほら、麗華さん。Jの缶コーヒー、開かないんだよな」「…………」

と、何も言わずに麗華さんは俺の缶コーヒーのプルタブに手をかけて。

開けた。

しかも、いつも簡単」。

「あれ?」「…………」

「悠斗君、震える」

言われて見てみると、コーヒーが小さな津波を起こしている。

俺は黙つて、缶コーヒーを隣に置いた。

格好悪いな。

3割以上の人人が、幻影獣のせいで天寿を全うできない、この「」時世。俺の知り合いで、犠牲になつた人は、一人や二人じゃない。俺も、ある程度の覚悟はできていたつもりだった。

死ぬかどうかも分からぬ、しかもたくさんの人々に守られているこの状況で怯えるなんて。

「悠斗君、ひょっとして怖いの？」

「たぶん……」

今さら、「まかしようもない」ので、そう答える。
こんな俺を見て、麗華さんはどう思うだろうか？
ほんとは、怯える麗華さんを俺が慰める、くじけじゃないといけないのにな。

「悠斗君、実は私は、死ぬのが怖いという感情が良く理解できない」「へ？」

「昔は分かつてたと思うけど、今は分からない」
あまりの衝撃的な話に、一瞬手の震えを忘れる俺。
「だから、どうすれば悠斗君の恐怖を取り除けるのか、分からない」「い、いや、それは……」

そんなことより、今の麗華さんの話の方が気になる。
ひょっとして、今、物凄い大事な話をしてるんじゃないだろうか？

「れ、麗華さ……」

「ソーデウエポンも、意外と分かつてない」

麗華さんに話しかけようとした俺のセリフが、女性の声で遮られる。
同時に、柔らかな感触に抱きとめられる。

「悠斗君を慰めるには、お姉さんのふくよかな胸に決まつてこる」
聞き覚えのある声と言ひ回し。

『お姉さん』といつセリフで一発でわかる。

というか『悠斗君』と限定するのと『ふくよかな』といつ修飾語は抜いてほしい。なんとなく。

「アローウエポン？」

「お久しぶり」

麗華さんの問いかけに返答する柔らかい一つのふくらみ……もとで、一つのふくらみを俺の後頭部に押し付けてくる女性。

「あ……茜嶋さん？」

「違うコトコト。お姉さんのことはお姉さんと呼ばないといけない。

または、光ネエとか」

後頭部から胸を離し、俺を自分の方に向かせ、本人は眠そうだが目の覚めるような美貌で俺の顔を覗き込みながら言う光さん。

「い、いや……でもですね……」

「やつぱりコトコト可愛い。ぎゅーってしたい」

最後まで話す前に、ぎゅーってされた。正面から。

「だから、飛ばしすぎやいうたやる、光！」

俺をぎゅーっとしていた光さんの脇を抱えるようにして持ち上げる女性が現れた。

猫のような勝気な瞳が印象的な女性。

その横には、俺の軽いトラウマになっている偉丈夫もいるが、この二人の前では、さすがに影が薄い。

「飛ばしすぎてない。むしろ、スロースターター」

マジか！

「スロースターターや、ないわ。ほんまにもう。ごめんな。悠斗君に剣さん。光はちょっと変わりもんでなー」

「いや、確かに女性の胸が男性の落ち着きを取り戻すといつのは聞いたことがある。私も勉強になった」

真面目な顔で答える麗華さん。

つて、それは麗華さんもギョーカとしてくれるところがどうか!?
いや、そんな」とより。

「犬神さんと臥淵さん……でしたよね。なんで、ここに?」

「いや、蓮に呼ばれて打ち合わせに来たんだがな……」

身長2メートルはある大男が、頭を搔きながら居心地悪そうに咳く。

ちなみに、今日はハンマーを持つてない。でも怖い。

「剛と私は、居てもあんまり役に立たないから、ぶらぶらしていいと瞳に言われた。困ったもの」

答えたのは光さん。それは、ほんとに困ったもんですね。

「あ、ウチは違うで。ただ、剛は放つておくと色々危険やから監視役や。……最近は、光の方がもつと危険やけど」

最後、こいつと付け加えた。俺も確かにそう思ひ。

「それより、おかしいのはおまえだ。たかだか大規模戦闘ごときで何をビビッてやがる?」

と言う臥淵さん。

今の俺にとつては、それより怖いのは麗華さんくらいしかいないんですけど。

「確かに。さつきはラッキーとばかりにギュッとしたけど、勇敢で強くてちよつとクールなコトコトが幻影獣との戦闘で怯えるなんて考えられない」

続くのは、光さん。

……それは、いつたいどこのコウトくんなんじょつか?

「つたく。分かつてへんなー、一人とも」

遮るのは犬神さん。

「おお、分かつてくれる!」

「悠斗君は怖がってるわけやあらへん。自分のせいでのみみんな

を巻き込んだのが心苦しこんなや。」

「…………は？」

「そつか。コトコト、優しい」

「つたく、相変わらず損な性分だな、おまえは
え？ え？」

なに、この『口下手だけど、根は優しいナイスガイ』的な扱いは?
「じめん、悠斗君。私は、そこまで気がつかなかつた」

と信じてしまう完璧美少女。

……なんだか俺も、実はそうだったような気がしてきた。

「つたく！ いいか、悠斗」
臥淵さんが、語りかけてくる。

「BMPハンターってのは、幻影獣と闘うのが仕事だ。それで金も
出るし、生きてこる意味も見いだせる。大口の闘う場所を用意して
やつたんだから、おまえは感謝されこそすれ恨まれる道理はないん
だぜ」

圧倒されるような迫力はそのまま、諭すような口調で話す臥淵さん。
「おまえは、いつも通り派手に暴れまわりやそれでいい」
いや、いつもそんなに暴れてないですが。
あ、でも、暴れると言えば。

「あの…………ちょっと聞いていいですか？」

「何、コトコト。お姉さんに分かることなら、なんでも答える」

「『首都橋の悪魔』のことについて、聞きたいんですけど」

言つた途端に、三人が固まる。

「しゅとばしのあくまがどうかしたのか？」

なぜか、突然棒読みになる臥淵さん。

「い、いや、緋色先生のお姉さんに『首都橋の悪魔』が実は幻影獣
でなく覚醒時衝動を起こしたBMP能力者だったって聞いて。今、

「どうしてのかなーって」

明日、助けに来てくれたりすると助かるなー、と思ったのは内緒だ。

「悠斗君、それは本当の話なの?」

珍しく口を挟んでくる麗華さん。

無理もないが、同時に覚醒時衝動を起した運命の相手だもんな。

「だとしたら、私も聞きたい」

真剣な眼をする麗華さん。

……若干ジヒラシーダ。

「……と言つてもな、うちらもリーダーが話した以上のこととは知らんねん。当たり前やけど」

「そうだな。俺らが総がかりで歯が立たなかつた化け物だつたってこと以外には、特にないな」

なんだか氣まずそうな臥淵さんと犬神さん。

と、光さんが俺と眼を合わせ、

「強かつたよ、とても。悠斗君と同じくらい」と言った。

……それは、本当に強かつたのか?

BMP管理局籠城戦

『7月24日10時29分・エントランス』

「本当に、入れるとは思いません、テシタ」

緊張した面持ちで話しているのは、本郷エリカ。

「別に驚くこともないんじやないか。峰はもちろん、俺だって一応、BMPハンターだ」

と返すのは、三村宗一。

「だからと言つて、BMPハンターではないエリカ君を通していい理由にはならないと思うがな」

渋い顔をしているのは、峰達哉。

そして、周囲には、BMP管理局のエントランスを埋め尽くすほど のBMPハンターたち。

そう。ここは、伝説のAランク幻影獣率いる幻影獣軍と、BMPハンター達の決選当日の、BMP管理局だった。

6月の第5次首都防衛戦と同じく、ハンター達が次々と集まって来ている。

峰と、一応BMPハンターの三村が馳せ参じたのも、じく自然なことだった。

しかし、いくら新月学園の生徒とはいえ、BMPハンターでないエリカが、これから戦場となるBMP管理局に入れたのはおかしいと言わざるを得ない。

普段勤務している職員も、戦闘員でない者は最低限の人員を残して避難しているのだ。

もちろん、エリカも最初から中に入るつもりではなかつた。

戦場に向かう三村と峰の見送りと、うまく会えれば悠斗と麗華を激励しようと思つてやつて来たのだ。

しかし、BMP管理局が見えるところまでやつてきた時に、
『やつぱり、私も一緒に闘いたいテス！』

とエリカが言いだしてしまった。

最初は反対していた三村と峰だが、結局は押し切られるよつた形でエリカの入場に協力することになったのだ。

と言つても。

『えーと、この娘、俺たちの付き添いなんです。一緒に中に入つてもいいですか？ こいつがいないと、調子が出なくてー』

という小学生以前の言い訳をしただけだったのだが。

入れてしまつたのだ。

「ひょっとして、俺、演技の才能あんのかな？」
「というより、いちいち厄介事に構つてている暇がなかつただけのようにも見えたがな」

三村の軽口に、冷静に返す峰。

彼の言うとおり、受付は、まさに戦場のような有様だった。普段から受付をやつしていると思われる女性はともかく、明らかに増援で連れて来られたような男性陣は完全に眼がイッていた。おそらくは、今日だけでなく、ここ数日は本来の業務で徹夜続きたつたオーバーワーク気味のホワイトカラーさん達なのだろう。お疲れさまとしか言ひようがない。

「それにしても、凄い数デスねー」

人気のある職業とはいえ、特殊な上に高度な適性が要求されるのが

BMPハンターである。

そのBMPハンター達が、まるで初売りの福袋に群がるようにして次から次へとやって来ていた。

とはいって、受付で配られているのは福袋の整理券ではない。むしろ、その真逆のものだ。

「さてと。俺は……G - 3!? なんで!？」

受付で渡された小さな紙を見て、三村が叫ぶ。

「俺も、E - 4だ……」

「わ、私もH - 3デス！」

続く、峰とエリカ。

なんのことか分からぬと思うので、説明すると。

このBMP管理局は、大きく、内層・中層・外層に分けられている。各層は、さらに細かく分けて。

内層：A～Cブロック。

中層：D～Iブロック。

外層：J～Oブロック。

となつていて。ちなみに、1～5の数字は階を表す。5は屋上だ。つまりは、G - 3なら中層Gブロックの3階。E - 4なら、中層Eブロックの4階となる。

それが、そのハンターが防衛を受け持つ区画という訳だ。

そして、彼らが何に驚いているかと言つと。

「俺らみたいな新人を中層に配置するなんて、何を考えてるんだ?」

「てつきり、外層で壁役をさせられるものだとばかり思つてたデス」という、三村とエリカの発言が答えた。

一般的な建物の例に漏れず、この建物も中に行くほど重要な施設となつてている。

特に内層はBMPハンターでも基本的に立ち入りができず、Aブロ

ックになると、非常時以外は誰も入れないショルターのようになつている。

今回の最重要人物である悠斗も、Aブロックに保護されている。

つまりは、内層に近くなるほど、実力上位の者が守るのが普通の考え方なのだ。

「いや、逆にこの方が理に適つていいのかもしれない」

一人、別の意見を言う峰。

「一番敵と戦わないといけないのは外層だ。そこに上位ハンターを集めておいて、主導権を握る。俺達は外層を潜り抜けてきた幻影獣を足止めするのが仕事だ」

「なるほど、時間稼ぎか」

納得した三村。

「じゃあ、ひょっとして内層はあんまり人がいないんでしょうか？」

「可能性はあるな。幻影獣に戦術なんかない。わざわざ戦力を出し惜しみする余裕も必要もないだろ？」「

「ナラ、私たちも、悠斗さんの傍に行ける可能性がありマスね！」

勢い込んで言うエリカ。

しかし。

「あ、す、すみません……。勝手なことしたら、他のBMPハンターの皆さんに迷惑デスよね？」

恥じ入るように小さくなる、真面目なエリカ。

と。

「いいんじゃないかな？」

三村が答えた。

そこには、普段の、どこか残念な一枚目半の雰囲気はなかつた。

「少なくとも、俺は、澄空を助けに来ただけのつもりだけな」
むしろ、不思議な安心感を感じさせる不思議な表情だった。
澄空悠斗言つところの『三村の兄貴モード』である。

そんな三村に、不覚にも見惚れてしまうエリカだった。

ちなみに、峰は実際に戦闘が始まった際の脳内シミュレーションで頭がいっぱいだった。

『7月24日12時55分・J5』

「凄い数やなー」

BMP管理局brookJ5。

すなわち外層の屋上部分で、犬神彰は周囲の空気とまったく相容れない暢気な声を出した。

どういうところが相容れないかというと、Aランク幻影獣ガルア・テトラが指定した開戦時刻は7月24日13時であり、しかも、もう視認できる距離にまで幻影獣の大群が来ているからだ。

「第5次首都防衛戦の時より多い。5倍くらい」

犬神に輪をかけて場の空気に相容れないのは、茜島光。本人は眠そうだが、眼の覚めるような美人の射手だ。

と。

『屋上に展開中のBMPハンターに告げます』
全館放送で、オペレーターの声が響く。

『敵幻影獣軍が接近中です。遠距離系BMP能力者は、敵が射程距離に入り次第、各員の判断で攻撃を開始してください。それ以外のハンターは護衛をお願いします』

「と言つても、もう射程距離に入つてるけど」

「マジかいな！ 100キロはあるで！」

淡々と告げる茜島のセリフに犬神が驚く。

幻影獣達は、まだ豆粒くらいにしか見えないくらいの距離だ。
とはいって、さすがに100キロはない。

「彰、ちょっと離れてて」

右の手のひらを幻影獣に向かつて突き出す仕草をする茜島。

「よ、よっしゃ」

犬神が離れる。

「^{レイ}天閃」

瞬間。

茜島の手のひらから、眩い光が現れる。

光は光線となり、一瞬で幻影獣軍に到達し。

10数匹を次々と貫通し。

敵の中央付近で、爆発した。

「うん。いい調子」

眠そうだが、上機嫌な声で言う茜島。

「い、いや、『いい調子』いつか……」

対照的に、犬神は眼を白黒させている。

「2、30匹は、消し飛んだんじゃないかな……」

「信じられねえ……」

「あれば、クリスタルランスの射手『アローウエポン』か……」
もちろん他のBMPハンター達も、開いた口がふさがらない。

「今なんなん？ 光！ あんなゴツツイん、初めて見たで！」

「今日は調子がいいから」

「いや、調子とかそういう次元には見えへんのやけど……」

「あと」

「ん？」

茜島は、眠そうな眼を犬神に向けて。

「悠斗君のために戦うのは、今日が初めてだから」

言つた。

「……それで劇的に強くなれるような引き出しがあんのは、あんた
くらいや……」

呆れたように呟く犬神。

「もう一撃」

言つて、茜島が天門レイを放つ。

そして、敵軍の中央付近で爆発。

ようやく他のBMPハンターの中にも攻撃を始められる者が現れ出
したが、茜島の攻撃は、次元の違う破壊力だった。

敵からの攻撃も飛んできているが、こちらに届く前に阻まれる。
建物 자체のシステムに加えて、守備的なBMP能力の持ち主も揃っ
ているのだ。

初手は、完全に人間側が優勢だった。

「でも、数が多い……」

「まあ、蓮も最初から、ここでケリがつくとは思とらへんかったや
ろうけど」

一人の言つとおり、視認できる敵の数は増え続けていた。

「別に私は乱戦でも、接近戦でも困らないけど」

「周りが困るつちゅうねん」

一応ツツ「コんだ後で。

「管制室！ 聞こえとるか」

『は、はい！ 聞こえてます』

犬神の呼びかけに、さきほどどの全館放送の声の主が答える。

ここで少し説明を。

このBMP管理局の放送システム、管制室から全館に放送できるのはもちろん、各ブロックから管制室や他のブロック間へ『放送』でできる。

もちろん電話は使わない。

さきほど犬神がやつたように、伝えたい場所を念じながら、その場で発言すれば、伝わるのだ。

通信系BMP能力を応用したシステムである。使用には若干の訓練とセンスがいるが。

説明終わり。

「ここで喰いとめるのは無理やー。適当なところで切り上げて他のブロックの応援に言つた方がええから、指示してな」

『は、はい、了解しました！』

相手がクリスタルランスの『電速^{パルス}』であることが分かっているのか、緊張した声で答えるオペレータ。

「悠斗君のところまでは、行かないよね？」

「さすがにいつも、そこまではないと思つけど」
言いながら、犬神も、そして茜島も、この戦いが簡単には終わりそうにない雰囲気を感じていた。

『7月24日13時10分・管制室』

管制室オペレーター・志藤美琴（22歳独身）は後悔していた。
勢いに流されて、電速^{パルス}の依頼に了解したことだ。

なぜかというと、今現在、この管制室には作戦行動を司る者がいない。

複合電算・離鳥結城が病欠中なのは仕方ないとはいえ、作戦担当が人事異動の不手際で不在なのは、もう完全に組織のミスではなかろうか。

そもそも、この組織は局長に頼りすぎなのだ。

それは志藤も理解していた。

だが、その局長が。

『当日は私は現場に出ます。国家維持軍に指揮を依頼してはみたのですが、軍としての構成が違すぎるから力になれない、とのことでした。まあ、私もそう思います』

と言つとは思わなかつた。そして、ほんとに当日になつても作戦担当の人間がいないう状態になるとは思わなかつた。

「こちら、管制室。Aブロック、聞こえますか？」

とはいへ、一応、頼つてみる。

『はい。どうしました、志藤君？』

「城守局長、どうやら建物外で決着をつけるのは無理のようです。乱戦に備えて、配置ブロックの変更に関する指示の依頼が来ています」

『ああ、やっぱり、そうですか』

いつも聞くだけで安心する、確かな実績と実力に裏打ちされた落ち着きのある声。

だが、今日だけは別だつた。

『仕方ありませんね、離鳥君に少し無理をしてもらいますか。セッティングはしておきましたよね？　あとは、管制室で対応してください』

『え？　え、でも？　結城ちゃん……離鳥さんには手伝つてもうつじても、今、ここ、オペレータしかいませんよ？』

『問題ないです。非常事態ですから、規則違反に問われることはありませんよ』

『いえ、心配なのは規則だけではなく……』

実力の方である。

当たり前だが、オペレータと作戦司令では求められる能力がまったく違う。程度でなく種類が違う。

『嫌な予感がするんですよ、今日は、やはり私は現場にいるしかないようです』

『で、でも……』

『頼みましたよ、志藤君』

と言つて、切れた。

しばらく呆然とする志藤。

そして、周りを見る。

仲間のオペレータも、皆同じ顔をしていた。

一斉に、頭を抱える。

「ううそお……」

「良くない状況ですね」

管制室との通話を終えて、イケメンな上に偉い（ある程度の地位だとは思つてたけど、まさかBMP管理局の局長だとは思わなかつた。）といふか、なぜ誰も教えてくれないんだ？）男、城守さんは呟いた。

「良くないですねえ」

とりあえず返答する。

別にお追従した訳ではない。実際に、良くない様子が丸見えなのだ。

少し、状況を説明しよう。

この俺、澄空悠斗は、BMP管理局Aブロック、即ち最深部で保護されていた。

Aブロックは、一言で言えばシェルターだ。

想定している敵は、あくまで幻影獣だが、直径100メートルほどの円筒型の空間は、核にも耐える壁で覆われている。

扉は一つ。あそこから、中庭であるBブロックに繋がつている。

そして、どういう訳か天井が高い。20メートルくらいある。

その壁面、10メートルくらいの所に、50近い数のモニターが掛つてしているのだ。

どういう用途で設置したかは知らないが、とにかくあのモニターで、管理局内の様子は手に取るようになつてている（でも、制御は管制室にある）。

そのモニターの一つが、現在戦闘中の屋上の様子を映し出しているから、良くない状況なのが俺にも分かるという訳だ。

説明終わり。ああ、疲れた。

「光と彰も良く闘っていますけどね」

「いや、あれは、獅子奮迅……というか、傍若無人といふではないでしょうか？」

城守さんの低すぎる評価に反論する。

カメラが捉えきれないほどの速度で走りまわる（というか実際に捉えてないんだけど、所々に電気が走った跡と横たわる幻影獸の死骸があるんで分かる）犬神彰さんに。

すでに乱戦になっているのに、お構いなしに光線を撃ちまくる（でも、なぜか誤射が全くない。どんなカラクリなんだろうか？）茜島光さん。

強い。

そして、凄い。

あんなのが5人もいるんじゃ、クリスタルランスが最強というのも頷ける。

でも。

「押されてる」

麗華さんが言う。

そうなのだ。

あの一人がいくら強くても、取りこぼしはある。

無法射撃区間を潜り抜けた幻影獸達が、次々、屋上から建物内部に侵入を始めていた。

ちなみに、ここAブロックにいるのは、俺と麗華さんと城守さんだ。最後の皆の割に人数が少ないのは、ここまで来られたら負けという認識なんだろ？。

とはいって、麗華さんがいる限り、ここが一番戦力的に安全な気もするけど。

「麗華さん、調子はどうですか？」

「問題ない」

城守さんの問い合わせに答える麗華さん。

今日の午前中にも、念のため、こじも先生が最終検査をしていたが、特に問題はなかったらしい。

でも、気のせいか。

なんか、顔色悪い気がするんだけどな……。

「悠斗君の護衛が最優先ですが、そもそもここまで攻められれば負けです。麗華さんには状況によっては、出撃してもらうことになると思いますので」

「ん。分かつてゐる」

城守さんに心える麗華さん。

なるほど、麗華さんがここに居るのは、俺の護衛であると同時に切り札でもあるのか。

でも、できれば、麗華さんが前線に出る事態にはならない方がいいんだけどな。

『さよ、局長、Z4ブロックが破られそうですね！』

さきほども聞こえた、オペレータさんの声が聞こえてくる。

「周辺のブロックから増援を。防御の薄いところを使わないようバランスを取りながら」

『バ、バランスと言われても……。あー、M3もまずいです！』

「雛鳥君の指示通りに！ 中層では足止めが精いっぱいです。なんとしてでも外層で優位に立つてください！」

『は、はいーー』

テキパキと指示する城守さんと、なんだか泣きそうな声のオペレーターさん。

しかし。

なんで、この人、ここにいるんだ?
管制室に行つた方がいいと思うんだけど。

『7月24日14時24分・管制室』

戦いが始まつて一時間ほど経つただろうか。

管制室では、オペレーター・志藤美琴（22歳独身、でもそろそろ彼氏は欲しい）は、しどろもどろになつていた。
ブロックO-1で闘つている、非常に強力なBMPハンターに問い合わせられているのだ。

『幻影獣どもは一通りは片付いたんだがな。気が付いてみると、仲間のBMPハンターがいない。ひょっとしたら何人か巻き込んだような気もするんだが、それにしちゃ死体もないんだよな』

通信機から聞こえてくるのは、野太い男の声。

どう聞いても冗談を言いそうな声ではなかつたが、声の主の素性を知つている美琴からすれば尚更だつた。

「え、えーとですね……」

口籠る美琴。

もちろん事情を知らない訳ではない。
が、はつきりと言つのが怖いだけだ。

それはそうだろう。

最強チーム『クリスタルランス』の『怪力無双』臥淵剛に向かつて、誰が『あなたの闘いぶりが恐ろしすぎるので、巻き添えを恐れてみんなO-1ブロックから避難しちゃいました』などと言える
というのだ。

だが、ここは戦場。情報は可能な限り伝えなければならない。
たとえ、さつきからなんだか美琴にばかりやつかいな通信が入って
来ているような気がしてもだ。

「ほ、他のブロックは押され気味でして……。O・1ブロックは臥
淵さん一人いれば大丈夫そうだからと、みなさん別のブロックの応
援に……」

『なんだと！？』

「『ごめんなさい！』

少しオブラーートに包んだ状況報告を一喝されて、美琴は縮こまる。
『ということは、これからは周りに氣を使わないで、全力で暴れら
れるって訳だな！』

「……あ、あれでも、周りに氣を使ってらっしゃったんですね……」

衝撃的なセリフに、思わず失礼な言葉を発する美琴。

それはそうだろう。

まるで漫画に出てくるようなバカでかいハンマーを振りまわして、
幻影獣を吹き飛ばしていく様は、モニター越しに見ても、どっ
ちが怪獣だか分からなかつた。

といふか、間違いなく臥淵の方が怪獣に見えた。

『俺は全然問題ないから、もつとこっちに回せ。といふか、このま
まだと鈍っちゃう』

『りょ、了解でーす……』

力なく返して、通信を切つた。

疲れる。

クリスタルランスの方々の相手をするのはとにかく疲れる。

「城守局長ー。早く帰ってきてくださいー……」

力ない美琴の呟きを、聞こえなかつたことにする他のオペレーター
ズだつた。

『7月24日15時37分・H-3』

H-3ブロックには、休憩室があつた。
そして、金髪のハーフっぽい少女・本郷エリカは、その中にいた。
別にサボっている訳ではない。

ただ、中に入れてしまつたとはいえ、見る人が見るとエリカのBMPが120に達していないのが分かるらしく、ここで大人しく待機しているように命令されたのだ。

「でも、あのリーダーさんらしきヒト、いざとなつたら闘つてもらうかもしけナイとも言つてましたヨネ」
むん、とばかりに気合いを入れるエリカ。

正確には『君が闘わないといけないくらい状況が悪くなる可能性もあるから、できればその前に逃げる』と言つていたのだが、まあ、このくらいの記憶の改竄は起こらないこともない。

「でも、このブロック、意外と大丈夫そうなんデスよね」

休憩室の中からでは外の様子は分からぬが、時折スピーカーから聞こえてくる報告を聞く限りでは、なかなか優位に闘えているブロックらしい。

まあ、優勢なのはいいことだ。峰も『どうせ最後は乱戦になるから、万一澄空に何かあつた時のためにも、序盤は体力を温存しておいてもいい』と言つてたし。

これだけメンバーが揃つた闘いで、前回のようになあの少年の力になれるとは思えないが。

と。

「あー、疲れたわ」

乱暴にドアが開かれる。

現れたのは、猫のような眼が印象的な活発そうな女性。なかなかに目立つ風貌だが、その印象が吹っ飛ぶくらいに強烈な力を感じる。

かなり高ランクのBMP能力者だ。

戦闘で高揚しているのか、周囲に『えるプレッシャーを隠そう』といわない。

といつても『つこうかり』抑え忘れた麗華ほどではないが。

そういうえば、なぜか澄空悠斗からは、この種のプレッシャーを感じたことがない。

覚醒した当初は力を抑える術を知らない『え』、187もBMPなのだから抑えきれるはずもないのだが。

緋色先生に聞くと『控えめなのが悠斗君のいいところよね』と言つていた。

「そういう問題では、ないと思つの『え』

「ん？」

しまつたと思うHリカ。

つい考えていることを口に出してしまつたらしい。

どう見ても今まで散々闘つてきてちょっと休憩に立ち寄つたような眼の前の女性からすると、たるんでいると思われても仕方がない。

「自分……」

「は、はい『え』……」

猫のような眼をすぼめて見つめてくる女性。

尋常ではない迫力だった。

「めつちや、可愛いな！」

「ハイ？」

今度は、エリカが疑問符を浮かべた。

「な、な。その金髪本物やう？ キラキラしとるもんや。うちも一時染めようと思つたけど、なんかうまく染まりそうになかったからやめといて正解やつたわ。でも、顔の線は柔らかい気がするし、言葉もうまいなー。ひょっとしてハーフさん？」

「は、はいデス。父がこの国の生まれデスが、母が違いまス」

「そつかー。あ、勘違いせえへんといてな。別に変な好奇心とか偏見とかやないんや。ただ、うち、可愛い子がめつちや好きやねん！」

「そ、そデスカ……」

それはそれでどうかと思うが、エリカは返事をした。

「光も、昔は、それはそれは美少女やつたんやけどなー。今は、どつちかというと美人さんやからなー」

「そ、そデスカ……」

それのどこが問題なのかは分からぬが、エリカは返事をした。だいたい、いきなり光と言われても誰のことか分からぬ。光という名前で知っているのは、アローウエポンくらいだ。

「名前聞いてもええかな？ あ、ウチは全然怪しいもんちやうから。
電速の犬神彰言^{バルス}うんや」

「あ、ハイ。私は、本郷エリカと言いまス」

傍から見ていればかなり怪しいのだが、見た目ロイヤルな割に素直なエリカは簡単に返事をしてしまう。いや、それよりも。

「つて、電速^{バルス}つて、クリスタルランスの方デスか！？」

「わ、知つてるんや。嬉しいわー！」

知らないはずがない。

クリスタルランスは、麗華と同じくくらい有名なのだ。

チームとしては紛れもなく最強。

個人でも、アローウエポンと引退したブレードウエポンは、今でもBMPハンターランクが麗華より上なのである。

「ア、じゃあ、ひょっとして光つテ……」

「そや。アローウエポン、茜島光。今でもウチ的には全然ストライクゾーンなんやけど、最近は悠斗君のこじばっかりやからなー」「悠斗さん？」

これは、間違いなく澄空悠斗のことを言っているのは分かった。しかし、なぜ、一か月前に覚醒したばかりの澄空悠斗とクリスタルランスに接点があるので？

と。

『え、援助要請です！ G・3ブロックが非常に危険な状態です。周辺のブロックはできるだけ応援に行ってください！』

さつきから良く聞く、常時慌てているような若い女性の声での放送が聞こえてくる。

「なんや、もう、中層にまで来とるんか？」

少し緊張感を取り戻した、犬神。

そして。

「G・3！？」

思わず叫ぶエリカ。

三村が配置されたブロックだ。

一応仮にも、三村はBMP120を超えているから、おそらく戦闘配置をされているはずである。

「ん？ G・3がないしたん？」

「友達が……、同じ学校の生徒が配置されてるんデス」

答えながら、すぐにでも飛びだしたい衝動に駆られるエリカ。

澄空を助けにきたつもりだが、良く考えれば、三村が一番危なつかしい。

彼に比べれば、たとえ能力を使いこなしていないにしても、悠斗の方が妙な安心感がある。

しかし、前回の第五次首都防衛戦とは状況が違う。

この状況で自分が飛び出していつても、はたして役に立つだろうか。

「友達かー。それは心配やな。なんなら、ウチと一緒に行こうか？」
「エ？ いいんデスか！？」

思わず申し出に驚くエリカ。

「ウチは今は遊軍扱いやし、誰も文句は言わんやろ」「で、デモ……。私は邪魔ジヤ……」

「なに、言うとんねん！ ウチは可愛い子に応援されると5割増しの実力が出るタイプなんや！ というか、エリカはんが来てくれんと、うち、光の方に行つてまうで。全然、応援を必要にせんタイプやけど！」

「そ、ソデスカ……」

その応援の決定方法には多大な疑問が残るが。

エリカはとりあえず、安心した。

この人なら、きっと三村を助けてくれる。

……だから、すでに死んでるとかは、なしにして欲しい。

『さよ、局長ー！ Dブロックに幻影獣が侵入し始めますー！』

緊迫したオペレータの声が聞こえてくる。

さつきから、この声の人ばかり通信してくるけど、他にはオペレータ居ないのか？

「これは……まずいですね」

円筒型の空間の壁面に掛けた50ほどモニターの一つを眺めながら、城守さんも同意していた。

あの『Dブロック』は俺も利用したことがある。自由訓練場だ。巨大な体育館とでも言つべき構造で、BMPハンターが自由に訓練できる。

俺もこの2週間で何度も利用し、それなりのイベントもあったが、紙面の都合でここでは省略。

まあとにかく、そのDブロックが押されていた。

もともと外層で可能な限り殲滅するというプランなので、中層は若干BMPハンターの層が薄い。

それに加えて。

「凄い数」

と麗華さんが言つようこそ、Dブロックは物凄い数の幻影獣が押し寄せて来ていた。広い分、収容キヤバがあるので。

その分、BMPハンターも多いのだが、仮にあそこが抜かれた場合は、あの数が内層に飛び込んでくる。

「仕方ありませんね……。いいは……」

『きょ、きょくちょーー。』

城守さんが何らかの作戦を思いついた時、さつきのオペレータさんが、さらに焦ったような通信をしてきた。

あまりに焦つてるので、ひらがなになつてゐる！

「少し落ち着いてください、志藤君」

落ち着いている城守さん。ふむ、志藤さんつていうのか。

『N-1ブロックに巨大幻影獣が出現しましたー！ BMP349

です！』

「そ……！」

349！？

「Bランク幻影獣！？」

「可能性はありましたが……、まさか本当にBランクを連れてくるとは……」

俺ほど驚いてはいないが、それでも衝撃を受けている様子の城守さん。

確かに、ガルア・テトラがAランクである以上、AランクがBランクを従えていてもおかしくはないのだが……。

モニターに目を向けると、確かに巨大な幻影獣の姿を映し出しているモニターがある。巨大な亀みみたいなやつだ。

「配置的に、クリスタルランスの誰かを向かわせるのは難しいですね……。とはいっても、それ以外でBランクに対抗できるとなると……」

考え込む城守さん。

「志藤君」

『は、はい！』

「その巨大幻影獣……そうですね、『タートル』とでも名付けて

か

『は、はい』

まんまなネーミングだ。

「そのタートルには、あまり積極的に係らないよう各ハンターに伝えてください。無駄に戦力を減らしたくない」

『で、でも、このままだと、タートルが内層に…』

「問題あつません」

断定するような城守さんの返事を聞いて。
嫌な予感がした。

「麗華さんに相手をしていただきます」

麗華さんの力を疑っている訳じゃない。
といふか、最強だと思つてゐる。

でも。

嫌な予感がした。

光速のライバル

『7月24日15時45分・G-3』

三村達は苦戦していた。

元々、幻影獣達は複雑な戦術なんか考えていらない。

行きやすいところを攻め、行きにくいところでも気が向けば攻める。結果、バランスを取つて布陣していくも、ブロックによつて有利なブロック・不利なブロックが出てくる。

そして、G-3は不利なブロックだった。

「猪突猛進！」
システィムアクセル

超加速から続く連携攻撃・猪突猛進。

直線に加速して突撃するという単純極まりない技のため、確かに以前麗華が言つていたようにかわすのは簡単なのだが、これだけ密集してれば関係ない。

4体ほどまとめて、壁に叩きつけた。

闘いの喧騒を引き裂くような悲鳴を上げて砕け散る幻影獣達。

三村の猪突猛進は、本人のBMPが121といつ低BMPにしては、なかなかの威力だった。

加速した突進力と、槍に見立てた拳に発生させた力場ですり潰すという単純な技なのだが。

「ナイス！ ルーキー！」

誰が褒めてくれたのかは分からぬほど混乱した戦場だが、誰かが褒めてくれた。

単純に嬉しい。悠斗には、分からぬかもしれないが。

が。

「あいつは憎らしい！」

思わず叫ぶ。

睨みつけるのは、天井を開いた大穴。

G-4ブロックと呼ばれていた空間に、人を小馬鹿にしたような様子でフカフカ浮かびながら、こちらに向かつて矢のような遠距離攻撃を仕掛けてくる幻影獣ども。

幻影獣の攻撃で天井が吹き飛ばされ、G-3とG-4ブロックが繫がってしまったのだ。

しかも、悪いことに、遠距離系のBMP能力者達が早々にノックアウトされ（確認した訳ではないが、誰もやつらに反撃していないんだから、そんなんだわ）、撃たれるがままになっている。

「つて、うわ！」

氣を散らしたのが、まずかった。

何かに足をぶつけて、派手に体勢を崩した。というか、足が地面から離れた。

「やばー！」

普段ならござしづらず、これだけの乱戦の中では、格好的である。
そして、悲しいことに、空中では超加速システムアクセルは使えない。

「くそー！」

衝撃に備えながら、自分の運を信じて、地面に足がつく瞬間を待つ。

と。

眼の前に、一つ目の巨人のような幻影獣が立っていた。

「あ

死んだ。と思った。

一つ目の巨人は、三村の身長ほどもありそうな棍棒のような何か（黒く光る金属のようにも見えるが、たぶんあれも幻影獣の体の一部だ）を振り下ろしてきている。

三村も見たことがあるからわかる。

パワータイプに見える幻影獣は、実際にもだいたいパワータイプで、直接攻撃をくらうと、だいたい原型が残らない。

棍棒が振り下ろされる。

……。

「……」

「ふむ。確かにイケメンやなー」

「へ？」

思わずつぶつた眼を開くと。

そこには、天使様ではなく猫のような眼をした女性がいた。

オペラのヒロインにするよーに、三村を抱き支えながら、好奇の目で覗き込んでくる。

「はれ？」

いきなりの衝撃的な展開に頭が付いていかず、思わず間抜けな声を出す三村。

見ると、さきほどの一つ目の巨人は、10メートルくらい離れた場所で頭を搔いている。

「三村さん。大丈夫デスか！？」

最初にこちらを見ていれば、天国に来たことを疑わなかつただろう。金髪ゴージャスなのに健気なハーフっぽい少女、本郷エリカが駆け寄つて来ていた。

「あ、ああ。大丈夫」

エリカの顔を見て、少し落ち着いてきた。

(「この辺が悠斗と違うところだ。ふん）

どうやら、G・3ブロックの不利を聞いて心配したエリカが、この女性とともに自分を助けに来てくれたらしい。

悠斗を助けに来た自分が、同じく悠斗を助けに来たエリカに助けられているのは褒められた状態ではないが、それでも素直に助かつたと思つ。

にしても、この女性は一体？

「ちょっと待つといでな」

三村をポンと離すと、トントンと足踏みする猫っぽい眼の女性。

そして。

「電速」
パルス

視界から消えた。

比喩ではない。本当に消えた。

しかも。

女性が通つた（んだと思う）あたりにいた幻影獣が、バタバタと倒れていく。

そして、倒れた幻影獣は、例外なく、漏電したかのようにパリパリと電気を発していた。

「ま、まじか……」

三村は茫然と呟く。

この能力に聞き覚えがあるのだ。

「凄いデスねー」

同心円状に、物凄い勢いで広がっていく電気死体の渦を見ながら、これがどれだけ凄い能力なのか、いまいちわかつていのエリカが褒める。

そう、これは、凄いどころではない。

これは、クリスタルランス・犬神彰のBMP能力。

高速移動系最強と呼ばれる女性の力だ。

三村とエリカを中心として吹き荒れる、電気を纏った暴風雨。見る見るうちに、乱戦の一角に空白地帯ができてしまった（危なくて、味方も近づけないのだ）。

「つ、つええ……」

思わず呟く三村。

同じ高速移動系と言うのが恥ずかしいくらいにレベルが違う。互角なのは、最高速度くらいか。三村のは曲がれないが。

……それはともかく。

「やつぱり、あればどうしようもないよな……」

諦めたように呟く三村。

見つめるのは、天井の大穴の向こうから小馬鹿にしたように激しい攻撃をしてくる翼を持った幻影獣だ。

いくら犬神が強くても、遠距離攻撃の手段がない以上、あの距離に居る敵は攻撃できない。

あいつらさえいなくなれば、もつ少し落ち着いて戦えるのだが。

と。

「ウザいなー。あいつらー」

現れた時と同じくらい唐突に、犬神が傍に立っていた。

「うえ！ い、いつの間に……」

驚く三村。確かに、1秒前に、10メートルくらい先で電気を纏った幻影獣が倒れるのが見えたのだが。

「どや、エリカはん。ウチもなかなかやるやろ？」

そんな三村をスルーして、エリカに向く犬神。

「はいデス！ まるで、悠斗さんを見てじるようデシた！」

（いや、全然違うだろ）と思つ三村だが。

「いやー……。さすがに、あの子には負けるわ」

「？」

意外な反応をする犬神。

少し気になるが、三村にはそれ以上に気になることがあった。

この犬神という女性。

強さも実績もステータスも完全に雲の上の存在なのだが、なぜか、近い将来。

（俺のライバルになる気がするんだよなー）

という訳だった。

考え事をしていると、また宙を舞う幻影獣から攻撃が飛んできた。エリカを抱えて避ける三村と犬神。もちろんエリカを抱えたのは犬神だ。おのれ。

「エリカはんを抱けたのは役得やけど、あいつらはうざいなー」「表現に少し引っかかりを感じますけど、あいつらがうざいのは同感です！ どうします？ やっぱり他のブロックから応援を……」

すでにこの「ロックのBMP能力者が何回も呼んではいるのだが。

「やめとき。他のロックも、手一杯や」

「うちの方がやばいと思うんですが……」

「ま、そやな。そろそろ片づけよか」

あつさりと返答する犬神。

何か切り札でもあるのだろうか。電速^{パルス}が遠距離攻撃できるなんて話は聞いたことがないが。

「さて、エリカはん」

「は、ハイ！？」

「さつき聞かせてもらひたBMP能力『豪華絢爛』やけど」

「ハイ」

「……えー名前やわー。まあしく、ゴージャスなエリカはんにピッタリやわー」

「口説いてる場合じやないと思つんですが」

思わずツッコむ三村。

セリフだけ聞いていると和やかだが、実際は幻影獣の攻撃を避けて移動しながら会話している。

エリカを抱えているのは、やっぱり犬神だ。おのれ。

「やばやば。エリカはんがあんまりキュー^トやから脱線してしもたわ。改めて、エリカはん！」

「は、ハイ！」

「『豪華絢爛』^{ロイヤルエッジ}を使つてくれへんかな？」

「で、デモ、さつきも言つたヨウに、斬れないデスよ

「斬れんでええねん。いや、むしろ、斬れん方がええねん。できる

だけ斬れ味を抑えてほしいんや」

「？」

「？」

揃つてハテナマークを浮かべるエリカと三村。

それでも、素直なエリカは『豪華絢爛』を展開する。

「あー、あれは、斬れそうにないなー」

三村の感想。

素直なエリカはほんとに斬れそうにない刃を作っていた。刃というより、潰れたラグビー・ボールだ。隠蔽率も低く、いつもより刃が丸見えた。

「これで一体、何を？」

「あかんで、三村君。これ見てまだ分からんのは、これから先も、悠斗君と一緒に闘つていいくつもりなんやろ？」

「す、澄空が何の関係が……」

言いつつも、若干動搖する三村。

それには答えず豪華絢爛を見据える犬神。

エリカを、トンと、三村に渡す。

「じゃ、行こか。二人の共同作業や！」

表現に若干の問題はあるが、犬神は地を蹴った。上へ向かつて。

「ま……」

「マサか……」

呆然とする三村とエリカ。

犬神が通つた証の電気が、豪華絢爛に残つていく。

「豪華絢爛を足場にして……」

宙を舞う幻影獣のところまで駆け上がつっていく。

ロイヤルエッジ

ロイヤルエッジ

ロイヤルエッジ

ロイヤルエッジ

豪華絢爛は、宙を舞う幻影獣の高さにも何個か布陣されている。大きさが不揃いなため足場にするには心もとない刃もあるし、距離が離れ過ぎている刃がある。

「い、いくらなんでも……」

対抗心ではない。

純粹に無理だと思つ三村。

だが。

「よつ見とき、三村君！ これくらいできんと、悠斗君には歯牙にもかけてもらひえんで！」

喧騒の中でも、不思議と囁き三村の心を抉る声。

そして。

まるで光の芸術のように、行く筋もの電気の軌跡が空間に描かれた。

『7月24日15時57分・管制室』

管制室オペレータ・志藤美琴（22歳独身。でも、そろそろ彼氏は欲しい。どちらかと言えば年上派だけど、怖い人は苦手）はそろそろイッパイイッパイだった。

「城守局長ー！ Dブロックがもう限界ですー！」

『落ち着いてください、志藤君。G-3はどうなりました？』

「クリスタルランスの犬神さんのおかげで盛り返しますー！ 物凄い勢いで！ しかも、なんだか若い男の子と女の子といい感じですー！』

『ふむ、相変わらずですね。彰君。【いい感じ】と言つのは何のことが分かりませんが……』

「そんなことより、Dブロックがー！」

城守局長には、何か算段があるのだろうが、志藤にはどう見ても限界に見えた。

というか、どうしてこれだけテンパっている自分が、こんな大事な報告をしているのだろうか？

『分かりました、Dブロックのことはもういいです。監さんは、他のブロックに力を注いでください』

「へ……。ちょ、長官？」

いきなりの予想外な発言に、一瞬固まる志藤。

聞き返そうとするが。

『管制室聞こえてるか！ N・4ブロック突破されそうだ。至急、応援を頼む！』

「は、はい！ えと、N・4だとどこから出せばいいんだろ……」

そんな暇はなかつた。

『7月24日15時58分・A』

「という訳で、私はDブロックに行きます」

管制室からの通信（やっぱり、あの女の人の声だった。他にいな
いんじやないだろうな、管制室？）を終えて、城守さんが言った。
「い、いや、城守さんが行つてもあんまり意味がないんじや……？」

それより、管制室に戻つて指揮を取つた方が

プロに意見するのは身の程知らずだとも思つたが、俺は言つた。
だいたい、BMP能力者でもない城守さんがあんなところに行つた
ら危ないぞ。

「大丈夫ですよ。私に策があります」

自信満々で答える、城守さん。

どんな策かは知らないが、どんな策でも普通に危ないと思うんだが。
……思つた以上に底知れない人だな、この人。

「それより、麗華さん」

「うん」

「Bランク幻影獣の方は、歩みは遅いですが確實に近づいています」

壁の上の方に設置されたモニターを見ながら城守さん。

そこに亀のような姿をした巨大幻影獣が映つている。

見た目のインパクトは、第五次首都防衛戦の時の奴の方が凄かつたが、少しづつにじり寄ってくる姿を見ていると、状況的に今回の方が嫌な怖さを感じる。

……前回はひっかとこうと、怖いと感じるほどの余裕もなかつたからな。

「こぞとこう時は、お願ひしますね」

「問題ない」

これからBランク幻影獣を相手にするかもしれないのに、全く気負いのない麗華さん。

凄い人だよな、やつぱり。

「そして、悠斗君」

「は、はい」

「悠斗君の所にだけは敵を来させないように布陣していますが、万一件のことがないとも限りません。あのAランク幻影獣が未だに姿を見せていないと、不気味です」

「は、はい……」

それはほんとに不気味だと思つ。

あれだけ意味ありげに出て来ておいて、まさか見物だけなんてことはないと思つんだが。

「たとえ万が一のことがあつても、死んでは駄目ですよ」

「も、もちろんです」

まだ死にたくないです。

「いえ、違います」

と、城守さんがちっちつと指を振る。

「死にたくないではなく、死んではいけない、です」

『7月24日16時02分・E-4』

幻影獣は、よく自然災害に例えられる。

殲滅に成功しようとしないと、時間が過ぎれば過ぎ去っていく。どれだけ激しく襲撃してこようとも、引き揚げる時は驚くほどあつさりと淡白に去っていくのだ。

奴らの行動様式は謎だらけだが、少なくとも、人類の絶滅を主論んでいるのではないのではないか、という意見もある。

が、今日は違った。

今日のここからは、明らかに『田的』がある。それが本当に澄空なのか、それとも別の何かなのかは分からぬが、それが達成されるまで、ここからは引き揚げない。

そして、幻影獣の実際の数は良く分かっていない。なにせ、普段はどうにいるのかも分からないのだ。確認のしようがない。

本気になつた奴らの増援がどれくらいのものなのか……。あるいは、無限なのか。

峰がそう考え始めるほど、激しい消耗戦だった。

「『砲撃城砦』…」
ガンキャッスル

味方に当たらないように小刻みに移動しながら、圧縮した空氣の塊

を連射する峰。

至近距離から撃つと威力が落ちる技ではないが、これだけの乱戦で下手に撃つと誤射の危険がある。

なので、威力も数も絞り気味に撃つていた。

そして、気付いた。

(この技、手加減して撃つ方がよっぽどキツい!)

もちろん、それだけではない。

そもそも、乱戦は遠距離攻撃系のBMP能力者にとっては、鬼門なのだ。

近接状態での回避は難しいし、攻撃も即応性があるとは言い難い。

その意味では、三村よりよっぽどきつい。

おまけに、峰はペース配分が苦手だった。

序盤から全力で飛ばして、後は野となれ山となれタイプだった。

当然、レベルが上の相手には通用しない。

前回の入院及び、そこで知り合った少年に諭されて、そのところをよく反省したつもりだったんだが。

「そういえば、あいつは、どうしてるんだろうな?」

確か、小野倉太という名前だった。

一応ウエポンの属性持ちのBMP能力者だと言っていたから、この作戦にも参加している可能性はあるのだが。

「つて、そんな場合じゃないな!」

眼前に迫る幻影獣に『ガンキヤッスル砲撃城砦』を掃射。

見事撃ち倒すが、やはり全力では撃てなかつた。
疲労もストレスもたまる。

「こんなことじや、ますます澄空に相手にされない！」

病院で、どこから入手したのか知らないが、小野に見せられた映像は衝撃的だつた。

死力を振り絞る仲間（本郷エリカのことだ）を背に庇い、生まれて初めて発動したBMP能力でBランク幻影獣を叩き斬つた同級生。こいつだ、と思つた。

BMPハンターは、好敵手が居た方が上達が早いというのは、周知の事実だ。

剣麗華の強さは別格だが、彼女をライバルにしようとは思わなかつた。

別に、女性だからといつもりはない。
……何か違うのだ。

澄空悠斗を見て、それが分かつた。

あいつはこれからどんどん強くなる。
それに必死で付いていけば俺も強くなる。

峰が考へてゐるのはこれだけだつた。
別に、大した伏線も事情もない。
ただ単に強くなりたいだけなのだ。

幻影獣を倒すために。

なのに。

「くそ……」

この間 Aランク幻影獣に奇襲された時、麗華を除いて誰も（もちろん自分も）反応できなかつた。『捕食行動』をあっさりと叩き斬つて見せた同級生。

あの時は、心底仲間を心配している顔に見えたが。

（ひょっとして、足手纏いと思われたのかもしれない）

そんなことはないとも思うが、もしさうなら屈辱だった。

助けあうのはいい。

だが、足を引っ張るしかできない実力なら、BMPハンターなんか辞めた方がいい。

幻影獣が目の前に迫る。

泥でできたような、個体と液体の中間のような姿をしていた。

「ふざけるな！ 澄空悠斗ー！」

ついにタガが外れた。

全力で『砲撃城砦』ガンキャッスルを掃射してしまつた。

今までとは比較にならない威力で、幻影獣の体に拳大の穴が無数に開いていく。

幸いに誤射とはならなかつたが。

「あ」

力が尽きた。

感覚でわかつた。

そして、間が悪いことに、この液体の体を持つ幻影獣は、『砲撃城砦』ガンキャッスルでは倒せない敵だつた。

粘液のような腕に頭を掴まれる。途端、呼吸ができなくなる。

あまりに情けない幕切れ。

せめて最後は潔くしようとしていたと思いつつ、まだ諦めたくないと思いつつ、同時に生まれ。

結局何もできずに、酸素を奪われていく峰。

周りのハンター達も助けに来れる状態ではなさそうだった。

そして、いよいよ限界を迎えた時。

閃光が走った。

「約束」の解釈

『7月24日16時10分・A』

「中層が破られた」と、抑揚のない声で麗華さん。

俺も一緒にモニターを見ていたから、状況は分かる。

あの亀みたいなBランク幻影獣が、ついに中層を抜けたBロックに入ってきたのだ。

ちなみにCブロックは、中層と内層Aブロック（要は、△△な）を繋ぐ、いわゆる中庭だった。

ついでに言つと、内層にはBMPハンターを配置していない。つまり、あのBランク幻影獣を止める者はもう誰もいないということだ。どうだね?「こんな状況の時くらい「中層が破られた……」と思いつきり悲痛に叫んでもいいと思うのだが。

「じゃ、行つてくる」

あつやつと告げる麗華さん。

ちょー

「ちよつと待つた!」「

「ん?」

振り返る麗華さん。

「…………」

「何? 悠斗君」

「……えーと」

何を言つつもりだったんだね?

状況的には、先ほどの打ち合わせ通りの展開だ。

戦力を無駄に消費させないために、あのBランク幻影獣には外層・内層を素通りさせて、Bブロックで麗華さんが撃退する。

切り札を使っている時点で良い状況でないのは明白だが、作戦的に間違いないんだと思つ。

それは分かっている。

分かつてはいるんだけど。

「か、代わりに俺が行っちゃ駄目かな？」

「？ 敵の狙いは悠斗君なんだから、私がここに残つても意味はない

い

「そ……」

「ですよね？」

「それに、少なくとも今は私の方が、安定した戦闘ができる」

「いや……」

今に限らずとも、おそらく未来永劫、麗華さんが強いっす。

……強いのは分かつてはいるんだけど……。

「私は抜かれたりしないから、Aブロックは安全。悠斗君は大丈夫」いや、そんなことは心配……してないのもまずいけど、今はそれよりも。

「れ、麗華さんだって『絶対』は、ないだろ？」

「そんなことない」

「へ？」

「悠斗君が『私のいないところでは死んではいけない』以上、私も

悠斗君が見ていないところでは死なない」

「あ……」

そのセリフは覚えている。

第五次首都防衛戦の時に、別れ際に麗華さんが言つたセリフだ。

「それが、絶対」

「……そつか」

『絶対』ならしううがない。

「分かつた。首を長くして、帰つてくるのを待つてるよ」

「そんなにからない。すぐ帰つてくる」

『7月24日16時16分・管制室』

管制室オペレーター・志藤美琴（22歳独身）。でも、そろそろ彼氏は欲しい。どちらかと言えば年上派だけど、怖い人は苦手。局長みたいにパーフェクト過ぎる人も、プライベートで付き合つことはどうかな？）は、戦闘中にも関わらず戦闘によらない興奮で顔を赤らめていた。

（い、今の会話、聞いていて良かつたのかしら？）
そんなことも考える。

今は戦闘中で、ここは管制室だ。プライベートだのなんだの言つている状況ではなく、まして会話が筒抜けになつてるのは、あの二人も承知のはずだ。

（というか、今の。なんだか愛の告白みたいにも聞こえたんだけど！）

もちろん、ただの『戦友同士の再会の約束』にも聞こえたが。
そういうえば、あの二人は一緒に住んでいるとのことだ。ちょっと変わり者とかなり朴念仁のカッフルとはいえ、若い一人だ。どうにかなつてないとも限らない。

(いや、そんなことはどうでも良くて……)

今は戦闘中だ。

「でも、あの一人……。なんだか、いいなあ」とても、いい。

まるで、映画の主人公達みたいだ。こんな時に不謹慎だが。と。

「新たな幻影獣の反応あり！」

志藤ではないオペレーターの切迫した声が飛ぶ。たまたま、目立つタイミングで志藤の出番が多いだけであつて、別に他のオペレータが仕事をしていない訳ではない。

「ひ、非常に強力な幻影獣です！」

「またBランク！？ BMPを測定して、早く局長に連絡を！」
どう見てもオールドミスタイプなのに、地味だけど優しい男性と結婚して可愛い子供もいるらしい主任オペレーターの指示が飛ぶ。

「そ、それが……」

問われたオペレーターが口籠る。

「どうしたの？ 早く、測定を！」

「いえ、測定結果は出ました……。機器の故障でなければ、BMP
368……です」

「え……！」

「368……！」

管制室内に衝撃が走る。

「JUJUちでも確認しました！」

「JUJUちでもです。誤差なし！ 間違いありません！」

「…ちもです！」

次々と最初の報告者を否定する同僚達。

「アランク幻影獸……！」

主任が呻く。

「とにかく！ どの方向から来てるの？ 確認して、局長に報告を！」

「そ、それが……」

最初の報告者及び、追加で確認したオペレータ達が、皆一様に一日で緊急事態だと分かる顔をする。

「今度は、何！？」

オールドミス（っぽいけど違う）主任が、少しイラついたように叫ぶ。

オペレータ達は一瞬顔を見合させ。結局、最初の報告者が口を開いた。

「敵幻影獸、すでに建物内に侵入しています」

「なんですか！」

あまりの展開に、大声を出す主任。

妄想を途中で寸断され少し思考停止していた志藤も、ようやく我に返つて、敵幻影獸のBMPと位置を確認する。

「嘘……」

そして、知った。

BMP368は間違いない。

どうやったのか、すでに建物内に侵入しているのも間違いない。

そして、その場所は……。

志藤はマイクを取る。

「Aブロック！ 澄空悠斗君！ 応答してくださいー。」

『7月24日16時18分・A』

「お久しぶり」

小学生くらいの少年の外見をした『何か』が言つ。

「…………」

「結構元気みたいで何より。実はミーシャに『あんなこととして追いつめたら逆に出せなくなるタイプもいるのよ』って怒られたんで、心配してたんだ」

なんでだ？

さつきまでいなかつたはずだ。

高BMP能力者と同じく、強力な幻影獣にも、それなりの気配がある。

傍に居るだけで全身が総毛立つような違和感の存在を、どうしてここまで接近されるまで気付かないんだ？

「…………どこから入った？」

「？ 決まっているじゃないか。 あそここの扉だよ。 他に出入り口はないし」

少年が指し示すのは巨大な扉。

こいつの言うとおり、Aブロックの唯一の出入り口だ。

しかし、あそこからは、さつき麗華さんが出て行つたはず。

そもそもBロック『中庭』で麗華さんが待機している以上、誰もAロックに入れるはずがない。

「イレギュラーコピー システムアクセセル
劣化複写・超加速！」

小糸な会話に応じると見せかけて、三村のBMP能力『超加速』^{システムアクセセル}を使い、唯一の出入り口からの脱出を図る俺。ありがと三村、物凄く役に立つたぞ。

が。

「あれ？」

この場の状況にそぐわない、自分でも驚くほど間抜けな声が出た。だつて。

「扉がない……」

さきほどまで確かにあり、目の前の少年が入ってきたと主張する、Aブロック唯一の出入り口がない！
というか、俺は扉に向かって『超加速』^{システムアクセセル}したはずなんだが。眼の前で突然、扉が消えた。

慌ててAブロック全体を見渡すが、やつぱりどこにも扉が見当たらぬ。

「思い切りの良さは感心するけど。悪い獣を倒す正義の勇者が、そんな臆病風じゃダメなんじゃないかな？」

眼の前の少年（つて、いつまでも現実から田をそらしていても仕方ない。ガルア・テトラだ。Aランク幻影獣だ）は、人さし指を立て腰を折つて上半身を突きだす、いわゆる『駄目だぞ』ポーズを取つている。

「…………」

こいつの能力なのか？

扉をなくす能力なんて聞いたこともないぞ？

「あ、心配そうな顔をしているから言つておくれど、僕のBMP能
力は『^{マンイータ}捕食行動』だけだよ」

「なら、これは一体なんだといつんだ？」

扉のない壁面を指して言つ、俺。

「『^{マンイータ}お友達』かな？ 誰も一人で来るなんて言つてないよね？ つ
て、あれだけゾロゾロ連れて来てるんだから、いまさらか」

腰に手を当て、胸を天に向かつて張つた姿勢で楽しそうに宣言する
ガルア。

「まさか！」

別のBランク幻影獣がいるのか！？

「大丈夫。誰にも邪魔はさせないから。もし、この場に乱入してく
る奴がいたら、敵味方関係なしに僕が食べてあげるよ
ぺろつと小さい舌で唇をなでるガルア。
そして。

ガルアの背後の空間から、滲みだすように巨大な『口』が姿を現す。

「僕の『^{マンイータ}捕食行動』がね！」

紹介された『口』は。

ガルアと同じような舌の動きで、唇を撫でた。

天閃（レイ）

『7月24日16時23分・E-4』

光が走る。

敵が砕け散る。

光が走る。

敵が吹っ飛ぶ。

光が走る。

敵がなくなる。

それは、一言で言えば光の芸術だった。
もしくは、光の暴力だった。

峰を窒息させようとした泥の幻影獣を一瞬で焼いた光線は、それから立て続けにこのE-4ブロックを襲った。

一眼で分かる、圧倒的なまでにレベルの違う遠距離攻撃。
いや、遠距離と言つていいものか？なぜなら、ここは室内だ。

「凄い……」

峰は、レーザーのような威力よりも、そこに感心していた。
あれだけ攻撃範囲の広い光線なのに、これだけの密集・混戦状況で、
味方のBMPハンターに一切あてずに幻影獣だけを攻撃している。
しかも『狙い澄ました』というような頻度の攻撃ではない。

それこそ、雨あられと光線が飛んで来ているのだ。

あまりに危なつかしくて、BMPハンター達は誤射を恐れてさつき
から動けなくなってしまっている。

と。

不意に、光線が止んだ。

すでに動きを止めていたBMPハンター達に加えて、めつきり数を減らした幻影獣達も逃げまどろのをやめる。

最初に光線が走つてから10分弱。

一方的な光の殺戮で、形成は一気に逆転していた。その、ほぼ勝負のあつたE-4ブロックに、靴が床を叩く乾いた音が響く。

人も獣も、皆、その方向を見た。

「初期の迎撃フェイズが終了して、遠距離攻撃系BMP能力者としてのノルマは終わったから」

それは、眠そうな眼をした眼の覚めるような美女。

「姉として悠斗君の応援に行こうとしていたのに」

少し不満げな表情で、その女性はなんの警戒もなく近づいてくる。

「悠斗君の名前が聞こえたから寄り道したら」

獣と付いていても本能はないのか、一匹の幻影獣が女性に襲いかかる。

「天レイ門」

咳きとともに、かざした右手から照射される必殺の光。

全身を光に包まれて消滅する幻影獣。

「やっぱりいないし、悠斗君」

女性はそう言って、あの光線を出したとは思えないほど可憐な手を口に当てた。

「しょうがない、片づけようか」

『さ、掃除始めよ』くらいの軽い口調で、眼の覚めるような美女が言つ。

差し出される右手。

その前に、直径60センチほどの光の輪が姿を現す。光の輪は回転を始め。

徐々にその速度を上げていく。

「天門」^{レイ}

呟く、女性。

次の瞬間、回転する光の輪に合わせるよつて、次々に光線が撃ちだされる！

「ふ、伏せろー！」

誰かの声がする。

さきほどまでの、この攻撃のコントロールを忘れた訳ではないだろうが、反射的に伏せてしまいたくなるくらい、圧倒的な光の量だった。

事実、ほとんどのBMPハンターは伏せた。

幻影獣も何体かは伏せたが、光線は容赦なく獣がいる地面を抉った。

そして、峰は。

数センチと離れない空間を、必殺の光が横切っていく状況にもかかわらず。

ただ、その光景に見とれていた。

戦闘は終わった。

幻影獣軍の増援には底がなく、今でも敵戦力は増え続けているだろうが、少なくともE-4ブロックには敵の姿は完全になくなつた。完全にだ。

破壊の光線が、最後の一匹まで、完全に根こそぎ焼きつくしてしまつた。

しかも、あれだけの攻撃で無駄撃ちや誤射が全くなかった。

制圧型の攻撃力と狙撃型の命中力を高い次元（ほとんど反則なほど

に）で融合させた完璧な攻撃だった。

峰はこの人物に心当たりがあった。

というか、その人以外に、こんなことができる人が居るとは思えなかつた。

最強BMPチーム『クリスタルランス』支援担当にして、メインアタッカー。

個人のBMPランクでも、あの剣麗華を上回っている凄腕ハンター。

「アローウエポン。『天ト門』の茜島光」

男とも女とも取れる名前だつたこともあり、峰は、今の今までアロー・ウエポンが女性という話を信じていなかつた。

別に、女性軽視をしている訳ではない。

単純に『氷のような心を持つて、機械のように正確に淡々と仕事をこなすプロフェッショナルで屈強な男性』をイメージしていたのだ。自分の。いや、全ての遠距離攻撃系BMP能力者にとっての憧れの存在。

イメージギャップは甚大だつた。

眼の覚めるような外見に反して、その表情は眠たげで優しげで。両手を組んで、上にのばして「うーん」とか伸びをしている姿はプロフェッショナルとも屈強ともかけ離れていて。

でも強い。圧倒的なまでに。

話したい。

なんでもいいから話して、聞きたい。

澄空悠斗どころじゃない。自分の最終目標が、すぐそばにいるのだ。

戦闘の方法、能力制御のコツ、闘つ理由、好きな食べ物、趣味・嗜好なんでもいい。

とにかく、何かを話さないと…

「君」

「と、とりあえず、好きなタイプは何ですかー？」

「？ それは、もちろん、コトコトだけど？」

「へ？」

固まつた。

今自分が口走つたセリフと、なぜか茜島光が自分に話しかけてきた
という事実と、聞きなれない渾名でさらりと答えられてしまったこ
とに固まつた。

「え、えーと……」

（何はともあれこれはチャンスだこれを足がかりにもつとお話をと
いつかまず不躾なことを聞いたことを謝らないとその前にコトコト
氏のことはメディア等に話さないと約束しないとというかアローウ
エポンに恋人がいたなんて話は初めて聞いたまあ性別すらはつきり
信じてなかつたくらいだからあたりまえだけどといつかそんなこと
より）

とりあえず、血口紹介をしないことには

「す、すみません。唐突に。俺は、新月学園1・Cの峰達哉と言ひ
ます！ 能力名は『砲撃城砦』です！」

「あら、コトコトと同じクラス。どうりで名前を呼んでたわけだ

「へ？」

今、何て言った、この人？

いぶかしむ峰の前で、茜島光は優雅に一礼し。

「初めまして。私は『クリスタルランス』所属、アローウエポン・

茜島光です。いつも、弟がお世話になつていています

「いや、こちらじゃ……。って、弟！」

びっくり仰天した。

「い、いや、ちょっと待つてください。うちのクラスには茜島なんて名字はいませんよ！」

もし居たら、土下座してでも頬み込んで家に案内してもらつているところだ。小遣いギリギリのお土産持参で！

「まだ、正式には姉弟になつていなかり」

「や、そうですか……。って、ちょっと待つてください…」

正式一歩手前の姉弟とがあるのか、この世界に…？

「実際に、こじこじる」

「で、ですよね！」

思わず同意してしまつ。

とこゝか、彼女の言つことを否定する奴がいたら、自分が代わりに論破してやらなければと瞬間に決意した。

(しかし、『コトコト』か……)

どういう関係かは分からぬが、この渾名が本名をもじつて付けているのなら、候補はかなり絞られる。

峰は、クラスメイト全員の姓名を完全に覚えている真面目な生徒なのだ。

今まで全然聞いたことがなかつた・あんまり話したことのない奴の可能性が高いな。もしくは最近知り合つた奴か。

コトコト・単に繰り返しているだけの可能性が高い。

コト・コト、コトウ、コトオ、コウト。

どうりで、名前を呼んでいた訳だ…それが名前を呼んでいた奴だな。

.....。

(ちょっと待て)

「すみません。コトコト氏の本名をお聞きして、よろしいでしょうか？」

必要以上の敬語になる。

「澄空 悠斗」

「やっぱりですか！」

思わず、大声を出す。

しかし、良く考えれば、周りは名だたるハンターばかりで、しかも今は戦闘後で、話している相手はアローウェポン。このノリはひょっとして、かなりまずいのではないだろ？
とこりか、自分はこいつタイプではないはずだ。こいつのまむしの三村のキャラだ。

「ところで、峰君

「は、はい！」

勢いよく返事する。

あとで蠶躑躅を買つたつて構つものか。今、この人と話せるのなら。

「君は、悠斗君のために、ここに来たの？」

「それは……」

もちろん。と言おうとして止まった。

眠そうな目が、わずかに真剣な色を帯びている。

これは、ノリや勢いで答えてはいけない質問だと感じた。
よく考えて。

考えて……。

考える必要などなかつたこと、気がついた。

「やうです。俺は、澄空の助けとなるために、ここに来ました」
言つた途端、彼女の顔が明るくなつた。

その表情を見て、さつきからの一連の話が、彼女にとつては伊達でも醉狂でもなかつたことを確信する。

「良かつた。今でも、やっぱり、悠斗君は悠斗君みたいいや、これはひょつとしたら、ただの姉弟なんかよりも、もつと……」

「あ、あの……。聞いてもいいですか？」

澄空と貴方のこと。

「会つたのは一週間前。私は、悠斗君と家族になりたいと思つている

「る」

「え」

「それだけ」

「…………」

もちろんそんなことはないはずだが。
これ以上聞くのは無理そつだつた。
いや、でも、一つだけ。

「どうして、澄空のお姉さんになりたいんですか？」

「強いから」

「え？」

「本当の意味での強さを持つてないと思つかり」

「…………」

「でも、無理するタイプだから」

不器用な嘘

『7月24日16時43分・A』

「イレギュラー・コピー・システム・アクセル
劣化複写・超加速！」

三村の能力を借りた超バックステップで距離を取る。勢い余つて5メートルほど後方移動してしまったが、全然無駄ではなかつた。

さつきまで俺の居たところの床が半径1メートルほどじりりとなくなつていた。

「喰つた……」

思わず呟く。

あの『口』がまともな生き物ではないのは分かっていたが、さすがに床をガリガリと咀嚼されると気が滅入る。

「駄目じゃないか。なんでもかんでも食べたら駄目だつて言つたら？」

『メツ』みたいな口調でガルアが言うが、もちろんそんな可愛らしい状態ではない。

あの『口』に呑み込まれたら異次元に飛ばされるという触れ込みだが、あの歯……というか牙も、相当な破壊力があるみたいだ。

「イレギュラー・コピー・イリュージョン・ソード
劣化複写・幻想剣・断層剣カラドボルグ！」

麗華さんの能力を借りて、断層剣カラドボルグを創り出す。

この技は当たりさえすれば最強の攻撃力（こども先生談）がある。この一週間、この動作ばかりを練習してきた。

一週間前、麗華さんの前で大恥をかいた時の速さとは、『使用前

『使用後』くらいの差があるはず！

「ひょいっ」

が。

小馬鹿にした口調とともに、わずかに身をかがめたガルア・テトラの上に、必殺の断層が姿を現す。

外れた！

「もう一丁！」

体勢が崩れた（と信じたい）ガルアに向けて、今度は振り下ろすような一撃を見舞う。

俺の剣の軌跡をトレースし延長するかのように空間に亀裂が走り。

「ひょい」

今度は横にかわされた。

「な、なんだ……？」

思わず嘆く。

二週間前とは違はず。

麗華さんみたいに神業的な速さで振りまわすことはできないけど、『これなら実戦でもなんとか使えるかな？』と訓練教官の人も言っていたのに……。

「全然駄目駄目だね。澄空悠斗」

『口』の唇を撫でながら、ガルアが言つ。

『剣が『重すぎる』んだよね。振りかぶった瞬間から、剣の軌跡も、空間亀裂のでき方も完全に予測できるよ

「なー？」

『そのオリジナル……剣麗華はさ、速いだけじゃなくて色々小細工もしてるんだよ。もちろん僕はあんまり興味ないけど

「……」

「君は、フュイントすらできないんじゃないかな？」

「……」

できないよ。

できるか、こんな剣で！

麗華さんの技術は、一体どうなってるんだ？

「だいたい！ だね」

ガルアが『ロ』に命令を出す。

『ロ』が向かつてくる。

「劣化複写：超加速」
イレギュラー・コピー・システム・アクセル

まともに走つたんじゃ逃げきれない。

三村の能力を使って、とにかく逃げまくらないと。

「管制室！ 聞こえますか！ 管制室！」

『……』

逃げながら管制室に呼びかけるが返答がない。

といふか、ここをモニターしてないはずはないから、すでに向こうから連絡があつていいはずなんだけど、管制室に何かあつたのか？

「君は間違つてるんだよ」

何がだ！？

「人類最強のBMPを持ちながら、よりによつて複写系能力なんて」

「？」

「自分より弱いやつらを真似て、一体どうするつもりだい？」

「？」

なんの話だ。

「君は、自分から最強になることを放棄したんだ」

『7月24日16時52分・C』

中層とAブロックを結ぶ中庭。
ブロック。

一人でBランク幻影獣を任された剣麗華は。
苦戦していた。

「断層剣カラドボルグ」

亀のような幻影獣の腕の一撃をかわしながら、一瞬でカラドボルグ
を具現化、居合抜きのような速さで振りぬく。

今澄空悠斗が見れば、それがどれほど芸術的で無駄のない動きか
少しばかり理解できるだろう。

もちろん亀のような大型幻影獣にかわせるはずもなく、甲羅の部分
にまともに空間亀裂が走る。

が。

「やっぱり、効いてない」

さしたる動搖も感じさせない声で呟く。
が、疑問には思っていた。

外見からして防御力重視の幻影獣だという想像は付いていたが、カラドボルグでダメージを与えるられないというのは異常だった。
そもそもこの剣は、『どれだけ使いにくくてもいいから、とにかく当たれば敵を倒せる、それもできれば大量に』という大胆なコンセプトで創造した剣だつた。

天賦の才がある麗華が使うにはこれほど向いている剣もないかもし

れないが、おかげで悠斗は苦労している。

それはともかく。

「つ

ガクンと膝が落ちる。

別に攻撃された訳ではない。

ただ、唐突に膝をついた。

「つ

立ち上がり場所移動。

さつきまでいたところに、Bランク幻影獣ターテルの腕が振り下ろされる。

「当たると、少しまずい」

何の特殊能力もなさそうだが、その重量だけでも十分な脅威だ。

それでも、普段ならまず当たることを心配するようなスピードではないのだが。

「ちょっと、まずい」

息が乱れている。

限界を超えて動き回ったとか、極度の緊張で一気に疲労が蓄積したとかではない。

麗華にして見れば、朝のランニング程度の動きしかしていない。（
麗華が毎日朝のランニングをしているということではない。念のため）

（め）

現実から田をそらしてもしょうがない。

明らかに麗華の体調はおかしかった。

攻撃が通じないのも、敵の防御力が高すぎるのではなく、カラドボルグの威力が落ちているからだ。

「どうか、頭が痛い。割れるように痛い。

頭痛なんて、覚醒時衝動の時以外したことなかつたのに。体も鉛のように重い。手足の方の感覚が、どんどんなくなつていく感じがする。

「少し無理があつたかもしれない」

とてもとても冷静に分析する麗華。

『7月24日17時00分・M-4』

開いた窓から幻影獣が飛び降りていく。
窓という窓からどんどん飛び降りていく。

襲撃方法から考えて、ほとんどの幻影獣は空を飛べるはずだが、飛び方を忘れたかのように地面向かつて一直線に落ちていく。
このくらいの高さで滅びるような連中ではないが、地面に落ちた幻影獣は立ちあがる気配がない。

どこのか、小さい幻影獣から、どんどん消滅を始めている。

「相変わらずの支配力ね……」

「じども先生（呼んでるのは、澄空悠斗だけだが）こと緋色香が言う。

相手は、紅蓮の瞳を輝かせている姉だ。

「大したことではありませんよ。彼らに『もつ存在を保てない』と認識させただけです。万一件を考えて、先に飛び降りてもらいましたが」

姉の『アイズオブクリムゾン』こと緋色瞳が答える。

ちなみに『万一のこと』とは、たまに消滅の間際に爆発する幻影獸がいるからだ。滅多にいなが。

「ところで、せっかく注意したにも関わらず姉さんの眼を見ちゃつ

たハンター達が動かなくなつちゃつたんだけど、大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ。『アイズオブクリムゾン』は、強い意志を持つ人間にはかかりませんから」

「その『強い意志』の要求が高すぎるような氣もするんだけどな……」

M - 4 ブロックに居た三分の一近くのハンター達が、呆けたような顔で涎を垂らしながら、突つ立つたまま動かない。（ちなみにあと三分の一は腰を抜かしてて、その他は単純にビビッている）。どうして人間は、「見ちゃダメ！」と言われると見てしまうのだろうか？

「小学生でも耐える子もいるんですねけどね……」

「え？」

「なんでもないです」

フイフと眼をそらす瞳。

「支配系最強と言われて長いのに、まだまだ支配力が増しているんじゃないかしら？ 我が姉ながら驚くばかりね」

悠斗がいれば、「むしろ、一人が姉妹ではなく親子に見えそうなことに驚きを感じます」とか言って小突かれるとこりだが、幸い悠斗はいなかつた。

が。

「私は、むしろ、あなたがこんなところで油を売つていることの方に、驚きを感じますが」

「え？」

思いもかけぬ強い口調に、驚く香。

「油なんて売つてないわよ。姉さんほどじゃないけど、私もなんとか役に立とうとしてるわよ」

「……ほんとに分かつてないんですか？」

「な、なにがよ……」

悠斗でなくとも、お母さんに怒られているお子様にしか見えない仕草で返答する香。

「危険なのは分かつてているけど意思を尊重したい、とか、いざとなつたら自分が何が何でも守るから悔いのないよう行動させてあげたかった、とか、そういう考えなら私も理解できたのですが……」
やれやれ、という仕草をする瞳。
「だ、だから、なんのこと！？」

「麗華さんのBMP中毒症」

「！？」

「忘れた訳ではないですね？」

「忘れてなんかないわよ。でも、今朝も念のため調べてみたけど何の異常もなかつたわよ。そりや、何にだつて絶対はないけど」

「あなたの『アイズオブエメラルド』には、欠点があります」

「……え？」

唐突なセリフに、言葉を失う香。

「何よ。姉さんほど支配力がないこと？」

「それは単なる個性でしょう？ 欠点ではありますん

「じゃあ、何？」

逆に問われた瞳は、一・二回瞬きをした。

次に眼を開いた時、赤い輝きが幾分弱くなっていた。

「『アイズオブクリムゾン』を抑えました。香、今の私の状態を診れますか？」

「そりや『アイズオブクリムゾン』を抑えてくれれば……。つて、あれ？」

近くに寄る。

普段悠斗にしてこぬよひに、ほとんどすがりつすべらの距離で姉の瞳を覗き込む。

ここにはいないが、三村が居れば「な、なんだかちょっとどじきどきする絵だな、悠斗！」と盛り上がるに違いない。

「ど、どひして？ 診れない……」

呆然とする香に、瞳は瞬きをひとつして。

「『アイズオブクリムゾン』は嘘に弱い」

「嘘？」

「対象者が見せたくないものは見えないし、見せたいものには騙される」

「ま、待つてよ！ 今まではそんなこと一度も！」

「幻影獣は嘘なんか吐きませんし、あなたに診てもらおうという人たちにも嘘をつく動機がありませんでしたから」

「そ、それって……」

よつやく香にも、瞳が何が言いたいか分かつた。

「麗華さんはそれを知つてた……？」

「悔っていた訳ではないでしきうが、あの子はあなたが思つているよりも聰明な子です。知つていてあえてそれを伝えなかつたのは、たぶん私と同じ理由なんでしょう」

「……私は、こんな欠点のあるB.M.P能力で、今まであの学園で教師をやってたの？」

澄空がいても三村がいても、ここで「そんな」とより、その外見の

方が驚異です」とは、さすがに言わないだろ。

「欠点のない能力などあつません」

「…………」

「問題があるとすれば、それは使い手の方です」

「つー」

辛辣とも取れるセリフに、俯く香。

が。

「姉さん。『めん。』『』、任せてもいい?」

「それ『』、愚問というものです」

「』で、ようやく僅かな笑顔を見せる瞳。

「ほんと『』めん! あとで、ビッグチョコサンデーマンデー風味をおい』から!」

謎の商品名(とにかく、新月学園学食で売っている)を呟びながら、走り出す瞳。

と、その足が止まった。

「姉さん、実は一つだけ聞きたいんだけど……」

「なんですか?」

「姉さん、ひょっとして、悠斗君に昔会つたことある?」

「? どうして?」

聞き返す瞳。

「あ、い、いや。『めん。』やつぱ、いい。へんなこと聞こへ』めん!」

その顔を見て、あつれつと質問を撤回して、『』を走り去る香。

「どうして……？」

その後ろ姿を見ながら、ひとり呟く瞳。

「もうこえぱ、どうして今まで言つてなかつたのかしりへ。」

フレードウェポン

『7月24日17時07分・A』

俺の劣化複写は、一度見た能力なら（劣化状態でだが）真似できる
という能力だが。
実はもう一つ大きな特徴がある。

なんとこの能力、発動に特別な手順が必要ないのだ。

一度見たことがあり、それが使える能力であれば、何の苦労もなく
発動することができる。

……使いこなすのは、別の問題だが。

「劣化複写：砲撃城砦！」

一度も試し撃ちしたことのないBMP能力だが、今回も問題なく発
動してくれた。

圧縮された無数の空気の弾が（どうやって圧縮したかは分からん。
とりあえず、能力だということを納得してほしい。もしくは峰に聞
いてくれ）ガルア向かつて飛んでいく。
いくらなんでも、これは避けられないだろう。
致命傷は無理でも、牽制くらいには……。

「あーん」

間抜けな声を出したのは、ガルアだ。

そして、それに答えるようにガルアの前に立ちふさがったのは『口』
だ。

「な！」

驚愕する俺。

紫の唇を見せつけるように、『口』が大口を開ける。と、無数に撃ち出した圧縮空気弾が『口』に吸い込まれていく。

「ちよ……」「……」

思わず文句を言つたくなる俺。

「やれやれ……。僕の『捕食行動^{マングイーター}』をただのイロモノBMP能力とでも思つてたの？」

イロモノというより、ゲテモノだと思つけどな。

「これでも僕は、Aランク幻影獣だよ。単体戦・集団戦、接近戦・遠距離戦、攻撃・防御。全てにおいて、この子には隙なんてないよ」

紫の唇（『口』の方のだ。ガルア自身も紫の唇を持つてる）を撫でながら言つ、ガルア。

ヤバい。こいつ、マジで強い。

と思う間もなく、『口』が襲いかかつてくる。

「劣化複写^{イレギュラー・コピー}・システムアクセル：超加速！」

『口』の下を潜り抜けるようにして、ガルアに接近する。

近づいたところで、カラドボルグにBMP能力を切り替えて突き刺す！

……カラドボルグは、刺すのにも使えるのかつて？

麗華さんは「たぶん、大丈夫」って言つてた！

ヒ。

「いい！」

眼の前に、『口』が居る。

なんだ！？

さつき振り切つてきたのに！

いざれにしても、これはマズイ。

「止まれー！」

両足に力を入れて、地面をこする。

が、全く止まりそうにない。なんて、融通の利かない能力だ。

「あーん」

ガルアのセリフが今度は冗談に聞こえない。

マジで死ぬ。

「お、おおおおー！」

全力で地面を蹴つて、右に曲がる。

ほんのわずかな方向転換には成功したが、とても体勢を保つていられない。

完全にバランスを崩して、転倒する。

それでも勢いは止まりず、まるで「ヒント」のよひ、「ぐるぐると回転しながら転がっていく。

壁にしこたま背中を打ちつけて、ようやく止まった。

「な、なんなんだよ……」

涙目になりながら、ガルアの方を見ると。

口の端から端まで5メートルはある『口』が『一いつ』。

空中に漂っていた。

「今のは良かつたよ、澄空悠斗」

陸のナイフが、幻影獣の肩口を捉える。

明らかに浅い。幻影獣も、構わず反撃してくる。

が、その動きが途中で止まる。

その隙に、陸のナイフが一閃。

深手を負いながらも反撃しようとした幻影獣の動きが、また止まる。
そして、陸のナイフが幻影獣にどごめを刺した。

傍から見ていれば、何が起きたのか分からないだろうが、これがクリスタルランスのルーキー、ダガーウエポン・坂下陸のBMP能力『ラピッドアタック連携攻撃』である。

陸の攻撃を受けた敵は、陸の連続攻撃が中断されるまで反撃できなくなる。

原理は分からない。精神に作用しているのか、なんらかの力で動きを抑えるのか、あるいは空間制御系のBMP能力なのか。
とにかく、陸の連続攻撃中は何人たりとも反撃できない。

それを知っている人間ならば、連続攻撃が終わるまでひたすら防御に徹すればいいだけだが、幻影獣にはそんな知能はない。
むやみに反撃しようとして、できず、追撃で倒されるだけだ。

だが、集団戦には明らかに向いていない。

それでも、陸は踏みとどまっていた。

とつぐに撤退命令は出ていた。

聞き逃した訳ではない。

ただ、クリスタルランスの先輩方なら、これくらいの劣勢は一人で覆せるだろうと思うと。

せめて、 shinがつくりこは務めなことと思つただけだ。

「潮時かな……」

もう他のBMPハンターの姿は見えない。代わりに、100体近い幻影獣で、実践訓練場・ロブロックは埋め尽くされていた。

もう役目は果たした。

ここを抜かれると内層まで、すぐまずことは思うが、さすがにもうひとつもない。

とこりが、ここから100体の幻影獣をかわして逃げるのが、そもそも至難の技だった。

しかも、うまく逃げだせたとしても、おそらく誰も褒めてはくれないだろう。

弱いのは罪だ。最近、本気でそう思つ。

ふと、あの男・澄空悠斗の顔が浮かんだ。

剣麗華さんに認められ。

クリスタルランスの先輩方とも何らかの関係がある（よつこにしか思えない）あの男。

あいつなら、こんな状況でもなんとかできるところのだらうか？

と。

「ん？」

おかしなことに気がついた。

幻影獣の間をすり抜けるように逃げようとした陸だが、あまりにも幻影獣の動きがないのだ。

最初は、もう自分に興味をなくして内層に攻め込もうとしていると思つたのだが。

「ふむ。闘いの気配は感じていたのですが」

静まり返ったD・1プロックに響く、涼やかな男の声。
長身と眼鏡をかけた整った顔に加え。
手には、わずかに反つた片刃の剣を持っていた。

「まさか、一人で踏みとどまっているBMPハンターがいよつとは
……。気が合いますね」

整つた顔に場違いに爽やかな笑顔を浮かべている。
すると、一匹の幻影獣が飛びかかつて行つた。
眼にもとまらぬ速さで刀を振るう男。
そして、縦に両断される幻影獣。

幻影獣達は動かない。

が、別の一匹が飛びかかつて行く。
今度は横に両断された。

その男について。

澄空悠斗が居れば、「城守さん！？」と呼んだことだろう。長所に恵まれまくった男が隠し持つていた新たな特技に「不公平だ！」とか怒りながら。

剣麗華が居れば、やはり「城守さん」と呼んだことだろう。「久しぶりに闘うところを見た」と無感情に事実だけを語りながら。
緋色瞳が居れば、なんと言つただろうか。
そして、坂下陸は。

「ブレードウエポン……」

かつて……、いや、現在でも最強と呼ばれる男の名前を呼んでいた。

飛びかかって行く三匹田の幻影獸。

今度は、首を刎ねられた。

内層へと続く扉の前に立ちふさがり、一步も動かさに淡々と刀を振るう城守。

四匹田、五匹田。

一体ずつ飛びかかってくる幻影獸を、順番に斬り捨てていく。

そして、陸の方を見て。

「クリスタルランスの新旧フォワード揃い踏み、といったところですが。邪魔にならなによつにしますので、よろしくお願ひしますね」

『7月24日17時29分・A』

「痛つ」

太ももに走る鋭い痛み。

一匹田の『口』を超加速システムアクセルでかわし、止まつたところをもう一匹田の『口』に狙われたのだ。

牙にひっかけられた程度だとと思うが、油断はできない。

ガルアに注意しながら、すばやく怪我の具合を確認すると。

右足の膝から先がなくなっていた。

「う、うわああああ！」

な、なんだこれ、なんだこれ、なんだこれなんだこれ！
全然痛くないのに、こんなこんなこんな！

「ミーシャ」

「う、うわああ……え？」

絶叫する際に一瞬外した視線を戻すと。

太ももを浅く切り裂かれているが、何事もなく無事の右足があつた。

「？？？？」

？を浮かべる俺。

なんだ？ テンパリ過ぎて、幻覚でも見たのか？

「少し休憩しよう。息を落ち着けるといいよ

「な？」

いきなり優しいことを言い出すガルア。

「ちょっと邪魔が入ったからね

？ なんのことだ。

言っている意味は分からぬが、とりあえず距離をとつて息を静める俺。

大した時間は鬪っていないはずだが、完全に息は上がつていた。

一時なくなつたように見える右足は、健在ではあつたが無傷ではなかつた。

最初は滲みだす程度だつた血が、少しずつ量を増している。

一旦休憩すると、体のあちこちの痛みが気になつてくる。特に左腕が結構痛い。まさか、折れてないだろうな？

「そろそろいい？」

ガルアが言つ。

よくないよ。

幻影の破り方

『7月24日17時35分・管制室』

「悠斗君！」

美琴が叫ぶ。

一つの『口』に追い回される悠斗が、少しづつ追いつめられていく姿を見ていることしかできないのがもどかしい。

「悠斗君、聞こえますか！？ 悠斗君！」

さきほどから叫び続いているが、モニターの中の悠斗は一向に気づく気配がない。

いや、悠斗だけではない。

他のオペレーターも各所に救援要請をしているが、誰も反応を示さないのだ。

「どうなっているんだ、これは！」

「通信機器に異常は見られません！ 音声は『聞いていいはずですよ…』

「Aブロックに関する発言以外は伝わるのに……」

「じゃあ、BMPハンター達がみんな精神支配されてここにいるというの！」

先輩オペレータ達も、あまりの事態になすすべがない。せめて、局長か結城がいてくれれば良かつたのに！

「なんで今日に限ってこんな……。おかしいよ、こんなの……」

『管制室、聞こえますか？ 管制室！』

澄空悠斗の切迫した声が聞こえる。

「聞こえてる！ 聞こえてるよ、悠斗君！」

叫ぶが、こちらの声は聞こえない。

あのガルア・テトラの能力なのか、それ以外のモノのBMP能力なんかは分からぬが、BMP能力者ではない自分の手に負えるような状況でないのは確かだつた。

「なんで私、オペレータになんかなつたんだろ……？」

BMPハンターでもない、一般人でもない。

こんな中途半端な場所が自分の目的地だつたのだろうか？

『いい加減に気づいたらどうだい？』

「つ

少年の姿を取つたAランク幻影獣、ガルア・テトラに呼びかけられて、どきりとする。

いや、違う。

自分に呼びかけてきたんじゃない。

『何の……話だ！？』

澄空悠斗が叫び返す。

息が完全に上がつている。

傷の数も増えて来ている。

『ちょっと考えれば、分かるんじゃないかな？』

それまでとは違う。底の暗い声。

嫌な予感がした。

『いや、全然、分からん』

ストレートな澄空悠斗の声。案外、この子、大物かもしねりない。

『通信機器の故障にしても、管制室が全滅したにしても、ここに誰も来ないなんておかしくないかい？ BMPハンター達が全滅した訳もあるまいし』

『お前には原因が分かるとでも言つのかよ！』

『あるじゃないか。簡単な理由が』

『なんだよ』

『僕は、君が死ねば帰る。他の連中はまだつか知らないが、たぶん帰るんじゃないかな?』

『.....』

「な、何言つてゐの、ローリー.....」

『君がどれだけ重要人物としても、全滅するよりはましだって考
えても不思議はないんじゃないかな?』

「ふ、ふざけないで! 悠斗君、こんなやつの言つひとと、聞こりや
だめ!」

聞こえないと分かつていても、叫ばずにはいられない志藤美琴。

『じつ思ひ、澄空悠斗?』

「悠斗君、お願ひ!」

叫びながら思つ。

これだけ優位に闘いを進めておきながら、じつして搖ゆぶりなんか
かける必要がある?

いくら潜在能力が凄いといつても、本格的に戦闘をするのはまだ一
回目の、まだ高校生の男の子の心まで折る必要がじつはある。

『.....なるほどな』

澄空悠斗の声。

驚くほどじよせひまして聞こえたのが、逆に不安を感じさせた。

『あれ？ 認めるの？』
『いや、幻影獣のくせに頭いいんだな、つて感心してた』
『じゃあ、認めないの？』
『別にどうでもいいよ』

「……え？」

今、何て？

『偉い人たちの陰謀とか、勝つための苦渋の決断とか。そんなこと、俺が考えたって時間の無駄だろ？』
『でも、見捨てられた怒りくらいは感じてもいいんじゃないかな？』
『それだって、時間の無駄だよ』

「……」

『俺のやること、一分一秒でも長く生き延びただ。他のことは、あとから考えればいい』

「悠斗君」

頭をがつんと殴られたような衝撃だった。
そして、同時に胸が熱くなるような感覚だった。

そうだ。

悠斗君の言つとおりだ。

自分の力が及ばないことに、いくら考えを巡らせても仕方がない。

今できることをやる。

それがプロだ。

と。

『あーあ。失敗か。やっぱり、幻影獣に人間を挑発するなんて無理なのかな?』

『.....』

『それとも、君が特別なのかな?』

『それはない』

攻撃が止んだ隙に息を整える悠斗。

『でもね、澄空悠斗』

『.....なんだよ』

『僕は、そんな君には興味がないんだ』

モニター越しでも分かるくらい、ガルアの気配が膨れ上がる。

『僕が興味があるのは、僕を殺せる君だけなんだよ』

『.....』

その背後に控えるのは、二つの巨大な口。

『闘おうよ、澄空悠斗。でないと、ほんとに死ぬよ?』

「つ！」

Aプロックのモニターから眼を離す。
見ていられなくなつた訳ではない。
自分にできる」とをするためだ。

傍らの受話器を取る。

「出てよ……。お願^ねい」

そして、番号をコール。

風邪でダウンした『複合電算』^{シミコレータ} 雛鳥結城の部屋の電話番号だ。

そして、美琴の願いは通じた。

「ひやーい……。ひなろりでふー」

半分だけ。

「結城ちゃん。大丈夫？ 話、できる？」

「できるおー。で、美琴ちゃん？ 悠斗君と剣さんの『闘い終わつて、正面から抱き合つて、悠斗君が剣さんの肩に頭を載せて、剣さんが少し困ったような顔をしてる』スナップ写真は手に入つたー？」

「ごめん。そんな約束初耳」

そして、そんなスナップ写真がこの世界に存在しないのは、この間のボーナス全額かけてもいい美琴。

ちなみに、彼女、雛鳥結城の名誉のために言つておぐが、普段はこんなはつちやけたキャラではない。

年に似合わぬ落ち着きを持つ、知的な女性なのだ。

作戦途中で氣絶するほどの中熱が下がつていないらしい。

でも、悠斗君と剣さんのファン（それもちょっと偏つた）なのは、友達だけど初めて知つた。

「お願い、聞いて結城ちゃん」

でも、この状況を何とかできるのは彼女しかいない。

美琴は、現在の状況を可能な限り簡潔に結城に伝えた。

しばらく返答はない。

結城が電話の向こうで氣を失っていないことを願うばかりだ。

と。

「精神支配で間違いないと思つ」

まるで、コンピュータが話しているかのような冷たい声。

「ゆ、結城ちゃん！」

良かつた。やっぱり、雛鳥結城もプロだ。

「でも、CJの管理局のBMPハンター全員を支配するなんて、一体どうしたらいいの……？」

「違うよ。支配されているのは、BMPハンターの人たちじゃなくて、美琴ちゃんたち」

「え？」

思わず、聞き返す。

「たとえ、BMPハンター全員を支配できる能力があつたとしても、管制室のオペレーター全員を支配する方が楽だもん。美琴ちゃん達、『少しも』その可能性を考えなかつたでしょ？ それが、その証拠」「そ……」

あまり的な推論に、言葉が出ない。

「これだけの精神支配、あのAランク幻影獣のセカンドアビリティとはとても思えない。他に強力な幻影獣がいるはずだよ。モニターには表示されているはず。それも見えてないでしょ」

「う、うん」

モニターには特に強い反応は一つ。

Aブロックのガルア・テトラと、Cブロックのタートルだけだ。

「どうすれば、IJの精神支配を破れるの？」

一番聞きたいことを聞く志藤美琴。

「IJの状況でできそなのは、強引ショックを受けるIJとくらいだけど。話を聞く限り、媒介も必要としないようなBMP能力を破るのは無理かもしれないわ」

「そう」

「役に立てなくて、ごめん」

「そんなことない。十分役に立つたよ」

雛鳥結城も、十分プロの仕事をしてくれた。

「んにや、『どうこう理由でか、カラドボルグを悠斗君の首に突き付けた剣さんと、何か剣的なものを突き付け返している悠斗君の姿を描いたカレンダー』約束にえ」

いきなり、崩れる結城。

そして、ゴトッと何かが落ちる音がした。

どうやら、完全に倒れたらしい。頭とか打つてなければいいけど。

ともあれ、自分のやることは決まった。

「志藤さん？」

オールドミスに見えるが、実は子持ちで家族思いの主任に呼びかけられながらも席を外す。

みんなに説明している暇はない。というか、説明しても意味はない。

「あつた」

整然と片づけられたロッカーから、一つだけ異彩を放つ奇妙な物体を取りだす。

「いつ見ても、禍々しいわね」

それは、木製の台座に金属製の棒のようなものがついたネズミ捕り

のよつなものだつた。

といふか、これはいつかの忘年会で誰かがとち狂つて余興用に持ち込んだと噂の（一説には城守局長という話もあるが、さすがに嘘だろう）ネズミ捕りだつた。

ネズミを『捕る』どころか『潰して』しまつほどのパワーが売りらしい。アホか。

「じくつ」

息を呑んで、左手をネズミ捕りにセットする。

城守局長が言うには、骨くらい折れる可能性があるので、『冗談でも誰かの手を挟んだりしないようにとのことだ』。

「でも、『冗談じゃないんですよ』

美琴は大まじめだつた。

でも、怖かつた。

「つて、いつまでも怖がつてもしうがないよね
全身に力を入れる。

足を踏ん張る。

歯を食いしばる。

そして。

「えーい！ 女は度胸！」

ネズミ捕りを発動させた。

「……」「……」「……」

彼女が何をやつていてるか分からぬ先輩オペレータ達の沈黙が痛い。傍目に見てても痛そうな、ネズミ捕りに挟まれた志藤の左手を見て、

卒倒しかかる人もいる。

でも、それが問題にならないくらい左手が痛い。ほんと痛い。
ひょっとして、折れたかもしれない。

これで何もなかつたら、ほんとに骨折り損ね、などと自嘲気味に思
いながらモニターに眼をやると。

「いた……！」

ほんとに居た。

管制室最外層プロック〇 - 4。

そこに、ガルアと同じくらい大きな反応が二つ。

幻影獣だ！

志藤美琴は、自分の席に駆け戻り、右手でマイクを取った。

紡ぎたい明日があるといつ予定で

『7月24日17時45分・O-4』

『今日、この場で闘っている、全てのBMPハンターの皆さまにお伝えします!』

良く響く声。

『現在Aブロックで、澄空悠斗君がAランク幻影獣ガルア・テトラに襲われています! 付近のハンターは最優先で救援に向かってください!』

今日飛び交った数多の声の中で、その慌てぶりから一番印象に残つていた声。

『また、ブロックO-4に非常に強力な精神支配系BMP能力を操る幻影獣が潜伏しています! 放つておくと危険です! 今から指示するブロックのハンターは連携を取りながら対応に向かってください! Aランク相当の幻影獣が一体です、無理はしないように!』

だが、さきほどまでの慌てぶりが嘘のように堂々とした声だった。何か痛みを堪えているような様子が気にかかるが。

「どういうことだい?」

ブロックO-4。最外層に位置するこのブロックにはBMPハンターがない。

幻影獣が襲つてこなかつたブロックだからだ。いや、正確には、襲つてこなかつたと思われていたブロックだからだ。

そんなブロックに、一人の少年と一人の美女がいた。

「何が?」

線の細い儂げな少年の問に、まるでこれからパーティーに出るかのような格好と雰囲気の美女が聞き返す。

「もちろん、今のは放送だよ。媒介を必要とせず、『支配されたことに対する気がつかない』君のBMP能力には、たとえあのアイズオブクリムゾンですら抗えない、って言つてなかつたかい？」

一見すると、貴族の令嬢と執事見習いの少年に見えるが、その口調は意外にフランクだつた。

「アイズオブクリムゾンには無理でも、抗える人もいるつてことでしょ」

何を当たり前のことを。といった口調で美女が答える。

「なるほど。そう言わると、返す言葉もないね」

納得したのか、どうでもいいと思つているのか、儂げな雰囲気の少年は素直に頷いた。

少年と言つてもガルアほど幼くは見えない。高校生くらいだ。

「で、どうするの？」

「Aブロックといにに来れないよう、全BMPハンターに暗示をかけるわ」

「できるの？ そんなこと」

「どうかしら？ さつきのこともあるし、何人かは抜けてくるかも

ね」と、人差指を唇にあて。

「その時は守つてくださるかしら、ソータ」

妖艶に囁いた。

「感情も付いてきていの人に人間の仕草をするのはどうかと思つた

「あら、それはガルアの努力を否定するんじやないかしら？ あの子、澄空悠斗を本気にさせるためにあんなに悪役ぶつて頑張つてのに」

「僕も最初はそつ思つてたけど、あれはひょつとすると地なんじやないかな？」

「あなたも、演じてるんじゃないの？」

「僕だって必要があつてやつてるんだよ」

と、傷けな少年は右手をかざした。

その先にあるのは、なぜか片づけられていない掃除用のモップ。それが、まるで吸い寄せられるように少年の手に収まる。

۱۷۰

軽い声で、モップを投げる。

2メートルも飛べばいい方というくらいの力の入れ方だったが、モップはまるで弾丸のように物理法則に喧嘩を売りながら飛んでいく。そして、壁にぶつかって粉々になつた。

「うん。問題ない。君に護衛なんて必要ないとは思つけど、微力をつくして頑張るよ」

「失礼な。四聖獸唯一の非戦闘員を捕まえて」

非戦闘員だけど僕やガルアよりは強いよね」と

これから何人ものEMFハンターと闘わなければならぬらしいの
に、まるで緊張したところのない二人。

「そ二いやカルアの方は力又夫かな？」

意だし

「僕らがBMPハンターを食べるのはほどほどにした方がいいんだ

「靈井通立の器通立」

豪奢な美顔が、冷酷な笑みに染まる。

「澄空悠斗が頑固だから、あの子困つてゐるじゃない。私が加勢しても怒られるし。仲間が死ねば、少しは彼も本気になるでしょう」

『7月24日17時50分・C』

「あ

ぼつりと呟く麗華。

何が起つたかと言つと。

「カラドボルグが……」

消えたのだ。

さきほど全館放送で、若干平常心をなくしたことによる影響はない。

ちなみに、その直後、峰・三村・エリカ（にこ）に来ていたとは知らなかつた）が、ここを通つてAプロックに向かつたが、あまり安心材料にはならなかつた。

結果、なんとかこのタートルを倒そうとして、少しペース配分（あくまで今の体調での）を乱してしまつたのだ。
イリュージョンソード

幻想剣を実体化できない。実体化しようとすると、異常なまでの頭痛がする。

そこまでやつて分かつたことと言えば、あのBランク幻影獣は、切り札と言つべきBMP能力を全く持たない代わりに、弱点らしき部位もないということだった。

亀を模した姿なので、試しに眼を狙つて見たところ、瞼を閉じただけでカラドボルグが防がれるくらいだ。

「困つた」

□調だけ聞けばあまり困つたように聞こえないかもしけないが、本当に困つていた。

もうBMP能力の使用の有無に係らずに、とにかく頭が痛い。

全身が重い。

手足の感覚がない。

BMP過敏症……いや。

BMP中毒症だつた。

覚醒時衝動の時の経験から、医者の言つことを聞かないことの恐ろしさは、痛いほどに分かつてゐるつもりだった。

本人も気づいていない『アイズオブエメラルド』の欠点をついてまで、この場所に来たのは、別に中毒症を甘く見ていたからではなかつた。

実際、他の敵であれば問題はなかつたはずだ。だが、出力が上げられない今の麗華にとって、このタートルは天敵だつた。

「これは……無理かもしねない」

冷静に受け止める。

幸い、タートルは麗華にそれほど興味はなさそうである。立ち塞がらなければ、襲つてくることはないだろう。

加えて、澄空悠斗ならば相性がいい。劣化状態とはいえ、彼のカラードボルグは威力の点ではオリジナルと大きな差はないのだ。もちろん彼の体調は問題ない。この巨体と文字通り亀のよつた動きのタートル相手なら、勝機は十分にある。

Aブロックに向かつた、峰・三村・エリカのトリオも多少は助けになるだろう。

「でも……」

放送によると、今澄空悠斗はAランク幻影獣ガルア・テトラと闘っている。タートルの乱入は、命取りになりかねない。

しかし、今ここで自分が死ぬまで闘つてもタートルは止められない。結果は同じ……どころか、澄空悠斗に加えて、もう一人最高ランクのBMPハンターが失われることになる。

「ここは、退くのが正解?」

成果は大きく、犠牲は少なく。

同じ死ぬなら、二人よりも一人の方がいい。

BMPハンターは、この国……いや、世界の財産なのだから。

「悠斗君だけが死ぬのが……正解?」

澄空悠斗の潜在能力は凄まじい。

今、自分が代わりに死ねるのならば、長い目で見ればその方が人類のためになる。

だが、両方死ぬとなれば話は別だ。澄空悠斗だけを助けるのが無理な以上、自分が助かるしかない。

「私だけが生き残るのが……」

決められない。

今までの考え方や経験で決めてしまふことができない。

確かに、澄空悠斗を失うことのデメリットは大きい。

「…………」

たとえば授業。

最初は、澄空悠斗の覚醒時衝動を止めるために受けていたが、なぜか今でも受けている。

別に受けなくても、澄空悠斗が勉強を教えてほしいと言つてきた時に対応できる自信はあるが、細かいニュアンスは一緒に授業を受け

ていた方が伝えやすい。

「いや、そんなことはどうでも良いで」

「ああ、でも。授業と一緒に受けていると、休み時間と一緒に話をすることができる。」

未だに話題選びには困るが、だいたい三村やヒリカ（最近では峰も）がやつてくるので、会話が途絶える心配はない。

昼ご飯だって一緒に食べに行ける。

教室に買ってきて、机をくっつけて食べてもいいし、学食に行ってもいい。

澄空悠斗は、わざわざチーズフライのない学食なんてクリープのないコーヒーだ、と言っていたが、案外なんでも美味しそうに食べている。

「やついえば……」

彼は言っていた。

食事時が一番寂しかったと。

自分はどうだったんだろうか。

家族と一緒に食べていたこの記憶はほとんどない。

人生のほとんどの時間を一人で食べていた……ような気がする、が。

「どんな感じだったかな……」

あまり覚えていない。

どんなものを、どんなことを考えながら食べていたのか。

澄空悠斗と一緒に食べている食事なら、日付指定でメニューを思い出せるのに。

それ以前は、食生活が貧しかったからだろうか？

最近では食事そのものにも興味が出てきた。幸い、経済的には恵まれているのだし、どんなものでも買つて来れるし、どんなところに行けば食べに行つたつてい。

「でも……」

澄空悠斗の作ったカレーだけは、一度と食べられなくなる。

タートルがゆっくりと動き出す。

動かない麗華を無視して、ゆっくりとAプロックに向かって歩みを進め始める。

数ヶ月前にBMP能力を覚醒し、生涯一度目の本格的な実戦で幻影獣最強のAランクと闘っている少年に、そり一一体で一軍に匹敵すると言われるBランク幻影獣が向かっている。

澄空悠斗と一度と会えなくなる。

澄空悠斗と一度と食事ができなくなる。

澄空悠斗と一度と話ができなくなる。

澄空悠斗と一度と一緒に歩けなくなる。

「ああ、そつか……」

ガルア・テトラに奇襲された帰り道。

『どうして逃げなかつたの?』

やはり愚かな質問だつたのだ。

『麗華さんも俺も間違つてない

その後に続く言葉。

あの後、澄空悠斗が何と言おうとしたのか、よつやく分かった。

「でも、守りたかった」

物凄い勢いでタートルが振り向いてきた。

今まで三味線を弾いていたのかといふくらい、全身で警戒を示している。

それもそのはず。

剣麗華の右手に、再び具現化したカラドボルグが握られていた。しかも、今までと迫力と言うか、存在感が全く違う。好調時でも、ここまで出力は出したことがない。生まれて初めて見せる『本気』だった。

『悠斗君が遠い』

『そんなことはない。
すぐ近くにいる』

『とても遠くに感じる』

『そんなことはない。』

『同じ気持ちを持つてはいる。』

「タートルを倒して、悠斗君の所に駆けつける
何も問題はない。」

二人とも助かれば、誰にも文句は言わせない。
必ず、二人で、明日を紡ぐ。

想いを抱えたヴァルキリーは、無敵の剣を振り下ろした。

幻影戦闘『四聖獣ガルア・テトロ』

『7月24日18時01分・A』

ストン、と。腰が落ちた。

やつぱり訓練と実戦は、消耗の度合^{ヒヨコ}が違う。
ヘトヘトになるまで逃げ回って。

『悠斗くん！ 幻影獣の精神支配は破りました！ もう少しで援軍
がやってきます！』

管制室のオペレータさんの頼もしい援護に、わずかばかりの光明が
見えてきたところだ。

ガルアが召喚した。

三つ皿の『口』を。

「…………勘弁してくれ」

それ以外、どう言えどこうなんだ？

「一応、説明だけしておけけど、別にさつきの彼女の放送で焦つて
いる訳じゃないよ」

対するガルアは涼しい顔。

どう見ても『いよいよ切り札を出してしまったぜ』的な雰囲気はな
い。

つまり、まだまだ余裕がある。

「たとえ、残りの全ハンターがここに雪崩れ込んで来たって、全て
喰らうくらいの自信はあるんだ」

だらうな。

「でも、このままだと、君は倒れるまで逃げ回りやつだからね」

同時に大口を開ける三体の『口』。

召喚数が増えても、その動きにはわずかの乱れも見られない。

「これが最後だよ、澄空悠斗。もう僕を倒すしかないのは分かるよね？」

小学生くらいの外見をしているのに、まるで駄々っ子を諭すような口調の幻影獣。

分かつてゐる。超加速システムアクセルじゃ、もう無理だ。

「だからといって、倒せる訳も……。な！」

心が折れ掛けているのか、戦闘中にも関わらずガルアから田線を外した俺の目に、衝撃の映像が飛び込んできた。

「な、なんで……？」

壁にかかっているモニター群の一つ。じブロッケを写しているモニター。

世界最強の女の子の鬪いを写しているモニター。

映つてゐるのは、当然のように画断され消滅しかかつてゐるBランク幻影獣タートルと。

うつ伏せに倒れたまま動かない麗華さん。

「れ、麗華さん！」

もはや、ガルアそっちのけで叫ぶ俺。

なんなんだ！

あれは『ちょっと休憩』的な倒れ方じゃ、断じてないぞ！

「驚いた……」

興味を示したのか、同じようにモニターを眺めながらガルアが呟く。
「時間稼ぎにもならないと思ってたのに、まさか相討ちに持ち込む
なんて……。あいつも意外に頑張つたなー」

ふざけたことを言つ、ふざけた存在。

「ふざけるなよ！ 麗華さんが、あんな亀に負けるか！」「ま、そうだね」

「へ？」

あつせりと認めるガルアに、拍子抜けする俺。

「あの子、相當に調子が悪そuddたからねー。ま、仕方ないんじ
やないかな」

「え？」

今、何て言つた？

「ん？ だから、調子悪かつたんだよね？『BMP中毒症』だっ
け。身体がBMP能力についてこなくなるなんて、いくら強くても
不便だね。君達、人間は」

ちょ、ちょっと待て……。

「嘘つけ！ こども先生は、BMP過敏症は治つたって言つてたぞ
！」

「知らないよ、君達人間の事情なんて。でも、本当に君は気付かな
かつたの？」

何気ない一言。

さつきは俺を本気にさせようと不慣れな挑発をしてたみたいだけど、
この言葉は違うのが分かる。
本当に何の気なしに言つた一言。

「あ……」

しかし、今までで一番俺の心を抉った一言だった。

「そうだ……」

確かに違和感は感じていた。

感じていたからこそ、「麗華さんの代わりに自分がタートルと闘うなんて身の程知らずな提案をして、麗華さんを驚かせたんだ。こども先生がどうして間違ったのかは分からない。でも。

「こども先生がどうとかじやなくて……」

俺は気づいてあげられなかつた。

麗華さんが苦しんでるのを。

そして。

麗華さんも言わなかつた。

「なんでだ……？」
俺が弱いからか？
俺がバカだからか？
それとも、その両方か？
確かに、その通りだ。
でも、言つて欲しかつた。
たとえ結果的に役に立たなくとも……。

「言つてくれさえすれば……」

こんなところで「倒れるまで逃げる」なんて、悠長なことは言つてなかつた！

『ま、しゃあねえやな』

ペース配分、なんて高等なことが俺にできるとは思つてなかつたけど。

心のどこかで何かが外れたのが分かる。

「劣化複写」：幻想剣断層剣カラドボルグ

熱い。

カラドボルグが今までと比較にならないくらい熱い。
いや、カラドボルグだけじゃない。

全身が燃えるみたいだ。

「驚いた。まだそんな力があるな。って、余裕を見せてる場合でもなさそうだね」

ようやく真剣な顔を見せるアランク幻影獣。

「それが君の本氣かい？ 澄空悠斗！」

「俺はいつだって本氣だ」

そのベクトルが変つただけだ。

『いいか、悠斗。これは戦争だ』
分かつてる。

『遠慮はいらねえ』
だれがするか。

『全ての技、全ての戦術、全ての能力』
全ての力で。

『痕跡残さず、消し去つてやれ！』

もちろんだ！

「おおおおおお！」

凶暴な吠え声をあげながら、カラドボルグを横殴りに振り切る。

それまでとは比較にならない次元の断層が空間を上下に裂く。

「くつ」

ガルアが宙に舞う。

「だめだよ、澄空悠斗。威力はダンチだけど、モーションがダダ漏れじゃないか？ そんなんじゃ……うるさい。」

「さらに続けて……」

カラドボルグが一瞬で虚空に消える。

「劣化複写：超加速！」

宙に浮いて身動きできないガルアめがけて、三村の超加速で追撃をかける。

「かふつ」

少年の外見をした獣の腹に、深々とめり込む俺の肘。

「猪突猛進！」

止まらずに、ガルアを宙に押し上げていく。

肘に集中する力が、槍に見立てた俺の肘を青白い光で覆っていく。

そのまま、ガルアをさきほどモニター群に叩きつけた！

「がふつ」

別に狙つた訳ではないが。

Cブロックが見えるモニターが、すぐ近くに見えた。

「ちょっとだけ、驚いたよ
モニター群に身体をめり込ませ、貫通しそうなほど深く俺の肘を身體にめり込ませながら。」

ガルアは少しも堪えた様子はなかつた。

「異なるBMP能力の連続起動とはね。君は最強を目指すことはできない、って言つたことは撤回させてもういいよ」

「でも、忘れてないよね？ こんなナリでも、僕はAランク幻影獣なんだよ。この程度の攻撃じゃBランクにだって傷一つ付けられな

……

「さらに続けて……」

肘を戾して。

呼ぶ。

「イレギュラー・コピー
劣化複写・捕食行動」

Aブロックに四体目の『口』が現れる。
他三体と外見、大きさ、存在感、全てが同じだが。
こいつは、ガルアの命令は聞かない。
俺の背後の空間で、俺の命令とエサを待つている。

「な……」

「悪いな」

驚愕するガルアに告げる。

「俺はあんまり興味がないんだ」

誰の方が優れているとか。
誰が一番強いとか。

「君は、人間だけじゃなく、僕らのBMP能力まで……」

「そんなものより、今はおまえを倒す力があればいい」

倒して麗華さんの所へ駆けつける力があればいい！

ガルアの胸倉を無造作につかみ上げる。
そんな俺の背後には、大口を開ける捕食行動^{マンイーター}。

「やはり、やはり君……」

外見通りではあるが、意外に軽いガルアの身体を、背後の口に投げ込む俺。

ガルアは、抵抗もせずに『口』の中に呑みこまれていき。

「『境界の者』……」

『口』が閉じた。

譲れない大仕事

『7月24日18時21分・管制室』

「やつたー！」

管制室オペレータ・志藤美琴（22歳独身。でも、そろそろ彼氏は欲しい。どちらかと言えば年上派だけど、怖い人は苦手。局長みたいにパーソナリティ過ぎる人も、プライベートで付き合つにはどうかな？　といふか、悠斗君かなりいんじやね）は、飛び上がって喜んだ。

「やつた、やつた！　悠斗君がやつたー！」

もちろん嬉しいのは分かるがなんで君がそこまで喜ぶんだ、的な視線を同僚オペレータ達からもらひながらも、志藤ははしゃいでいた。嬉しいのだ。

まるで自分があのガルア・テトラを倒したかのように、いや、それ以上に嬉しかった。

局長が、普段から澄空悠斗の話を良くする理由も分かる。彼は確かに英雄的ではないかもしれない。でも、それ以上に特別だった。

「志藤さん。嬉しいのは分かるけど、まだ闘いは終わってないわよ

「！　そ、そうでした」

オールドミスに見えるけど、優しい旦那さんの居る主任オペレーターに注意されて、我に返る。そう、まだ終わっていない。

幻影獣軍団はまだ残ってるし、あと一人のアランク幻影獣も気にかかる。

それにより。

『ブロックで倒れたまま、身動き一つしない剣麗華が気にかかる。

志藤美琴は、受話器を取り、上条研究所の電話番号を『一九一』

『7月24日18時24分・A』

「やつた……」

ほんとにやつてしまつた。

なんだか頭がカーッとして良く覚えていないが、俺があのAランク幻影獣を倒したのは間違いない。

みんなに『褒めて褒めて!』と言つて回りたいところだが、まだ一番大事な仕事が残つている。

麗華さんを助ける。絶対に!

でも、その前に。

「どうやつて降りよう……」

思わず呟く。

今現在、俺は半壊したモニター群の一つにしがみついていた。

Aブロック自体の高さは20メートルほどだが、モニター群は10メートルくらいのところに設置されている。

飛び降りても死ぬことはないかもしれないが、今は骨折なんかしてる暇はない。

とはいって、Aブロックの壁面はツルツルで取っ掛かりないので、這つて降りることもできない。

え? ここまで来れたんだから、逆に超加速で降りればいいんじゅ

システムアクセル

ないかって？

あの技はブレークが利かないんだ。さつきは、ガルアの身体をクツショシステムアクセルン代わりにしたけど、今度は自然落下プラス超加速で地面に激突して、スプラッタになる可能性大だ。おのれ、三村め。

「でも、迷っている暇もないよな……」

俺がしがみついているモニターにはCブロックの映像が映し出されている。つまり麗華さんが映っている。

うつ伏せに倒れたまま動く気配が全くない。

もう管制室が助けを呼んでくれているとは思うし、俺が行つても何もできないとは思つが……。

行かない訳にはいかないだろ！

「えーい！ 男は度胸！」

氣合一閃。

モニターを蹴つて飛び立とうとして。

「澄空！」

誰かの声が聞こえた。

「三村？ それに、峰とエリカ？」

Aブロックの入り口（そういうえば、いつの間にか復活してるな）に現れたのは、俺のクラスメイト達（エリカは違うが）だった。大きな怪我はないようだが、戦闘の跡が見える。まさか、鬪つてたのか？

「ちょっと待て、澄空… 自慢じゃないが、超加速でそこから飛び降りたら、間違いなく大怪我するぞ！」

ほんとに自慢じゃないことを大声で忠告してくれる三村。

大丈夫だ。普通に飛び降りるつもりだから。

「それでも、怪我するぞ！ ちょっと待つてろ！」

と告げて、エリカになにやら話しかける三村。

まさか、クッシュョンとか持つてくるつもりじゃないだろうな？

麗華さんのことが心配でそんな暇はないし、麗華さんのことがなくとも、俺の情けない握力がそろそろ限界だぞ。

と。

「豪華絢爛！」

良く響く澄み切った声が、Aブロックを満たす。

瞬間、空間に出現する（ちょっとだけ）不可視の刃。

しかし。

「なぜ、この状況で、豪華絢爛……？」

呟いてみる。

しかも、闘いの疲れのせいか、隠蔽率も鋭さも、いつもより遙かに悪い。

と。

「システムアクセセル
超加速」

三村の姿が消える。

次の瞬間、少し高いところに出現する。

そして、また上へ。

「ま、まさか……」

豪華絢爛を足場にして……！

しかも、極短距離に絞っているせいか、ブレークが利いている。まあ、利いてなかつたら、三村の身体がサックリだけど！

なんどか、そんな移動を繰り返して。

「ま、こんなもんか」

麗華さんの映つたモニターにしがみつく俺のすぐ隣。

不可視の刃を足場にして、三村が空中に立っていた。

そして、『さあ俺の胸に飛び込んで来い』とばかりに、腕を広げて

いる。

三村の兄貴モード全開だ！ でも、若干飛び込みたくないぞ！
とばかりも言つてられないでの、モニターを蹴つてジャンプする。

「おつとと」

三村の腕に（不本意ながらも）収まりながら、豪華絢爛ロイヤルエッジの足場に立

つ。

「わわわわわわ！」

バランスを崩す。

こんなツルツル滑る、できそこないのラグビーボールみたいな物体
の上に立てるか！

「ほら、しつかりしろ。澄空ヒカル」

が、三村は涼しい顔で立っている。

「さ、行くぞ。システムアクセセル超加速」

そして、俺の肩を抱いたまま、登つて来た時と同じよつ、元気ツバメで、
爛ツヅを足場にして下まで降りてしまった。

「凄いな、三村」

三村達がここに来た一通りの経緯を聞いた後。

光速のライバルに教わったとかいう、エリカとのコンビネーション
スキルに、俺は素直に感心していた。

が。

「ぶへつ！」

峰に思いつきり、背中を叩かれた。

「どほ！」

そして、三村にボディを決められた。

「ん？」

エリカには、なぜかデコピングされた。
なんなんだ？

「凄えのはおまえだろ、澄空！」

叫ぶ三村。

「本当に、Aランク幻影獣を倒してしまつとは……」

「凄すぎテス！ 悠斗さん！」

峰とエリカも、褒めてくれる。

……そつか。

やつぱり、これだよ。

新聞とか、テレビで『Bランク幻影獣を倒した奇跡のBMPハンターワーク』とかって報道されるのも嬉しくない訳じゃないけど。やつぱり……。

「つて、こんなことしてる場合じやないんだ！」
と、麗華さんが映つているモニターを指差す俺。

「あれつテ、……」

「……剣？」

「彼女にしては苦戦しているとは思つたが……。あまり良い状態ではなさそうだな」

そう。峰の言つとおり、麗華さんの状態は良くない。といつか、なんでまだ誰も助けに行つてないんだ！

「いや、しかし、お前こそ大丈夫なのか？ 最後、とんでもない大技使つてたけど」

「大丈夫だ！ まだ、あと3セットはいける」

三村に応える俺。

ちなみに『1セット』=断層剣カラドボルグ・超加速・捕食行動コンボ』だ。

「それは凄いな……」

素直に感心する峰を置いて、走り出す俺。

「あ、マ、待つてください！」

エリカの声を聞きながらも、足は止めない。

若干ふらふらしてゐけど。

名著ある闘い

『7月24日18時36分・C』

Cブロックには、先客がいた。

「緋色先生！」

三村が叫ぶ。

仰向けにした麗華さんを膝に抱いて、先生が待っていた。

「悠斗君！？ ガルア・テトラは？」

「退場してもらいました！」

「嘘……」

先生が、信じられないものを見るような眼をした。

「そんなことより、先生！ 麗華さんの状態は！？」
「良くない！」

俺の質問に、簡潔に答える先生。
その顔色は悪い。

「BMP中毒症……。それも、かなり重度の。今すぐ上条博士のところに処置をしないと、命に係るわ！」

「そんナ……」

呻くエリカ。

上条博士の研究所は遠い。

それでも、行くしかないだろ！

「管制室！ こちら、A……じゃなかつたCブロック澄空悠斗！」

麗華さんが危険な状態です！ すぐに上条博士の研究所へ行く車の

手配を！』

『駄目です、悠斗君！ 管理局の車は全て破壊されています！ 車は呼びましたが、幻影獣が外にまで溢れ出して道路が寸断され始めています！ なんとか、応急処置を！』

「お……」

応急処置つて言つたつて！

A E Dとかで何とかなる状態じやないぞ！

「か、回復系のB M P能力者とか居ないんですか！」

『いなーいことはないですが……』

『B M P中毒症を治せるような能力はないわ』
管制室に叫ぶ俺に、先生の声が浴びせられる。
まるで冷水のよつこ。

「じゃあ、どうすればいいんですか！？』

「…………」

俺の問いに、下を向いてしまつ先生。
やめてくれ。

そんな簡単にあきらめないでくれ。

そんな簡単に麗華さんがいなくなつてたまるか！

上条博士も、B M P能力者も駄目だつて言つんならー。
言つさならー…………。

…………。

「あ」

唐突に思い出す。

アイズオブクリムゾン、緋色瞳との言葉。

『その覚悟があるのなら』

ある。

麗華さんがいなくなるくらいなら、そんな覚悟でくらでもしてやるー。

「先生！」

声を上げる。

「何、悠斗君」

「調律メンテナンスですよ、先生！俺はウエポンティマーです！先生のお姉さんも、先生に聞けば基本的な使い方を教えてくれるって！」

言つてたよな、確か！

「調律メンテナンスの使い方を、先生が？」

「そレハ、緋色先生ハ、BMP能力についてノエキスパートではありますけど」

「さすがに、ウエポンティマーの技は教えられないと思つが、……」
三村、エリカ、峰が余計なことを言つ。

教えられなくても、教えてもらわないと困るんだよー！

「そうか。そういうこと」

が、先生は何か分かつたようだ。よしー

「教えてくれるんですね！」

「教えると言うか……。いい？ 良く聞いて悠斗君」

まずは落ち着けとばかりに、先生。

「私は、別にウエポンティマーのこと詳しへはないわ

おい！」

「だから、私に聞けば分かるといつことは、たぶん誰に聞いても分かるといつこと

？

「姉さんは、悠斗君はもう調律メンテナンスが使えると言いたいのよ

「でも、現実に使えないんですって！」

もつ、そのドラマ的な言い回しはいいから！

「落ち着いて悠斗君。もし悠斗君が調律メンテナンスを使えるなら、誰もが知つ

ている有名で基本的なウエポンティマーの技があるの

「そ、そなんですか！」

「うか！ そう繋がるのか！」

「ああ、あれか」

「そう言えバ、聞いたことあります

「マジで。あれを？」

「峰、エリカ、三村も何せらり心当たりがある様子。三村のトーンが若干気になるが。

いや、気にしている場合じゃない！

「いい、良く聞いて悠斗君。調律メンテナンスの最も基本的な技は……

「は、はい！」

技は！？

「マウスアームマウスなの

「……………。
……………。
……………。
……………。
えーと。

「……………なんですか、それ？」
思わず聞き返す、俺。

と、先生は顔を真っ赤にして。

「だ、だから、マウストゥーマウス！ いわゆる人工呼吸！ とい
うか、見たことくらいあるでしょ！ 先生は、じども先生だから
て、実演はできないうけど！」

叫んだ。

いや、もちろん人工呼吸が何かくらいは、いくら俺が馬鹿でも知つ
ているが。

とにかく、こんなときだけ『じども先生』を自称するとは、黒いな。
ポンと肩に手が置かれる。

三村だ。

「俺は子供ではないからして、やることにやぶさかではないが。後
で剣に首を刎ねられる可能性が大だから、お前に任せると
俺が刎ねられない保障でもあんのか！」

「ないが、ここはやるしかないだらつ」
と峰。

「学園一の美人さんノ唇を奪えるコトを考えると、決して損な役回
りではないテス！」

無責任に焚きつけるエリカ。

そ、そりや、麗華さんとキスできるなら役得でないとは言わないけ
ど。

首と引き換えとか言わると……それでも、損ではないかもし
れないが。

これからも、麗華さんと一緒に学園生活を送ると考えると。

……やるしかないか。

(俺の)心臓止まるかもしれないけど。

「で、では、悠斗君。こちらへ」

(なぜか) かちんこちんに緊張した「じども先生が、膝に乗せた麗華さんの頭の位置を少しづらす。形の良過ぎる麗華さんの桜色の唇が、上を向く。

「…………」

あ、あんなとこで、俺の口を持つていいくのか！ マジで！

「覚悟を決める澄空。どんな美少女とやつたってキスはキスだ」

三村の励まし。意味が分からん。

「調律の発動も忘れるなよ」

峰の注意。ああ、それもあった。本当にキスするだけで発動するんだろうな？

「フ、不謹慎かもしけないですケド、ドキドキしてきましタエリカ。勘弁してくれ。

俺の心臓なんて、もう破裂しそうだ。

へ、変に意識しないで。

本当に人工呼吸のノリで。

いや、むしろ、様子を見ようと麗華さんの顔を覗き込んだら、ちよつと唇が当たっちゃった、くらいのノリで。

「いへい」

これからも、麗華さんと一緒に生きていこうため。

俺は、顔を近づけた。

「……」「……」「…………」「…………」「…………」

痛いほど寂寥。

唇には湿つた感触。

脳を蕩かす麗華さんの香り。

そして。

俺の身体から、唇を通して、何かが流れ込んでいく。

俺の命が、力となつて、麗華さんの身体に溶け込んでいくような、不思議な感覚。

本体の俺が嫉妬するくらい勇敢に、俺の力が麗華さんの身体に住む悪い病を駆逐していく。

それは、とても名前ある闘いに思えた。

Bランク幻影獣を斬り捨てたことよりも、Aランク幻影獣を次元の彼方に放り込んだことよりも、誰かに最強と称えられることよりも。

自然に離れる唇。

確信があった。

俺は勝ったんだと。

「…………ん」

ゆっくりと眼を覚ます麗華さん。

麗華さんが状況を把握する前に距離を取らないと、俺の首が危険といつ気もしたが、そんな気力はもうどこにもなかつた。
といつも、もうひとつとして俺の心臓は止まっているかもしねない。と。

「麗華さんー！」

後ろから、麗華さんの頭を抱え込むような体勢で抱きしめるエリカ。

「うひの、ヤロオー！」

三村に殴られる俺。

「見事だ。さすがは、俺の永遠のライバル」

微妙にノリの違う峰。

「…………あうあう」

顔を真っ赤にした、こども先生。意外とウブだ。

そして。

「私は……」

麗華さん。

麗華さんが、自分の唇に手をやる。

胸が物理的に締め付けられるような、強烈な感覚。

麗華さんはじつに畳つだらう。

怒ってカラドボルグを振り回すくらいなら、まだいい。もし仮に泣かれでもしたら、俺も泣いてしまいそうだ。

「れ、麗華さん……。そ、その……」
「メンテナンス
調律……」

「へ？」

10パターンほど瞬時に浮かんだ反応の、どれにも当てはまらない単語が飛んできた。

「ありがとう。悠斗君」

「…………あ」

「助けてくれて、ありがとう。悠斗君」

死んだ。

たぶん、俺もう死んだ。

覚醒時衝動

『7月24日18時45分・管制室』

「――――――！」

志藤美琴（22歳。澄空悠斗ファンクラブ初代会長）は、コンソールをドンドン叩きながら悶えていた。

悶えまくっていた。

あんなの見せるからだ！

まるで自分がキスされたかのように、顔が熱い。

「――――！」

勤務中であることも忘れて、完全に腐女子と化していた。

が、誰も咎めるものはいない。

皆（オールドミスに見えて、実は家族思いの主任も）、Aブロックの様子を眺めていた。

志藤のような愉しみ方をしている者はさすがにいなかつたが。

それでも皆、見入っていた。

強さに依らない、澄空悠斗の強さ】。

英雄よりも英雄的な、澄空悠斗の勇気に。

誰もが感じていた。

いくら本人が否定しようとも。

やはり、彼は何か特別な意味を持つて生まれてきた少年なのだと。

と。

「いや、まだだ！」

鋭い男性の声が響く。

ちなみに（どうでもいいが）、声の主は、クール系のかなりの美形だった。でも独身。

「澄空悠斗君の様子がおかしい！」

その声で、志藤も我に返る。

そういえば、大事なことを忘れていた。

澄空悠斗が、今までに調律メンテナンスを発動メンテナンスしたという記録はない。つまりは、これが初めての調律。

……ということは。

「Aブロック！ 悠斗君から離れてください！」

見る見るうちに膨れ上がって行く、澄空悠斗のプレッシャーを感じながら叫ぶ。

「覚醒時衝動です！」

『7月24日18時48分・C』

（甘かった……）

アイズオブエメラルド・緋色香は、歯噛みする。

別に、澄空悠斗が覚醒時衝動を起こさない体质などと超希望的観測をしていた訳ではない。

たとえ覚醒時衝動を起こしても、せいぜい剣麗華の時と同程度（それでも、一大事だが）だと思っていたのが甘かった。

澄空悠斗がレジストを持たない支配系能力ならば、少しは効果があるのでは、と予測したのが馬鹿げた妄想だった。

身体が重い。
息が苦しい。

空間そのものが重みを持ったような、まるで自分達が陸に打ち上げられた魚のように場違いの存在であるかのような、そんな感覚だった。

「お、重いデス……」
「エリカ！」
フレッシャーに耐えられなくなつたのか。ぐずおれるエリカを三村が支える。

「なんてこと……」

呟く香。

強すぎるBMP能力は、特に具体的な能力発動をしなくとも、BMP能力の低い人の精神に悪影響を与える。

常日頃から、剣麗華に気をつけろと言つてていることだ。

しかし、肉体にまで影響を及ぼすフレッシャーなど聞いたこともない。

しかも、エリカはBMP119とはいえ、立派なBMP能力者だ。

見つめる視線の先。

つい先ほどまで顔を真っ赤にしていた少年は、まるで幽鬼のようにな虚ろな表情で立ち尽くしている。

生氣の全く感じられない立ち姿から、冗談のように膨大な力を垂れ流している。

「深い……」

眼帯を外した深緑の右眼に映るのは、奈落の底を彷彿とさせる深い闇。

圧倒的な力を感知して焼けるように痛い右眼に、芯の凍えるような闇が突き刺さつてくる。

「ヤバイ……なんてもんじゃないよな?」

「絶体絶命……だな」

エリカを支えたままの三村の問いに、峰が短く答える。

こんな時だが、香は、一人が取り乱していくことに少し感心する。

『アレ』は、元がクラスメイトというだけだ。

純粹な力だけで言えば、恐らく、あのAランク幻影獣以上。

「せ、先生……。どうしまジョウか?」

三村が聞いてくるが、もちろんどうにもできない。

このメンツでなんとかできる相手ではないが。

このまま放つておくと、幻影獣軍とBMPハンター達の鬭いの真っただ中に、彼が飛び込んでいくことになる。

そのせいで人死がれるような事態になれば、澄空悠斗がどんな想いをするかなど、考えたくもない。

(せめて、麗華さんが万全なら………)

膝に抱く麗華は、意識こじしつかりしているが、とても起き上がり状態ではなかつた。

暴走する澄空悠斗を見つめたまま、身動き一つしない。

「フレッシャーは凄いけど、今のうちなり………」

具体的な能力発動をしていないことに(最後の)希望を託して飛びかかるうとする三村の前で。

澄空悠斗が右手に剣を出現させた。

「ちつ……」

「カラドボルグか……」

峰が呟く。

剣麗華の幻想剣を複写して具現化した剣。

(ん？　まてよ？)

思いつく香。

澄空悠斗の劣化複写^{イレギュラー・コピー}は、『必ず劣化状態で複写する』能力だ。すると、たとえ澄空悠斗のBMP能力自体が底上げされたとしても、オリジナルのカラドボルグより強くならないのではないか？だとすると（それでも十二分にやっかいだが）勝機はある！

が。

「お、おい……。あれ……」

「なんだ、あれは……？」

三村と峰が指差すのは、澄空悠斗の背後。そこに、壮麗な剣が『浮かんで』いた。その数、50ほど。

「か、カラドボルグか？　あれ？」

「BMP能力の多重起動？　い、いや、しかし、なぜ浮いているん

だ？」

「豪華絢爛^{ロイヤルエッジ}デス！」完全に不可視化した豪華絢爛^{ロイヤルエッジ}で保持していまス

！　なんテ、応用力ト制御力……！」

同一能力の多重起動に加えて、異なる能力の複合起動。力の総量はもとより、超絶技巧どころではないテクニック。

(普通は、覚醒時衝動が大きくなるほど、制御は大雑把になるのに……)
もし、あの一本一本がオリジナル並みの力を持つているとしたら……。

「緋色先生……。来る」

「え？ あ、ああ！」

現実逃避しかけた意識を、剣麗華の一言が引き戻す。
確かに、澄空悠斗の背後に浮かぶ幻想剣が、動きを見せ始めている。

「や、ヤバイって、これ！」

「三村！ エリカ君を連れて逃げる！ 僕は、緋色先生達を……！」

驚愕の精神力で、回避行動を取ろうとする三村と峰。

だが。

「ダメ！ 二人とも、動かないで！」

緋色香の声が制止する。

あまりといえばあまりの指示だが、従つてくれなければ死ぬ。

ここは、『アイズオブエメラルド』……いや、緋色香と生徒達の信
頼関係を信じるのみだ。

そして、50の刃が振り下ろされる。

祈りにも似た気持ちが通じたのか、三村と峰は動かなかつた。

この世の終わりのような轟音が響いた後。

Cブロックは、本当にこの世の終わりのような惨状を示していた。
複写版カラードボルグは、オリジナルの威力を忠実に再現し。
中層側はおろか、核にも耐えうるAブロックをもズタズタに引き裂いていた。

だが、何よりひどい惨状なのは地面だ。

幼子に戯れに引き裂かれたキャンバスのように、深い深い亀裂が、
縦横無尽に走っている。

浅い所でも、10メートルほどの深さのある亀裂だ。

そして、香達の立っている場所は、文字通り陸の孤島と化していた。

「や、ヤヤヤヤヤヤ、やばかった……。や、さすが、緋色先生……」

「動いていれば、死んでいたな……」

峰の言うとおり、香達が立っている場所以外には、どこに逃げても
安全地帯はなかつた。

攻撃の軌道を『アイズオブエメラルド』で見切つた、緋色香のファ
インプレーだつた。

(良かつた……。今日初めて役に立つた気がする……)

若干自信を取り戻す香。

いや、それどころか。

(この至近距離で外すなんて……。力の総量もテクニックも凄いけ
ど、やっぱり制御しきれてない?)

考えてみれば、当たり前かもしれない。

どれほど澄空悠斗が凄かろうが、彼はまだ能力覚醒して3カ月程度
の、いわば初心者。

こんな超絶能力を意識して制御できるわけがない。

「いけるかもしない」

意識があるのかどうかも分からぬ、虚ろな眼をした澄空悠斗を見ながら、香は呟く。

「みんな良く聞いて」

麗華を抱いたまま、語りかける香。

「覚醒時衝動を抑える一番いい方法は、空っぽになるまで能力を使わせること。これは知ってるわね？」

授業の時のような問い合わせに、三村と峰とHリカが頷く。

「でも、この状況でそんなことしてたら、[冗談抜きで首都が落ちるかもしれない」

少なくとも、BMP管理局は、この世から消えてなくなる。

「もう一つの方法は、本人を氣絶させる」と

この状況では、そちらの方が難しいといつ話もあるが。

「今なら、可能よ」

と、三村と峰を見る。

「名譽ある任務つてやつですね」

「元より、ここで退く者にBMPハンターを名乗る資格はないでしょ」

「わ、私も、やれマス！」

三村、峰、Hリカが迷いのない返事をする。

「ありがとう……」

と、最高の生徒たちを見る香。

（こんな私でも……。教えてきたことは間違いじゃなかつたのかもしない……）

僅かな感傷を振り切って、説明を始める。

「作戦は、簡単よ。まず、私が『アイズオブエメラルド』を最大出力で悠斗君に叩きこむ」

「はい」と峰。

「ひるんだ一瞬の隙に、三村君と峰君が攻撃して悠斗君を氣絶させる。この時、絶対に手加減しないこと。ちょっと表現が悪いけど、殺すくらいの覚悟で今の悠斗君にはちょうどいいわ」

「ふつふつふ……。問題ないですよ、緋色先生。合法的に、やつの不可思議モテフィールドに審判を下すチャンスなんですから。ちょっと不必要なくらい本気で行きます」と三村。

「本郷さんは、万一一の時、麗華さんを連れて逃げること。こんなこと言いたくないけど、私を含めて誰にどんなことがあっても、麗華さんだけは逃がしてね」

「わかりましたー」と麗華を抱える香の所に駆け寄るエリカ。

「じゃ

と、緋色香は、エリカに麗華を託して立ち上がる。

感触を確かめるよう、一二・二・三回、右眼を瞬きする。

「いくよ、悠斗くん！」

普段は眼帯で隠されている緋色香の右眼からほどばしる深緑の光。

「『システムアクセセルオーバードライブ
超加速・猪突猛進』！」
「『ガンキヤッスルアサルトチャージ
砲撃城砦・全力突撃』！」

そして、三村と峰は、アイズオブエメラルドを信じて、大地を蹴る。

作戦に穴があつたとは思えない。

澄空悠斗が完全に自身の力を制御できていねりず。

精神支配に対するレジストを持たず。

身体能力そのものを強化していない限り。

澄空悠斗は、三村と峰の同時攻撃で確実に意識を失つはずだった。

「が……はつ」

「な、なんで……？」

絞り出すように声を上げる、峰と三村。

それぞらの腹には、お互いの拳が捻じりこまれている。

「三村君！ 峰君！」

声を上げる緋色香。

彼女の眼の前で、一人がゆっくりと崩れ落ちていく。

「な、なんてコト……！」

エリカも声を失っている。

何が起こつたのか分からぬ。

確かに、澄空悠斗は『アイズオブエメラルド』で一瞬意識を失つていたはずだし、三村と峰の攻撃は彼の身体を捉えたように見えた。

「一体、何が……？」

最悪の事態に、ほとんど条件反射で澄空悠斗を分析しようとする深緑の瞳。

「あ、あれッテ……！」

だが、その必要はなかつた。

原因は一目了然だった。

一番初めの、一番肝心な前提が間違っていたのだ。

「そ、そんな……」

澄空悠斗を守護する騎士のように、空間に浮かぶ50の剣。その半分近くが、断層剣カラドボルグではない別の剣に代わっていた。

あれは……。

「干渉剣フラガラック……」

全てを引き裂く無敵の剣ではなく、通常攻撃では倒せない相手を攻撃するための精神干渉剣。

今まで、あんな剣はなかった。いや、見えなかった。

「フラガラックの多重起動で、私達に幻覚を見せてイタんでしょうか……？」

エリカが言つ。

「嘘でしょ……」

対して香は、恐怖を通り越して驚きを感じていた。

あれはあくまで精神体を攻撃するというだけの剣だ。

単純に多重起動したところで、人間に幻覚など見せられるはずがない。

しかも、対象の一人は感知系最高峰の『アイズオブエメラルド』だ。

「甘かつた……」

アレに隙なんかない。

攻撃のための剣を多重干渉させて幻覚をみせるなど、剣麗華本人にもできるかどうか……。

「…………もう嫌。なんで今日は失敗ばかり……」

いや、違う。

たまたま今日明らかになつただけで、今まで自分に問題がなかつた訳じゃない。

能力が及ばなかつたのはまだいい。

しかし、澄空悠斗が能力を完全に制御しているのを見誤つたのは、完全に自分のミスだ。麗華の時と同じミスだ。

たとえ、澄空悠斗が初撃を外していたとしても……。

「？ 待つてよ……」

そうだ。おかしい。

あれだけ超絶テクニックを駆使する今の澄空悠斗が、ただ斬り裂くだけでいいカラドボルグの斬撃を、この至近距離で外すだろうか？ それに、三村と峰のことも。

あれだけ言ったのにお互い手加減したおかげで、一人とも気を失うだけで済んでいるが、そもそも幻覚を操れるなら、そこら辺に空いている大穴に突っ込ませればいい。確実に死ぬ。

（まさか……！）

「意識があるの……？ 悠斗君！」

声。

届くかどうかわからない声。

「ねえ、聞こえてる、悠斗君！ 私よ！ あなたの担任のこじも先生よ！」

外見は小学生だが、この場で一番の『大人』である香が必死に声をかける。

「つ……」

と、初めて澄空悠斗に変化があった。

搔き築るように頭を抱える。

「ゆ、悠斗君！？」

届いたかもしれない声に、駆け出そうとする香。

「駄目、先生」

「れ、麗華さん……！？」

その香を、いつの間にかエリカの腕の中から起き出していた剣麗華が引きとめる。

「先生は、直接攻撃に対する防御手段を持つてない。うかつに近づくと危険」

「き、危険なのは、あなたの方でしょ！… サっきまで、あなた死にかけていたのよ！」これは、私がなんとかするから、本郷さんと一緒に逃げて！」

「悠斗君も闘っている。私だけ逃げられない」

危険な状態は脱したとはいえ、未だ顔面は蒼白でとても本調子とはいえない状態だが、その声には力があった。

「れ、麗華さん……。でも……」

「先生だって知っているはず。氣絶させる方法は、BMP能力が高い場合にはとても危険。もう一つの方法を取った方がいい」

「ば、馬鹿なことを言わないで！… 今の悠斗君の力を全部使わせるなんて、首都の全BMPハンターがかかつても足りないわよ！…」

「私も昔、おじい様達に、そうやって助けてもらつた」

「あ……」

「だから、今度は私の番」

ふらつく脚で、カラドボルグを具現化させる。

実物と見紛うほどに澄空悠斗の背後に顯現し、周囲を押しつぶすほどの力を放つている偽物に比べて、その剣はひどく頼りない。

向こう側が透けて見えるほどの儂とは幻想剣の名前通りではあるが、この剣でいまの澄空悠斗に立ち向かうなど、無謀を通り越して喜劇だった。だが。

「首都の全BMPハンターなんていらない。私が全て、受け止める」

剣麗華に迷いはなかつた。

『おい！　おい！　悠斗！　聞こえてるか！　聞こえてないとと思つけど、しつかりしろ！』

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。
頭が痛い！

いや、頭じゃない、身体だ！

パンパンに空気を入れて膨らませた風船みたいに、破裂寸前。

どんどん抜かないと、本当に破裂する。

でも、発散させるだけじゃダメだ。

せつかくのBMP能力なんだから、うまく使わないと。
幻影獣を口口さないと。

力は有り余ってるけど、無駄遣いはしないで。

効率よく殺すんだ。

じやないと、渴きは満たされない。

そうだ、俺は渴いてる。

全部の力を使いきつて、全部の幻影獣を殺し切つて。

誰も死なない世界を作るまで。

あの子が寂しくない世界を作るまで。

『悠斗！　おい！』

そんな世界は来ないって？
そんなことは知ってるよ。

でも、皆が俺を見るだろ。

俺のB.M.P能力に注目してるだろ。

使うんだ、限界まで。

後に何も残らなくてもいいから使うんだ。
この渴きは死ぬまで満たされない。

けど、使うんだ。

『悠斗！..』

分かつている。

これが覚醒時衝動だ。

自分だけがならない体質だなんて思つてなかつた。
けど、話に聞いていたほどゴツイ感じはないな。
むしろ、ひもじい。

寂しい。

渴く。

力が溢れているのに、中身がどんどん空っぽになつていいみたいだ。
でも、使わないと。

『悠斗！　力を発散するのはいいが、前を見ろ！..』

「え？」

薄ぼんやりと開いた眼に映るのは、折り重なつて倒れる一人の少年。

見覚えはある。が、名前が出てこない。

でも、たぶん知り合いだ。

俺を殺そうとした知り合いだ。

でも、殺したくなかった知り合いだ。

だから、なるべく怪我をさせないように無力化した。

……これでいいのか？

いいんだよな。

頭が痛い。

「悠斗君！」

「悠斗さん！」

こどものような姿をした先生と、美しい金髪を持つ少女が俺に呼びかけて来ている。

あの一人も、たぶん知り合いだ。

俺を殺そうと……？

分からぬ。けど、無力化しないと。

守るために無力化しないと。

次はどうやろうか？

おれのちからはおおきすぎていこういろなことにふべんだな。

そして。

「どうしたの、悠斗君？」

この世の者とも思えないほど美しい少女が。

「私は！」

明らかに弱り切った身体と剣に渴を入れながら。

「悠斗君が全ての力を使いきるまで、相手になる

「俺の背後の50の剣に、一斉だにくれず！」。

「来ないなら、こっちから行くよ？」

世界で一番澄んだ瞳で、俺を見ている。

『そりゃあ、無理だぜ。ソードウェポン……』

頭が痛い。

あの子の名前が思い出せない。

俺より強いのに、俺が一番守りたいあの子のことが思い出せない。
俺が守りたいのに俺を殺そうとしているあの子を無力化するには、
どうすればいい？

「難しいな……」

みんなが俺を嫌っている。

みんなが俺を殺そうとしている。

でも、俺が憎い相手は一人もいない。

俺はみんなを守らないといけない。

今度は、あの時と違つて、敵はない。

だから、うまく無力化しないといけない。

いや、あの時も、結局は俺の早とちりで敵ではなかつたんだっけ……。

「…………あの時…………？」

待てよ。

ひょっとして。

前にも、こんなことなかつたか？

ブレードとダガー

『7月24日19時00分・D-1』

「一時間半ほどですか……。まあ、時間が問題ではありませんから、良しとしましょう」

普段はBMPハンター同士が腕を磨く武道館のような造りをした鍛錬場。

その広大な空間の中で、一人のBMPハンターが向かい合って立てていた。

2時間前までこの空間の主人だった100体を超える幻影獣は、全て霧と化しており。

100体を超える幻影獣を一体ずつ順番に斬つて行ったBMPハンターが吐いたのが、さきほどのセリフと言つ訳だ。

「な、なんなんですか、あなたは……」

「？ 私のことを聞いていないのですか？ しょうがないですね、彼らも……。いいですか、私のBMP能力は一騎討ち（グレイトバトル）について……」

「そんなことは知っていますよ…」

意外に強い声で遮るダガーウエポン・坂下陸。

ちなみに、ブレード・ウエポン・城守蓮のBMP能力、一騎討ち（グレイトバトル）は、敵味方に一対一を強いる能力だ。

どういう理屈なのは分からぬが、この能力の発動中は、誰も城守に複数で敵対できないし、誰も城守に加勢できない。

精神に干渉しているのか、肉体を操っているのか、空間を制御して

いるのか。

誰に聞いてもうまく説明することができないので、概念能力なのでは、今まで言われている。

「そんなことじやなくて……」

その能力自体も、聞くのと見ると見ると違ったが、それよりなにより。

「1体ずつとはいえ、100体以上の幻影獣を斬り倒して、無傷だなんて……」「

といふか、息一つ乱していない。

「ああ、そんなことですか

「そ、そんなことって……」

「一対一で強いからこそ、この能力が意味があるんですよ。100体くらい斬り殺せないようじや、剛にだつて負けているじゃないですか？まあそれでも、時間当たりの効率でいえば光には敵いませんけどね」

それがどうしました、と言わんばかりの口調で、愛用の刀の手入れを始める城守。

眼鏡をかけた線の細い知的な顔とマッチしている優雅な仕草だが、その刀がさきほど100体以上の獣を斬り殺していると考へれば、逆にシユールだ。

「は、はは……」

唐突に渴いた笑い声を上げる陸。

「これが、僕の前任……。無敵の城守。歴代最強ブレードウエポン

か……」

今までの緊張の糸が一気に切れたみたいだ。
どうしてクリスタルランスの仲間は認めてくれないのかとか、澄空
悠斗が特別扱いされるのと何か関係があるのかとか。

全く見当違いのことばかり考えていた。

「あなたが比較対象じや、誰だって僕になんか期待しませんよね」「
次世代のホープだなんて呼ばれていても、所詮自分は数合わせだつ
たのだ。」

「ふむ。あなたの抱えている問題は一見深刻そうですが、何か勘違いをしていませんか?」

「勘違いなんかじゃないですよ……何度も出撃しても迷惑かけるばか
りだし、なかなか一緒に特訓はしてくれないし、ミーティングにだ
って呼んでくれないし……」

「あの連中は付き合いが長いですからね。すぐに連携に付いていく
なくて当然ですよ」

「で、でもですね……」

「そもそもあの連中は、自主的にミーティングなんかしませんよ。
一緒に訓練するのも、光と影くらいです」

「え?」

「リーダーや剛が仲良く訓練しているところを、想像できますか?」

「そ、そりや、そうかもしませんけど……」

「考え方ですよ」

「で、でも、それじゃあ、澄空悠斗のことはどうなるんですか?
あいつと先輩方は絶対に何かあるはずなのに、誰も教えてくれない

!」

言つた後、陸はしまつたと思った。

このことは言つてしまつなかつたのに。

「ふむ。やう言えば、どうなりましたかね、Aプロックは？」

刀をしまい、今思い出したとばかりに言ひ城守。

といづか。

「やうですよ、Aプロック！ 城守さんに見惚れてすっかり忘れていたけど、Aランク幻影獣が現れて、なんとか倒したら、今度は澄空悠斗が覚醒時衝動を起こして！ なんかめちゃくちゃやばい状況らしいじゃありませんか！」

忘れるなよ。

「そうですね」

「やうですねって……！ いいんですか？」

「良くはないんですけど……」

と、眼鏡の位置を治す仕草をして。

「あなたのところのリーダーに』もし悠斗君が覚醒時衝動を起こしてもあなただけは絶対に来ないで』と釘を刺されますからね。私にも怖いものはあるのですよ」

「？」

意外な人物の名前がでてきたことに驚きを覚える陸。

「そ、そつか……。あなたも、澄空悠斗と何かあつたんですね……？」

「ふむ、それも聞いていないと」

「そ、そうですよ！ これってやっぱり、俺が信用されていない証拠だと……！」

「それこそ考へ過ぎですよ」

と、踵を返して歩き出す城守。

「ブレードウエポン？」

「少し休憩しましょ。我々の出番はないと私はいますが、万が一

のことはありますから。どこがいいか……。ああ、そつそつ。悠斗君が来てから急に品ぞろえが良くなつた自販機コーナーがありますね。あそここしましょづ。奢りますよ」

「は、はあ……」

それでいいのかとも思うが、BMP管理局長にして最強のBMPハンターでもある城守蓮が間違つた判断をするとも思えない。とつあえず付いていくことにする。

「ああ、そつそつ。わたくしの話ですが、あの連中にちゃんと尋ねましたか?」

「え? 澄空悠斗の話ですが、もちろんそれとなく……」

「それとなくでは駄目ですよ」

ちちちつと指を振る城守。

「どうも、あの連中に複雑なイメージを抱き過ぎるようですね」

「え、そつなんですか?」

「外見や能力に騙されがちですが、あの連中は基本、大きな子供です。必要のないメンバーなど絶対に入れないし、不要だと思つならハッキリ言います。悠斗君と過去のクリスタルランスの関係など、今あなたに必要ないと思つたんでしょう。試しにきちんと聞いてみてください。『あれ? 聞きたかったんだ』とか言いながら教えてくれますよ」

「え、そつでしょづか?」

自分の頭の中にあるクリスタルランスのイメージと、かつてのメンバーが語るイメージの違いに、いまいち修正が追い付かない陸。

「いや、良く考へるとペナルティものですね」

「は?」

「こくらあの連中が鈍いとはいって、可愛い後輩をこんなに悩ませるなど」

「は、はあ」

肩を並べて歩きながら、BMP管理局長ではなく、先輩の顔で語りかける城守。

「この役得、私がもうこましょいわ
え？」

「光あたりは『コトコトのスタイリッシュ』を伝えるのは私の役目だつたのにー』とか後から言いだしそつですが、悪いのは彼らですからね」

「は、はあ。……いや、はー。聞かせてください。大事なことのよ
うな気がするんです」

居住まいを正す陸に対して「せつでもないと思ひますけどね」と咳
払いをする城守。

「と、その前に一つ。せつしきあなたが言ひていたことです
が

「はい？」

「私は無敵でも最強でもありますよ」

「はい？」

何を言つているのかと思つ陸。

10年前に引退した今でも、BMPハンターランク一位に君臨し、
どんな乱戦でも制する一騎討ち（グレイトバトル）を持ち、そして
一対一で決して負けないこの男のどこが最強でないといふのか？
「といつても、実際に負けましたしね

「え？」

衝撃的な一言。

真偽を確かめよつとする前に、城守が口を開いた。

「では、語りましようか。私が世界で一番強いと思つ少年の話を」

追憶～首都橋の悪魔～

『10年前・首都橋にて』

「なるほど。」りやひでえ

首都橋の一角、ワゴン車から降り立つばかりの5人のうちの一人、高校生くらいの、大柄な身体を持つ少年が言った。
その後、『もう僕の用事は終わりっすね』とばかり、ワゴン車は逃げて行った。

「ここまで派手さんは、さすがにウチも初めて見るわー」

逃げ去るワゴン車を氣にもせず、勝気な眼が印象的な少女が言う。
眼の前に広がるのは、盛大に玉突き事故を起こして沈黙している車の群れである。

「と言つても、直接的なBMP能力による破壊が行われた形跡はありませんけどね」

続けるのは、線が細く、眼鏡をかけた美少年である。
が、腰に下げる刀と相まって、その存在感は大柄な少年を圧倒している。

「そんなん分からない。リーダーみたいに支配系能力者かもしれないし、直接攻撃しなくとも、走っている車の制御を乱す方法なんて、いくらでもある」

美少年に応えるのは、さきほどの少女と同じくらいの年の美少女である。

トロントした眼のせいか、5人の中で一番おつとりした印象を受ける。

「ともあれ、このプレッシャーは本物です。幻影獣ではないようですが……。みなさん、気を抜かずに」

5人の中で一番年上の少女が、締める。
どんなCG補正をかけばこんな美少女ができるのか、といつもくらいの美形だが、その姿の中で一番眼を引くのは、燃えるような深い瞳である。

と、まるでその声に応えるかのように。

数百メートル、数十台に渡って玉突き事故を起こしている大惨事の車の群れの中から、一人の少年が姿を現した。
小学生くらいに見える。まだ幼い男の子だ。

「あいつか？」

「そうだと思つ」

「動ける人は避難し終わっているみたいですね」「
「ゆうても、車の中に取り残されどる人らも結構あると思つで」
大柄、眠そう、眼鏡、猫目の順で日々に感想を言つ。

「救助も大切ですが、第一の任務は、あの少年の確保です。覚醒時衝動を起こしているのはほぼ間違いないので、油断はしないでください」

「こんなプレッシャーの中で油断できるのは、リーダーと蓮くらいやわ……」

わずかに緊張した面持ちで、猫目の少女が赤目の少女に返す。

「リーダー。あの子、BMPどのくらいだと思つ？」

「私のアイズオブクリムゾンは、分析にはそれほど向いていないのでなんとも……。ただ、私より上なのは間違いないですね」
おつとり眼の少女に、赤目の少女が返す。

「リーダーより上？ BMP170以上は理論的に入りえないんじ

やなかつたか？」

「今この瞬間に覚醒時衝動を起こしている剣大臣のお孫さんも、172と聞いていますか？」

「ああ、そういうやうだった。あつちは国家維持軍で対応するからつて外されたんだつけな、俺ら」

大柄な少年と美少年のやり取り。

「正直腐ってたんだが、ひょっとしてこっちの方が大当たりなんじやね！？」

「相変わらずの戦闘狂ですね、あなたは。……しかし、否定はしません」

水と油どじりか、全く接点のなさそな外見の一人だが、妙に気が合っている。

もちろん、見た目と中身にギャップがあるとすれば、眼鏡美少年の方だろうが。

「ま、とりあえずはお手並み拝見だな」

ひょい、といつた感じで、近くに転がっていた軽トラックを持ちあげる大柄な少年。

「ちょ、ちょい待ち……、剛！」

「つけえー！」

猫目の少女の制止も聞かず、沈黙した車の群れの中で虚ろな目でたたずむ少年に向かつて、軽トラックを投げつける！

軽トラックは、冗談のように高く綺麗な放物線を描き。

覚醒時衝動を起こした少年を叩き潰した。

「…………」

「…………」

「…………死んだのではないでしょつか…………？」

眼鏡美少年が、ぽろつと呟く。

「アホか？ 蓮。これだけ馬鹿でかい気配を振りまいてるやつが、これくらいで死ぬか」

「アホは、あんたや！」

すぱん、と、猫目の少女が大柄な少年の頭に突っ込みを入れる。

「んだよ、彰？」

「あのな！ いくら強力なBMP能力いつても、それが戦闘系とは限らんやろが！ うちのリーダーかて、BMP168やけど、飛んでくる車を受け止められると思うか！」

「…………あ」

「…………あ、や、あらへんわ！ この脳筋が！」

やつちまったく、的なポーズを取る大柄な少年に、再度の突っ込みを入れる猫目少女。

どうやら、この二人は仲がいいらしい。

「どうやら、その心配はなきやつですよ」

赤い瞳のリーダーの澄んだ声が告げる。

それに応えるように、大柄な少年……ハンマー・ウエポン臥淵剛が投げたのと同じくらい高く綺麗な放物線を描いて、軽トラックが橋の下の海に投げ込まれる。

後には、傷一つない虚ろな眼の少年。

「どうやら、戦闘系みたい」

「しかも、身体能力強化系かよ！ 大当たりどころか、超大当たりじゃねえか！」

眠そうな眼の少女の感想に、語彙の少ないことをアピールするかのようなセリフで続く剛。

「リーダー。とりあえず、俺が行つていいか？ いや、行く！ 絶対行くから邪魔すんなよ、お前ら！」

リーダー……アイズオブクリムゾン緋色瞳はあるが、クリスタルラ

ンスメンバー全員に釘を刺して、剛が駆けだす。

「どうりやあ――！」

丸太のような太い腕が、無防備な少年の頭を捉える。ピンポン玉のように跳ね飛ばされる。

と思いきや、少年は、まるで恋人に訳のわからない理由で頬を叩かれて訳のわからない男のような仕草で、緩慢に頬を指で搔いていた。

「おおおおー……！」

雷のように激しい蹴りが、少年の身体に深々と突き刺さる。くの字に身体を折り曲げるが。

次の瞬間には、何事もなかつたかのように虚ろな眼で佇んでいた。

「ま、まじかよ、こいつ……！」

純粹なる身体能力強化系の怪力無双の攻撃を歯牙にもかけない少年を前にして、剛は怯えるどころか、ますます闘志を滾らせた。

「面白えじやねえか！ こうなりや、どうちかが倒れるまで……！」

最後まで言えなかつた。

華奢といつほどではないが、決して強そつとは見えない少年の腕に、がつちりと首を抱え込まれたからだ。

「……このー」

それまで無反応だった少年の突然の反応に驚く剛だが、さすがにそこはBMPハンター。

逆に、少年の胸を掴み返した所で。

腹に、思いつきり膝を叩きこまれた。

「が……。がはっ……」

不意を突かれたことを差し引いても、胃液が逆流しそうな程の強烈な一撃。

ダンプカーと正面衝突しても、相手が車両保険に入っているかどうかを心配する（主に仲間がだが）剛にとって、初めての衝撃だった。

「や、やべえ……」

危険な相手どころではない。

先日、クリスタルランスで初めて倒したBランク幻影獣が可愛く見えるくらいの、暴力的な力だった。

続いて、下げられた剛の頭を、引っ込抜くようなアッパー切割が襲う。

一瞬、剛の足が地面から離れる。

頭の中に星が舞う、という表現が比喩ではないことを実感する。

「ぐ、お……」

氣力で地面に倒れこむのは拒否したが、防御どころではない。

まだ視界さえ定まらない。

その揺れ動く視界の中で。

虚ろな眼をした少年が、その頼りなさげな拳を凶悪に振りかぶつているのが見えた。

最大級の危機を迎えるながら、ガードを固めず、あえてカウンターを狙いにいった剛の拳は空を切り（そもそもまだ焦点があつていなかった）

代わりに灼熱の衝撃が頭を貫通した。

「死にましたかね……」

「ど、どうやる……」

眼鏡美少年……ブレードウエポン城守蓮と、猫目少女……電速犬神

彰が思わず呟く。

視線の先には、10メートル近く吹っ飛ばされ、柱に強く打ちつけられて、そのまま動かなくなる剛。

「剛が力で負けるなんて……」

「恐ろしい能力ではありますが、純粹な身体能力強化系なら、それほどやっかいな相手でもなさそうですね」

眠そうな眼の少女……アローウエポン茜島光に、どこか残念そうな様子で答える蓮。

「どうでしょう、リーダー。ここは、私が片づけましょうか?」

「油断しないでください。わざわざから私が……」

「うあ！ ヤバイで、あれ！」

凄く行きたそうにしている蓮に、瞳が何らかの警告を発しようとこころで、彰が弾かれたように飛び出した。

虚ろな眼をした少年が、地面に伏したままぴくりとも動かない剛に向かつて歩き始めたからだ。

「電速！」
パルス

一陣の風が通り過ぎた後。
虚ろな眼をした少年の身体に電気が走りぬける。

「？」

まるで、「コントのようだ」と覗できるほど激しい電撃だったが、少年はキョトンとしていた。

「マジかいな……」

眼を疑いながらも、返す刀で少年の傍を走り抜けると同時に再度の電撃。

「…………」

が、やつぱり、これといった反応を示さない虚ろな眼の少年。

「攻撃力だけでなく、防御力も半端やなく上がつとる……。まるで、剛の怪力無双や……」

あまりの鉄壁ぶりに閉口する。

とりあえず、剛の無事を確認しながら、少し距離を取つとする彰。

が。

「……え？」

少年が居ない。

剛の方を向いた一瞬の隙に、身体中を電気で焼かれていたはずの少年が姿を消していた。

「ど、どこに……？」

不安げにあたりを見回す彰。

敵にそうさせたことは何度もあるが、自分がするのは初めての経験だった。

と。

「え？」

腰のあたりに、温かい感触。

見ると、小さな二つの手が、後ろから回されていた。

「あ……」

彰の顔が、眼に見えて青ざめる。

さきほどこの男の子は、全開で怪力無双ドラゴンスターを発動させていた剛の防御

をたやすく吹き飛ばした。

並みの防御力しか持たない自分が、あの力で攻撃されればどうなるのか。

「あ、ああ……」

上半身と下半身が一つに引きちぎられる絵が頭に浮かぶ。

が、それも決して大げさな妄想ではない。

一か八かの想いで、自分の腰に後ろから回された少年の手を掴む。

全ての力を使い切る覚悟で、電撃を放とうとした彰に。

逆に紫電の衝撃が駆け抜けた。

追想／クリスタルランス vs BMP187／

少年の発した電撃により、犬神彰は静かに倒れた。

「え、え……？」

茜島光が疑問を浮かべる。

一瞬予想した最悪の惨劇は起こらなかつたが、別に状況が良くなつた訳ではない。

「生半可な速度で、彰の眼を強引潜れる訳もなし。おまけにあの電撃……」

「まるで、電速……パルス」

加速度的に底が知れなくなつてゐる少年を前にしても、さして動じていらない蓮に対し、若干不安そうな光。

「複写系能力ですね」

リーダーが断定する。

「ただの複数能力の可能性はありませんか？」

「さつきから、私のアイズオブクリムゾンが全く通じません。相当高位の支配系能力を使つています」

「なるほど。アイズオブクリムゾンまで複写されていましたか」

言いながらも、むしろ楽しそうな顔をする蓮。

「彼のことを探ろうとしたのが失敗でしたね。初手で支配しておけば良かつた」

言つ瞳に。

「それじゃ、面白くないじゃないですか」と、蓮は刀を抜き放つた。

「私が行きます。問題はないですね」

「いきなりやつかいな能力を3つも複写されてしましましたからね。もうあなたでなければ歯が立たないでしょう」

お手上げポーズをする瞳。

「怪力^{ドラゴンバスター}無双の攻撃・防御力と電速^{パルス}のスピード。そして、アイズオブクリムゾンのレジスト効果で精神支配も効果なし……と。お手軽万能戦士の出来上がりですね」

いつになく軽口を叩く蓮には、気負う様子は全くない。

絶対の自信があるようだった。

「蓮……。油断しない方がいい」

「おや、めずらしいですね、光。あなたが心配してくれるとは」

「別に心配はしていない」

冷たい一言にも、蓮は、そうですか、と薄く微笑んだだけだった。クリスタルランスと言うチームを組んでいるが、蓮も他のメンバーも大した仲間意識はない。

特に蓮にいたっては『強い者同士で集まつていれば、大きな仕事に呼んでもらいやすくなる』という理由でしかなかつた。

そもそも蓮の能力は、仲間の存在を必要としない。

「一騎討ち（グレイドバトル）」

落ち着いた足取りで少年に向かいながら、蓮は咳く。

地を搖るがすような振動もなく、強い風に煽られるような波動もないが、蓮にだけは発動したことが分かる。

ただ一人の敵以外は、敵味方共に蓮の戦闘に関して一切の手を出せ

なくなる『現象』だ。

「一応言つておきますが、別にあなたの仲間がどこかに隠れていると心配している訳ではありませんよ」

「…………」

答えが返つてこないのを承知で話しかける。

「もちろん、私の仲間に手を出させないための騎士道精神でもあります」

「…………」

「単なる習慣です」

刀を握りしめながら続ける。

少年は何を言つているのか分からぬだろうが、別に構わない。これも単なる習慣だから。

負けたことがない男の。

(それはともかく)
思う。

少年の瞳が赤く染まつていない。
アイズオブクリムゾンを複写しているのはほぼ間違いないのだが、レジストをするのが精いっぱいで、相手の支配まではできないということだろうが。

「まあ……。例えオリジナルでも私には通じませんが」
アイズオブクリムゾンを破るのには、実は特別な能力は必要ない。誰にも侵されない強力な意志さえあればいい。
「それでも、あなたが私を倒せる唯一の可能性だったのですがね……」

若干残念そうに言つ蓮。

と。

少年の姿が焼き消えた。

「やはり電速ですか」
パルス

慌てることなく視線を動かし。
動かし……。

そのまま180度振り向いた。

「意外に慎重ですね」

語りかける蓮。

少年は、攻撃することなく蓮の横を駆け抜け、背後に回ったのだ。
しかも、最初より蓮との距離が離れている。

いきなり勝負がつくかと思つたのだが。

「臆病風に吹かれたのとすれば、少しはできますか」と言つたところで、僅かな違和感を覚えた。

(慎重……。臆病?)

あの少年は、覚醒時衝動を起こしているのではなかつたか。
どちらも、あり得ない言葉だ。

怯えるとすれば自分のBMP能力に対してだけのはず。

「まあいいでしじう。電速^{パルス}で動き回られると時間がかかりそうですが」
と、自身の敗北を1パーセントも勘案していないセリフを蓮が吐いた瞬間。

少年が驚きの行動に出た。

「ほつ

最初に剛がそうしたよつこ、近くにある自動車（普通のセダンだ）を持ちあげたのだ。

そのまま投げつけてくる。

「やれやれ」

接近戦は分が悪いと悟ったのは立派だが、この戦法は論外だ。

最高速では劣るはずだが、蓮は電速よりも速いと錯覚させるほど現事な動きでセダンの下を潜り抜ける。

そして、そのまま少年に向かってあいつという間に距離を詰める。

(やはり、複写したBMP能力の切り替え時にわずかな隙ができる)動きを止めた少年に向かって、容赦なく突進しながら刀を構える蓮。

「これで……」

終わりです。と思つた瞬間。

少年の姿が消えた。

少年の姿はない。
代わりにあるのは柱。

そして、身体の前面に感じる痛み。

「あ、あ……？」

大したダメージではなかった。
が、唯一の武器である刀を無様にも取り落としてしまつぼどの衝撃
だった。

「あ……」

視界の定まらない中、手探りで刀を求める蓮。頬に感じる灼熱と、口の中の血の味。

どれも初めての経験だった。

状況は分かる。

アイズオブクリムゾンだ。
確かに蓮にあの技は通じない。

が、それは平常時、普段通りの状態であればの話。
愚策を取つたと相手を侮り、勝負はついたと気の緩んだ一瞬に、支配の魔手を差しこまれたのだ。

「く……！」

ようやく刀を探り当てた蓮は、弾かれたように顔を起こして周囲を見回す。

今、自分は完全に無防備だったはずだ。

なのに攻撃してこなかつた。

覚醒時衝動だから正確な判断ができるといいとか言つなよガキが。

（あれほどの戦術がとれる者が、我を失つていいはずが……！）

と怒りの感情を露わに（これも初めてのことだった）する蓮の瞳に、少年の姿が映る。

そして、滾った血が急速に収まつた。

少年の瞳は燃えるような赤色に染まっていた。

まるで幽鬼のように生氣のない仕草で立ちながら、その瞳だけはま

るで炎のよがだつた。

「あ……」

その瞳をまともに見た蓮の手から刀が滑り落ちる。

油断だつた。

あの少年がここまでアイズオブクリムゾンを使いこなせることが、まったく予想できなかつた訳ではない。自分すら欺く高度な戦法を、今日目覚めたばかりの少年が使つたことが受け入れられない現実なのではない。

あの眼だ。

アイズオブクリムゾン使えるかどうかなんて、わざいなことだつた。

彼の眼は。

自らの力に怯えて泣き叫ぶ子供の眼でも。

自らの力に酔いしれて暴れまわる狂人の眼でもなく。

「ぐ……あ……」

全身の筋力と氣力を総動員して向かうが、一度侵入を許した支配の力は、易々とは出でていかない。

刀を持つていれば、太ももあたりに付き刺す手もあつたが、さつき取り落としてしまつっていた。

そして、なにより、蓮自身が見惚れてしまつていた。

確たる目的を持ち闘う戦士の眼に。

負けることなどないはずだつたブレードウエポンに敗北を教えよう

としている少年の意思に。

「あなたはいいたい……」

何者なのですか、どう言葉は声にならす。

蓮の意識は闇に閉ざされた。

「リーダー……」

「ここまでですね」

光の言葉に、短く応える瞳。

「完全に闘い方を間違えました。蓮まで破れてしまつては、もう誰も彼を止められないでしょ」

「……」

「撤収します。後は、BMP管理局に任せましょ」。どのみち、あの少年はもう長くないでしょ」

言つて、近くの車を物色し始めるリーダー。

「どうこうこと、リーダー？」

「身体に比して、BMP能力が大き過ぎます。あれでは、遅かれ早かれBMP中毒症を発症するでしょ」

「……そうなの？」

「高BMP能力者が精神を病むのは良くある」とですが、身体に收まりきらないほどの能力とは……。どんな神様の悪ふざけなんでしょうね

幸いと言つべきか、当たり前と言つべきか、一合目でキーの差し込まれたままの車に当たった。

「そ、乗つてください、光」

「…………」

運転席に座つて呼びかける瞳だが、光は少年の方を見つめたまま動こうとしない。

「あの三人なら大丈夫ですよ。あの少年の力は確かに凄まじいですが、どれも致命傷になりそうな攻撃はありませんでした？」

言いながら、自分のセリフにわずかな違和感を覚える瞳。

その原因を探るうとするより前に。

光が両腕を頭上に振り上げて、クロスさせた。

「光！？」

「まだ私が闘つていない」

「な、なにを！？」

慌てるリーダーの前で、光の両手に力が集束していく。

彰と同時にクリスタルランス入ったこの少女は、どうにも掴みづらい性格だとは思っていたが。

自分から進んで闘いたがるようなタイプでは、決してなかつたはずだ。

「私も、あの子と闘つてみたい」

言つと同時に、天閃^{レイ}を少年に向かつて放つ光。

が、少年は眼にもとまらぬ動きで、光線をかわす。

「電速……^{パルス}」

吆くリーダー。

やはり、あの少年を倒すことは容易ではない。

「だつたら」

今度は、クロスさせずに両手を頭上に掲げる光。それぞれの手に、力が集束していく。連撃で勝負するつもりのようだ。

だが……。

「待つてください、光！」

「天閃」

リーダーの制止も聞かず、右手の光線を投げつける光。瞬間、少年からも同種の光線が放たれる。

そして、正面衝突した光線同士が爆発を起こす。

「う……」

「や、やはり……」

天閃まで、複写されてしまった。

反射的にもう一つの光線を投げつける光。

今度は抵抗なく、少年がいたあたりで爆発を起こす。

「あ、当たった？ リーダー？」

「いえ、おそらく外れました」

おまけに、再度の爆発で、完全に少年の姿を見失ってしまった。

これは、ますい。

「早く乗ってください、光！ 逃げますよー。」

「ま、まだ」

なおも意地を張る光。

やむなく、一人で発進しようとした瞳の眼の前で。

小さい影に、光が押し倒されるのが見えた。

完全に勝負はついた。

光はうつ伏せに組み伏され、後ろ手に固められている。
決して大きくはない光の背中に乗っているのは、さらに一回り小さい少年である。

一見すると、高校生のお姉さんに小学生の男の子がじゅれついているだけのように見えるが、彼は普通の小学生ではない。
（ラゴンスター）
怪力無双を複写した彼にとつては、あのまま光の腰をねじ切ることも朝飯前だらう。

瞳もアイズオブクリムゾンを全開にして睨みつけるが。

「…………」

「……やはり、通じませんか」

瞳と同じく、煌々と輝く深紅の眼を持つ少年には通じない。

……通じないのだが。

「気に入りませんね」

リーダーは言った。

「どうして、そのまま光を殺さないのですか？」

「……」

物騒なセリフにも、まるで反応を示さない少年。

「さきほど、同じような状況で彰も気絶させただけでしたね？」

「……」

「剛と蓮にいたっては。柱に吊りつかるなどせず、そのまま海に落としていれば、確実にとどめをさせたはず」

「……」

「あなたはいつたい、何がしたいのですか？」

問いかける瞳。

少年は応えない。

答えないが、無防備な瞳に襲いかかっても来ない。

光の背中に乗つたまま、静かな眼で瞳を見つめていた。

「どうすれば、その子を放してくれますか？」

切り口を変えてみる瞳。

と。

「これ以上……。みんなを……傷つける……な

少年が初めて口を開いた。

が。

「? なんのことですか?」

瞳が疑問符を挟む。

むしろ、被害を受けているのはクリスタルランスの方なのだが。

と、その時。

「あつ」 「あつ」

光が短く悲鳴を上げた。

どうやら、少年に後ろ手に握られている腕を変に捻つてしまつたらしい。

その瞬間、少年が腕を放した。

「…………え？」

疑問符を浮かべる瞳と光。

光の背中に乗つたままの少年は、気まずそうな顔をしながら、今度はどこを掴めばいいのか迷つていてる風だつた。

それを見て、瞳が再び話しかける。

「あなた、ひょつとして、ほんとは私達と戦いたくないのですか？」

というリーダーの問いに、少年は首を縦に振つた。

そして、背後の玉突き事故現場に視線を移して。

また、瞳と光に戻した。

その瞬間、瞳の脳裏に閃くものがあつた。

「あなたもしかして、私達クリスタルランスから、ここで事故を起こした人達を守つてているのですか？」

追憶へはじまりの物語へ

「えーと……。つまり、全部俺のせいって訳か？」

さきほどまでの暴れぶりが嘘のように大人しくなった少年を、クリスタルランス5人が囮んでいた。

瞳の見立て通り、やられぶりのわりには誰もほとんど怪我らしい怪我をしていなかつた。

「それ以外に解釈のしようがないでしょ」「

もつとも、蓮あたりは、プライドに多大なダメージを負つたようだが。

「ま、いきなり軽トラが飛んできたら、普通は敵やと思つやうなー」「いや、しかし彰よ。あの馬鹿みたいなプレッシャーは覚醒時衝動のもんだと思つても無理ないだろ？」「

「万が一そうでない可能性があるから、みんな気をつけろんや！

見事に裏目つたやないか、この脳みそ筋肉君が！」

元気いっぱいの彰に対し、剛は若干疲労の色が濃い。

少年に一番手加減されなかつたのかもしれない。

「それが……。覚醒時衝動を起こしていたのは間違いないようなのです」

「へ？」

リーダーの言葉に、揃つて声を上げる彰と剛。

「というより、まだ覚醒時衝動中です」

と、瞳は、さきほどまでの暴れぶりが嘘のように虚ろな眼で座り込んでいる少年を見た。

ちなみに、なぜかさきほどから光がしゃがみこんで少年の頭を撫で続けている。

「覚醒時衝動中？ 確かに、プレッシャーは凄まじいままですが……」

と、疑問符を浮かべる蓮。

ちなみに、今すぐでも再戦したくてたまらない鬪志を全く隠していない。さきほどの戦闘は相当なショックだったらしい。

「もう闘つ理由がなくなつたから闘わないんだよね。悠斗君しゃがみこんで視線を合わせ、少年の頭を撫で続ける光が言つ。その顔は、今までに見たことがないくらい優しい。

ちなみに、名前は瞳がアイズオブクリムゾンで読み取った。

「事故の原因がなんであれ、いきなり襲いかかってきた剛を敵だと勘違いし、事故を起こした人達を守ろうとしたというのは理解できます。しかし、覚醒時衝動となると話は別です」

「だよな。覚醒時衝動中は、普通は意識なんかねえよな」

蓮と剛が頷き合つ。

自分達の覚醒時衝動の時のことを思い出したのだ。

そして、結論。

……いや、やつぱ無理だろ、と。

「覚醒時衝動ん時には、本性だ。力に酔うか、恐れるか」

「その力をどう使つかなんてことに悩みが及ぶのは、氣絶するほど暴れた後の話ですよ」

剛と蓮が神妙に言つ。おそれらへ実体験なのだろう。

「その辺は同意見ですけどね……」

深紅の瞳で少年を見詰めたまま言つコーダー。

『力に対する依存も恐れも半分半分……』

ということが読み取れる。

なかなかバランスの取れた『本性』ではある。そもそも、どんな性根であれ、最終的には大した問題にはならない。たとえ自分がどんな人間だとしても、目指す目標のために自分を律する意思というものを人は持っているからだ。

だが……。

「ああ、良かつた」
いきなり瞳が言う。

「リーダー？」

「だ、そうですよ」

彰の疑問符に応える瞳。

「こんなのは嫌だ。誰かが傷つくのは嫌だ。誰かが傷つけるのは嫌だ。あの子が傷つくのは嫌だ。そんなのは嫌だ」

「…………」

「そんな感情ばかりでした」

と言うなり、一・三度瞬きして赤い瞳の力を落とすリーダー。

「こいつは、聖人君子か何かか？」

「だったら力ずくでも大人しくさせる、というあたりの発想は好みですが」

軽口を叩きながらも、剛と蓮に霸氣がない。
色々な意味で衝撃だつたらしい。

「リーダー。この子、クリスタルランスで預かれない？」

くるん、と視線を向けて聞いてくる光。

「お、それは……」

「名案ですね！」

なぜか、剛と蓮が割り込む。

「IJのBMP値だ。どうせ、まともな施設じゃ面倒見切れねえ。力に心が潰される暇もないくらい、徹底的に鍛えてやろうぜー。」

「あなたにしてはまともな意見ですが、どうせいい遊び相手ができる、くらいに思つて居るのでしよう。言つておきますが、このまま彼が強くなれば、すぐにあなたでは相手にならなくなりますよ？」

「阿呆か、おまえは。そつならなによつに、俺も強くなんだろうが！

……つて、そういうや、てめえも負けたんだつけな。自分こそ、いきなり、リベンジです、とか言いだすなよ」

「やだなあ、剛さん。脳幹まで筋肉のあなたと一緒にしないでくださいこよ」

「ちょ、ちょい待ち蓮。今はやばいって。真面目な話をしどる最中やから、邪魔するヒーラーに殺されるー。」

「いい感じにヒートアップしてきた剛と蓮を、彰が止める。もちろん、とばっちりが恐ろしいからだ。

「で、でもリーダー。クリスタルランスで預かる言つんは、悪い話やないと思つて。剣大臣はんは、BMP能力者があんまり好きやないみたいやし、こんだけとんでもないBMP能力者を預かれるとは他にないやない？……光もその気みたいやし」

最後の一言を、なぜか苦虫を噛み潰したような顔で言つ彰。

「うん。彰の言つとおり。そして、私がお姉さんにならうと思つ

「お、お姉さんやで」

「うん、私が一番悠斗君と年が近いから。たくさん可愛がつてあげようと思つ」「うと思つ

「う……。そ、そりやな。それがええわ」

『うちとも遊んでくれるよな！』といつセリフを噛み潰して、親指を立てて答える彰。女性だけど漢である。

が。

「みんなの気持ちは分かりましたが」「？」

「悠斗君はクリスタルランスには入れません」

「……どうして、リーダー？」

「というよりも、政府に報告しません」

瞼を閉じたまま言い放つ瞳。

「それは、違反行為ですよリーダー」

「違反は結構だが、意味があるのか？」

蓮と剛が疑問符を浮かべる。

「この子は、身体に対してもBMP能力が大きすぎます。このままで
は、遅かれ早かれ異常をきたすでしょう」

「でも、高BMP能力者にとって、精神に異常をきたすリスクは当
たり前のもんやろ？」

「この子の場合、精神ではなく身体です。精神ならば、専門の医師
の指導のもとで過ごせばそれなりになんとかなるものですが」

彰の疑問に答えるリーダー。

「身体がBMP能力についていかない？ そんなことは初めて聞いたぞ」

「でしょうね。私も初めて見ましたから」

剛にも答える。

「どうすればいいの、リーダー」

心配になつたのか、少年の頭をぎゅっと抱きしめている光。

「身体がある程度成長すれば、負担も軽くなるはず。小さい頃から
鍛えた場合に比べて爆発的な成長は望めないかもしませんが、そ

のぐらいの方が逆にいいでしょ。」「う

「それまでBMP能力を封印でもすんのか？」

「あら、察しがいいですね、剛。その通りですよ」

さうじと答えた瞳に、剛は驚く。

「今から、この少年に呪いをかけます

「の……」

物騒な単語に、彰がひぐ。

「今日のことを含め、自身のBMP能力に関する記憶の一切を封印します。そして、成長し、自身のBMP能力に対応できる身体と、それを使う意思を宿した時、解けるように設定します

「そんなことができるのですか？」

疑問を投げかける蓮。

アイズオブクリムゾンなら記憶の封印はできるかもしないが、任意のタイミングでそれを解除するとなると想像もつかない。

「私の弟を捧げますから

「弟？ 捧げる？」

何を言つているのか分からない、クリスタルランスメンバー。

「光、悠斗君の顔をこちらに」

「……記憶は本当に戻るの？」

「戻らなければその方が幸せかもしれません」

残酷でもあり優しくもあるリーダーの言葉。

「急かすつもりはありませんが、あまり時間はありません。今この瞬間にも、悠斗君の身体は衰弱し続けています」

光はしばらく考えていたが。

やがて、少年を促して瞳の方へ向かせる。

少年は完全に無抵抗だった。

「あなたのためとはいえ、これから私は、あなたにとても酷いことをします」

「…………」

「できるだけBMR能力に関する記憶に限るつもりですが、それでもかなりの部分の記憶を失います」

「…………」

「生活環境も、おなじく今まで通り暮らすことは不可能でしょう」

「…………」

「納得してくれないとましいえ、私の弟にも……。いえ、翔には、すでに謝り切れないほどのことをしていますね、私は」

「…………」

「恨んでくれても結構です。結局、これは私の勝手な考えに過ぎないのですから。ただ、できれば恨むのは私一人にしてください」

「…………」

一度深紅の瞳を閉じて。

見開く。

その眼は、今までになじみどき強い光を放っていた。

「うう」

少年が呻く。

「短くて10年ってことか。まあ、気長に待つとするか」

剛が言つ。

「長いですね。けれど、退屈はしないかもしません」

蓮も言つ。

「ああは言つけど、リーダーの呪いは強烈やからな。ひやんと帰つ

てきいや

彰が心配する。

「悠斗君、私は待ってる。今度会えたら、ちやんとお話ししよう」

光も約束する。

「では、頼みますよ、翔

「…………」

「また、いつか。私の呪いが解ける日にはましょ、澄空悠斗君

『7月24日19時15分・D-1』

「とまあ、意外に大したことのない話なんですが

澄空悠斗が泊まり出してから急に品ぞろえが豊富になつた自販機ロ
ーナーで、『どくどく縁クン』なる謎のドリンクを片手に、ブレー
ドウエポン城守蓮は語り終えた。

「いや、十分大したことありますって！」

大声で反論するのは、後任のダガーウエポン坂下陸。

「そうですかね」

「そうですよ！ 知っちゃいけなかつたり、知らない方が良かつた
りする秘密が5・6個ありましたよ、今の話！ 先輩方が話してく
れない訳で……」

「大したことのない話なんですよ」

静かに、しかしあつきりと断定するブレードウエポン。

「あなたはクリスタルランスなんですから」

「あ……」

その一言で。

ブレードウエポンが何が言いたいのか分かった。

「ほんとに……、俺が聞けば、先輩方はこの話、してくれたんでしょうか？」

「お疑いなら、改めて聞いてみればいいと思いますよまだ迷っている様子の陸に、涼しい顔で返す蓮。

「……そうしてみます」

陸も頷く。

「澄空悠斗が覚醒時衝動を起こしていても城守さんが落ち着いているのは、あいつが一度、覚醒時衝動を克服したことがあるからですか？」

「ええ。覚醒時衝動といつても、悠斗君にかかれれば解法の分かつているパズルのようなものです。心配には及びません

陸の問いに、信頼しきった表情で答える蓮。

「ブレードウエポン……。城守さんがクリスタルランスを辞めたのも……。やっぱりあいつに負けたからなんですか？」

「そうですね。それまでの生き方を全否定されるくらい、見事なまでに酷い負け方でしたからね」

セリフに比して、とても穏やかな表情で言うブレードウエポン。

「あまりに酷過ぎて……。悔しいとか、憎いとかを通り越して、憧れてしまつたんですよ」

「あ、憧れた……？」

「田標ができた、と言つていいかもしれません」

と、飲み終えた『どくどく縁クン』をきちんとゴミ箱に捨てながら（意外にうまかったらしく満足そうな顔をしてくる）城守は続ける。

「ただ、それまで何も考えずに生きてきたツケは大きかった。確たる田標ができるのに、どうすればそこまで至れるのか、さっぱり分からせんでしたからね」

「……」

口を挟まず蓮のセリフを聞きながら、陸も空き缶をゴミ箱に捨てる（じゅうは普通の缶コーヒーだった）。

「10年は長かった。色々な経験をして、多くのことを学んで、色々闘いに挑戦して……」

と、一旦、言葉を切つて。

「あの日の少年の背中こ、一体どれくらい近づけたんでしょうね?..」

ソードウポン・スウポンティマー

『7月24日19時20分・C』

「幻想剣・断層剣カラドボルグ」

数発撃つたびに現世から撤退しようとする『カラドボルグ』を、麗華は再度召喚する。

とっくに限界を超えている麗華には、安定した状態でカラドボルグを具現化することができないのだ。

もちろん、こんな中途半端な召喚は、さらに燃費が悪いことは間違いないのだが、もうそんなことを言っている場合ではなかつた。

「悠斗君！」

呼びかけると共に、澄空悠斗に向かつて断層剣を振るう。別に、血迷つた訳ではない。

その詛拠に、澄空悠斗の背後に浮かぶカラドボルグもどきが数本反応し、迎撃の断層を作りだし、麗華の断層攻撃を受け止める。

「はあ……はあ……」

カラドボルグの空間亀裂で空間亀裂が受け止められるというのは、つゝさつきまで麗華自身も知らなかつたが、おかげでだいぶ助かつていた。

わずかながらも、牽制に使えるからだ。

とはいって、発射口の数が違い過ぎる。

麗華はもちろんカラドボルグ一本だが、宙に浮かぶ悠斗のカラドボルグは、20数本はある（幸いと言つべきか、後の20数本は干渉剣フラガラックのままだった）。

「くつ……」

大きく飛び退く。

カラドボルグもどきの攻撃によつて、地面に出来そこないのアスター
リスクのような亀裂が走る。

一本一本の動きは緩慢だが、威力はオリジナルカラドボルグと大差
がない。当たると死ぬ。

「く……」

かわした先にも、またカラドボルグが3本ほど。
視界を覆うように、複数の断層が迫つてくる。
反射的に放つた麗華の空間亀裂が受け止める。

「うっ……く。は……はあ……」

やんわりとした吐き気のようなものをこらえながら、麗華は焦つて
いた。

とてもじゃないけど、最後まで持たない。

自分の調子が最悪なのは最初から分かつていたが、あれだけ馬鹿げ
た力を振りまわしている悠斗が、まるで息切れしそうには誤
算だった。

いつも肉体の方が先にバテているらしいから気付かなかつたが、ど
うやら、あれが澄空悠斗の本来の容量らしい。

「れ、麗華さん……」

「え？」

予想外の声に、振り返る。

そこにいたのは、緋色先生と本郷エリカ。あと、倒れたまま動かな
い三村と峰。

悠斗のカラドボルグによつて、どんどん悪くなる足場を逃げ回つて
いるうちに、最初の場所に帰つて来てしまつたらしい。

（これは……まずい）

倒れたままの三村と峰はもちろん、緋色先生とエリカも、悠斗の多

重カラドボルグをかわせるとは思えない。

悠斗のカラドボルグズは、今のところ麗華をターゲットにしているが、その後ろに他人が居ても全く気にしないだろう。と云うか、すでに8本ほどが攻撃態勢に入っている。牽制してやり過ごせるような状況ではない。完全に相殺するしかない！

「幻想剣：断層剣カラドボルグ！」
（イリュージョンソード）

残った最後の力を振り絞るつもりで、断層剣を実体化させる。そして、一閃。かなり際どかつたが、なんとか相殺できた。

が。

「あ、あれ……？」
また消えた。

カラドボルグが。

当然、もう一度具現化しようとするが。

「…………」
出てこない。

どうイメージしても。

どう集中しても。

ついでに、手のひらを上間にブンブン振つてみても。
出てこない。

「これは……」

『エンプティ』。

BMP能力の枯渇である。

麗華にとつては、ほぼ10年ぶりの現象だった。

剣麗華は確かに天才ではあるが。

さすがにBMP能力なしで、20数本のカラドボルグの攻撃をかわし続けるのは不可能だった。

「…………」

使えないものは仕方がないので、今できることに思考を巡らせる。あの宙に浮かぶ断層剣にとっての弱点は、言つまでもなく澄空悠斗本人である。

攻撃の軌道に彼を入れてしまえば、必殺の断層を作ることはできなくなる。

だが、ちまちま動いていたのでは、一歩間違えれば、澄空悠斗が自身の作りだした断層で真つ二つになってしまつ危険がある。

「組みついて羽交い絞めにする

そうして、澄空悠斗自身を『盾』にして、彼がBMP能力を使い切るのを待つ。

実は、この作戦は最初から考へてはいたのだが。
その隙がなかつたのだ。

が、BMP能力を使い切つてしまつた今となつては、もうこれしか方法がない。

自分でも驚くほど、悠斗を見捨てるという選択肢は浮かんでこなかつた。

「行くよ。悠斗君」

宣言とともに、飛び出す。

同時に、牽制を受けなくなつた20数本のカラドボルグズが、元気いっぱいに麗華を狙う。

繰り返すが、麗華は天才である。

本体にほとんど意識がない状態での、遠隔断層剣の攻撃パターンなど、ここまで戦闘でほぼ解析できていた。

飛び越え、潜り、かわし、抜け。
完璧な動きで、澄空悠斗に迫る。

が。

「つ……！」

足元に鈍い衝撃。

酷使に酷使を重ねて、限界以上に疲労していた麗華は激しく転倒した。

普段の優雅さからは想像できないほど、無様で豪快な転倒だった。

繰り返すが、カラドボルグの攻撃は全て把握していた。

だから、これまでの戦闘で歪に歪み、斬り裂かれ、そして隆起した地面の一つに足を取られた麗華を誰が責められるだろうか。

「…………」

仰向けに寝そべるような体勢で大地に投げ出された麗華。

見上げる先に浮かぶのは、彼女自身のBMP能力を模した20数本の断層剣。

彼女は天才である。

逃げるルートも術も、ただの一つもないことがすぐに理解できた。

「…………」

約束は破っていない。

なぜなら、自分が死ぬのは澄空悠斗の目の前だ。

だが、それを悠斗が悲しむかもしれないということは……。
あえて考えないことにした。

だつて。

「これは……無理」

いや、最初から無理だつたのだ。

相手のBMP能力は、とても強大で。
しかも、自分はBMP能力が使えず。

守りたい誰かのために、逃げることもできない状態で。

それでも何とかできる人間など。

「……」

人間など。

「……」

たつた一人だけ。

「知つている……！」

稻妻のように起き上がる剣麗華。

そのまま『宙に浮く悠斗が召喚したカラドボルグ』の一つを引っ掻
んだ！

どうしてそんなことができると思ったのか分からぬ。

といふが、ほんとにそんなことができると思ったかどうかも分から
ない。

まあ、悠斗なら『たぶん大丈夫』とか言つだろ？。うん、たぶん大
丈夫。

掴まれた劣化版カラドボルグは、一瞬、抵抗するように激しく動いたが。

「悠斗君は遠くなんかない」

握る力の強さに圧倒されるように。

「私も、同じ気持ちを持っている！」

想いの強さに屈服するように。

あっさりと、その抵抗をやめた。

同時に、完全に不可視化しカラドボルグを保持していた豪華絢爛が、ガラスが割れるような音とともに碎け散る。

「幻想剣：断層剣カラドボルグ！」

渾身の力を込めて、剣を振るう。

20数本マイナス1本のカラドボルグズは、全員一致で、その一撃を受け止め。

そして、動きを止めた。

「…………？」

カラドボルグを奪った麗華の前で、宙に浮いたまま動きを止めるカラドボルグズ。

何かとんでもない攻撃の前振りかと警戒する麗華だが。カラドボルグ達は、動き出す気配が全くない。

麗華の仰天行動に面喰つたのか。
それ以外の理由なのか。

澄空悠斗は、苦しみでこらみつて見えた。

「どうして……？」

全ての力を使い切らなければ、覚醒時衝動は終わらない。

「どうして止めるの？」

自分が『全て受け止める』と宣言したのに。

澄空悠斗が苦しまないで済むように、全ての力を自分に吐き出してほしいのに。

何度も呼びかけて。

それでも反応がないと分かつた剣麗華は。

澄空悠斗に近づき。

断層剣カラドボルグを澄空悠斗の首筋に当てる。

同時に、しぶしぶといった感じで宙に浮かぶカラドボルグ達が麗華の身体を取り囲む。

一步間違えば身体を輪切りにされる状態ではあるが、悠斗にもカラドボルグズにも戦意は感じられない。

若干の焦りと疑問と共に、彼女は叫ぶ。

「応えて、悠斗君」

癒えない渴きを癒すモノ

『7月24日19時30分・C』

長い夢を見ていたような気がする。

現実に還った俺を出迎えたのは、首筋に当たる冷たい感触だった。それから、至近距離にあるとんでもなく美しい少女の顔だった。

といつか、麗華さん……だよな？

どういう超絶テクニックを使ったのかは知らないが、俺を守る劣化版幻想剣の攻撃を悉く退けて、この至近距離まで間合いを詰めたらしい。

そして、『断層剣カラドボルグ』を俺の首筋に当てる。

麗華さんがその気になれば、いつでも俺の首が胴体となざりばにする危険な位置だ。

「どうして止めるの悠斗君？」

言つ麗華さんを取り巻いているのは、20数本の劣化版断層剣カラドボルグ。

麗華さんの肌数センチの所に浮かんで、鋭利な切つ先を向けている。もし今命令があれば、麗華さんの身体は数十の断片に変えられてしまつくらい危険な状態だ。

「全ての力を使いきらないと、覚醒時衝動は収まらない」と続ける麗華さんには、怯えの色は全く見られない。ところが、若干怒っているような気さえする。

「BMRハンターは、まず自分の命を守るのが原則。……じゃなかつたっけ？」

嫌味のつもりじゃない。単なる軽口だ。

「そうだと思ひ。でも、今の私も間違つてない」

「やうなの？」

「守りたいと思つてるから。悠斗君と回りつけ」

「…………」

参つた。

ほんとに参つた。

麗華さんに参つた。

麗華さんを取り巻く、俺の劣化版断層剣カラボルグセットが消えていく。

「悠斗君、どうして？　まだ、悠斗君のBMR能力は全部使い切つていなー」

そんなこと言つてもな……。

「もう十分だよ」

逃げない君の強さが思い出せてくれたから。

全てを失くした始まりの匂のことを。

「やつ全端吐き出した」

逃げない君の優しさが満たしてくれたかい。

決して癒えるはずのない渴きを。

「だから、もう十分だ」

もう立っているのも億劫で。
前のめりに倒れそうになる。

今日は散々痛い目にあつたけど。

それでもやせっぱり、地面に顔面ドカンは勘弁してほしこと黙つていい
る。

ふわ、と。

温かくて柔らかい感触に抱きとめられる。

「麗華……さん？」

いつの間にかカラドボルグを消して。
この細い腕のどこにこんな力があるのか、力強く抱きとめられてい
る。

でも、麗華さん。物凄くキヨトンとしている。

「ゆ、悠斗君……。ひょっとして、覚醒時衝動、終わったの……？」

「たぶん」

終わつたと思つ。

こんなにすがすがしい気持ちになつてるんだかい。

「えーと……。一応、どんな状況なのか聞いてもいい、のかな？」

フラガラックの多重干渉にやられて、さつきまで峰と折り重なるよう^うに氣絶していたのが氣まずい、という訳でもないよつだ。

「されど、無事で察してくれると嬉しい」

と返すのだが、いの俺、澄空悠斗

なせなら、今、俺は麗華さんに抱えられて、なんとか立てしらわる状態だからだ。

第三者が見れば、抱き合ってうとしか見えない状態だからだ

座れはいいじやん、と言われればその通りなのだが、俺も麗華さんもなんとなくタイミングを逃してしまい、座るに座れない不思議な状態なのである。

「じゃあ、ちょっといいかしら、悠斗君」

と、今度は「じどり先生」が手を伸ばしてくる。

アイスオフHメテルにて診察して貰うつもりだという」とは分か
るのだが、この体勢だと麗華さんの身体をサンディッシュすることに
なってしまい、若干俺が良い思いをするのは、いいのだろうか？

「悠斗君」

「は、
はい！」

いや、不埒なことなんて考えてません。というか、そんな体力ありません。

「嘘は……つかないでね」

卷之三

嘘つて、なんのことだ。

「うん、『めん。なんでもない。今のは忘れて』
『ひつと、』じども先生は眼帯を除けて、アイズオブエメラルドを全開にした。

背伸びをし、俺の顔を両手で固定して、瞳を覗き込んでくる。

「え？」

「あ、あれ？」

同時に驚きの声をあげる、じども先生と俺。
なんか、これ。今までと全然違うぞ。

深緑の瞳がいつもより強く輝いているような気がする。
その光が、心の隅々まで行きわたつているようで。
でも、不快じゃない。

「翔！？」

「へ？」

いきなり聞きなれない名前（だよな。まさか、ショウ！　なんてす
っとんきょうう叫び声をアイズオブエメラルドが上げるとも思えん）
を呼ぶ、じども先生。

「あ、うつと。なんでもないの……」

「そ、ですか？」

明らかになんでもなくない顔をしていたが、とりあえず俺は何も聞
かなかつた。

しばらくして、じども先生が顔を離す。

「緋色先生？」

「うん。信じられないけど、ほんとに覚醒時衝動が収まっているわ
峰の言葉に、眼帯をしながら（しかしやっぱり、つい眼帯だ。もつ
とファンシーなのにはればいいのに）答えるじども先生。

「でも、BMP能力を使いきつたって感じじゃないんですけど？」

今度は三村が質問している。

「や。まだたつぷり残ってる。これからヨウノンク幻影獣と闘つ」と
だつて可能じやないかしら」
いや、さすがに無理です。

「とにかくね……」

「自分の意思で覚醒時衝動に打ち克つた、とにかくとなのかな?」
「悠斗さん、凄すぎテス……」

三村、峰、Hリカが心からの賞賛を贈つてくれているのが分かる。

褒められるのは基本的に好きなんだけど、今回ばかりは遠慮をしたいところだ。

なんせ8割方……いや、9割以上麗華さんのおかげだからな。

「悠斗君」

その麗華さんが話しかけてくる。

背が同じくらいだから、真横に顔がある。

「ん?」

「私はどうすればいい?」

麗華さんの言葉は唐突な上に、短すぎることがある。

まあ、今回は大丈夫だ。何が言いたいかりちゃんと分かる。

「何も

そり、何もしなくていい。

もう十分過ぎるくらいにしてもらつた。

「そり、なの?」

「これ以上何も……。

いや。

ひとつだけ。

「やつこや、麗華さん」

「ん?」

「嘘、吐いたる?」

「え?」

キヨトーンとした顔で、口ひげを向こう（めつぢや近こす）へる麗華さん。

「ターテルと闘いに王城の前に。麗華さん『絶対にすぐ帰つて来る』つて言つた」

「実際に、ちやんと帰つてきた。嘘こはなつていない」

ほう、そう来ますか。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……悠斗君、怒つてこる?」

「煮えたぎつた俺の臓物で、モツ鍋ができやつなくらっこ」
もちろん嘘だけ。

「それは……困つた。どうすれば許してもらえる?」

真剣な麗華さん顔。

少し胸が熱くなる。

でも、ちやんと言わなきゃな。

「一つだけお願ひ……とこいつよつ、提案があるんだけど」

「うん。なんでも聞く

「え？」

マジですか！

……つて、そういうじゃなくて。

「麗華さん、前に言つてたの。自分の言つことで俺を不快にさせることがあつたら、ちゃんと指摘してくれって」

「うん」

「それと逆にや」

そう逆に。

「俺が麗華さんを怒らせたり。いや、俺じゃなくても、麗華さんでつけて苦しむことや、つらいことがあつたりしたら」

「……」

「教えて欲しいんだ、俺に

どんなことでもいいから。

あまり役に立たない可能性も大だけど。

「俺は悪い意味で普通だからさ。言つてくれないと分からんんだ」

麗華さんが、わずかに俺を掴む手に力を入れた。

「……でも、そうすると、悠斗君を不快にさせるかもしない」

「いいんだよ、それで」

それでいいんだ。

「麗華さんが俺を怒らせて」

俺が麗華さんを怒らせて。

「一人がお互いにすれ違うことがあつたりしたり衝突することがあつたりした」

その時は。

「二人で

一緒に。

「喧嘩しようつ

第2章『ウエポンティマー』 ハピローグ

ハピローグ

Aランク幻影獣率いる幻影獣軍とのBMP管理局での籠城戦という、なんらかの節目であるのは間違いない大きな鬪いが人類の勝利で終わってから1週間。

世界は、未だ興奮の中にあった。

Aランク幻影獣を撃破した英雄について、本人のプライバシーを尊重するということで顔出しNGにしたのが、逆に神秘めいた魅力を加味してしまっているらしい。

それは、ここ、賢崎グループ傘下・アドバンテック新月の社長室でも同じだった。

「失礼します。賢崎社長」

いかにも強面の、しかしダンディな中年男が重厚なドアをノックする。

「どうぞ」

と若い女性の声に促されて中に入る。

社長室の中から聞こえてきたにしては意外な声だが、ダンディは別に驚きはしなかつた。

なぜなら、ここアドバンテック新月の社長は、実際に高校生くらいの少女なのである。
もちろんスーツは着ているが。

が、この辺ばかりは、若干驚いた。

「どうしました、佐藤部長？」

「いえ、今季の決算報告を持つてきましたのですが、……」

娘より若い少女に、最上級の敬意を払いながらも、やはり佐藤部長は疑問符を浮かべていた。

「賢崎社長がとても楽しそうな顔をしていましたので。何か面白い記事でも載っているのですか？」

と、佐藤部長は、書類を少女の机に置いた。

「もう勤務時間も終わりですし『社長』はいいですよ
眼鏡の位置を直しながら、少女は微かに微笑む。

その顔は、少し整いすぎではないか、というくらいに美形だった。

そんな風に言われたのもずいぶん久しぶりだったので、ダンディは若干驚きはしたが。

「でしたら、昔のよう、お嬢様とお呼びしましょうか？」

「藍華でいいですよ」

「それは無理です」

佐藤部長は断固として断つた。

「いつたい、何をお読みで？」

「これです」

と差し出される、やけに薄っぺらい新聞。

「季報・新月？」これは、ひょっとして学校新聞と言つやつですか？」

「BMP管理局の情報統制はなかなかですが、さすがにここまで手を回したりはしなかつたみたいですね」

盲点だったというよりやり過ぎだと思ったからでしょうね、と付け足す眼鏡美少女社長。

商売柄身に付いた速読で、ざざつと読み通す佐藤部長。

編者は新條 文とい「うらし」。

高校生なので技術的にまだまだの所はあつたが。

「なかなかいい文章を書きますな」

センスはあると思つ。

それに何より、文章から感じる真摯でひたむきな感じが良い。
(うちの娘も、これくらい頑張ってくれればな)

と佐藤部長が思つたのは余談だ。

ちなみに、佐藤部長の娘さんが意外に頑張り屋さんなのも、まあ余談だ。

それよりも。

「しかし、これはひょっとして、本人に直接取材ができるので
しょうか?」

気になるのはそこだ。

想像で描いたにしてはやけにリアリティがある。とい「うか、これが
フィクションならば、この編者は新聞記者ではなく、作家にでもな
つた方がいいのではないだろうか?

「でしょうね。澄空悠斗と同じ高校に通つていますから」

「なんと」

言われて見れば、BMP管理局籠城戦の話だけではなく、澄空悠斗
の普段の高校生活についても事細かに書かれている。

学食にささみチーズフライを復活させる意見書を毎週欠かさず出し
ているエピソードなどは、さすがに同じ高校に通つてなければ無理
だろう。

「ちなみに、ソードウエポンも同じ高校ですよ」

「なんと。……といつても『新月』はBMPハンター養成校として
は超名門ですからな。別に驚くことでもありませんか」

載つてゐるのが澄空悠斗と剣麗華の話だけで、他のことが一切書か

れていないのは、学校新聞としては軽く驚きではあるが。

「澄空悠斗ですか。まさしく救世主と呼ぶに相応しい活躍を見せてくれていますが、お嬢様も気になるので」

「ええ、かなり。覚醒したてでBランク幻影獣を破った頃から気にはなっていましたが、最近では、仕事中以外はしおつちゅう彼のことを考えています。ひょっとして、これが恋なのでしょうか？」

「…………！」

いきなりの意表を突いた少女のセリフに、佐藤部長はオーバーアクションで後退した。

部下が見れば、半年は仕事帰りの飲み会のネタにされそなぐらいイメージと合わない仕草だった。

一応、昼間は強面な管理職なのである。

「お、お嬢様の考へることは、私などには到底理解の及ばないところです……」

「冗談ですよ？」

「わ、分かつちります」

囁んだ。

「ところで、佐藤部長。社長をやる気はありませんか？」

「は、はい！？」

今度は奇声を上げてしまつダンディ。

「もう、このアドバンテック新月の経営も軌道に乗つたみたいですし、私がいなくとも大丈夫でしょう。佐藤部長なら、取締役の方たちにも部下の方たちにも評判がいいですし。人事的にはちょっと無茶ではありますガ」

「ま、まあ、お嬢様が言えど通ると思いますが。お嬢様以外なら、誰がやっても大差ないですし」

自嘲ではなく、心底そう思つ佐藤部長。

「では、お任せしてもよろしいですか？」

「い、いえ、少し待つてください。私自身の心の準備や社内の反応はともかく、お嬢様はどうされるつもりなのですか？ もう賢崎グループ内の不採算部門はあらかた片付きました。私はこのまま、賢崎グループを継がれるまで、お嬢様はここで羽を休めるつもりだと思つていたのですが」

この超一流企業の社長席を腰かけと評してしまつのは相当なセンスだが、この少女の場合は、あいにく間違いではなかつた。

「あ、ひょっとして、お父様の所で本格的に後継者としての修業を

……」

「いえ、高校に入ろうかと思います」

少女のセリフにダンディは一瞬止まつた。

確かに、この少女は高校には行つていないが、小学生くらいの時に国外の超一流大学を首席卒業した彼女に、どうして高校が必要だというのだろうか。

……いや。

「もしや、お嬢様……」

「賢崎の本当の役目は、企業経営ではないのですよ」

「それは……確かにその通りですが。今のお嬢様は、国内どころか世界でもなくてはならない経営者の一人になつております。ソードウエポンや澄空悠斗など優秀なBMPハンターが次々と生まれている今、お嬢様はもつと他の形で彼らの助けになることができるのです？」

佐藤部長は、アドバンテック新月の優秀な管理職ではあるが。

同時に、賢崎本家と浅からぬ因縁がある。

一言で言つと、丁稚奉公をしてただけだが。

「賢崎のB.M.P能力は特殊です。他の誰にも代わりはできません」

「…………」

「その時が来れば使わなければならぬ」と。……母も言つていました

僅かに表情を曇らせて言ひ、賢崎藍華。

その表情をなるべく見ないようにして、佐藤部長は問つ。

「澄空悠斗がその人物だと？」

「それは、分かりません」

アドバンテック新月最上階から見える街並みを見下ろし。
そして言ひ。

「だから、それを確かめに行こうと思ひます」

第2章『ウエポンティマー』完。

おじい様とのナイショの話

「……この国のトップの居城、首相官邸である。

その最奥、首相の執務室内で、一人の客人を迎えてるのが剣首相。そして、その客人というのが、この俺、澄空悠斗である。

一般人偏差値49くらい一般人な俺がこの国のトップと一対一で面談しているというのは、もう超常現象と言つていいのではないだろうか？

「すまんな、澄空君。若者の貴重な時間を年寄りのわがままに浪費させてしまつて」

「いえ、とんでもないです……」

剣首相の時間の方が、100万倍貴重だと思います。

俺も一応（本人の自覚そっちのけで）この国のトップBMPハンターの一人と見られているみたいだから、首相と面会する機会くらいはあつてもおかしくないのかもしねないが、俺と剣首相の場合はちよつと事情が違う。

なんどこの人、俺が同居（同棲じゃないぞ、断じて）しているBMPハンター剣麗華さんのおじいさんなのだ。

だから、麗華さんと剣首相と俺の三人で会うというのは、プライベートでも十分起こりうるイベントなのだが。

麗華さん抜きで会つとなると、やはり異常事態だ。

「そう緊張せんでも大丈夫だよ、澄空君。麗華からも『悠斗君は大しいところもあるから、あまりプレッシャーをかけてはいけない』と言われたばかりだからね」

「そ、ですか……」

麗華さんナイスフォロー！

でも、もつとはつきり『単にペペリだから、あの子』みたいな言い方でいいですよ。

「……」

「……」

「……」

「……い、いたしますね」

沈黙に耐えかねて、コーヒーに手を伸ばす。

素人鼻（うまい表現が思いつかん）にも良い香のコーヒーに口を付ける。

たぶん高いんだろう。俺は芸能人ではないからして『実は安いんですよ、それ』とか言われても、別に落ち込んだりはしない。

「そ、そいえば、今日は緋色瞳さん、いないんですね？」
さきほどコーヒーを持つててくれた美人さんの顔を思い浮かべながら言う。

ちなみに、緋色瞳さんは『アイズオブクリムゾン』という支配系最強のBMP能力を使うBMPハンターで、『クリスタルランス』という最強BMPチームのリーダーで、おそらく『こども先生』系最強と思われるうちのこども先生のお姉さんにして、剣首相の秘書みたいな仕事をしているらしい女性だ。
え、設定詰め込み過ぎて意味が分からなって?
奇遇だな、俺もだ。

と、いつまでも現実逃避している場合ではなくて。

「うむ、来てはいるんだがな……」

「え？」

意外な剣首相の一言に驚く。

忙しい人だから居ないのは仕方ないと思つけど、いるのなら顔くら

いは見たかつたな。

「まあ、彼女にも色々都合があるようだ」

「や、そですか……」

なら仕方ないか。

それより、そろそろ本題に入つても良さそうな……。

「時に、澄空君」

「は、はい！」

いきなり来た！

「君は、麗華の恋人になるといつ意味を理解しているのか？」

「は、はい？」

なんのこつちや？

「こういつ言い方は直接的すぎて好きではないが、あの子は剣財閥唯一の継承者だ。あの腰ぬけ息子に継がせるつもりは毛頭ないからな」

「は、はい……」

なんの話が始まるのかは分からぬが、とりあえず黙つて聞く世渡り上手な俺。

ちなみに、剣首相の息子さんは、現在剣財閥を動かしている辣腕で鳴らしている実業家だ。どの辺が腰ぬけなのかは俺が聞いてもたぶん一生分からないから、あえて聞かないでおこう。怖いし。

「麗華はあの通り完璧だが、その夫が無能でいいという訳ではない。剣財閥にもしものことがあれば、この国はおろか世界の経済が揺らぎかねんからな。まあ、賢崎や神のところは張り切るだらうが」

「は、はい」

ちなみに、今出てきた3つの財閥が本気で手を組んだら、世界の半分くらいは狙えるらしいよ。

……今はそんなことしてられる時代じゃないけど。

「その男の決断一つ、行動一つ。あるいは想い一つで、数万……いや、数億の人の生活が脅かされかねんのだ。そのことが君には分かっているのか？」

「いや、でも大丈夫ですよ」

「ほう」

驚いた顔をする剣首相。

『こやつ、意外にやりおるかも』的な顔をしている。

「どんな人なのが想像もできませんけど、麗華さんの選んだ男性ですから、そのぐらいはプレッシャーにも感じないんじゃないでしょうか？」

麗華さんが選ぶくらいだから、きっと麗華さん男性版とでもいって完璧で天才な男なんだろう。あまりに凄過ぎて、たぶん嫉妬すらしないに違いない。

「そ、そうか……」

至極まつとうな意見を言ったつもりなのだが、剣首相はなんだかずつこけたような姿勢をしていた。

氣のせいか『こいつは、どうしようもないかもしれない』的な顔をしている？

「少し、回りくどかつたようだな……」

「？」

？

「单刀直入に聞こいつ。君は、麗華とできているのかー？」

「…………」

……え。

「え――――――」

思わず大声を上げてしまった。

「で、でででで、できてないですできないです！　お、俺と麗華さんは節度を守つて同居生活を……！」

節度を守るのなら、そもそも同居するなどか言つなー。

どうしても、引っ越し先が見つからぬんだよ、どういふやつが！

「ありえん！」

「え？」

あ、ありえんとか言われても……。

「元々の事情が事情とはい、あの麗華と同居しているんだぞ、君は！　男なら、すでに二桁後半くらいには不埒な行為に及ぼうとしているはずだ！」

「そんなことしたら、首飛びますって！　比喩じゃなく、リアルで！　断層剣で」

一国の首相が何言つてんだ！

「どうか、この人、キャラが変わり過ぎではなかろつか。
だから、君の首と胴体がくつついて以上、できていると考えるしかないだらうー！」

「いや、そもそも襲つていないと考えてください……」

断層剣を抜きにしても、あり得ない。

俺達ほど彼我の戦力差（もちろん男女としての）があれば、畏れ多い通り越して滑稽だ。

剣首相は、自分がナイスガイだからそんな自信があるに違いない。

「ほひ、あくまで違うと云つて張る訳だな、君は

「ち、違います」

囁んだのは許してほしい。

剣首相の口調が、国会で質問に立つた野党の党首を逆にいびつくる時と、凄く似てきた。

「尾藤君、あれを！」

なんだか芝居がかつた剣首相の声に応えて現れる、さきほども「一ヒーを入れてくれた秘書らしき女性（というか秘書だろたぶん）。緋色瞳さんと比べるのは相手が悪過ぎるが、この人も相当の美人だ。いやにアナログな機械を持つていてる。

テープレコーダーとか、もう骨董品だと思つていた。

「ここを押してください。問題の部分が流れます」

そのテープレコーダーを机に置き、上記のセリフだけを言い残して、尾藤秘書は退室していった。

「テープレコーダーなのは、雰囲気を出すためだ。特に意味はない」「そ、ですか……」

聞いてもいらないのに教えてくれるというのは、本人にはそれなりにこだわりがあるらしい。

「これは、先日のBMP管理局籠城戦の時の録音記録だ」「え？」

「もちろん極秘データだ。が、ここに問題の記録がある。心して聞きたまえ」

「りよ、了解です」

さきほどまでの話と全く繋がらない展開のよつた気がしたが、なんだかおおごとなのを察した俺は素直に頷いた。

そして、剣首相が再生ボタンを押す。

『

「か、代わりに俺が行っちゃ駄目かな？」

「？ 敵の狙いは悠斗君なんだから、私がここに残つても意味はな

い』

「そ……」

「それに、少なくとも今は私の方が、安定した戦闘ができる

「いや……」

「私は抜かれたりしないから、Aプロックは安全。悠斗君は大丈夫」
「麗華さんだつて、『絶対』は、ないだろ？」

「そんなことない」

「へ？」

「悠斗君が『私のいないところでは死んではいけない』以上、私も
悠斗君が見ていないところでは死なない」

「あ……」

「それが、絶対」

「……そつか」

「分かった。首を長くして、帰つてくるのを待つてるよ
『そんなにかかるない。すぐ帰つてくる』

『

「という訳だ」

停止ボタンを押す剣首相。

「……」

いや、もちろんあの籠城戦が記録されていることくらいは知つてた
けど。

俺、ほんとあんなこと言つたのか？

顔が熱くなる。

「君は、この一連の会話が、できていない者同士の会話だと主張で
きるのかね？」

「と、ともに死線を潜り抜けようとする仲間同士の会話にも聞こえ
ます！」

先日の国会で、野党の売り出し中の新人議員を完全粉碎した時と同

じ口調で迫る首相に、驚異的な精神力で反論する俺。
と云ふか、反論しないと殺されるぞマジで！

「なるほど……。な、」「これまだつかね?
ホ、まだあるんすか?

「悠斗君」

—
h?
—

一私はどうすればいい?

何毛

卷之二十一

۷

「嘘、吐いたろ？」

-
え?
」

夕川上

「実際には、ちゃんと歸つてゐた。嘘になつて、一なつ

1

11

卷之三

卷之三

[REDACTED]

……悠斗君、怒ってしる？」

煮えたぎった俺の臍物でモツ鍋かでぎをひなくいに

それは……困ったことだ。どうすれば話してもうかるか、わからぬ。

「おはようございます」

「四庫全書」

「ことがあつたら、ちゃんと指摘してくれって」

「うん」

「それと逆にさ」

「俺が麗華さんを怒らせたり。いや、俺じゃなくても、麗華さんに
ついて苦しいことや、つらいことがあつたりしたらさ」

「……」

「教えて欲しいんだ、俺に」

「俺は悪い意味で普通だからさ。言つてくれないと分からないんだ」

「……でも、そうすると、悠斗君を不快にさせるかもしれない」

「いいんだよ、それで」

「麗華さんが俺を怒らせと」

「二人がお互いにすれ違つ」とがあつたりしたら……」

「一人で」

「喧嘩しよう」

『』

「あ……」

あうあうあうあう。

穴があつたら入りたいっす。

「これが、恋人同士の会話でなくてなんだと言つのだ。いや単なる
恋人同士どころではない！ わしだって、妻とこんな会話を交わし
たことは一桁はないぞ！」

ところによれば、9回近くはあるのか！ 涙いな！

などと言つてゐる場合ではない。

なんとか言い訳しないと（社会的に）命に係る。

「え、ええとですね……。そ、その時は色々戦闘状態で興奮してア
ドレナリンが出てて、いやもちろん麗華さんは冷静んですけど、
俺が一方的に熱くなつて、その前に刺激的なイベント……はどうで
も良くて、というか甘つたるい気分では決してなく大事なことを伝
えないといけない必要があるよつな気がして……」

ああ、もう、文章になつていない。

「ふむ。どうしてもできていないとこ張る訳だな？」

「もちろんです！ いくらなんでも麗華さんと俺と同じ釣り合ひが取れなさすぎますよ」

つこいつかりできてしまつ、にしても程度とこいつものがある。

「わしは、そこまで釣り合ひが取れていなことは思わんがな
「え？」

「いや、なんでもない」

と、口に口を付ける剣首相。

「少しからかに過ぎたよつだな

「え、えーと？」

じょ、冗談だったのですか？

つて、当たり前か。ちょっと調べれば、分かるよな。
でも、冗談にしては手が込んでるよつな。

「麗華と過ごすのは大変ではないかね？」

一転して穏やかな口調で聞いてくる剣首相。

「いえ、結構楽しいですよ」

時々ハプニングイベント（麗華さんに危機感がなさすぎるせいで）
で下着姿とかそれに類する何かを見てしまった時に心臓止まりそう
になるくらいで。

「そうか」

といつ剣首相の声は、なんだか優しげで。

俺たちはそのまま、10分ほど、麗華さんの話題で盛り上がった。

「そつ『釣り合いが取れていないとは思わん』」

澄空悠斗が去った首相官邸。

剣首相は、すっかり冷めたコーヒーを片手に、ひとつ呟く。

「麗華と過ごすのを、ただ『楽しい』と表現できる君が相手ならば
な」

そう呟く剣首相をドアの隙間から覗いているのは、支配系能力最強

『アイズオブクリムゾン』緋色瞳。

「彼はもう帰ってしまったよ」

「わ、分かっています」

珍しく気まずそうな口調の緋色瞳。

「気まずいのは分かるが、彼は君のことを見んでいるよつては見え
んかったぞ」

「だから、困っているのです」

部屋に入つて来て、剣首相の前に腰を下ろす。

彼女……緋色瞳は、10年前、澄空悠斗に呪いをかけた。

BMP能力に関する全ての記憶を奪い、覚醒 자체を『なかつたこと』
にしてしまつたのだ。

精神はおろか、身体そのものを蝕むほどの異常なBMP能力から澄
空悠斗を守るための止むをない措置だったとはいえ、澄空悠斗の人

生を大きく歪めてしまったのは間違いない。

「たとえ殺されても文句は言わない。くらいの覚悟はあったのですが……」

「彼がそのような男でない」とくらいは、分かっていただろう?」「ですが、あの無頓着ぶりは正直予想外です」

彼女の言うとおり、澄空悠斗の反応は、用意していたどの謝罪策でも対応できないものだった。

というか、そもそも忘れていたとしか思えないくらいのものだった。

「IJのために、10年がかりで償いの方法を考えていたのですが……」

「ま、まあ、そのうち機会もあるだろうたぶんないだろ?」と思いつながら答える剣首相。

「BMP能力は精神を蝕む。記憶を封じられた為に、彼の精神は影響を受けることなく成長できた。だから、彼はあの通り『普通』である。そういうことで、いいのかな?」

「それは違います。封じている間はともかく、再覚醒した途端に精神を蝕まれるはずですから。私が呪いをかけたのは、あくまで身体が成長するまで時間を稼ぐためです」

そして、身体の成長がBMP能力に追い付き、呪いが解かれる条件が揃ったため、上条博士と緋色香に引き合わせて常時ケアしていくのだ。いつ、精神に異常をきたしても対応できるよ!」

「上条博士も香も首を捻りっぱなしですよ。第五次首都防衛戦であれだけ激しく再覚醒したのに平気な顔で学園生活を送り、超難度のイレギュラー上课を他者にプレッシャー一つ感じさせずに操り、あげくの果てには覚醒時衝動を自分の力で克服してしまったなんて……」

「ふーむ」

「一応仮にも同じBMP能力者として、完全に理解の範疇を超えています」

半ば呆れたように、しかし半分は嬉しそうに、赤い瞳を持つ女性は言った。

「わしにはBMP能力者ることは良く分からんが、やはり彼のよつなタイプはあまりおらんのか?」

「少なくとも、私は他には知りませんね」

「そうか」

と言つたきり、何か考え込むような仕草をする剣首相。

「ならば、やはりBMP能力があつたからと言つて、彼のようになれるとは限らんのだな……」

「剣首相?」

それまでトーンの違う声に、緋色瞳が疑問符を浮かべる。

「わしの妻も、BMP能力者だった」

「え?」

「麗華と同じで、才色兼備といつ言葉がしきりじく聞こえるほど完璧な女性だった」

「…………」

どうやら話したいことがあるらしい、といつこを察した瞳は、黙つて聞くことにした。

「わしもそこそこ異性には人気があったのだがな、彼女の前では有象無象の一人に過ぎんかった。もちろん、声をかける度胸があるつちの有象無象だがな」

「はい」

映画俳優と言つても通りそうなほどの雰囲気ある美形に加えて、剣財閥の次期党首が約束されていた若者だ。『そこそこ異性に人気が

ある『どじろ』ではなかつたはずだが。

とりあえず、瞳は流した。

「人生であれほどプライドを傷つけられる出来事は他になかつたといつくりこの振られ方もした。ほぼ週一で」

「そ、そうですか……」

以外に感想のいいようがない。

「が、わしには他の有象無象とひとつだけ違つところがあつた

「……」

「それは彼女のことを本当に分かつてやれる自信があつたことだ。彼女の美しさや才に惹かれたことは否定しない。しかし、わしだけが彼女の本当の苦しみに気づいてやれる。そういう自信があつた。だからこそ、最終的に妻と結ばれることができた」

「ご立派です」

「……とんでもない思い上がりだつた」

「え！？」

予想外の話の展開に、思わず声をあげる瞳。

「それが分かつたのは、麗華が覚醒時衝動を起こした時だ」「あ……」

よつやくじこいで、瞳にも剣首相が何を言いたいか分かつた。

「剣財閥を信頼できる部下と、ついでに腰ぬけ息子に押し付けて政界に転身し、麗華のためにできる限りの環境整備をしたつもりだったが、結局のところ麗華が上条博士の研究所を出るまで一度も会いに行けんかった」

「それは、上条博士が面会を止めていたからで……」

「麗華があそこを出た後も、わしは何もしてやれんかった……。そこでようやくわしにも分かつた。妻はただ、わしに合わせていくれただけなんだと」

「…………」

「あの少年と会つてからの麗華は、毎日ほんとに楽しそうだ。彼と

同じBMP能力があつても、わしにはとてもできません。……今更の話だが、わしはああいう男になりたかった

特に意味のある会話ではなかつたのだろう。剣首相も、クリスタルランスのリーダーとしての緋色瞳に、なにかしらの意見や感想を求めていた訳ではないのは明白だつた。だが。

「10年前……。クリスタルランスが悠斗君と鬪つた後。私が取つた行動を聞いても、剣首相……当時は大臣でしたが、一言も責めませんでしたね」

「そうだつたな。今思えば、あれがわしの唯一のファインプレーだつたか。あの時、無理やり澄空君を探し出して訓練施設に入れてしまつていては、麗華のあんな顔を見ることはできなかつたかもしかん」

「そのことだけではあつませんよ」

「む?」

「動機は麗華さんのためだつたとはいえ、剣首相はBMP能力者が社会に溶け込めるよう様々な手を打つてくださいました。10年前であれば、私がここに居ることですら考えられなかつたはず」

「…………」

「今、麗華さんが充実した生活を送つていられるのなら、彼女が悠斗君と出合えたことも含めて、それは剣首相の10年の成果でもあると思います」

「緋色君……」

「悠斗君に負けてないですよ、剣首相も」

そう言って。

どんな虚言でも信じられる瞳を持つ女性は。

ただ単なる感想を述べていた。

ちなみ。

ずいぶんと盛り上がりてしまったが、まだ序章である。

新たな予感

剣首相と別れた帰り道。

カレーを待つ麗華さん……。失礼、俺がカレーを作つて一人で喰つ約束をしている麗華さんが待つ家路に急ぐ俺。

「にしても、俺と麗華さんができているねえ……」

思わず呟く。

まあ、覚醒時衝動を今度こそ完全に乗り切つたんだから、俺の覚醒時衝動対策で一緒に住んでくれていた麗華さんとこれ以上一緒に住む必要は全くなく、今でも同居を続けているといつのは誤解を生む素地ではある。

「でも、新居が見つからないんだよなー」

探しているのは俺である。

麗華さんの新居を探すのであればともかく、もともと屋根さえあればいいような俺がそそう部屋を選び好みする訳もなく。すぐ決まると思ってたんだけど。

なぜか見つからない。

契約寸前までいって断られたケースも何度かあつたし、最近では不動産屋に入った途端に、なぜか店側が『お断りモード』に入っている気すらする。

まるで、何らかの国家権力が俺の家探しを拒んでいるかのよう!

「……アホか

と一連の思考を踏まえたうえで結論を出した俺は、改めて家路を急ぐ。

と。

「あれ……」

背筋にわずかな違和感を感じた。
が、不快なものじゃない。

これは……。

「BMP能力者のプレッシャー……？」

久々に感じる。

と、ここで少し補足説明を。

BMP能力者のプレッシャーは、もちろん能力が高ければ高いほど大きいが（例外俺）、自分の意思で他人に与える影響を抑えることができる。

ちなみに麗華さんクラスになると、抑えないと新月学園がまともに運営できないくらいのプレッシャーをまき散らす（例外俺）から侮れない。

まあ、それはともかく。

麗華さんクラスでなくても、BMP能力者であれば誰もがそれなりにプレッシャーを与える（例外俺）ものである。

BMP能力者でない人にとっては、それほど大きくないプレッシャーでもやはり不安に感じる人はいる。

だが、このプレッシャーというやつ、実は慣れることができるのだ。BMP能力者によらないプレッシャーと同じで、何度も接していると次第に気にならなくなってくるらしい（例外麗華さん）。

人間の適応能力は素晴らしい。

以上説明終わり。ああ疲れた。

いや、疲れただじゃなかつた。

要するに、このプレッシャーの持ち主は、今まであまり会つたこ

とがない人だということだ。

「…………」

それだけなら別に珍しいことではない。
が、このプレッシャーの持ち主……。

と、曲がり角から『その人』が姿を現した。

「ボクサー？」

というのが俺の第一印象だった。

かなりのスピードでランニングをしている人は、ボクサーが来て
いるようなウエットスーツを着ていたからだ。

両手には、総合格闘技の選手がしているような指を露出するタイプ
のグローブ。

フードのせいで顔は見えないが、ウエットスーツの上からでも引き
締まつた身体をしているのが分かる。
ただ。

「女性？」

グローブから覗く白くほつそりした指と、胸のあたりの膨らみがそ
れを物語っている。

まあ女性ボクサーだろうと、ダイエット中のモデルさんだろうと別
に構わないのだが、このプレッシャーだけはやはり気になる。
抑えてはいるが、まるで突き刺すような鋭いプレッシャー。
麗華さんはまた違ったタイプ。

「強い……よな」

すれ違いざま、思わず咳いてしまう俺。
別に語りかけた訳じやなかつた。
けど。

「え？」

彼女には聞こえたようで、顔をこちらに向けてきた。フードの中の顔が露わになる。

「え！？」

そして、今度は俺が驚いた。

なぜなら。

物凄い美人だつたからだ。

「とこりよつめうなことがあつたんだ」

「とこりよつめうなことがあつた翌日。

俺は、麗華さん、エリカ、三村と四人で登校していた。

「それデそれデ！ それから、どうしたんデスか！？」

エリカは、謎の美人との遭遇について、早速喰いついてきた。

基本どんなことでも真剣に聞いてくれる、見た目ゴージャスなのに健気なハーフ少女なのだが、俺のつたない話でもやっぱり真剣に聞いてくれる。

なんとなく予想通りの良い子だつて？ うん、俺もそう思つ。

「いや、そのまま普通に走り去つて行つた」

「そデスか……。でも気になりマスよね、麗華さん」

「うん。悠斗君が強いって感じるくらいだから、たぶん相當に強い

んだと思つ

エリカの問いに応えるのは麗華さん。

いつもと同じで、特に喰いついてくるという訳ではないが、つまりなそうにもしていない。

というか、俺は麗華さんがつまらうなそつた顔をしている所を見たことがない。

え、予想外だつて？ うん、俺もそつと思つ。

で、三村は……。

「安心したぞ、澄空」

「は？」

いきなりの唐突なセリフに思わず疑問符を浮かべる俺。

「おまえの美女遭遇率の高さには今更文句を言つつもりはないが、その美人とフラグ的だつたりクライマックス的だつたりする恋愛イベントを起こさなかつたことは良かつた。俺はてっきり、その美人が実はお前と結婚を約束した幼馴染とかじやないだろうと気が気じやなかつたんだ」

「…………」

いかん。また、三村の脳に何かが沸いている。

「大丈夫だ、俺には幼馴染とかいないから
たぶん。

「血の繋がつてない妹は！」

「い、いない」

と思つ。

「分かるもんか！ げんに、お前の姉になりたがつてゐる遠距離攻撃系最強の美女がいるじゃないか！ 俺は、お前とクリスタルランスの関係について、まだ疑つてるんだからな！」

「ぐ

疑わしいどころか完全に黒なのだが、それを言つ訳にもいかない。俺自身がどう思つてゐるかはともかく、10年前の緋色瞳さんの行動は完全に違反行為だからな。

いくら三村達が相手でも、うかつに話すとクリスタルランスの皆さんに迷惑がかかる可能性がある。

「と、とにかく大丈夫だ。昨日の美女は本当に知らない人だったから」

「昨日まで知らない人でも、これから恋愛イベントを起こすかもしれないだろ！」

どうしようと叫んだ？

「そんなの決まってるだろ！ これ以上、ピンク色のイベントを起さないでくれ。俺は、クラスメイトが三角関係を作つてゐるのを見ると、喘息を起こす体质なんだ」

それは、難儀だな。

「大ニュースだ！ 澄空！」

1限目の休み時間。

自販機にコーヒーを買いに行つたはずの三村が、教室に飛び込んできた。

だが、俺は驚かない。

「分かつてゐる、三村。ついに新月の学食にささみチーズフライが復

活するところ話だらう。」

喜ぶべきことだ。

週一で、学園に投書をし続けたかいがあった。

「誰が、ささみチーズフライの話をじてるんだよ。」

「違うのか……？」

衝撃の事実だった。

「なら悪いけど、俺抜きで大いに盛り上がりってくれ。俺は今忙しい学食に行くのを昼休みまで待つか、2時限目の休み時間に行ってしまふかで悩まなければならない。」

「何が忙しいんだよ？」「

「昼休みまで待つ方が、適度に腹が減ってささみチーズフライを楽しめるのは間違いないが、売り切れてしまう可能性が否定できない。かといって、腹の減っていない2時限目の休み時間に行くというのも、ささみチーズフライに対して不誠実ではないだろうか？」

「…………？」

三村が、「いかん。今のこいつとはまったく話が通じない」といった顔をしているが、気にしない。

「とにかく、聞いてくれ。おまえに一番関係のある話なんだよ」「嫌だ」

俺は珍しく意固地になつて、ふいと横を向いた。

なぜなら、ささみチーズフライの付け合せを考えなければならぬからだ。

俺的定番のソースかつ丼と組み合わせるのもありだが、よりささみチーズフライを味わうために白米のみといつのもありだし、ヘルシーにサラダバーと組み合わせるのもささみチーズフライの味引き立てるかもしれない。

「分かった。昼休みに俺も一緒にささみチーズフライを食いに行こうじゃないか」

「え？」

言つて三村は俺の席を離れる。

峰の席に近づいていつて何事かを話しありつい教室に帰つて来た麗華さんも捕まえて、俺の席に戻つてきた。

「峰と剣も一緒にささみチーズフライを食べに来つてもいいこと言つてる」

「み、三村……」

「あとでエリカも誘つておく。だから、今はとりあえず俺の話を聞いてくれ」

「わ、分かった」

俺は感動していた。

そして、麗華さんと峰は普通にキョトンとしていた。

ナックルウェポンの尊

「見てほしいのは、これだ」

と、麗華さんと峰も見守る中、三村が俺の机の上に一冊の雑誌を広げた。

『季刊BMP最前線VOL156・歴代BMP能力値上位100傑特集』だそうだ。

開かれたページの一一番上に見覚えのある名前が載っている。

『歴代最強のBMP187。覚醒より半年でBランク幻影獣とアランク幻影獣を撃破した救世主、澄空悠斗』だそうだ。
顔出しNGにしているせいか、上位者は基本的に写真入りなのに、
画像部分が「シークレット」になっている。

「三村、いくら俺が田舎者でも、もう雑誌に載つたくらいじゃ感動しないぞ」

最初はしまくつてたけど。

「俺だって、おまえが雑誌に載つたからって、騒がないよ」と、三村は女性側の上位者を見るように促してきた。

女性側の1位は……、麗華さんだよな、やっぱり。

『BMPは歴代2位の172。人類には不可能と言われたBMP170の壁を初めて破った女性。超人的な戦闘能力のみならず、BMP研究の分野でもすでに数々の功績を上げている才女。最近では澄空悠斗のパートナーとして共に闘つており、彼にとつてなくてはならない存在となっている』だそうだ。

そして、顔写真は俺と同じシークレット。

こういう風に顔を隠すと『実はすんごい美形なんじゃないか?』という噂はたつが実際にはそこまでもなくて、本人結構悩むが、実

際麗華さんはすんごい綺麗でない美形といつ、俺達の顔写真と一緒に載せれば、何も悪いことはしていないのに、なぜか俺だけいたたまれなくなるという……。

ええい！不公平な！

「澄空？何を難しい顔をしてるんだ？」

どんな顔をしていたのか、峰に心配されてしまった。

「俺には分かる。その愚痴は後でたっぷり聞いてやるから、とにかく先読み」

そして、三村が兄貴モードを発動しつつ『頼むからこれ以上脱線するな』光線を発している。

「なんだか照れる」

意外な一言を言つのは麗華さん。しかも、なんだか嬉しそうだ。

「でも、この文章、まるで麗華さんが俺のサポートをしているみたいに書いてるぞ」

俺は少し憤慨している。実際には、どうやつたら麗華さんの足を引つ張らずに済むのか、自問自答している毎日だといつのこと。

「私が悠斗君のサポートすると、まずいの？」

心底不思議そうに聞かれた。

「いや。これじゃ、まるで麗華さんが脇役みたいじゃないか？」

「別に構わない。悠斗君の役に立つてているのなら、嬉しい」

「…………」

やばい。たぶん、俺、顔真っ赤だ。

と、思わず顔をそらした俺の顔の前に、なぜかカメラがあつた。

「？」

そして、三枚ほど撮られた。

「いー表情の提供、びーも！」

とてもいい笑顔でカメラを構えているのは、俺のクラスの委員長、新條文（新聞記者バージョン）だった。

「頼む、今のは載せないでくれ」

「大丈夫、すぐには載せないから」

「いずれ、載せんのか！」

「ネタに詰まつたらね。さつきの顔を載せられるのが嫌なら、せつせと活躍する」と

普段の真面目ぶりが嘘のように、恐ろしい裏取引を持ちかけてくる
マスク（マスク）
委員長。

と。

「どんな写真が撮れたんデスか？」

金髪の美少女が、委員長のデジカメを覗き込んでいる！

「アラ、悠斗さん、こんな顔するんデスね」

「え、エリカ！ なんで！？」

思わず、俺は叫んだ。

ここで少し説明しておこう。

ここ新月学園はBMP能力者育成機関として名高い高校ではあるが、生徒全員がBMP能力者ではない。もちろん能力者ではなくても、対幻影獣関係の仕事に就く者が多いが。

そして、俺のクラス「1-C」は、別に全員がBMP能力者という訳ではなかつた。

BMP能力者は、1日か2日に1回集まって、BMP課程を受けるが、それ以外はばらばらにクラスに配置されている。

そして、クラス分けを決めるのは純粹に学力だつた。エリカも非常に優秀ではあるが、学年2位のクラスなので、学年1位の1-Cとはクラスが違うのだ。

とこなが、BMP能力者のくせに、頭までいといいう麗華さんや、

峰や、三村（こいつが一番意外だが）の方が異常なのだ。

え、俺？ 俺は大丈夫、このクラスにいるけど頭は悪いし、実際に成績も悪いから。

以上、説明終わり。

「三村さんが、走つて行くのが見えましたのテ。興味があつたので、やつて来ましタ！」

全く含む所のない微笑みで言うエリカ。

美人でスタイル良くて金髪で性格に裏表がない。この娘はこの娘で凄いキヤラだと思つ。

……麗華さんが凄過ぎるだけで。

「い・い・か・ら・さ・き・よ・め！」

「りょ、了解つす！」

やばい、三村がそろそろ限界だ。

10個の目が見つめる中、俺は女性側の2位の人を見る。

女性側2位（男性も含めると3位）は、緋色瞳。

BMPチーム『クリスタルランス』リーダーにして、最強の支配系能力『アイズオブクリムゾン』を使う、うちの担任のお姉さんだ。BMPは、168。

この人は、顔写真を載せている。

麗華さんと同じくらいの美形に加えて、なんと両目が深紅だ。これが素顔だということは俺が良く知っているが、この人が載っていると、高BMP能力者ってほんとに実在の人物なのか怪しくなつくるな（と自分のことを棚に上げて言ってみる）。

ああ、それから、2位はもう一人いた。

緋色瞳さんと並んで歴代3位のBMP168を持つ女性。

「賢崎、藍華さんか……」

まず、美人だ。

このページを見る限り、高BMP能力者はどうい訳か美形が多い（俺除く）ようだが、この賢崎藍華さんは緋色瞳さんと並んで別格だった。

どれくらい別格かと言うと、麗華さんと同じくらい美形の緋色瞳さんと同じくらい美形なので、最終的に麗華さんと同じくらい美形なのだ。

眼鏡が凄い良く似合っている。『知的な美人』としか、俺のボキヤブラーでは表現のしようがない。

しかも、俺達と同い年だったりする。恐ろしい。

まあ、それはともかく。

問題は、文章の方だった。

『BMPは緋色瞳と並んで歴代3位の168。近年は経営者として賢崎グループ内の不採算部門を軌道に乗せ続けてきたが、近いうちにBMPハンターとして復帰予定?』

世相に疎い俺だが、この人のことは知っている。

剣財閥と同格の賢崎財閥の正統後継者にして、歴代3位のBMP能力値を誇る女性。

賢崎はそもそも優秀なBMPハンターの家系もあるから、この人も強力なBMP能力があるのは間違いないらしいが、それ以上に頭脳の方が凄いらしい。

小学生くらいの時に海外の超難関大学を卒業し、この文章にある通り、俺達と同い年でありますながら、どんなコンサルでも立て直せなかつた賢崎グループ内の不採算部門を次々軌道に載せていくとか。要するに社長さんなのだ。それも超やり手の。

「どうだ、澄空？」

「あ、ああ、驚いた」

「だろ。そろそろ、あの賢崎グループを繼^{つづ}かって御令嬢様が、なんで今更BMPハンターに復帰するんだろうな？」

「い、いや、でも、『?』つて付いているし、本人がそう言つている訳じゃないんだろ？」

この『季刊BMP』は誤ネタを載せないと有名な雑誌ではあるのだが。

「あ、デモ、この話、本当らしいデスよ？」

意外な所からの意外な発言。

みんな、一斉にエリカを見た。

「犬神さんが『これ、すんごい極秘情報なんやけどな。近々、あのナックルウエポンが復帰するらしいで。いやービックリやなー。悠斗君に刺激を受けたんやろうか？　あ、もちろん、この話は秘密な。エリカはんが国家機密並みに可愛いから教えたんやでー』と言つてしまシタ」

「…………」

何をやつてるんだ、クリスタルランスは？

そして、この国的情報管理は本当に大丈夫なのだろうか？

あ、ちなみに、犬神さんというのは、最強BMPチーム・クリスタルランスのメンバーで、BMP能力・電速^{バルス}を使う猫みたいな目が印象的な女性だ。フルネームは犬神彰。

「……ほ、ほら見ろ！　クリスタルランスが言つんだから間違いないだろ！？」

と言いながらも、なぜか顔が引きつっている三村。

犬神さんの名前を聞いた途端だな。どうしたんだろう？　三村は三

村なりに、何か俺のうかがい知れないドラマでも抱えているんだろ
うか？

「でも、三村。ナックルウェポンが戻ってくるのは大ニュースかも
しれないけど、どうして三村がそんなに興奮するの？」
と至極もつともなことを言うのは麗華さん。

あ、ちなみにナックルウェポンと言つるのは賢崎藍華さんの称号だ（
と思う、たぶん）。

「なに言つてんだ剣。ここをどこだと思つてんだ？ 天下のBMP
能力者養成高校『新月学園』だぜ。しかも、賢崎藍華さんは俺達と
同じ年。ここに転入してくる可能性は大いにあるだろ？」
と言つ三村。

いや、しかし。

「賢崎藍華さんって、もう大学出てるんだろ？ 復帰するにしても、
もつと本格的な訓練機関に通えばいいんじゃないかな？」
と俺は言つてみる。

確かに新月学園は、BMP能力者養成高校としては最高峰だが、あ
くまで高校だ。

BMP能力の訓練をするだけであれば、もつといい場所は他にある。

と。

「どうしたんだ、澄空？ 今日に限つて、なんでそんなまともな意
見を言つんだ？」

驚いた顔の三村。

失礼な男だ。とっても失礼な男だ。

「これだけの才色兼備美少女が自分と同じ高校に転入してくるかも
しない可能性があるのなら、少々の設定の無理には目をつぶるの
が男だろ？ それともおまえは、剣さえいれば、他の世界中の美
少女がいなくなつてもいいとでも言つのか！」

「む……」

無茶苦茶だ。今田の三村は、なんだかとつても無茶苦茶だ。

「ま、分からぬでもないけどな」

「え……」

峰が意外にも口を挟んでくる。

「強者と共に学ぶ」とは、とても意義のあることだ。特に俺たちみたいな成長途中の若者にとってはな。容姿端麗といつのも、悪いことじやない。少なくとも三村みたいな連中はさうにやる気をだすだろ?」

「おまえは、一体何歳だ?」

「同じ年で、しかも同性の高BMP能力者と友達になれるなんて、私ももちろん嬉しいデス。麗華さんだつて、そうデスよね」

「うん。否定する理由はない」

エリカと麗華さんも肯定したつす。

といふか、俺だって別に嫌だと言つている訳じやないんだけど……。

「といふかせ。澄空つて、ひよつとして女嫌いなのか?」

「ぶつー。」

唐突な三村のセリフに、吹いた。

「な、何言つてんだ、お前は! ? 健全な男子高校生が、そんな漫画やアニメみたいな設定を持つてるわけないだろ!」

持つてゐるわけがないとも!

「と言つてもな……。剣にはなんとか慣れてきたみたいだけど、俺、おまえが剣やエリカ以外の女子と話してゐるあんまり見たことないぞ」

「ぐつ」

そ、そんなことないと思つぞ、たぶん。

た、たまたま麗華さんと話す機会が多いだけ。

「だいたい、おまえはアランク幻影獣を倒した救世主様なんだからな。BMP能力者の守護者を自称してゐる賢崎の後継者様が、おまえ且當てに転入してくる、へりいの妄想しても誰もおかしいとは思わないぞ」

「それが、一番、困るんだよ……」

と、言つてから、しまつたと思った。

みんなキヨトンとした目で俺を見ている。

ちなみに、みんなどいつも三村達5人だけじゃない。

クラスメイト全員に注目されてる！

「澄空君 やはり」

と委員長がメモを取り始める。

ヤバイ。これはなんだかどつてもヤバイ。

「ち……違うんだ、委員長。俺は別に女子が苦手な訳じゃない」

「？ 別に私は何も言つてしませんけど？」

と首を傾げながら『もつと頑張つて言い訳しないと、既成事実として季報・新月に載せちゃうよー。あ、既成事実といつのはヤオイと

いうことね、もちろん』オーラを発してゐる委員長。

「た、確かに、美人は少し苦手ではあるけど、基本的には普通だ、ほんとだ」

と言つてから、またしまつたと思つた。

俺は何を言つてるんだ？

これは、麗華さんが苦手、と言つてゐるに等しいではないか！

「悠斗君は、美人が苦手なの？」

と麗華さんが聞いてくる。

麗華さんが俺なんかのことで怒るのは思えないけど、もともと表情

が読みにくい人だから、怒ってるのかいないのかさっぱり分からん。

「ち、違うぞ、麗華さん。ほ、ほら、麗華さんはもちろん、緋色瞳さんや茜島光さんみたいな美人とも普通に話してたろ？ 全然、そんなんことないよ」

茜島光さんは、クリスタルランスのメンバーだ。あとでまとめて説明する！

「た、ただ、こういうクール系というか傲慢……は言葉が悪いな。えーと、そ、そう、厳しそうな美人さんはちょっとだけ苦手というか……。ほ、ほら、俺は三村みたいに『美人に踏まれて感じる属性』とかないから……」

「なぜ、そこで俺を引き合いで出す」とツツコム三村。そんなもん、もう他にどうしようもないからに決まってるだろ！

「ふーむ。まあ、言つてることは分かりました」と、しっかりとメモを取りながらも、一応引き下がってくれる委員長。クラスメイトもなんとか納得してくれている（と見せかけて、たぶん俺に気を使つてくれている）。

「最強のB.M.P.ヴァンガードも、女性には勝てないか」「なんとか、いいですね、こういうノ」妙に暢気な峰とエリカの会話を聞きながら。

俺は、もう一度、さつきのページに目を戻した。
賢崎藍華さんの顔写真をもう一度見る。

大丈夫だ。こんなハイスペックあんどのハイソサエティな美少女がクラスマイトになるなんてこと、一生で二回もあるはずがない。全部、三村の単なる願望だ。

と。

「ん？」

思つてたんだけど。

「この顔……」

見覚えがある。

基本的に人の顔を覚えるのが苦手な俺の脳裏にも、一度見ただけで焼きついてしまった美顔。

眼鏡のせいで、気がつかなかつたのは、いかにも俺らしいが。この人……。

昨日、帰り道で会つた人じやないのか？

笑顔の練習

「」は、新月学園1・C最寄りの女子トイレ。

良く清掃されてはいるが、じく普通の女子トイレに、明らかに場違い（と言わても本人は困るだろうが）な美人女子高生がいた。
剣麗華だ。

どんな美人であれ、生理現象からは逃れられない。
そんなことは当たり前なのだが、この口ばかりはなにやらいつもとは違っていた。

「ある程度、謎は解けた」

淡々とした口調で呟く、天才美少女こと、剣麗華。

その眼は、ガラスの中の整い過ぎた自分の美顔を、睨むように見つめている。

確かに少し整い過ぎてはいる。疑いようもない美人だ。

彼女自身は「まあ、顔が整つても悪いことはない」くらいの認識しかなかつたが、周囲にとつてはそういうことくらいは知っていた。

特に男性の中には、彼女のB.M.P能力以上に外見に価値を見出している者も少なくないことは分かつていた。

そして、現在一番近くにいる（なんせ一緒に住んでいる）少年にとっては、自分の外見のせい周囲の視線を浴びるのは、若干気疲れする事態であることにも気付けていた。

が。

「悠斗君は、私の顔が整っていない方が良かつた？」
と聞いたら。

「そんなもの、美人さんの方が嬉しいに気ますよ!」

と(なぜか敬語で)とてもいい笑顔で答えたので、まあ、整った顔が嫌いと言つ訳ではないらしい。

しかし、一緒に暮らし始めて4か月になるつとしているのに、未だに自分に慣れておらず、一人で居る時いつもどこか緊張した様子なのは、やはり澄空悠斗になんらかの異常があると考へざるを得ない(と本人は思つてゐる)。

「まともに対人関係を学んで来れなかつた私でせえ、今の生活にずいぶん慣れてきたのに」

咳く麗華。

「けど」

分かつた。鍵は『クール系』という言葉だ。

俗語か造語の類だろうから、言葉自体を調べても無駄だつが、さきほどの話の流れから「いつも隙がなく、厳しそうな女性」のことをイメージしているのは分かる。

思い出してみると、同じ美人でも、緋色瞳さんのような女性を前にしている時は緊張しているが、アローウエポンやエリカを前にしている時は、なんだかテレッとしている(のような気がする)。

「アローウエポンやエリカとの違い……」「ポイントは……。

それまで以上に真剣な顔で、鏡の中の自分の顔を見つめる麗華。

あの二人にあつて自分にないもの。

それはおそらく。

「笑顔」

それも、同性も異性も、見ている者が思わず和んでしまう、穏やかな微笑み。

……超難問だつた。

挑むような笑みや、蔑んだ笑いなら、できそつな氣もするのだが。誰かを癒すような微笑みとなると……。

「いや……」

最初から逃げていても仕方がない。

この数カ月は、きちんと人と会うようにしてきただといふ自覚はある。今のところあまり活用できないが、他人の顔を見て学んだ表情のパターンに関するデータの蓄積もある。そして、なにより。

自分は……剣麗華は、微笑みたくないと思っている訳ではない！

剣麗華は、覚悟を決めて、鏡の中の自分に向かつて、微笑んだ。

エリカは初めに「ソレ」を見た時、純粹な恐怖を感じた。

第五次首都防衛戦の時より、BMP管理局籠城戦の時より、怖かつた。

そして、次の瞬間「ソレ」は見てはいけないものなんだと気がついた。

「彼女」が悪いのではない。それを見た自分が悪いのだ。

今日のこの時間、1-C最寄り女子トイレに本郷エリカが来た、と
いう事実ごと「ソレ」を見た事実を封印してしまつのが最善だと結論付けたのは、あまりにも当然の帰結だった。

……帰結だったのだが。

「ソレ」の衝撃があまりにも強すぎて、回れ右をしようとした時に豪快に転倒してしまつエリカだった。

「エリカ？」

いつもの無表情（でも、やつぱりあり得ないくらいの美顔ではある）に戻つて、女子トイレの床に女の子座りをしてしまつたエリカに問いかけてくる剣麗華。

そのことに少しほつとして、未だ力の入らない足でなんとか立ち上がるエリカ。

床が揺れてなくて良かつた。

「どうしたの、エリカ？　顔色悪い」

全く悪意のない様子で聞いてくる剣麗華。

「れ、麗華さんこそ、どうシタんですカ？　す、凄い顔してましタけど……」

実際には「凄い」程度の形容詞で表現できる表情ではなかつたが……。

「ん？　笑顔の練習だけど」

「は、ハイ！？」

甲高く語尾を上げるイントネーションで返事をするエリカ。

「コンセプトは、納期直前、連夜の徹夜残業を乗り越え、一週間ぶりに帰宅した夫を迎える、新妻の笑顔。……だつたんだけど、違つてた？」

「ぜ、全然、違いマス！ むしろ、一週間後に保険金殺人する予定の旦那さんに『テモ見せちゃ いけない類の顔でしタよ…』」

鏡越しに見た麗華の表情があまりに衝撃的だつたせいか、珍しく大きな声で反論してしまつエリカ。

「うーん。結構、難しい」

咳く、麗華。

「難しい」というレベルの問題ではなかつた氣もするが、エリカはそれ以上に氣になることがあつた。

「そもそも、どうして、いきなり笑顔なんて氣にするん『デスか？』」「ん？」

予想外の質問だつたのか、麗華がきょとんとした顔を向けてくる。「ひょつとして、さつきの話……気にしてるん『デスか？』」

「もちろん。パートナーとして、悠斗君にマイナスとなる要素はできるだけ排除しておく必要がある」

「…………」

くらつとした。

そして、危なかつた。

エリカが男性だとしたら、今のセリフで、間違いなく惚れていたことだらう。

そんな麗華が微笑ましくて、そんな気持ちを受ける悠斗が少し羨ましくて。

エリカは薄く微笑んだ。

と。

麗華の手が、エリカの頬に伸びてきた。

「え？ エ？」

「エリカの微笑みは凄く自然。魅力的……なんだと思う」
魂を抜かれそうな程に美しい瞳で、エリカを見つめてくる麗華。

「どうしたら、そんな表情を作れるの？」

「ど、どうしタラと言われましテモても……」
完全に混乱しているエリカ。

「教えてほしい」

顔を近づけてくる麗華。

と、物音と息を飲むような気配がした。

次の瞬間、黄色い奇声とともに、誰かが逃げ去っていく。
なにか誤解されたかもしれない。

いや、そんなことより。

「で、デモ、麗華さんも、表情だいぶ柔らかくなつてマスよね？」

「え？」

それは、完全に予想外のセリフだつたらしい。
麗華の顔が離れた。

女子トイレの鏡を見つめて。

「そりかな？」

「そうデスよ。入学式で初めて会つたときとハ、別人デス！」
別にお世辞ではない。

本当に、そう思うのだ。
しかし。

「自覚がない」

本人に自覚がないらしい。

「ほんの少しどえけど、微笑んでいると思うんだえけど……。ほんとに、心当たりがないでスか？」

「ない、と思うんだけど……」

言いつつ、もう一度思い出してみる。

澄空悠斗が、哀れなくらいに慌てた様子で、朝までに終わらなかつた宿題の手助けを求めてくる時。

三村が馬鹿なことをやつた時。

峰が大真面目な顔で持論を展開し、澄空悠斗が助けを求めてくる時。緋色先生に遠まわしに責められて、澄空悠斗が困っている時。エリカの頬笑みを見て、自分まで和んでしまつた時。

「笑つてた……かもしない」

「でスよ！」

勢い込んで答えるエリカ。

正直、普段の麗華の表情には、他人から見て微笑みと分かるようなものはあまりなかつたが、エリカには雰囲気で麗華も結構笑つているのが分かる（ような気がしていた）。

「焦る必要はナイと思いマス。麗華さんは、少しずつ素敵な微笑みを身につけていると思いまス」

その言葉は、本心からのものだつたが。

鏡からエリカの方に振り返つて。

「ありがとう、エリカ」と言つ彼女の。

薄く笑みの形を作る顔を見て。

エリカは思った。

(麗華さん……。これ以上可愛くなつて、どうするつもりなんですか?)

続・ナックルウェポンの尊

その日の放課後。

俺は麗華さんと一人で下校していた。

峰は賢崎さんの話でさらにやる気を出したのか特訓。エリカは買い物、三村も買い物（エリカと一緒にやってるんじゃないだろうな）、こども先生は普通に仕事（そもそも一緒に帰つてない）。

なので二人きりだ。

住んでいるところが同じなので最後は必ず二人きりになるのだが、最初から一人で下校するのは珍しい。

二人きりだとやっぱり緊張する。

三村やエリカがいればもちろん、峰でもいてくれれば基本的に話題に困ることはないのだが。

二人きりだと、俺か麗華さんのどちらかが話題を振らなければならない。

悪い意味で普通な俺と、悪い意味で普通でない麗華さんには、なかなかの難題だつた。

「悠斗君」

「ん？」

「面白い話をしよう

……ほらな。

「え、えーと、面白い話……？」

「うん。面白い話。下校時にまで、実用的な話ばかりしても仕方がない」

そ、それは、俺もそう思つけどね。

方向性として面白い話をするのは大賛成だが、「面白い話をしよう

と宣言するのは、いわゆるムチャ振りといつていいだろ？

基本的には、俺は口下手（美人相手にはさうに口下手）だというの……。

あ、でも待てよ。

「賢崎さんの話なんかどうだらう？」

「ナックルウエポンの話？」

「そ、そうぞ？」「

やはり、賢崎さんの称号は「ナックルウエポン」で間違いないらしい。素手で闘うのだろうか？

しかし、女の子なのに「ナックル」とは、ちょっと口づけ感じはあるな。

……まあ、「ソーダ」が女の子らしいかと言えば、悩ましいところはあるが。といづか。

「麗華さん。賢崎さんのこと知ってるのか？」

「上条博士の研究所に入る前、何度か会ったことがある。パーティーとかで」

「あ、なるほど」

麗華さんは剣財閥当主の孫娘。賢崎さんは賢崎財閥の次期後継者。セレブ同士繋がりがあつても別におかしくない。

俺みたいなスーパー庶民と麗華さんに繋がりがある方がおかしいんだ。

……いや、それはともかく。

「どんな人？」

と俺が聞くと、麗華さんは少し考え込んで。

「一言で言つのは、難しい」

「え？」

セリフ 자체よりも、その声の調子に少し驚いた。

嫌悪しているという感じではなかつたが、友好的とは程遠く。認めてはいるが油断できない相手と言うか、好きにはなれないが頼りにはなるというか。

どうも、俺の交友関係には存在しないタイプの、ちょっと訳ありの関係らしい。

「悠斗君も会つてみれば、分かる」

「そ、そう？」

俺も健全な男子高校生だから美人に会うのが嫌という訳ではないが。……やっぱり、できたら会いたくないかも知れない。

「たぶん、向こうから会いに来る」

「え！」

なんですよ！

「三村の言つ」とは、あながち間違いではないから「言つと、くいつと顔をこちらに向けてくる天才美少女。身長差がほとんどないから、美少女に見上げられる構図にならないのが唯一の難点だ。でも可愛い。

「つい最近になつて対幻影獣に力を入れ始めた剣財閥とは違つて、賢崎は元々BMP能力者の支援に積極的だから」

「あ、その話は俺も聞いたことがある。賢崎グループは創業以来、幻影獣から世界を守ることを理念にしてるって」

ソースは三村だ。

「というより、賢崎は元々BMPハンターが本業」

「え？」

「賢崎一族は幻影獣を倒すために存在する。企業経営は、彼らにとって副業。もしくは手段」

淡々と話す麗華さん。

俺も賢崎がBMP能力者の家系つてのは聞いたことがあるけど（もちろんソースは三村）。

……というか、この話、俺が聞いてもいいものなのかな？

「私が知っていることで、悠斗君に教えられないことなんてない」

そういうつもりじゃないと分かっていても、どうしても惚れてしまいそうになる麗華さんのセリフ。

ほんとに惚れたら、麗華さん、責任とつてくれるんだろうな？

それはともかく、麗華さんの話をまとめると。

1：BMP能力には遺伝的な要素もあり、代々BMP能力の強い家系というのも存在する。

2：賢崎一族はその中でも特に強力な家系（ちなみに麗華さんのところは、代々といふ訳ではなく、麗華さんのお祖父さん……剣首相の奥さんが凄いBMP能力者だつたらしい）。

3：賢崎一族は強力なBMP能力者を多数輩出しているが、なかで多いのが「流れの先を読む」タイプのBMP能力者。

4：その力を生かして経済界で成功し、その富をBMP能力者の支援と対幻影獣に充てている。

といつたりしい。

「対幻影獣とは言つても、幻影獣はBMP能力者にしか倒せないから、彼らにとつては強力なBMP能力者はどんな富よりも貴重な宝。普通は適齢時判定が出た段階で、生涯にわたつての支援を申し出でくるはず」

続けて話す麗華さん。

よーし。今日は出血大サービスで、もいっちょ説明行くぞ！

（適齢時判定について）

1：この国に生まれた者は皆「ある年齢」に達するとBMP能力値の検査を受ける。

2：「ある年齢」が決まっていないのは、毎年学会で見直しがされるからだ。ちなみに今年は6歳だつたはず。

3：というのも、BMP能力は先天的に素養が決定するにも関わらず、生まれてすぐは観測できないからだ。

4：ちなみに俺も5歳の時にちゃんと受けたと思う。その時は確かにBMP103という、この国の平均値まんまの数字だったはず。なのに、今年の4月に再検査した時にはBMP187というとんでもない数字になつたのは周知の通りだ。

5：あの時の検査機関がなんらかのミスをしたのか、その後、俺に何か超常的な出来事があつて劇的に伸びるはずのないBMP値が増えたのか、あるいは上条博士が極秘裏に開発した非法の「BMP値を上げちゃうぞ薬品」の投与を受けてしまつたのか、は神のみぞ知るところだ。

という感じだ。

それはともかく。

「でも、俺には、賢崎財閥からは今まで何のアプローチもなかつたけど？」

「私のせい。……なんだと思つ」

無表情で言つ麗華さん。

普段から無表情なので、無表情にならないといけない話題なのがそうではないのか分かりにくい。

「えーと……。それは、麗華さんが剣財閥の人だから？」

「そ、おじい様が対幻影獣に力を入れだして以来、剣財閥と賢崎財閥はそれなりに良好な関係を築いているから、気を使つてるんだと思つ」

そう言つた後に、麗華さんは一呼吸入れて。

「でも、これだけ悠斗君の評判が高まつてしまつて、さすがに限界みたい」

と相変わらずの無表情で言つた。

その時。

俺の『本質的にはもちろん全然分からんんだけど時々麗華さんの表情の意味が分かるような気がする』スキルが発動したような気がした。

具体的に言つと、麗華さんがなんだか嫌な顔をしたような気がした。なので聞いた。

「えーと……。俺、何か酷いことされるのかな……？」

「そんなことはない。賢崎はBMP能力者に危害を加えたりはしない。対幻影獣の大義を盾に、BMP能力者の自由や権利を阻害するようなこともしない。せいぜい、悠斗君専用のディテクトアイテムの開発提案をしてくるが、悠斗君の対幻影獣活動全般の資金支援を申し入れてくるか、ライセンス契約を結んでCM出演の依頼をしてくる程度だと思つ」

「……」

ちょい待ち！

最後なんか一つ、とんでもないのが混じつてましたが！

「ただちよつとだけ気になるのが……」

俺の『麗華さんならともかく俺の顔なんて公共の電波で飛ばしちゃダメだろ』的な心配をよそに、麗華さんは何やら考えている。

「悠斗君の資質を考えると、あり得ない話ではないけど……」

珍しく言いにくそうに、俺の顔を覗き込んでくる麗華さん。

……いや、言ひてやうといふか、なんだ、この顔？
こんな表情の麗華さんは、初めてみるぞ？

「麗華さん？」

「うそ……。悠斗君。ひょとしたらなんだけれど……」

と、また、一瞬口ごもって。

何か考えるような顔をして。

それから俺の方を向き直つて。

もう一度、口を開……。

開けりつとしたところで、携帯電話が鳴った。

大して件数の入っていない俺のメモリーの中で、一つだけ着信音の違う登録先。

しかも、同時に麗華さんの携帯電話も鳴っている。
BMP管理局からのエマージョンシーケールだった。

慌てて出る。

「はい、もしもし、澄空ですナビ」

「はい、剣です」

『突然すみません、悠斗君！ オペレータの志藤です！ 『無沙汰
してます！ 緊急事態です！』

『城守です。いや、困つたことになりました』

「何があつたんですか？」

「何があつたの？」

『市街地にBランク幻影獣が出現しました！ 近くには、悠斗君と

麗華さん以外にBMPハンターが居らず、非常に危険な状態です』

『Bランク幻影獣です。下位ハンターでは、犠牲が増えるだけなので下がらせています。なんとか、お一人で喰い止めてください。もちろん退治していただいても結構です』

「び、Bランク幻影獣……！？」

「位置は？」

『今から位置を転送します。すでに応援要請はしていますので、なんとか時間を稼いでください』！このままでは、大惨事になります！』

『座標の転送は終わっています。BMP値は345。Bランクとしては高い方ではありませんが、何やら嫌な予感がします。油断はないでください』

「あ、ええと……。と、とりあえず、向かいます（見方が分からんつす）！麗華さんに付いていけば大丈夫ですよね？」

「位置は確認した。悠斗君と足止めに向かう。可能なら撃破する」

『ぐ、くれぐれも無茶はしないでくださいね。いくら悠斗君が凄くても、実戦経験はまだまだ多いとは言えないんですから……。といふか、なんで悠斗君にばっかり大変な敵が来るんだろ？不公平ですよね…』

『そういえば、悠斗君と麗華さんの共同戦闘は初めてですね。どんなコンビネーションを見せてくれるのか楽しみです。仲良く闘ってくださいね』

「そ、そうですね……」

「うん。分かった」

とこう訳で、俺も麗華さんも電話を切った。

……なんだろ？ 良く聞こえなかつたけど、同じ会話をしている
とは思えないくらい、緊張感というかテンションが違つた話だった
うつな気がする。

まあ、それはともかく。

「行くよ、悠斗君」

颯爽と走り出す麗華さん。

「りょ、了解つす」

やつぱり、格好いいよな。

アナザーヒロイン

「クラブって名前はどうだね?」

「うん、いいと思う」

5分ほど走って現場に駆けつけて、初めに俺達が交わした会話だ。

20階建てくらいのビルを、ハサミ状になっている腕で殴り続けて
いる大型幻影獣。
まさしく蟹に見える。

俺のネーミングに麗華さんが賛同してくれたのも当然と言えよう。

いや、そんな」とゆり。

「あのままだと、あのビル崩れる
わ、分かつてる」

俺の束の間の現実逃避を破る、冷静な麗華さんの声。

周りの人も次々と逃げている最中である。あのビルの中の人達の避
難が完了していると考えるのは、希望的観測に過ぎんだろう。

「いくよ、悠斗君」

と、壮麗な剣を実体化させる麗華さん。

.....

「…………りよ、了解!」

頭の回転の鈍い俺は、3秒遅れくらいで麗華さんの意図を理解して、
彼女と同じ剣を実体化させる。

神話や伝説上の剣を、自分なりの解釈で実体化せるのが、麗華さ
んの幻想剣。
イリュージョン sword

それを真似ているのが、俺の劣化複写。
イレギュラーコピー

「周りの人や建物に当たないよう気をつけ」

「りょ、了解！」

「……呼吸を合わせて」

「了解！」

二人で『断層剣カラドボルグ』を振りかぶり。

振り下ろす。

空間を切り裂く断層が、エックスを描いてクラブに向かっていく。カラドボルグは、麗華さんの体調さえ悪くなれば防御不可の攻撃だ。

そして、俺のカラドボルグも威力だけは麗華さんのものに引けを取らない。

当たりさえすれば、Bランク幻影獣でもただでは済まない！

つと思つていたのだが……。

「……」

「……あ、あれ？」

思わず疑問符を浮かべる俺。

クラブの身体には傷一つ付いていなかった。

俺達の断層剣を防いだのは、クラブがこちらに見せつけるようにしている一本のハサミ。

「あのハサミ……。ひょっとして、めちゃくちゃ固い？」

「最近のBランクは、厄介なのが多い」

面白くなさそつに麗華さん。

……いやいや麗華さん。Bランク幻影獣は昔からボスクラスですよ？

そんな」とはともかく。

「正面からじゃ無理。悠斗君、前後から挟み撃ちにしよう」「りょ、了解！」

「同時攻撃よりも、少しタイミングをずらした方がいい。クラブが向いている側が先に攻撃して、防がれると同時に、逆側が背後から」「分かった！」

さすが麗華さん。

素早く、かつ、的確な判断力だ。

「劣化複写、超加速！」

麗華さんは天才美少女だが、移動系の能力は使えない。

俺が友人の三村宗一からコピーした超加速で、クラブの後ろに回り込む。

クラブは動きが鋭い訳ではない。

俺の姿をあつさり見失い、仕方がないのでビルを一度激しく殴りつけ、それから麗華さんの方を向いた。

……どうか、あのビル大丈夫だろうな。3分の1くらい削り取られてるよう見えるんだけど……。

と。

クラブを挟んで反対側の麗華さんから力の高まりを感じる（ような気がする）。

お互いの距離は100メートルほど。

武器は断層剣カラドボルグでいらっしゃい。

そして、麗華さんが必殺の断層を放つ。
さきほどと同じく、クラブは避けようとする素振りを見せない。

よし。

あとは、クラブが防御すると同時に……！

「…………え？」

思わず間抜けな声が漏れた。

なぜなら……跳んだ！

さきほどまでの鈍重な動きが嘘のようになり、20階建のビルの屋上近くまで、クラブが跳躍した！
すげえ！

いや、そんなことより！

「や、やっぱ……！」

クラブが防御しなかったたとえことは、断層剣カラドボルグの攻撃も消滅しなかつたということで。

クラブを挟んで麗華さんの反対側には、俺が居る訳で。

そして、何より、俺は防御系のBMP能力をコピーした覚えがない。
このままだと……死ぬ？

じょ、冗談じゃないぞ。

こんな死に方、あり得るか！

カラードボルグで迎撃……いや、今の状態でできるかどうか自信がない。

超加速で後ろか横に回避……無理だ。ちょっと無理だ。

上か下に回避……これしかない！

と言いつつ、最後に一択を残したのが失敗だったかもしれない。ジャンプしようとして、思いつきりつんのめってしまった。

「ゆ、悠斗君……」

麗華さんの叫びが聞こえたような気がする。

体勢を崩した俺の眼の前には、無慈悲な空間断層。

今まで麗華さんの近くに居た俺には分かる。

この断層には、万一、なんて絶対にない。

死ぬ。絶対に身体は真っ一つになる。間違いなく死ぬ。

もう回避は不可能。

ほとんど反射的にカラードボルグの実体化を始めているが、間に合つか？

間に合つたとして、相殺できるのか？

……できるのかじやない。するんだ！
こんなところで死ねるか！

「カラードボ……ぶつ！」

渾身の力を振り絞ろうとした、その時。
俺の身体は、地面に転がされていた。

…………最初から、こうすれば良かつたんだ。
大地に仰向けに寝転んだ俺の上を、空間断層が通り過ぎていく。
無敵の断層剣も当たらなければ無意味。
ただ寝転がるだけで、かわせたのに……。情けない話だ。

それはともかく。

「大丈夫ですか？」
俺を押し倒した人が声を掛けてくる。
疑うまでもなく命の恩人だ。
しかも、声は女性のものだ。

俺は三村ではないが、それでも何かドラマ的なものを感じずにはいられなかつた。

「す、すみません！ 大丈夫です！ た、助かりました……！」
一拍置いて、恐怖がぶり返していく。
ほんとに助かつた。
この死に方だけはシャレにならない。
いや、どんな死に方だつてしたくはないけど……

「それなら、良かつたです」

「いや、ほんとに助かりました！ あなたは命の恩人です！ ほん
とに助かり……」

繰り返しお礼を言いながら身体を起こして、命の恩人の顔を見なが

「うむ。一度お礼を言おうとして。
固まつた。

見覚えがある。

「け、賢崎……藍華……さん？」

「あら。名前を「」存じとは光榮です。澄空悠斗さん」
タイムリーすぎる。

そう思う俺の心中を知つてか知らずか（もちろん知つている訳がないが）、俺の勝手な想像とはまるで違つ穏やかな笑顔でほほ笑む賢崎さん。

眼鏡をしていないせいかもしれない。

「あの幻影獣……。澄空さんは、少し相性が悪いようですね」「は、はい」

相性ではなく、単に実力不足なだけだと思つただが、とりあえず頷く俺。

「私が隙を作ります。澄空さんは、ソードウエポンと共に攻撃を「す、隙を作るって……？」

思わず引き留めようとする俺。

賢崎さんがどんなB.M.P能力を持つているかは知らないが、あの幻影獣は結構ヤバイ気がする。

「まあ、ブランク明けの初実戦にしては厄介な相手ですが。なんとかなると思います。でも、危なくなつたら助けてくださいね」

ウインク一つ残して、賢崎さんは幻影獣に突進していった。

「悠斗君、大丈夫！？」

Bランク幻影獣に突進していく賢崎さんを茫然と見送る俺の前に、
青い顔をした麗華さんが駆け寄ってきた。

「あ、ああ。大丈夫」

「ほんとに！ 斬れてない！？ 切れてない！？」

若干取り乱しているのか、斬れているんじゃないかと疑わしい（麗
華さん的に）箇所を撫でまわしてくる麗華さん。

「だ、大丈夫だから、ほんとに！」

そんな麗華さんをなんとかなだめる俺。

というか、今、麗華さんが撫でた箇所が斬れているのなら、いわゆ
る一刀両断状態です。

いや、そんなことより。

「麗華さん！ それより、あれ！ 賢崎さんが一人で幻影獣に！
援護しないと！」

Bランク幻影獣が弱い訳はないのだが、あの『クラブ』は、特別や
ばい気がする。

全開の『カラドボルグ』を弾くハサミも、あの巨体でジャンプする
ようなふざけた運動能力も、今までのBランク幻影獣にはなかつた
ものだ。

が。

「ううん、ナックルウエポンなら大丈夫」

「へ？」

「接近戦で『あの能力』に対抗できる幻影獣なんか、ほとんどいな
い」

と、認めてはいるが油断できず好きにはなれないが頼りにはなる相手に対する表情を賢崎さんに向ける麗華さんだった。

幻影戦闘『Bランク幻影獣クラブ』

ナックルウェポンと叫んでいたから、接近戦に強い能力なんだろうな、とは思っていた。

だが、身長こそ高いが、まるでモデルのようにほつそりとした体格からして、まさか怪力無双の臥淵さんのような純粋なパワー・タイプではないだろう、とも思っていた。

だから、その光景を見た時は、心底驚いた。

「れ、れれれ、麗華さん？」

「うん、良い打撃だと私も思う」

俺の言いたいことを完全に誤解したまま返事をしていく麗華さん。だつてそうだらう。

高校生くらいの女の子に、全長10メートル近くはある怪物が吹っ飛ばされ、5メートルは先にあつたビルに叩きつけられたのだ。

ビルに突っ込んだ頭を引っこ抜きながら咆哮を上げるクラブ。

さきほど大ジャンプを見せた時と同じく、巨体からは信じられないくらい素早い動きで賢崎さんに迫る。

そして、あのハサミでなぎ倒すように横薙ぎを繰り出す。

「あ、危な……」

思わず呻く。

僅かに身を逸らした賢崎さんの身体すれすれを、空間断層ですら防ぐハサミが通り過ぎていく。

そのまま、まるで暴風雨のようになにか一つのハサミを振りまわすクラブ。

対して、賢崎さんのかわし方は、あまりに危なつかしい。

「れ、麗華さん、麗華さん。やっぱって、やっぱり。なんとか援護を！」

麗華さんの指示で！

「良く見て、悠斗君。ナックルウエポンは、危なくなんかない」
いや、危ないって、あれ！

どう見ても、ギリギリで！

……ギリギリで？

「ギリギリで……。わざと？」

「あれば、ナックルウエポンの『アイズオブフォアサイト』と『自律機動^{一ストップ}』。敵の動きを完全に読み切つて、最適化した動きで対処する。一撃が当たらないなら、何度も攻撃しても当てることはできな
い」

賢崎さんの動きそのものは、三村の超加速^{システムアクセル}のように人間離れしたスピードじゃない。

けど、まったく当たらない。

自分の身体より大きいハサミを高速で振りまわすクラブの攻撃を、まるで脚本通りに進行する舞台のような自然な動きで軽やかにかわしていく。

それはまさに舞踏のようだ。

状況も忘れて、思わず見入ってしまう俺。

と、鮮やかな舞踏に、わずかに異質な動きが混じる。
それまでの横の動きに対し、縦の動き。
例えるなら、サマーソルトキック。

。

「つて、サマソ！？」

「うん。いい斬れ味だと思づ」

またまた俺の言いたいことを完全に誤解した麗華さんは置いておいて。

賢崎さんは、それまでの流麗な動きから一転、まるで格闘ゲームのよつな見事なサマーソルトキックを繰り出していた。

格ゲーでも、あんな大技そつそつ当たらないが。

そして。

斬り飛ばされたクラブの方のハサミが宙を舞っていた。

……マジか？

「悠斗君、準備して

「え？ あ、ああ！ 了解！」

ボーとしている場合ではない。確かにこれはチャンスだ！

「劣化複写：幻想劍断層」

「待つて、悠斗君。まだ早い」

「剣……つて、まだ？」

「うん、まだ」

「何を……」

言われて見ると、残った右側のハサミの根元に賢崎さんが絡みついていた。

と見てみると、賢崎さんの右肘と右膝がまるで大蛇のよじ口を広

げ。

噛みちぎるように交差した。

断末魔の叫びと共に引きちぎられる、クラブのハサミ。

痛そうつす。敵ながら。

が、賢崎さんはそれでも止まらず、今度はクラブの正面に回り込む。

そして。

気合一閃。

引っ越し抜くようなアッパー・カットを抜き放つた。

高い。

全長10メートルはある怪物が、俺と同い年の女の子のアッパー・カットで、ビルの5階くらいまで浮き上がっている。壮観だった。

というか、非現実的だった。

「悠斗君」

「！ りよ、了解！」

呆けている場合ではない。
いまこそ、好機。

「幻想剣：断層剣カラドボルグ」
「劣化複写：幻想剣：断層剣カラドボルグ！」
二つの声が交差する。

厄介なハサミは既になく、クラブは空中で身動きがとれない。
そして、攻撃力だけなら最高ランクのカラドボルグによる同時攻撃。
これで倒せない訳がない！

俺達一人の初めての同時攻撃は、空間に大きなエッグスの文字を描いて、クラブの身体を四つに引き裂いた。

翌朝。

俺は三村にヘッドロックを決められていた。

「どうじうことだ、澄空ー！」

おまえがどうじうことだー！

どうして、朝の挨拶をした直後に、頭を締めあげられなければならぬ！

「悠斗さん、凄いテスー！」

俺の頭を締めあげる三村の腕のさりに上から、エリカの胸……もといエリカが抱きついてくる。

この位置関係では、良い感触……もとい良い思いをするのは三村だけで、俺は普通に息苦しい。

「どうか、朝っぱらから、なんなんだー！」

「しらばっくれるのか、澄空！ 俺が二コースを見ないとでも思つたのか！」

「というか、ゴールデンタイムに特番が組まれてましタ！ 録画しましタ！」

「分かつていてるか、おまえは！ お前と剣が未だに顔出しねGだけど、賢崎さんは顔出ししてしかも凄い美人だったから、視聴者はみんなお前も超一枚目だと思つてるんだよ！ 剣は後ろ姿だろうと、

輪郭だけだらうと、もうどこからどう見ても美人だと想像するしかないから、おまえもやつぱりハンサムなような気がしてくるんだよ、だんだん！ というか、俺も若干ドキッとしたよ格好いいな、お前！」

「デスネ！ デスネ！ 顔なんか出さなくても、悠斗さん、すつごく格好良かつたデスねー」

「顔出さなかつたから、格好良いんだよ！ 撮影のトリックだ！」

俺の頭を一人で抱えたまま、仲睦まじげに叫び合ひエリカと三村。

……なんなんだ、一体？

「なぜ今日は、あの三人あんなに仲がいいの？」

「君らがBランク幻影獣を倒したからだろ」

悠斗を中心にクルクル回りながら通学路を歩く不可解な三人組を見ながら、剣麗華は横を歩く峰達哉と話している。

「特別番組が組まれてたの？」

「賢崎グループがメインスポンサーでな。今まで澄空については目立った応援はしてなかつたのに、急にどうしたんだか」

「…………」

わずかに顔を曇らせる麗華。

「というか、剣はあんまり嬉しそうじやないな。Bランク幻影獣を倒したつていうのに。剣くらいになると、Bランクくらい大したことないのか」

「そんなことはない。私もBランク幻影獣を倒したのは、昨日で二体め」

「そつか。奴ら、もともと数が少ないからな」

「私でも、評価されたら嬉しくない訳じやない。Bランクは厄介な敵が多いから、達成感もある」

「そうなのかな？」

「……最近は、だけど」

ふと向けた麗華の視線の先では、ようやくヘッドロックから脱出した悠斗と三村が何やら言い合っている。

「じゃあ、その顔は喜んでいる顔なのか？」

「いくら私が表情に難があるとはいえ、それはない」

言いきる麗華。

「じゃあ、何が気に入らないんだ？」

と問われると、麗華は一息置いて。

「失敗したから。大失敗」

そんなこんなで波乱含みで始まつた、ある夏の日。
その朝のホームルームでのこと。

帰りたい。

俺は、この学園に通い始めてから、初めてそつ思った。

「…………」

「…………」

教室には沈黙が満ちている。

壇上には、右眼にじつに眼帯をした『アイズオブエメラルド』こと、
このクラスの担任・緋色香先生。別名・こども先生。
そして、その横には麗華さんクラスの美少女。

あんな物理法則を無視した美形がそう何人もいる訳がない。

賢崎藍華さんだつた。

昨日、Bランク幻影獣を倒した後、『すみません。まだ新社長への
引き継ぎが残つてるので、これで』と口くに話もできないまま別
れて以来の再会だった。

今日は眼鏡をしているけど。

「えーと、質問は、なしでいいのかなー？ 先生今日は気分がいい
から、なんでも答えちゃつわよー」

なぜか上機嫌のこじも先生。

「質問に応えるのは先生ではなくて、賢崎さんのばずです」などといつ意見は、まったく通りそうにない。

一応いまのうちに誤解を解いておくが、別に賢崎さんが取つつきにくそだから皆が黙つてしまつた訳ではない。
こじも先生に促されて自己紹介した賢崎さんは、昨日感じた通り、知的な美人ではあるが、冷たいという印象は全くなかった。
凛とした雰囲気の中にも、どこか親しみやすい空氣を漂わせていると云うか。

麗華さんの無表情を見慣れているから、余計にそう感じるのはもじれないが。

まあ、賢崎さんが（俺の時は違つて）怖がられている訳ではない。では、何が問題なのかといふと……。

「は、はい！」

と手を上げたのは三村。

皆、「おおー、ついに行つたか！」的な視線を送つている。

「け、結局のところ、澄空とはどんな関係なんですか？」

言つた途端。

クラス全員の視線が、俺と賢崎さんの二手に別れる。

どうも、昨日俺達がBランク幻影獣を倒した時の特番は、賢崎グループがかなり露骨に前面に出できたらしい。

『彼こそ時代に選ばれた救世主』とか何とか。

それまでどちらかというと俺に無関心だつた賢崎グループの豹変は、昨日から（俺が知らなかつただけで）かなり噂になつていていたらしい。

そして、今日、突然の俺のクラスへの編入。

ほんとに偶然としても、皆が気になるのは当然と言えば当然だつ

た。

「そうですね……」

失礼な三村の質問にも、全く気分を害した様子を見せない賢崎さん。「尊敬に値するBMPハンターだと思っています。ただ、みなさんが想像されているような大げさな話はないと思います。賢崎本家が少し騒ぎすぎているので無理ないのかもしれません。私がここに通うことにしては、あくまでBMPハンターとしてのプランクを取り戻すことが目的ですから」

返答も無難だった。

「ただ……」「

が。

「賢崎の次期後継者として『BMP187』に興味がないと言えば、嘘になりますね」

一瞬だった。

ほんの一瞬、それまでの親しみやすい田から一転、心の底まで見通すような、底知れない視線をこっちに送つて来た。

こ、これが、ひょっとして噂に聞く(というか、昨日麗華さんから聞いたんだけど)賢崎藍華さんの『アイズオブフォアサイト』か! 敵の動きはあるか、心の動きまで先読みし、思い通りの方向へ誘導できるといつ!

……と。

「せ、宣誓!」

懐かしい言い間違いをして、俺の右隣りの席の子が立ち上がる。

「私、中央付近の席に強い憧れがあつたのを思い出しました! 今から移りますね!」

と、賢崎さんのために用意されていた真ん中最後尾の席に高速移動する。

「…………」

質問に立つたままの姿勢で立ちぬく二村と、やがて静まり返るクラスマイトと、もう穏やかな表情に戻つてゐる賢騎こと、とりあえず一通りテンパつてみる俺。

「う、うーんと、どうある悠斗君。先生的にはどう見ても断れる雰囲気じゃないとは思うけど、一応無駄な抵抗してみるわ。」

うなこども先生が、妙に嬉しそうな顔をする。

俺も無理だと思つけど、一縷の望みをかけて麗華さんの方を見た。

「…………」

麗華さんは、我関せず、と言つた顔で黒板を眺めつづいていた。

…………どうやら、無理みたいですね。

「疲れた……」

思わず顔に出して咳いてから、俺は柵に寄りかかった。
こゝは屋上。

何年か前に失恋を苦に自殺した女生徒が居るとかいう噂も事実もないこの屋上は、普通に出入り自由だった。

ファンスのようなものもなく、安全設備と言えば、俺が寄りかかつてこむ俺の胸までくらいしかない柵のみ。

「はあー……」

最近お気に入りになつてゐる『レッドマウンテン』といづパチモン缶コーヒーを飲みながら、俺はため息をついた。

疲れたのだ。

賢崎藍華さんは、会う前の俺の予想とは違つて、本当に良くてできた女性だつた。

知的で冷静なのは予想通りだつたが、相手を見下したり、威圧感を与えるような所が一切ない。

休み時間中、自分の机を取り囲んで質問の集中砲火を浴びせてくるクラスメイトに、いちいち完璧な受け答えをしていた。

問題なのは、

質問する度に、クラスメイトが俺の方をちらつと見ることだ。

そして、3回に1回くらいの割合で、賢崎さんも俺の方を見ることだ。

俺のBMP187が人類最高で、賢崎財閥がBMP能力者の守護者を標榜する一族なのは分かつたが、それと賢崎さんが俺の隣で学生生活を送る因果関係が分からぬ。

同じ『天才美少女類考』でいることが分かりづらい系でも、麗華さんの方が、まだ分かりやすい。

「ふいー」

『レッドマウンテン』をもう一口飲んで、ため息を吐きだす。

そうだつた。麗華さんの様子もおかしいんだ。

朝から機嫌が悪い。

いや、麗華さんだから例によつて感情が読みにくいくらいだけど、あれは機嫌が悪いと断定していいだろつ。

なぜなら、俺が『麗華さん。ちょっと。無茶苦茶居心地悪いから、

何か俺と会話して』と田線で訴えかけても『うめん、今、予習で忙

しい』と視線で返されてしまつ（普段予習なんかしない癖に）。

つまり俺は、机の両サイドから異なる天才系美少女のプレッシャーを受けて満身創痍と言う訳だ。

だから、2限目休み時間はこいつして屋上に逃げ出してきた。

と

「良くないね」

突然後ろから声が掛けられてきた。

「昼休みならともかく、2限目休み時間から黄雀るのは良くない」

「え？」

「慌ただしいだろ？ 時間がなくて」

声をかけてきたのは、新月学園の制服に身を包んだ見知らぬ少年だった。

美少年と言えばいいのだろうか。

峰や三村とはタイプの違つ、線の細い少年だった。

「昼休みは駄目だ」

「どうして？」

「ささみチーズフライを食べに行かなくてはならない」

そして、今現在、教室に猛烈に戻りたくない。

「悩みがあるなら、相談に乗るよ」

と、少年は、まるで10年来の友人のように当然に、俺の隣で俺と同じように柵に肘をついた。

不思議なことに、俺の方も驚くほど違和感を感じない。

「いや、悩みなんて偉そつなものじゃないんだけどな……」
俺は普通に話していた。

（事情説明中）

「ふむ」

と少年。

「剣さんはことは分からぬけど、賢崎の方は簡単なんじゃないかな？」

「へ？」

「スカウトだよ」

「スカウト？」

なんのこっちゃや。

「賢崎一族が、積極的に優秀なBMP能力者を一族に加えていることは知っているだろ？？」

いや、知らん。

「……加えているんだ。賢崎一族の中だけじゃ限界があるからね」

俺の無知にもくじけることなく、話を進める少年。

「さすがに、賢崎藍華本人の婿にするのは無理があるけど、一族の優秀な女性『達』を紹介するつもりなんじゃないかな」

「しょ、紹介つて……」

「後継者づくりだよもちろん。優秀なBMP能力者は、他に生産の方法がないからね。君の遺伝子なら競争率も高そうだ」

「せ、生産つて……」

別に女嫌いではないが、若干奥手な俺は絶望的なうめき声を上げる。というか、話が生々しそぎる。

が。

「……と、ミーシャが言つていた」

〔伝聞情報か。〕

「……ところ、設定はどうだらう?」

しかも、オチかよ、おい!

少年の破天荒な言動に、思わず（格好つけて吊り下げ持ちをしていた）缶コーヒーを取り落としてしまった。

「しまつた!」

まだ、60円分は入つているのに!-

まるで映画のように、黒い飛沫をまき散らしながら自由落下していく『レッジドマウンテン』。

と、突然、『コーヒー缶が空中で停止した。

「…………?」

いぶかしむ俺の前で、重力を完全に無視した動きで缶コーヒーが浮き上がりてくる。

隣で腕を伸ばす少年の右手に向かつて。

「…………」

『レッジドマウンテン』は少年の右手に収まっていた。
60円分のコーヒーが、まだその缶の中に残っている。
と、少年は、缶に口を付けた。
つて、飲むんかい!

「ああ、しまつた……」

俺の非難の視線に気づいたのか、少年は気まずそうな顔をした。
「これじゃ、間接キスになつてしまつね」
そんな話はしていない。

が、少年は意に介さず、全部飲んでしまった。

「よつ……と」

カラになつた缶の上下を押さえる少年。

と次の瞬間、レッドマウンテンの缶は小気味いい音と共にペしゃんこになった。

そして、手首のスナップだけでそれを投げる少年。

缶は、完全に物理法則を無視したあり得ない速度で飛んでいき。たぶんそこを狙つたのである。中庭の「ミミ箱の、一メートルくらいい離れた地面に突き刺さつた。

「…………」

「……まあ、コントロールは別だから」

……なんやねん、それ。

と。

「悩む」となんてないよ

突然、さきほどの大敗を完全無視したかのように、少年の声のトーンが変わる。

「君の望むままにすればいい」

BMP能力者特有のフレッシャーが今更のように感じられる。

「欲しいものを手に入れて、嫌いなものは遠ざければいい」

そして、わずかな悪寒……いや、違和感。

「君はBMP187なんだから」

と、唐突に少年は踵を返した。

茫然とする俺の前で、少年は5・6歩ほど歩き。

また、こちらに振り向いた。

「僕は『アックスウエポン』小野倉太。能力名は引^{ストレンジャー}自在」

「…………」

「近いうちに、必ず君の前に立つ存在だよ

「な、なんで？」

「秘密」

と、少年……小野倉太は憐げな顔をし、

「でも、その時はよろしく」

言った。

「という訳で、今日からこのクラスに編入してきた『アックスウェポン』小野倉太君です」
何が『』という訳で『』なのは全くもって不明だが、こども先生は言った。

先生の横には、一時限目の休み時間に屋上で会つたばかりの線の細い美少年。

そして、今は四時限目。

『早過ぎだ』と思つた。
なにが『近いうちに』だ。めちゃくちゃ直後じやないか！
と。

「倉太……？」

意外な所から声がかかる。峰だった。

「久しぶりだね、達哉」

小野も答える。

……知り合いいか？

「入院中になんとな」

俺と同じ疑問を抱いたクラスメイツの視線に応える峰。
そういうや、峰はしばらく入院してたんだつたな。

「じゃ、みんな何か質問はないかな？」

「こども先生がクラスメイツに問い合わせる。」

？ 妙だな？ 微妙にテンションが低い気がする。

「その前に、僕から自己紹介をさせてもらつてもいいでしょうか？」

「ああ……。それもそうね。どうぞ」

こども先生が、あつさり譲る。

確かにそれが普通の段取りだらうが、何か違和感がある。

「『紹介にあずかりました『アックスウェポン』小野倉太です。BMP能力は『引斥自在^{ストレンジヤ}』。主に、物体を引きよせたり、引き離したりする能力です」

自然に自己紹介を始める小野。

「BMPは161です」

そのセリフで、クラスにざわめきが起こる。

俺や麗華さんが異常に高いだけで、たいていのBMPハンターはそれほど高いBMP値を持っていない。

いわゆる一流ハンターと言われる人たちの中でも、BMP140以下の人はずらにいる。

かいつまんで言うと。

BMP103：人類の平均

BMP110：BMP能力発動下限。

BMP120：幻影獣に有効な攻撃が加えられる。

BMP130：普通に強い。

BMP140：エリート。

BMP150：超エリート。

BMP160：伝説級。

BMP170：基本的に人類には不可能。

BMP180：異常。

こんな感じだ。

もちろんBMP能力値の高低だけで強さが決まる訳ではないが。

160以上のBMP値の持ち主なら、普通の人なら知つていて当然

のはずなのだ。

だが、俺もクラスメイトも、この小野といつ少年のことを知らない。

「皆さんに馴染みが薄いのは当然です。僕は、つい最近まで能力が制御できなくて、BMP能力者関係の施設で過ごしていました。BMP管理局にハンター登録したのも先月のことです」

クラスメイツの疑問に答える小野。

……麗華さんと同じような境遇か？

「もちろん覚醒時衝動も経験済みなので、心配は要りません」

皆の意識が一斉に俺の方に向いた。

……ような気がした。

しかし、こじも先生が妙に大人しいな。
何か気になるぞ。

と。

「で、ここに来た目的は何なのかしら？」

こじも先生が急に口を挟む。

先生とはいえ、自己紹介の途中で口を挟むのはルール違反なのだが、誰もそれを指摘しなかった。

こじも先生が、じつは眼帯を外し、深緑の右眼を全開にしていたからだ。

「賢崎一族が悠斗君に接近を始めたのとは逆に、色々と彼に思ひつところがある人達もいるそうね？」

深い瞳と深い声を出す、先生。

俺は思わず賢崎さんを見る。

……彼女は、浅い笑みを浮かべていた。

え、何これ？

今、シリアルスパートだつて？

「そういう人達がいるのは否定しませんね」
しれっとした顔で言う小野。

「そういう人たちとお友達という可能性は？」

「友達ではありませんね」

「へえ……」

こども先生の『アイズオブエメラルド』の輝きが、目に見えて強く
なったような気がした。

教室内に緊張が走る。

「小野君」

「はい」

「あなた」

「はい」

「実は男の子が好きってことはない？」

「はい？」

「？ 僕は人間……あ、いや、そういう方面には疎いんですが……」
いきなりの超展開に、小野も困惑している。

……というか、これは……。

「えー。このタイミングで美少年系が登場つてことは、絶対ボーイ
ズラブ展開だと思ったのにー」

何を言つてゐるんだ、この子供は？

「あ、あの、先生？」

クラス全体が唖然とする中、三村が口を開く。

「い、今の、シリアルスっぽい会話は……」

「あー。最近ほら、学園に刺激がなくてみんな退屈してゐるかなと思つて。先生からのドッキリサプライズ」

「口口口と笑いながら言つ、こども先生。

「そ、倉太は？」

峰も聞く。

「いや。……ビックリしたよ」

と答えると、峰を見ると、ビックりやら小野も聞いていなかつたらしい。

「いや、先生もびっくり。打ち合せなしで、あれだけ完璧に対応するなんて。一瞬、本当に悠斗君を狙う悪の組織の手先かと思ったわよ」

嬉しそうな、じども先生。

「と言つて、後藤さん

「は、はい」

返事をしたのは、俺の前の席に座つてゐる女子高生・後藤さん。なかなかの美人なのが、両斜め後ろに反則級の美人が二人もいるので、色々と損をしている（と三村が言つてゐる）氣の毒な女性である。

まあ、それはともかく、そんな後藤さんに向けて、じども先生は言った。

「席開けて。そこに、小野君に座つてもらつから
無茶苦茶だ。この人、今日は特に無茶苦茶だ。」

結局のところ、小野は俺を狙う黒幕の手先でも、男の子が好きな男でもなかつた訳だが、それでもかなりミステリアスなクラスメイトには違ひなかつた。

161という高BMPや、麗華さんと似たよつた経歴はもちひん、もうとにかく雰囲気がミステリアスだった。
おまけに美少年。

クラスの女の子達が集まるのは当然と言えた。
それ自体は問題ないのだが……。

5回に1回くらいの割合で、俺の方をちらりと見るのが気になる。仮にもBMP能力者であれば、『BMP187』に興味を持つのはおかしいことではないと思うけど……。
何か、気になる。

これが俺の前の席の話。

そして右隣りは、小野に『賢崎藍華は澄空悠斗に一族の優秀な女性達を紹介するつもり』と『太話を聞いて以来、ますます分かりづらくなつた賢崎さん』。

左隣は、まだちょっと機嫌が悪い（んだと思つただけど、実際のところは良く分からぬ）麗華さん。

まあ、とにかく、今は教室には、あんまり戻りたくない気分と言つてだ。

なので、いぐらお氣に入りのせせみチーズフライとはいえ、がつ

いたのはまさかった。

食堂を出たものの、昼休みが終わるまで、まだあと30分はある。

「うーん……」

どうじよつ。

できたら、もう少し時間を潰したい。

と。

「ん?」「

『保健室』と書かれたプレートが目に入った。

「保健室か……」

そういうえば、これだけデンジャラスな生活を送っているのに、この学園の保健室には入ったことがなかった。

「…………」

ちょっととここと思いついた。

午後の授業が始まるまで、ここで寝るとこのまどりつだらつ。

別に仮病と言つ訳じゃない。

俺は昨日、Bランク幻影獣を激闘の末倒した3人組のうちの一人。しかも、今日は朝から一人も新キャラを迎えて、精神的にちょっと疲れている。

ベッドに空きさえあれば、30分くらい寝かせてもらつても、バチは当たらないはずだ。

わずかな後ろめたさを覚えながらも、保健室の扉に手を掛ける。

「大丈夫……」

保健室の先生は、人の良さそうな年配のおばさんだと三村が（悔しそうに）言つていた。

さつと、今の俺の微妙な気持ちを踏まえて、ベッドを貸してくれるはず！

俺は意を決して、扉を開いた。

「…………」

そして、閉めた。

「…………」

さつも俺は、自分で思っているよりも疲れているらしい。

あり得ないものが見えてしまった。

「…………」

もつ今日は帰るつ。

保健室でちょっと寝るよつも、家に帰つて明日の朝まで眠りこけた
い。

とこつか、もう一度この扉を開けて、中身を確かめたくない。

「よし、帰るつ」

俺が決心して、踵を返したといつ。

「さつきから何をやつてゐの？..」
扉が開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7486m/>

BMP187

2011年11月27日16時34分発行